
レイモンドール綺譚

青蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイモンド・ル・綺譚

【Zコード】

Z5941C

【作者名】

青蛙

【あらすじ】

国境を魔道で封じ、五百年もの間繁栄してきた島国、レイモンドール。しかし長く続いたこの国にも変革の時が訪れようとしていた。レイモンドール国の北部の州候の三男、クロードは自分がその変革の中心になること知らなかつたがどんどんと渦にまきこまれていく。

まじめつ（前書き）

前に別サイトに連載していた物を訂正しながら書いております。初心者ですので変な所が満載かもしだれませんがよろしくお願いします。もう、なんでもいいので感想、つつこみ等お待ちしています。

はじまり

「これは……」

薄暗い廟の祭壇の上、焚いていた炎が何の前触れも無く灰色の煙を細く上げて消えた。

王に異変が？

「ルーク様、祭壇の火が！」

周りの魔道師たちが怯えたように最上位の魔道師であるルークを見る。

「解かっている、リチャード付いておいで。サイトスに行く」

青灰色のローブの裾を翻してルークは直ちに印を素早く結んで呪文を唱える。

『アルベルト！ ルーファス！ サイロス！ 解せよ…サイトスへ通せ』

その声に応えて人一人が通れるくらいの漆黒の闇がぱっくりと口を開けた。

「直ぐに帰つてくるから。この事は口外しないように」

言ってルークはリチャードと呼んだ魔道師を連れてその闇に沈むとその闇は忽然と姿を消す。

廟の内部のように薄暗い石畳の洞窟然とした道を進むこと一ザンと少し。

二人の目の前に双頭の龍を象った彫金が細工されている扉が姿を見せた。ルークが手前に引いて開けるとそこはうつて変わつて眩しい光が差す大きな部屋。

そこは先程の廟と同じくたくさん魔道師たちがいたが室の様子は廟とはまるで違つて庁舎のようだ。

「ルークか」

そう言つて書類の山に埋もれるように座っていた茶色の髪の魔道師が顔を上げた。

「『鍵』に変化があつたのではないかと来てみたんだけど……」

それを聞いて茶色の髪の男は慌てて立ち上がる。

「朝は何も変わつたところは無かつたが……ルーク、王の執務室へ行こい」

首都サイトスの主城内の廊下を三人の魔道師が足早に王の元に急ぐ。

「今度の王はまだほんのひよつこだらう。その子供はまだ殻つきほどの雛だ。大丈夫なのか？」

赤毛の巻き毛を揺らしてリチャードが横の魔道師をつつく。

「四十一歳をひよつこ扱いとはおまえも爺になつたもんだよねえ」ルークが笑いながらリチャードにお返しとばかり背中をぱしりと叩く。そんな二人に前を行くガリオールが振り返つて厳しく咎める。

「お前達、こゝは『アート』の廟じやないのだ、そんな軽口を誰かに聞かれでもしたらどうする」「はいはい、爺とは言い過ぎました。お年寄りですね」

「ルーク！」

冷たい視線を受けながらも肩を竦めるルークにガリオールは溜息をつく。話の内容に反比例してその三人はまだ二十代の若者に見えるが……。

「ゴートの廟長としての仕事にルークを専念させてリチャード、おまえがもつとしつかりしてくれなくてはならないと言つた。いつまでもそんなでは生きヴァイロン様もお嘆きになられよう」

「もつと大人になれ、という事だ、リチャード……これ以上大人になるのは大変だ。なんせ四百年かかるこれなんだからさ」

ルークが真面目くさつた顔を作つて言つ。

「ルーク、おまえに王の半身を教育させるのを止めたほうがいいな。私の一番の失策だ。」

苦い顔をしてガリオールはまた溜息をつく。

「心配なく、ガリオール、せつせと立派な上位の魔道師を量産して
るから」

ルークが苦りきつたガリオールの横で笑いながら言った。

レイモンドール国の中王は即位の時に魔道と契約を交わし、正式に
王となる。

その即位以降、王は魔道の加護を受け、国政に携わるがその在任
中外見の歳は変わらない。つまり不老となる。

しかし、不死では無いため寿命は只人と変わらないと言われている。
だが、外に漏れてくる話はどうまで本当か嘘なのかはわからない。
秘密めいた国レイモンドール。

その実は他国はあるかレイモンドール国の国民たる解かつてはい
ない。

「ううう、寒いっ」

肌を海峡から吹く冷たい風が駆け抜けてクロードは首を竦めた。
もうレイモンドール国首都サイトスでは國花である白霧花が咲
き始め、春の賑わいを見せる頃合だ。

しかし北部に位置するここバルザクト・ロイス・ヴァン・ハーロ
ート公爵が治めるモンド州の州都エリアルはまだ冬の名残を色濃く
のこしていた。

だいたいがレイモンドール国自体が温暖な国ではない。

一年の大半は冷たい海からの風が吹く寒々しい季節が続き、春が
来たと思うと一斉に花が咲き乱れ短い夏を迎える。

「クロード、父上がお呼びだぞ！ おまえはすぐに供も付けずに居
なくなるから捜すのに骨が折れる」

州城は海を見下ろす小高い丘に造られている。クロードと呼ば

れた少年はその海を望む城壁の上に立っていた。

城壁に立つたところで見えるのは海岸線から僅かに覗く青い色だけ。

直ぐ目の前には国境に巡らされている結界のために一年中、濃い霧が晴れる事がない。

「ダリウス兄様、春はまだ遠いな」

従者を後ろに控えさせて髪を押さえながらこちらを仰ぎ見ている兄に向けてクロードは呑気に答えた。

従者つていつたつて俺には端から決まつた従者なんていないじゃないか。

心の中でそう悪態をついたが何も言わず兄の方へ向かう。ダリウスはやつて来た弟の姿を認めるに主城に向けて歩き出した。

「先ほど、首都サイトスから父上にお客様が来たのだ。高位の魔道師らしいけど……父上に何の御用かな」

レイモンドール国は三十ほどの州に分かれていてそれぞれ州候が自治を任せられていた。

その州候を補佐する者として多くの州が魔道師の州宰を置いているがここモンド州は魔道師の州宰がいないため高位の魔道師といつ存在自体が珍しいものだった。

先を行く兄、ダリウスの漆黒の長くてまつすぐな髪が白いマントの上で揺れている。

俺と兄様つて似てないよな、やっぱり。いつそりとクロードはつぶやく。

クロードの父、バルザクト・ロイス・ヴァン・ハーロートは公爵の地位にある。

現国王コーラルの兄であるからなのだが、なぜ弟が王位を継ぎ、公爵である彼がこのような辺境の地に州公として居るのかクロードには解からなかつた。

しかし、このモンド州の山からは良質の金や銀が採れる。大半は国の直轄地になつてゐるがその差配は州公に任されている。

それゆえこの土地は国にとつて重要である。 そしてもう一つ、この州の半分を有するゴート山脈には魔道教の本山がある為、ともいえる。

ハーネート公は逞しい体躯に釣り合つ四角くがつしりした顎に強い意志を秘めた黒曜石のような瞳。

しつかりした鼻梁を持つ高い鼻、情に厚そうなふっくらとした唇。顎には豊かに鬚が蓄えられていてなかなかに堂々としていた。

長男のダリウスはその父親の特質を一人で持ち逃げしたかのようによく似ている。

男らしい風貌と闊達な性格により、彼の評判は天井知らずだった。次兄のユリウスは十七歳、母親似で亞麻色の髪に薄い水色の瞳を持つ線の細い女性と見紛う美形だ。

ところがニヤリと時々つり上がつたように笑う口元のせいで酷薄な印象を与える。 クロードはこの次兄が苦手だった。

なんにおいても顔に出るダリウスと違つてユリウスはいつも突然現れて謀るような顔してクロードにちよつかいを出してはしひつとした態度で立ち去つていくのだ。

さつきもそうだ。

ダリウスがやつて来る一刻も前、クロードは自分の部屋で長椅子に寝ころがつて読書をしていた。

いや、していたつもりだったがいつの間にか掲げるよう持つていた本は垂らされた右手に持たれてはいたが、今は床に伏せられていた。

何か柔らかいものが頬に触れてきて。

「兄様！」 クロードは眠りから覚めて薄目を明けた。

「兄様！」 ユリウス兄様

目覚めた視界一杯にユリウスの顔があることに驚いて飛び起きようとして、クロードは自分の顔にひたとユリウスの両手がかかつているのを知つてもう一つ動搖した。

「こういう奴だつた。いつも不意をつくのだ。

ユリウスの軽くウェーブのかかつた髪が流れてまるでカーテンの

よつこニコリウスとクロードの周りを囲んでいる。

「よく開けておこでだつたね、クロード。もしかしたらおまえの

三國志

ユリウスの唇の右端が二ツと上がる。

「何のことです、ヨリウス兄様、一大事つて何ですか？」

今度はユリウスの目がすつと細くなつた。

普通なふ笑顔にて口にはなのだがこの元がせると何で

ぐなに醜薄な顔にならんぐた

サイドスナ

たからご

「その鄰に咲いてる花は？」

「なんてそんな事、リサ兄様が知っている。」

かつた。

「」

暴れる弟の両腕を掴む

「少し静かにしないと教えてやらないよ」
暴れる弟の両腕を掴んで動きを封じるとその耳元にしゃべる。

これに対して文句を言いたかったが、サイトスから来た客がなぜ自分に用があるのか大いに興味があつたクロードは取りあえず静かにした。

しかし、次期当主と本人はもとより、周りや父親でさえ思つてゐるダリウスよりもどこで仕入れて来るのやら。

ユリウスはこの州の内情はおろかサイトスの事まで良く知つているのだ。

「いつもこんな風に大人しくしていれば良いのに」
ユリウスはクスリと笑つた。

「サイトスから来た客は王宮付き魔道師の長のガリオールだ。宰相も兼ねている魔道師がお供を一人しか連れずに人外の道を使ってここまで来たようだ」

「人外の道？」

「そう、魔道師と王しか通れない……竜道とも言われている道。それを使えばサイトスからも一_一ザンもかからずここへ来られるな」
そんな道がサイトスからここへ繋がつていようとはクロードは思つてもみなかつた。

その道を使って魔道師が俺に何の用があるのだ？

ますます混乱するクロードにすいつと再びユリウスの顔が近づいて慌てて顔を背けるクロードの耳に触れる程、唇を寄せた。

「おまえ、あの男、ハーロートを本当の父親と思つているかい？」
あまりの事に顔を戻したクロードは結果、ユリウスとキスした状態になる。

「おや、これは何のキス？　起きぬけのキスじゃあ時間が経ち過ぎているが」

「だ一つ！　大人しくしているんだからもうちょっと離れてよ、兄様」

「はいはい」

笑いながら手を離した兄を押しのけてクロードは長椅子から立ち上がった。

「どうこうこと？ わたしは父様の子供ではないの？」

確かに自分は父親似ではない。 髪はシルバー・ブロンドで瞳の色は黒に近い藍色だ。 鼻も細いし、唇も厚くない。

しかし、それを言うなら線が細いのは自分が十四歳だからだらうし、目の前にいるゴリウスだつて男としては細すぎるくらいだ。ゴリウスが母親に似ているように自分も母親に似たと云ふこと…

…じゃあないの？

「自分の母親の顔を知ってるのか」

クロードの心を見透かしたようにゴリウスが尋ねる。 クロードは頭を横に振った。

彼の母親はクロードを生んではぐて亡くなつたのだという、州城に仕えていた女官の一人だつた女性。

クロードは後継者としては一人の兄が健在である^{やじょりゅうじょ}娘^{むすめ}に上らない庶子^{よし}だつた。

しかし、それも違うといふのか。

「兄様は私の出生を知ってるんですか」

クロードが思わず詰め寄る。

「ちょっと喋りすぎたなあ、だつておまえの『反応面白^{アキラカ}』^{アキラカ}言つてクロードのおでこに口付ける。

「今のは、さよならのキスだ、クロード」

ゴリウスは、硬直したクロードを残しおつたと退室していった。
ばかやわー… 僕はさよならのチューなんて歳じゃない！

馬鹿兄貴！

もやもやとした気持ちを何とかしたくてクロードは、お気に入りの場所、海を見下ろす城壁の上に立っていたのだ。

手の先さえ見えないほど霧のその先はどんな世界なのか。

島国であるレイモンドールの東は狭い海峡を挟んで大陸が広がっているという。この国で大陸に繋がっている港は首都サイトスしかない。

サイトス以外から大陸へ船を出す事も大陸から船がくることもない為、クロードは外国船を見たことが無かつた。

ダリウスに続いてクロードは州城の貴賓室きひんしつへ行くものとばかり思つていたが、ダリウスは普段あまり使われた事の無い部屋の前に立つた。

いつもいる取次ぎの下官もいなくて、ダリウスは一瞬躊躇とまどつた後に自分の拳を扉に当てようとしたがその直前に。

「ダリウス殿か、クロード殿もどうぞ入られよ」

中から声がかかり、ダリウスは深呼吸をして扉を開けた。

中央に置かれた大きい円テーブルに父親のハーコートが座り、その斜め横に灰青色の全身を覆うローブを身に纏いフードを後ろに跳ね除けている若い男が座っている。

部屋の奥にはガリオールが連れてきた魔道師がフードを深く下ろして控えていた。

「ダリウス・ザクト・ヴァン・ハーコートでござります。お初にお目にかかります」

「サイトスで魔道師長を勤めております、ガリオールといいます。あれはゴートの廟を取り仕切つてているルークといいます」

ガリオールの声に、ルークと呼ばれた魔道師が浅く頭を垂れた。にこにこと愛想よく挨拶を交わした茶色の髪をきつちり後ろに結んでいるガリオールはハーコートにも愛想の良い笑顔を向ける。

「お父上によく似ておられる。良い継君をお持ちですか、公」

そして……ガリオールの髪と同じ茶色の瞳がクロードの前で止まる。

「クライブ様と同じ……ヴァイロン様に似ている」

小さいつぶやきが洩れる。

「クロード・ヴァン・ハーマートで」『』といいます

軽く会釈をしてクロードはガリオールの茶色の目が一瞬猫のように細くなったのに驚いて隣の兄を見るがダリウスは気付いていないようなのだ。

「いくつにおなりですか

「十四歳です」

「まだ、お若いですね」

笑いかけたガリオールが次々と手を複雑に組んで意味の解からない言葉を発して。

それを補佐するように後ろに立つルークが古代レーン文字を宙に描いて大きく印を切る。

『刻印！』ガリオールの細長い筋張った指がクロードの左の胸をつく。クロードは急に田の前が暗くなり、大きな声が頭に響いて呆然とする。

「印が完成するころ迎えに参ります」

あまりの左胸の痛みと熱さに胸を押さえていたクロードはそのまま眩暈におそわれて崩れるように倒れた。

人の話し声によくクロードが目を開けたのはそれから一刻以上経った頃。

寝台から身をやつと起こすと女官が部屋を出て行く音がして、時を置かず父親が部屋に入つて來た。

選ばれた者

今まで父親が自分の部屋に来たことなど無かつた。そのせいでクロードは酷く落ち着かない氣分で父親を見上げた。

「もう、体はいいのか」

手すから寝台の側に椅子を置いて腰掛ける。

「父様、先ほどはお客様の目の前で申し訳ありませんでした」暫く無言のままの父親にクロードは自分の出生についての疑問をぶつけてみようかと口を開きかけた。

「父様、あの……」

「先ほどのガリオールの言葉はダリウスには聞こえていないし、あれは何にも見ていない」

「えっ？」

さつきのあれを兄様は見てないし、聞いてない？

「呪をかけられたのだよ、おまえは」

言つて、クロードのシャツのリボンを解くと左の身頃を肌蹴た。見るとクロードの左胸に薄く何かの模様が浮き上がっている。火傷のような赤紫の模様。

「これって？」

「……竜印」

父親がぼそりと言つ。

「わたしもこれを見たのは今日が初めてだが」

クロードの目を見据える。

「クロード、おまえはわたしの子供ではないのだ」

ハーコートの言葉にクロードはこれから自分が知りたかった話が始まることを知つた。

「わたしの子供では無いが、血の繋がりが全く無いわけでもない。我々は王の血脉で繋がっているのだ。おまえは、現王コーラル、わたしの弟の子供なのだ」

クロードの目が大きく開かれる。 父様は、この人は何を言つてゐるのだ？ 僕がこのレイモンドール国の国王の息子だつて？

クロードが混乱していふつむけにもハーコートの話は続く。

「あと数年之後、現王コーラル陛下が崩御される。次期国王となられるのはおまえの兄、クライブ殿下だ。クライブ殿下が即位なされる時、おまえもサイトスに赴き王の影として王崩御の時までお側に付き従う事にならう。おまえとクライブ殿下は双子として生を受け、この国の王は双子の内一人が継ぐことになつてゐるのだ」

「選ばれたのがクライブだつた」と、いうことですか

「いや、選ばれたのはおまえだ、クロード

ハーコートの言葉にまた、混乱する。

だいたい、双子なんてそんなに頻繁に生まれないし、それが条件であるというのならこのレイモンドール国が五百年も続いてきた事が嘘くさくなる。

そして、王では無く王の従属として生きる方が選ばれた者とはどうこう事なんだ？

父の話を聞いていても他人事のようだ。

こんな事が俺と関わりあるはずが無いではないか……。

唾を飲み込む音がやけに響いてぞきりとする。

クロードは、父親の話を神妙に聞いているのだが、その話は手のひらからこぼれる砂のように頭から落ちていく。

「王の即位の日までおまえはここでそのまま暮らすがよい。しかし、これからはある勉強が必要になる」

ハーコートはクロードから田を離して扉の方へ顔を向けた。

「ゴリウス、いるか

「はい、ここにいますよ、父上」

戸の外に控えていると思っていたハーコートは、思ったより近い声に眉根を寄せた。

「おまえ、いつの間にそこへ」

寝台の天蓋から下がっている布を搔き分けてぬつとユリウスが顔を出すと慄然とした顔を隠そうともせず、ユリウスをねめつけた。

「あなたが来る前から居ましたのでね。ルークが私の城に寄つて行きましたのでお話は全部伺いましたよ、話が早くて良かつたでしょう。じゃあ、明日から始めてよろしいのでしょうか、父上？」

不機嫌な父親に対してもいつものように唇の端をニヤリと吊り上げてユリウスが笑う。

「今日は無理をせずにゆつくり休みなさい」

ハーコートは優しく言つと最後にユリウスに冷たい視線で一瞥すると部屋から出て行つた。

その様子をクロードは何も言わず、見ていたが……。

何でこの二人はこんなに仲が良くないのか？ クロードが物心ついた時にはすでにユリウスと父親の仲はギクシャクしていた。子供らしくないユリウスのせいだと思つていたが、それだけでは無いのかもしねれない。

「どれ、見せてごらん」

口の端を上げたまま寝台に腰を降ろしてユリウスは父が肌蹴たままにしていたクロードの胸元に指を滑らす。

「くくっ、立派な呪だな、ガリオールは流石にきつちりしている」言いながら胸の模様を指でなぞる。

「あの……くすぐつたいから止めてもらえません？ 兄様」

「ハーコートの言つていていた事、聞いたろ？ 私とおまえは兄弟じゃないんだ。一人の時は名前だけでいいよ」

「じゃあユリウス、触るの止めてよ！」

「はいはい」

ユリウスは笑いながら手を引くとすつと表情を変える。

「今日ハーコートから聞いた事はこの先、私以外の人間がいる所で口外してはだめだよ。ダリウスやちび姫にもね」

「解かつた」

「よし、いい子だクロード」

ヨリウスはすいと立ち上ると部屋を出て行き、クロードはぽつりと部屋に残された。

明日から何が始まるのか……そして思い返してみれば現国王が崩御するなんて何で解かるわけ？

しかもそんな恐れ多い事を父様やヨリウスも何で平然と言つてのけるのか。

今晚はとても眠れそうに無い。胸のじくじくする痛みと共にクロードは長い溜息をついた。

「リカスの城へ

「兄様あ、おきて、もう朝ですよー。」

大声と同時に自分の腹の上にダイブしてきた妹の頭をくしゃくしやとかき混ぜながらクロードは体を起こした。

「うやつてクロードの部屋に供も連れず、ふいに入つて来るのはユリカスかこの妹姫だけだつた。

「エスペラント、おまえも結構重いんだから兄様は潰れちやうよ。だからこんなマネは止めて欲しいんだけど」

一応、兄らしくいいながらもエスペラントのわき腹をくすぐるとエスペラントがきやあきやあと笑い声を立てながら身を捩つて寝台から降りた。

「こつまでもお寝坊しているからよ。言わせてもらえば、この頭どうじてくださいるの？」「ザンもかけて女官に結わせたのにこんなにしてくれて」

リボンの取れかかつた黒髪を指差してエスペラントがふくつと頬を膨らませた。

「あはは……ごめん、ごめん、だけどその方がさつきより断然可愛いけど」

クロードの言葉に猛然と抗議するエスペラントを適当に受け流しながら寝台から降りて衣装部屋の扉を開ける。

「どこまでついてくるの？」

「え？　ああ、お着替えするのね、兄様。お食事の後、私を馬に乗せてくださる？..」

おねだりする、妹につぶと言つたになつて昨日の事を思い出した。

「じめん、エスペラント、今日は朝から用事が出来て無理なんだ。また、暇が出来たら乗せてやるから」

「えーっ、嫌よ、兄様！」

素早く衣裳部屋にすべり込んで扉を閉めてクロードは服を着替え始めたが扉はドンドンと叩かれている。

やれやれ……クロードは扉の向こうの姉妹を思つて溜息をついた。十一歳のエスペラントは父親によく似た黒髪とくるくるよく動く黒い瞳の少女だ。

小さい時から何となく城内で放つておられたような疎外感を味わつて育つてきたクロードにとつてはしがみついてくる、邪氣の無い妹姫のエスペラントは可愛くて仕方が無い。

女官達の「女としてお生まれになつたのなら、お母様に似ていらっしゃたら良かつたのに」などといつ声をどうかエスペラントは聞かないで欲しいと切に思うのだった。

ダリウスとユリウス、エスペラントの母親であるエリーゼは亞麻色の髪で色素の薄いユリウスと同じ水色の瞳の絶世の美女だつたらしい。

しかし、エスペラントを生んだあと、体調を崩し南のザーリア州に転地治療に行つたままあつけなく亡くなつたのだ。

まだ幼かつたクロードやエスペラントはまったく覚えてないのだが、ダリウスは 綺麗な人、だつたと思ひ。

これまた不確かな記憶でしかないがそう言つていた。

転地治療に行く前から病弱でめつた人に前に姿を現さなかつたらしいが城に絵が一枚残されていて、それは彼女が伝説のように美しかつたことの証明になつていた。

少し前に、初めてその絵を見て、何でユリウスが女装して描かれているんだと兄、ダリウスに聞いて笑われてしまつたのだが……。

「だつて、すごく似てるんだもの」

言つたクロードにそうだなど、ダリウスが頬を染めて言つていた事を……思い出した。

とにかく、それ以降ハーロート公は正式に妻を娶つた事は無く愛妻を城下の屋敷に住まわせているらしい。

誰に遠慮しているのか、クロードは解からないが子供達では無い

事だけは確かだ。

ダリウスもエスペラントも父親が新しい妃を迎えるべきだと常々言っているし、クロードも同意見だ。

ユリウスは父親の事なんか興味無もそつだし。

物思いに浸っていたクロードは、バキッと扉の一部が壊れる音に我にかかる。

「エスペラント、そんなに叩くとルーバーになってる所が壊れちゃうよ」

着替えを終えて扉を開けると頬を膨らませたまま、エスペラントがクロードに抱きついて来た。

「馬に乗せてくれるまでこの手を離さないんだから」

「ええ？ 聞き分けてよ、エスペラント」

うーんと唸つて困り果てたクロードが天を仰いだ所に戸を開ける音がした。

「何だ、騒々しいし、乳臭い匂いがすると思つたらやつぱりおまえか、チビ姫」

今日も一人でふらつと寄つた風情で壁に寄りかかってユリウスが目だけエスペラントへ向けた。

「ん~もう一 チビじやあ無いわよ、失礼ね！ ユリウス兄様には関係無いのよ。あっち行つてらして」

宿敵の登場にエスペラントも熱くなる。

「チビだからチビって言つてるだけだけど？ もつと他の事も言つてやつてもいいけど」

泣きそうなエスペラントにクロードも加勢する。

「もう、止めてよ！ ユリウス……兄様。大人気ないまねは止めてください」

それを聞いて、そーだ、そーだと嬉しがるエスペラントにつかつかとユリウスが近寄つてクロードから引つ剥がすとそのまま長椅子に放りなげた。

「痛いっ」

「何だよ、乱暴な」

二人の抗議など鼻で笑い飛ばしてユリウスはクロードの腕を掴む。「さつさと顔を洗つて……田やにがついている。食事を済ましたらわたしの小富において、クロード」

田元に手をやるクロードをニヤリと見る。

「あ、それと食事は軽めにしとけよ。後で吐かれると面倒だからな」腕を離して部屋を出て行こうとして思い立ったように振り向く。

「エスペラント、悪いけど当分、クロードは私が預かるからね。この前まで使つてた木馬にでも乗つておきよ。そっちの方がお似合いだと思うけど」

しつかり無駄口を最後にユリウスは部屋を出て行った。

「んもう！ 私、ユリウス兄様、大嫌いよっ」

扉に向かつて大声で叫んでからしょんぼりとうな垂れる。

「絶対、近いうちに乗せてやるから」

クロードがエスペラントの肩を軽く抱く。

「絶対よ、兄様」

部屋を出て行くエスペラントと入れ違いに女官が入り、朝食と洗面の用意をする。

「後で始末をしにまいります」

用意が整うと女官達は側に付くことも無く下がつて行く。クロードが父親や兄のダリウス、妹のエスペラントと一緒に食事を取らなくなつてもう久しい。

それでも昔は、横で女官が何くれと世話を焼いていたのだが、一人で食事を出来る歳になつてからは鬱陶しくていつも追い出していた、いつの間にか誰も付く事が無くなつていた。

また、ユリウスは、州城の敷地内にどういう理由か小さい城を貰い、そこを居室としている為やはり一緒に食事を取つた事が無い。それどころか今までその城へクロードは入つた事も無い。

テーブルの前に座つて並んだ朝食を見たが、さっきのユリウスの言葉に早速食欲が無くなつたクロードはフォークで添え物の茹でた

かぶをグサグサと突き刺した。

今日ぐらい、エスペラントを誘つて一緒に食べれば良かつたかな。

結局、一口も食べずにクロードは立ち上るとユリウスの小富へ向かった。

小さい時からクロードだってそれ相当の勉強を先生についてやらされていたが、ユリウスが先生について勉強しているなどと聞いた事が無かつた。

まあ、離れた小富に先生を呼びつけていたのならクロードが知ることは無いだろうが。

十八歳で成人となるこの国ではダリウスも去年、大々的に成人のお祝いをし、父親について政務を学びながら早くも権の移譲も少しずつ行われている。

後継者が決まっている今の状態であれば、クロードもユリウスも「ぐくづぶしに違いない。

しかし、クロードについて言えば仮の姿だったわけだ。俺が王の影として俺の役目ってなんだろう？ 反乱とかあつたら身代わりになる……とか？

一体、ユリウスから何を学ぶのか、それさえ解かっていない。自分より三つ年上なだけの兄が何を知っているのか？

まあ、本人に聞くか。考え方をしながら歩いていて綺麗に刈り込まれた庭園をすでに過ぎ、ちょっととした森の中を歩いている。ようやく森の中にユリウスの小富が姿を見せた。

ここまでちょっととしたハイキングコースだよな。

クロードは自分が来た道を振り返り、目を前方に戻して城の門の所に長身の男が立っているのに気付いた。

黒っぽい長めの上着を着た男 州城にいる官吏や下男とは服が違うがユリウスの従者だろうか？

「クロード様、お待ちしておりました」

その従者は顔色の悪い頬骨の浮いた顔をにっこりと笑い顔にして

クロードを城へと案内する。

殺風景な石造りの玄関ホールから一つ扉を開けるといきなり大きな部屋に続いていた。

地下室

「いきなり部屋なの？」

「お早うクロード、わたしの城は気に入つたかい？」

「この城の主がゴブラン織りの長椅子に寝転がつて読みかけの本を傍らの先ほどの男に渡す。武骨な外觀の中での部屋は中々に見事だった。

毛足の長い複雑な模様を織り込んだある絨毯が敷かれてその上に置かれている調度類も細工の凝つた見事なものばかりだ。

「陰気な城だけどこの部屋は綺麗だね」

クロードの物言いにユリウスはクスリと笑う。

「そうだな、この部屋と寝室ぐらいしか上は使ってないからな。クロード、来て早々悪いが早速着替えてもらわないと

「着替えるつて何に？」

「そこにある」

ユリウスが指し示した美しい螺鈿細工を施した机の上には、

見覚えのある灰青色のローブが他の薄物と一緒に折り畳んであった。「これってガリオールが着てたやつだよね？」

クロードが広げて問うようにユリウスを見た。

「ふん、同じだな、これを着ないと下には行けないからね。これから行く所は呪で結界が張つてあるから常人では行けないのさ」

立ち上るとその言葉が終わらないうちにからクロードの上着を背後からするりと引き抜いた。

「着替えくらい自分で出来るよ」

クロードが抗議する。

「じゃあ、どうぞ」

ユウリウスが後ろに下がつて腕を組んで人の着替えを楽しそうにみている。

ローブを手に取つて見ると灰青色の厚みのあるローブには濃い灰

色の糸で何やかや模様や、異国風の言葉が隙間無く刺繡されていて。下に着る薄物には嗅いだ事の無い香が焚き染めてあつた。

「着たけど……」

「そのようだね」

ユリウスが懐から銀で出来た、竜の飾りに革紐を通したペンドアンを取り出した。

「最後にこれを付けるのを忘れるな、クロード」

「この模様は……」

「そうだ、おまえの胸についている物と同じだ」

ユリウスが、ローブの上からクロードの左胸に指を突きつけた。

「おまえの竜印は完成してないからね。その代わりだ。竜印が完成したらペンドントもローブも必要なくなる」

竜印が完成するのは、現王が亡くなつてクライベグが王に即位した時か

「じゃあ行くよ」

「ユリウスは着替えないの?」

歩き出したユリウスにクロードが不思議そうに言つ。

「そうだな……ラドビアス」

「はい、こちらに」

いつの間に控えていたのか背後から短い応えがあつてクロードはビクッと振り返ると、ラドビアスと呼ばれたユリウスの従者が立っていた。

「私のローブを持ってきてくれ

「はい、畏まりました」

ラドビアスは静かに出て行くとすぐに黒いローブを手に戻つて來た。

そして、慣れた手付きでユリウスの服を脱がして服をさつと置んでいく。あつと言ひ間にユリウスは下着一枚になる。

さつき自分も同じようにして着替えをした筈なのにクロードは視線をもじもじと彷徨わせる。

「何をそわそわしている、クロード？」

楽しそうなユリウスの声。

くつそう、人が弱みを見せたら食いついてくる」とは解かってたのに。

じひいう所は絶対取りこぼさない奴、それがユリウスだった。

「可愛いよね、赤くなったりして」

クロードの顎を持ち上げてにたりと笑う。

ローブを手にしたラドビアスが「風邪を召しますよ」と、言つがそんな事を聞く彼では無い。

しかし、同じ男の体の箒なのにじいちが恥ずかしくなるような肌なのだ。

牛乳に薔薇を溶かした、あり得ないような色香を放つ体に亞麻色のウェーヴのかかった髪が揺れて……。

じぎまきしてこるクロードの前でクシュンーと、ユリウスがくしゃみをした。

「だから風邪を引きますよと言いましたのに。いい加減、服着て下さいまし」

ぼそっとラドビアスが言いながら薄い裾の長い前開きのシャツを着せ掛ける。

「つるさいよ、おまえ」

言いながらも手を動かして黒いローブを着ると壁際にあつた燭台に火を点けた。

「じゃ行くよ、クロード」

部屋の最奥に竜の彫刻が施してある一見、扉には見えない壁に向かつて印を結ぶ。

『アルベルト！ ルーファス！ サイロス！ 解せよ…』

低く唱えると壁が消え、下方に続く階段が現れた。

薄暗い中、燭台の灯を頼りに下りていくと後ろから足音が聞こえて振り返るといつの間に着替えたのか灰青色のローブを着たラドビアスが付いて来ていた。

「灯をもう一つお持ちしました」

つて、コリウスもこいつも魔道師つて事？

階段を半分くらい下りた所でクロードは頭痛が酷くなり、壁に手を付きながら下りていたが眩暈がして前を下りるコリウスに倒れこんだ。

「おや、気分が良くないのかい？」

抱きとめたコリウスに吐きそつ、それだけ言つてクロードは氣を失つた。

「竜門をぐぐつた所では何ともなかつたのに……鈍いのかな、この子」

「私がお連れしましょう」

差し出した手をコリウスが払つ。

「いいよ、軽いし」

「ですが」

ラドビアスはコリウスのローブを指差す。

「吐かれますよ、」「」「」

「うつ！」

コリウスの顔が引きつる。

「クロードは預ける」

「だから最初に言いましたの」「……」

「うるさいつ！」

主人の憮然とする顔などどこ吹く風で、ラドビアスはクロードを肩にかついでわいつわと下りて行つた。

この匂い。 今日着替えた服についているのと同じだ。

クロードは、部屋中に満ちている香りに刺激を受けて目をさました。

薄暗い壁一面に装飾的な外来の文字が描いてあり、床と天井は円や直線の組み合わせの図にやはり字がびっしり描いてある。

一方の壁は天井から書棚が作り付けてあり、丸めた書物やら本がぎっしりと詰め込まれていた。

その書棚の手前に置かれている長椅子にクロードは寝かされた。頭を上げて起きようとすると後頭部がズキリと痛む。

「目が覚めたか」

「うん」

ついそうなクロードに構わずヨリウスが手を引いて起き上がらせる。

「頭、痛い」

「すぐ、慣れる。それより、おまえ私が何者か知りたいだろ？？」

「そりゃあ知りたいよ」

クロードは頭を押さながらも座り直した。その横へヨリウスが座る。

「私はこの州を任せられた魔道師……ということになっている。ハーハー」

「つて……それじゃあそつじや無いって事？」

モンド州には魔道師の州宰がないと思つていたが、そうではなかつた。

州宰が魔道師なのでは無く、魔道師は州公の子供になりすましていた……と、いうこと？

「なんでまた、そんな事？」

「そりゃあ父様も気分良くないか……。

「なんでって……」

ヨリウスの眉が上がる。その様子を見てクロードはあつと思つ。

「俺のお目付け役なの？ ヨリウス」

クロードの言葉にヨリウスが軽く息を吐く。

「そうだな……そんなものかも」

ラドビアスの咎めるような顔をヨリウスは無視する。

「さてと、勉強しなきやあな。じゃあ、この国の成り立ちから……」

言いかけたヨリウスの言葉をラドビアスが遮る。

「ユリウス様、ダリウス様が城に後一ザンもすればお着きになりますが」

ユリウスが大きく舌打ちする。

「ちつ！ 今日から始めると言つておいたのにハーコートめ、息子を放つておいたか」

眉を顰めながらふらりとクロードを立たせて肩を貸すと歩き出す。

「さつさと歩け、クロード」

有無を言わせずに歩かされてクロードは気持ち悪いと泣き声を言うが無視された。

「ラドビアス、ダリウスを足止めしてくれ」

「はい」

ユリウスに答えた後、ふいにラドビアスの気配が消えた。

一人の仲

地下室から何とか元の部屋に戻り、クロードは不本意ながらコリウスに手伝つて貰いながら来た時の服に着替えて長椅子に寝転がつた。

「気分が悪いなら寝室で横になればいいのに」

「そんな事危なくてできないよ」

クロードを気遣つて言つてるとはとても思えないのとりあえずそういう甘言は断ることにする。

「ああそう

どこまでも人の弱つている所を見るのが好きな性分のユリウスはにやりと唇の片端を吊り上げた。

一人が何気無くをどうにか装つた頃合を見計らつたようにラヂビアスの声が来客を告げる。

「ダリウス様がお見えです」

今日は従者を一人しか伴わないでかなり急ぎで来たのか肩で息をしている。

「どうしました兄上、何かご用でも？」

いつの間に用意したのか、八重の花を模した華奢かやな茶器に入れたお茶を美味しそうに飲んでいるユリウスは今までバタバタと動いていたとはとても思えない。

ダリウスは眉間に皺を寄せてつかつかとユリウスに歩み寄るときなり両肩を掴んでそのまま椅子に押さえつける。

「何をするんです、兄上」

「ガリオールは何をしにこの州城にやつて來たんだ？」

茶器をそつとテーブルに戻して訝しげに見上げるユリウスに強い口調でダリウスが問う。

「そんな事、父上に聞けばいいじゃありませんか」

自分の肩を掴んだ手を埃を払うようにのけながらユリウスが二タ

りと笑つたのを見てダリウスの右眉がぴくつと動く。

「父上は何も教えて下さらない」

苦々しく言いたく無かつたものを絞り出すよつてダリウスが言った。

「それでなんで私が知つていいと思つていらっしゃるんですか。兄上が知らないことを」

しれつと言つコリウスにダリウスはを自分抑えられなくなる。

ガターン！ と、テーブルに拳を叩きつけてその勢いでテーブルに置かれていた茶器が受け皿ごと盛大な音と共に床に落ちて割れる。「おまえ、父上とクロードの部屋で密談していたらっ」

青筋をたてているがそれでも何とか声を抑えようとしているので語尾がわずかに震えていて両の手を硬く握り締めている。

「あーっ、この茶器、私のお気に入りでしたのに」

コリウスが溜息をつく。

「ラドビアス、直ぐに片付けて。絨毯じゅうたんにしみが残つたら大変だ」

言いながらお茶が自分の服に跳ねてないか点検するようにあちこち引っ張つて見る。そこへ、ラドビアスが掃除道具を手にやって来てしゃがみ込む。

自分を無視された会話にダリウスの抑えていたいらいうが暴発する。

膝をついて片付けている、ラドビアスの頭じに伸ばした手がコリウスの胸倉を掴んで引き上げる。

「私を馬鹿にするなよ、コリウス、どうにうつもりだ。私は……私がだけ何も知らないなんて事は許せないし、そんな状態は好きではないのだつ」

「いた……痛いですよ」

コリウスが抗議の声を上げるがダリウスは力を緩めようとしない。「何も知らないって……あなたが知らない事なんて山ほどありますよ。今まで全部知つてていると思って暮らしていられたなんて何て幸せ者だつたんだか」

ますます、自分を窮地に追い込むよつた馬鹿にした口調にダリウスの自制心も吹っ飛び。

しゃがんでいる、ラドビアスを避けて横にコリウスの胸倉を掴んだまま引きずつていく。

「何を父上と話していたのか全部喋つてもううそ、コリウス！」

「解かりましたよ、苦しいから離して貰つていいですか。それにクロードが心配そうに見ていてますよ、兄上」

コリウスの言葉にはつとして部屋を見回したダリウスの目に長椅子から身を乗り出して心配そうに見ているクロードが映つた。

「クロード、なんでここに？」

コリウスから手が離れ、片付ける手を休めて見ていたラドビアスが片付けに戻る。

「別に密談なんてしていませんよ」

逆にコリウスからダリウスに近づいてダリウスの肩に手を置く。

「大げさなことじや無いんですよ、兄上。魔道師長のガリオールに挨拶にも行かなかつたのを クロードの部屋に居るところで見つかつて説教されていたんですよ」

クスリと笑つてダリウスを見上げる。

「あんまり兄上が必死なんで、ちょっとからかいたくなりまして… 申し訳ありません」

「かつ、からかうなどと！」

ダリウスが慄然とするのを幼い子か、はたまた恋人がするように腕を絡ませて上目使いでダリウスを見る。

「私は兄上を敬愛しておりますよ、信じていただけませんか？」

「おまえはどこまで信用していいのか…。ともかくそういう事ならもう、良い、帰る」

絡められた腕を慌てて振り解いてダリウスは城の外に待たせていた従者を連れて帰つて行つた。

一体、二人の関係はどうなつているの？ 弟に腕をとられて顔を赤くしている兄さんって？

しかしさつきユリウスの着替え見て俺も顔を赤くしていただと
思い出した。

「あはははは……ダリウス、あいつ、何しに来たんだ、変な奴！」
お腹を押さえて笑い転げているユリウスを見る。こいつと関わ
るととにかく自然なことが不自然になる。

「あなたの方がよっぽど変だ」

思いつきり冷たくクロードは言つてやる。

「おや、気分が良くなってきたのだろう、クロード？ 明日からは
少しは実のある時間を過ごさないと王の即位に間に合いやしない。
いいかい、クロード。明日からはサクサクいくからね。吐いてる場
合じゃないよ」

クロードのおでこを人指し指で弾いてユリウスが言つた。

「わかったよ」

サクサクって……いろいろ言いたかつたが吐いて一刻以上寝
ていたのは本当だったので 大人しくクロードは返事を返す。

「今日は体も慣れていないし、もうお帰り」

「はい」

何が何だか何も身には付いていないが恐ろしい程自分が昨日まで
の境遇と違う事、だけは実感出来た一日だった。

「コリウスの正体

次の日の朝、クロードが小富の前まで来るとやはりラドビアスが門の所で待っていた。

「おはよう、ラドビアス」

「お早うございます、クロード様」

「俺が来るの、ずっと待つてたの？」

「そうだと悪いなあと思ひながらラドビアスを見ると、ラドビアスがにつこり笑う。

「いえ、途中に使い魔を見張りに出して、知らせを聞いてから出て参りますのでご心配無用ですよ」

使い魔つてそんなおつかない物がいたの？ クロードは今来た道を振り返つたがそれらしい物は見え無かった。

城に入つてそそくさと着替えてラドビアスに続いて地下に下りるがやはり気分は良くない。

地下室には昨日嗅いだ例の香の香りが満ちていた。その中でにコリウスが机について分厚い異国の文字で書かれた本を開いて読んでいた。

「クロード様がおいでになりました」

ラドビアスの声に顔を上げる。

「ああ、今朝は吐かなかつただろうな、クロード。」

「吐いてません」

朝の挨拶がこれからこのやりとりだつたら最低だ。

コリウスは黒いローブを着て髪を黒のリボンで結んで先生モード全開のようだ。

「では、この国の成り立ちから……」

「成り立ちくらい、俺、習つてるよ。」

昨日と同じ所でまたもや話を中断されてコリウスがむすつと顎で言えと示す。

「じゃあ、言つてみる」

「えっと……レイモンドール国は五百年前、太陽王と言われた、ヴァイロン王によつて統一された。王は、一人の魔道師に命じて魔道を使って国境に結界を張らせ、國を外国からの侵略から守り繁栄させて今日に至る。……んでしょう？」

ちょっとびり間の事をはしょつたけどまあ、こんな感じだった筈とクロードはコリウスを伺つ。

「まあ、それは表側の歴史だな、本当の所は少しずつ違う。」

見てきたかのごとくコリウスは言い切る。へーえ？ と、クロードが興味を示してコリウスはさうこなくちやと満足そうに話し出す。

レイモンドール国の五百年と少し前、この島国は今は州となつている小さな国が互いに争つて疲弊していた。

この島の豊富な鉱物資源を手に入れようと大陸側からも何度も何度と無く戦を仕掛けられて戦乱の時代は長く続きどの国も貧しかった。この島の北部に位置する、モンド国の三年前に王に即位したばかりの若い王、ヴァイロン。

大陸側からルクサン皇国ドリゲルト率いる今までに無い大軍に他の国が次々と倒されていく。

つい三日ほどの短い間に主城を落とされ、モンド国の大半を占めるゴート山脈に逃げ込んだ。

彼は、そこでそのゴート山脈で一人の魔道師と契約を交わしたのだ。

「どんな契約？」

クロードの質問は、黙つて聞け！ と、一喝される。

その契約とはこの島国を魔道を奉じる国にする事、その代償としてヴァイロンを島国を統一した、建国の王とする。

王は即位する度に自分の半身を魔道側に引き渡すこと。王が即位する為には前王が死んだ後に直ちに『鍵』と契約を交わすこと。

『鍵』？ またもやクロードが口を出すのをコリウスがペシツとク

クロードのおでこを指で弾いた。

「痛っ！」

「これから話してやるから大人しく黙つておけ！」

王が契約を交わすのは『鍵』だ。それは王と契約すると王の意思によつて剣となり、指輪となる。

いつもは王は指輪にして身に着けている。それを持つていることが王の証だ。

「もつともこの平安の世の中で『鍵』を剣に変えた王などいないが」「それと……」

ユリウスが付け加えるように話す。

「王の剣でその魔道師を斬ればこの島にかけられている呪はすべて無くなり、契約を破棄する事が出来る」

「それはお教えしなくても宜しいのでは」

ラドビアスが困ったように口を出す。

「つるさい！」

これまた、ユリウスに一喝された。

しかし、そんなことよりクロードが気になつたのは

「五百年以上前にヴァイロン王と契約した魔道師がまだ生きてんの？」

そっちの方が凄い。クロードの言葉にユリウスとラドビアスが顔を見合させた。

「クロード様、これをご覧下さい」

ラドビアスが胸元をぐつと下げて自分の左胸を見せる。赤紫の鮮やかな、クロードの薄いものとは違つて少し模様に沿つて盛り上がりつている。

「これを頂いた者はそれが完成した時点から歳を取りません。つまり、ヴァイロン様と契約をされた魔道師のイーヴァルアイ様が亡くなるまで、不慮の事故や相当の怪我以外は不老不死となります」

じゃあ俺はあと数年後に成長が止まってしまうということ？

「初期の頃にイーヴァルアイ様から直々に竜印を頂いた魔道師は三

人おりますが、その者たちは今でもおりますよ。先ほどお会いになつた、ガリオールもその中の一人です」

歴代の王の半身が竜印を受けて上位の魔道師になり、州宰や各所の代官を務めているということか。

「じゃあ、ガリオールも何代目かの王の半身だつたの？」

いいえと、ラドビアスは即座に首を振る。

「国内の各所にある廟から上がって来た優秀な魔道師にも竜印が授けられますから今は、ざつと二百人あまりでしようか」

それでも何十万人といる魔道師の中での二百人とはほんの一握りの人数でしかない。

「ねえ、ラドビアス、竜印を持つ魔道師がエリートなのは解かつたけどそのラドビアスが従者みたいなことをしているって事はユリウスがラドビアスと同位の魔道師な訳無いよね？」

クロードの問いにラドビアスはユリウスを見る。

「……まあ、そうだな」

言いにくそうにユリウスが肯定するのを見てラドビアスがくすつと笑う。

「私の名前はもう一つ、あつてそれは……イーヴァルアイという」「イーヴァルアイってあの五百年前、ヴァイロン王と契約したっていう……」

「そうだ、十七歳よりは少し、上だつたかな」

「そりゃあ思いつきりさば読みし過ぎだつて！」

「うるさい！ 人を年寄り扱いするなよ」

ユリウスがブイッと顔を背けた。

「宰相のガリオールは王の半身じゃ無いってさつき言つてたけど？」「顔を背けたユリウスに代わりラドビアスが答える。

「初期のモンド州の廟で飛び抜けて優秀な魔道師が一人おりまして。人が首都サイトスで宰相と魔道師長を勤めております、ガリオールで今一人がモンドの廟を束ねて いる廟長のルークともうします」ラドビアスが昔語りをする親戚の小父さんみたいに話すのを聞い

て少し背中がぞくりとする。

見た目は二十代後半から三十代前半に見えるが、なんといつても十七歳と偽称してきたユリウスが五百年以上生きているのだ。

十四歳のクロードにしてみれば考えの及ばない長い年月だった。

「歴史はもういい、次だ、次」

ユリウスが書棚から巻物を抜き出して机に広げる。

「印の種類と、範字の読み、書き……だな」

それを覗き込んだクロードが声を上げる。

「知ってる。それって大陸の東にあるバラナシっていう国の中の文字だよね」

「何で知ってる？」

訝しそうに聞くユリウスにクロードが種明かしする。

「言うからさ、そんなに怖い顔しないでくれる？」

怖いと言つ割りに平然と机の上に腰掛けてユリウスと向かい合う。「話は簡単、昨日、帰りに予習したいってラドビアスに頼んだら最初はこれでしょうつて見せてくれたんだ。で、どんぴしゃりつてわけで」

「ラドビアス！」

ユリウスのきつい声に、はいと返事をしたラドビアスにユリウスが手に持つた巻物で殴りつける。

「やめろよつ」

驚いたクロードがユリウスに組み付く。

「やめろ、俺が頼んだんだつ」

「離せ、クロード、ラドビアスは従者じゃなくて私の僕だ、僕が勝手な事をするからだ。おまえも私の僕のことでお出しするんじゃない」

「嫌だ、俺が関係してるんだから口出して何が悪いんだつ」

「まだ十四のガキのくせして生意気な口を利くな、クロード」

「なんだよ、それを言つなら人の何倍も生きてるくせに大人気ないんだよ」

い

だんだん話がずれて子供の喧嘩のようになってしまってく。

始まる、勉強

「がき！　がき！」

「つるせーじじー」

ラドビアスが二人の間に入つてクロードの襟を掴むコリウスの指を外し、コリウスの髪を掴むクロードからコリウスの髪を開放する。「出過ぎた事をして申し訳ありません。さあ、お勉強の途中だつたのでは？」

「そう……だつたな」

ほどけた髪を半ば強引に結い直されながらコリウスは机に広げた巻物を指した。

そこには普通、レイモンドールや大陸の西側で使われているインクとは違う黒い物で書かれている。

装飾的な文字が縦書きしてあるがクロードにはまったく解からなかつた。

「これが範字といつもので古代バラナシで使われていた文字だ。この一つ一つに呪が封じ込まれている。例えばこの文字は「力」と読むがこの右中指と左の薬指をこう組ませて呪を発動させる」「爆！」言葉が終わつた途端、目の前で激しい爆風が起つる。

クロードは机から吹つ飛んで反対の書棚にぶつかり背中を打ちつける。

その彼の上にバタバタと書棚から巻物が降り注いだ。

「痛いっ！」

腰をさするクロードにコリウスがにやりと笑う。

「少し威力が過ぎたか……悪かった」

全然悪かつたと、思つてない口調でコリウスが言つがさつきの意向返しのつもりに違ひない。

「くつそつ」

コリウスとの勉強には体力も必要らしい。

「では次の字だが……」

字と言われば字にも見えるが、クロードには模様の一つにしか見えない。

それは、読むのも書くのも難しそうでこれを使いこなすのはかなり苦労しそうだ。

「基本はこれだが私の呪法は古代レーン文字を組合させている」

今度は鹿皮に燻し銀の飾りを施した立派な表装の分厚い本を取り出して開いた。その中の一つを指差す。

「フェイユーと読む。力を現す言葉だ」

尖ったもので引っかいたようにも見える、横書きに書かれている文字を説明しながら巻物の方を今度は指差す。

「これは『ラ』火を現わす」

言いながら印を結ぶ。

「左人差し指を立てて他は握り、その立てた左人差し指を右手で握る。智拳印という 意味は風勢だな」

そのまま直ぐ後、『焼尽せよ!』コリウスの言葉が終わる前にクロードが一足先に脇へ飛びのく。

恐ろしいほどの火柱がクロードが座っていた椅子を直撃して椅子は一瞬で燃え尽きた。

「解かつちゃつたか

「笑い事じやあないだろう! 殺す氣かよ、まったく」

楽しそうに笑うコリウスと真っ黒な椅子の残骸を横田にクロードは大きく息をはいた。

レーン文字『力』と範字の火を組合させて後は風の印とすれば予想がつくが、早い所これらを覚えない逃げるばかりではいつか大怪我、いや殺される。

まったく物騒な師についてしまつたとクロードは冷や汗をかけてコリウスを見る。

まだ、心臓がばくばくしているが当のコリウスは至極楽しそうでクロードは再度大きく溜息をついた。

「『』の本、借りていいい？」

「うーん、本当はここから出したくないがおまえがやる気になつて
いるようだからいいよ。しかし、他の者に見つかるなよ」

ゴリウスは軽く本に触つて『解』と小ちく言つた。

「何？」

「ここにある物には持ち出せないよう呪を施しているからそれを
解いたんだ……そうだ」

ゴリウスは書棚へ向かうと次々と巻物と本を取り出して、クロードの差し出された手にのせていく。

新たに『』用の『』つい本がのせられるに至つてクロードは慌てて書
棚から離れる。

「もう、勘弁してよ、こんなに覚えられるわけないだら」

「明日までに印を『』まで覚えるよ！」

クロードの手の上から一つ巻物をさらりと広げると机に置いて、
ゴリウスはクロードの手の前で鮮やかに流れるように印を組んで見
せた。

「書物を机の上に置け」

言つとおりに書物を机に置いたクロードの背後に回り、手を添えて一通りクロードに印を組ませる。

「じゃ、一人でやってみろ」

えつと……とつぶやきながら、クロードがぎこちなく印を組む形
を所々手を取つて直してやりながら何度も組ませて。

「それじゃあ呪の発動は無理だな、明日までにしっかりやっておく
よ！」

ゴリウスは、あつさりとクロードを開放してラヂアスを呼ぶ。

「もう、外が暗い、送つてやれ

「はい」

ラヂアスについて階段を上りながら一人で帰れるよとクロード

は言つが。

「主の命ですから

ラドビアスに却下されて、服を着替えて薄暗くなつた空の下。

クロードは、ユリウスの小富を後にする。

人通りの全く無いしんとした森の中。

前を風除けの付いた蠟燭台を持つたラドビアスが歩き、そのまま後から心持よたよたとクロードが歩いている。

「あのさあ

「はい、何でしじう?」

分厚い本三冊と巻物まで持たされて重くてそこいら辺に投げ捨ててしまいたい衝動と戦いながら、クロードは田の前のラドビアスに話しかける。

「重いですか？　お持ちします？」

言つて振り向いたラドビアスが片手を差し出す。

「違つて」

手を動かせないのでクロードは首を振る。

「この本さあ、書き込みとかやつちやだめかなあ。さつき一応説明されたけどもうさつぱり忘れちゃつてるし」

「それはダメですね」

きつぱりと言われてショッギるクロードにラドビアスが優しく言つ。「お部屋に戻られたら少し私が説明させていただくというのはいかがです？」

「えーいいの？　ラドビアスさえ良ければお願ひするよ！　あいつさあ、説明するの速すぎだし他の奴にもあんな教え方してんの？命がいくつあつても足りやしないよ」

クロードの不満顔にラドビアスが笑む。

「の方があら術をお教えになるのはクロード様だけですよ。やつですね……教師としてはいくらか問題あり、ですから」

「そうなの？　だよな、うんうんとクロードは一人頷く。

あんな乱暴な教え方をしてた日にま、そこらじゅう死体の山と瓦礫の山で、ただでさえ少ない竜印を持つ者は全員死滅しているはずだ。

なんだつて俺に直々に教えよつと思つたのか勘弁してもらいたいものだ。

部屋に戻ると、半刻ほどラドビアスに今日のおせちに付き合つてもらつて。

クロードは心底先生はラドビアスがやつて欲しいと思つた。

ラドビアスが帰るとテーブルの上に用意されていた、冷え切つたラム肉を一口切つて口に入れるがやはり美味しくない。

散々つづいた後、横に添えてあるマッシュポテトを丁寧にラム肉に塗りたくつて遊び、そのまま皿を押しやつて夜着に着替えると寝台に潜り込んだ。

誰にも干渉されない代わりに放つたらかしの生活。

俺今日風呂入つてないよな……まあ、いいかとクロードは皿を閉じた。

明るい光が顔に当たり、ああ俺カーテン閉め忘れたんだなと薄日を開けた。

夢の中でヨリウスに追いかけられて呪文やら印やらでそこら中爆発の炎が上がり、ほうほうの体で逃げ続けて……朝を迎えてしまつたのだ。

寝た気のしないクロードは枕を頭の上に乗せてもう一眠つと思つたが。

「兄様、起きてる?」

妹姫の乱入によつて叩き起しそれてしまつた。

「うーん、今日は勘弁して」

「朝しか一緒に居られないのに寝ちゃダメー」

クロードの懇願も一蹴される。

「ねえ、兄様朝ごはんと一緒にしていいでしょ?」

言葉の内容は疑問形だがはからクロードの返事なんて気にはしてない。そしてテーブルに目をやってその惨状を見る。

「何あれ、兄様汚すぎる」

寝台の下に脱ぎ散らかしている服にもきやーきやー言いながら外にいる女官たちに声をかける。

「早く部屋を片付けて。テーブルの上もよ、綺麗にしたら朝食を一人分用意しなさい」

エスペラントの命に三人の女官が入つて来て片付け始める。クロードは仕方なく寝台から降りて衣装部屋に向かった。

洗面と着替えを済ました頃、丁度朝食の支度も整つて二人は向かい合わせにテーブルに着く。

「ねえねえ、あの意地悪ユリウスの所に何しに行ってるの?」

ベーコンを頬張りながらエスペラントがクロードの皿からラザイツシューを突き刺して自分の皿に入れる。

「うーん……」

意地悪ユリウスには思いつきり賛同するが何をしているか話すわけにもいかず、パンを齧りながら言い訳を考えている。

「意地悪って誰のこと?」

当の本人の声がして思わずむせてゲホゲホと口からパンや水を吐き出してしまった。

「汚ない、兄様」

エスペラントがうえっと顔を歪める。扉に寄りかかっていたユリウスがテーブルに近づくとフォークを振り回して牽制する。

「今、朝ご飯の途中よ、ユリウス兄様」

「だから何だよ、もう」馳走様したほうがいいよ、エスペラント。そんなに食べるとチビにデブがくつついてチビデブ姫になるよ」

「もう、ユリウス兄様なんて大嫌いよ」

エスペラントが大声を出す。

「なんか久しぶりに意見が合うな、私もおまえなんて大嫌いだ」冷たくユリウスが言い返してエスペラントが泣き出す。

そこへ

「いい加減にしないか、一人とも!」

凛とした声がして長兄のダリウスが立っていた。

ダリウスの婚約

クロードの何で今日はこんなに俺の部屋、満員御礼なんだ？しかも、ちつとも嬉しくないんだけど」とこいつ思いが伝わるわけもなく。

ダリウスは朝早いといつにきちんと髪に櫛を入れて、お気に入りの長めの上着にマントまで羽織っている。

朝から面倒だとクロードは息を吐いた。

「お早うござります。ダリウス兄様」

大人しく挨拶する弟にお早うと、簡単に挨拶を返してダリウスはエスペラントを見る。

「朝食の席にいないと思つたらここに居たとはな。父上がお怒りになつていらしたぞ。朝の挨拶もしないで何をしているんだ。エスペラント」

「じめんなさい、兄様、今から行つて来ます」

悪戯が見つかった子供のようにじそじそとエスペラントが部屋を出て行つた。明らかに次兄のコリウスに対する態度とは違つ。

「まったく、なんてお子様だうねえ。躊がなつてない」

エスペラントが出て行つた方を見ながらコリウスが言つ。

「おまえも同じだということに気付いていいのか」

ダリウスの怒氣を含んだ声が飛ぶ。それに対してダリウスの肩に手を置いたコリウスが失笑氣味に言つ。

「私が兄上や父上と同じ食卓で朝食を取つたりしたら父上は心臓が止まつてしまふんじゃあない？ それとも兄上はそれを狙つていらっしゃる……とか」

「また、お前はそんなことを」

説教を続けようとするダリウスの話をコリウスが遮る。

「兄上、じ婚約のお話があるのでしそう。おめでとうござります」
話をじりつと変えてダリウスを黙らせてしまう。

「……何でそれを知つている？」

肩に置かれた手を払いのけて、ダリウスが睨むようにユリウスを見る。

「ダリウス兄様、本当なの？　おめでとうございます」
クロードのお祝いの言葉にダリウスは渋々頷く。

「まだ、正式な話では無いが内々にそんな話があるにはある」
ダリウスは正当な跡継ぎで十九歳、そんな話があるのは不思議でも何でもない。

しかし、堅物のダリウスらしく、正式に決まったわけでも無い話を弟といえども話すのは憚られるらしい。

「それにもそんな情報をどこから仕入れてくるのだ？」

「まあ独自のルートがあるとしか申し上げられませんね。相手は사이트スのクライブ殿下の姉君、マーガレット様。ますますうちの格は上がるけど相手は従兄弟でしょ？　そんなに血を濃くして大丈夫なのかな。それに兄上も大変だ。上から降される姫なんていうのはさあ」

「ユリウスが理由知り顔でダリウスを見る。

「え？　何で、何があるの？　お姫様なんてすごいじゃない」

クロードの無邪気な意見を当のダリウスは無視する。

「あのねえ、一国の皇女なんて矜持きようしの塊みたいなものなんだよ。それが公爵つていつたつて臣下の嫁になるんだから自分の夫は自分の臣下だと錯覚してそりやあ大変……」

「ユリウス！」

ダリウスの強い声にユリウスがペロッと舌を出した。

ダリウスにしても気が重いには重いが。自分にとつて結婚は、社会的地位を強固にするための契約に他ならない。

そこには私情をはさむ余地などないと割り切つている。

貴族の、しかも州公の公子である身で自由な恋愛結婚などと夢物語を思い描いても仕方の無いことだ。

「まあ、兄上には可愛い妻妃を見つけてあげるよ」

事も無げに言うコリウスにクロードは目を丸くする。

「結婚もしてないうちから妾妃の斡旋話かよつ

「何言つてゐ、おまえも妾妃の子だろ」

「元つて、

「やめなさい、コリウス」

すかさず、ダリウスがたしなめる。

あーもう、鬱^{うつ}とおしい……とクロードはため息をつく。

「だいたい、お一人とも朝っぱらから何の御用ですか？ 私は用があるんでもう行きますからね」

話を終わらせてクロードは部屋を飛び出して行った。 残された

格好になつたダリウスにコリウスが話しかける。

「クロードが気になつていらつしゃるんですか兄上？」

「ああ」

ダリウスがクロードの出て行つた方を見ながら言つ。

「クロードも気になるがおまえとクロードがこそこそ何かをしているのが気になつてゐる」

「あははは……」

コリウスが破顔^{はがん}する。

「兄上はいつも真つ直ぐですね。じゃあ少しだけ教えて差し上げますよ、耳を貸してください」

コリウスの方へ頭を傾げたダリウスの耳に口を近づけて肩に手を置く。

「どにでもいる州宰と兼任している魔道師がなぜこのモンド州だけいな」と思います？」

「コリウスが何を言つつもりなのか見当がつかず、頭を上げようとしたダリウスの頭をコリウスの手が押さえる。

「それは……私がいるからですよ、兄上」

驚いたダリウスが頭に置かれた手を振り払つてコリウスと対峙する。

「私が魔道師なんですよ、兄上」

唇の片側を吊り上げてコリウスが笑い顔を向ける。

「どうしたことだ？」

ダリウスはコリウスの言つてゐる事がすぐに頭の中に入つてこない。

「一人でこそこそしてこるのはクロードも私の仲間にしようとした画策中でして」

ダリウスが尚も質問しようとするのをダリウスの口に指を押し当てるで止める。

「少しだけと言つたでしよう、クロードを誘いにきたんですよ。では、クロードを見つけに退散いたします」

コリウスが部屋から出て行き際に振り向きもせずに言つた。
「ああ言い忘れてましたが、マーガレット姫、大変な美人らしいですよ。ラッキーでしたね兄上」

手だけ後ろでに振つてコリウスは出て行く。その後姿が消えてダリウスはいまいましそうに彼らしくも無くテーブルの足を蹴り付けた。

何処に行くあても無くコリウスの小富に早々と着いたクロードをラドビアスが門の所で待ち受ける。

「お早う、ラドビアス」

「お早うございます、クロード様。コリウス様にお会いになりましたか」

部屋に通されて椅子に座つたクロードにラドビアスがお茶を入れた茶器をしながら聞く。

「会つたけど……何？」

「今日は急な用がお出来になつたのでお勉強はお休みにすると仰つておられたのですが」

「えーっ？ 聞いてないけど」

まあ、そんな話をするには聞かせたくない面子めんじが大勢いたが。

そこでクロードのお腹がグーッと鳴る。

「おや、お食事がまだでしたか」

「うん、まだみたいなもの、かな」

「何かお持ちしましょう。朝の残り物ですがよろしくですか」

「何でもいい」

クローデの言葉にこいつらとしてラドビアスは部屋を出て行くと直ぐに戻ってきた。まるい甘いパンといくつかの果物が盆にのっている。

「これくらいしかありませんが」

そう言って出されたパンをわしわしとクローデは口に入れると

「うまい、ありがとうラドビアス」

その前に座つて器用に赤い橢円の実をナイフで剥いて四つに割つて皿に落とし、次に黄みがかつた実の方へと手をのばす。

食事時に世話を焼かれるのが嫌いなはずなのに、ラドビアスにしてもうのは何だかとても居心地がいい。くそつ、こんないい従者をコリウスは独り占めにしているとはまるで。

「お腹いっぱい、『駄走様』

と、言つたといひで濡らした綿布を渡され、手と口を拭いていたところにこの城の主が帰ってきた。

東の庭

「クロード、捜していたのに。何、人ん家に勝手に上がり込んで」
飯たべているんだよ、おまえは」

「今日休みなんて聞いてなかつたんだもん」

「つるさいー 無断で食べたものを返せ」

「なんだよ、ケチ！」

テーブル越しに組み合つた手をラディアスが両手で押さえる。
理由を見つけて喧嘩をするのを止めてください。コリウス様、お
急ぎなのでしょう？」

「そうだつた……クロード、宿題はちゃんとやつたらうな」
「いや……その……」

そういえばあの後わざと寝台に潜り込んで寝ただつけ。

「もううん、やつたぞ」

後ひめたさゆえの強氣で言いながらコリウスを見る。

「へえ……」

「まあ良いよ、貸した本と巻物をしつかり勉強しておけよ、クロード

「ラディアス行くぞ」

何か言われるかと思つたがユリウスは龍門を開いてそいつを、潛
つていいく。

「それでは失礼します、クロード様」

頭を軽く下げてラディアスも主を追つて龍門を潜り、闇はふいと
消えた。なんだよ、さくさく急いでお勉強するんじゃないのかよ。
ほつとしたのか、がっかりしたのか自分でも解からないままクロ
ードは暫く椅子に座つていたが。 そうだ、と立ち上がる。

エスペラントを馬に乗せてやるか。 またいつ休みになるか
解からないのだからと自習なんて棚上げしてクロードはコリウスの
小富を後にした。

「あんな大昔の詩やら歌やら今更何の役に立つていうわけ？」

丁度、古典の勉強が終わつたところで少々げんなりしながらもエスペラントは威勢よく言つた。

その大昔の言葉が俺には大問題なんだよと思いながら、自分の部屋に置きっぱなしになつてゐる本のことを考えてクロードは苦笑した。

「今日は葦毛のロッショに乗せてやるよ」

「早く、兄様」

エスペラントに手を引かれながらクロードはダリウスの結婚話を思い出していた。

俺は結婚なんてこの先縁がないのだろう。

したいのかと聞かれれば今は全く好きな娘もないし興味もない。しかし、一生できないと決まつてるとなるとしてみたくなる……かなと思つ。

確かに魔道師は妻帯出来ないと聞いた事がある。

この国の国教であるはずの魔道教は在宅で魔道師になることを禁止している。

つまり魔道師はすべて出家して各地にある廟に属しているか、首都サイトスにある魔道師庁に属しているのだ。

一般の人人が魔術を日常使つことは無いが、まれに廟から脱走して街中で暮らす辻魔道師がいるにはいるらしい。

そんな事を考えながら厩舎に向かう。横で姦しくエスペラントが何か言つているがクロードは上の空だ。

「ドレイク、いる？」

厩舎の入り口から声をかけると太りじしの中年の男が手ぬぐいで

首の後ろを拭いながらやつて来て歯の欠けた口を開けて笑いかけた。

「これはクロード様、今日はどの馬になさるんで？」

いつもふらりと一人でやつて来て馬の世話や馬丁の子供と遊んでいた子供が、自分の雇い主の庶子とはいえ、本当なら口を利くこともない身分だと知つたのはつい一年ほど前だ。

相変わらず一人でやつて来て自分のような下賤の者にも町の子供じみた気安い口を利くクロードにすっかり慣らされて、今では膝を折ることも無く普通に話をしている。

「うん、今日は一人で乗るから体の大きさにロッシュにしようかと思つてる」

「あれは足が遅いですよ」

「今日は速くなくていいよ」

「左様で」

そう言つたところで厩舎の外にいる豪華なドレス姿の少女が目に入り、ドレイクは狼狽するが。

「ああ、こいつは気を使わなくていいから」

クロードが少女の方へ顔を向ける。

「エスペラント、父様や、兄様に告げ口なんかするなよ」

「そんなの、するわけ無いでしょう」

勝気な返事が返ってきて、ね？ とクロードは馬丁の男に片手をつむつてみせた。

大きい馬具をロッシュに着けると、クロードはドレイクに手伝つてもうつてエスペラントを馬に乗せて、自分は身軽にエスペラントの後ろに飛び乗る。

「じゃ、東の庭に行くか」

楽々と手綱を取つて並足よりやや速い速度で走らせ始める。

東の庭は庭とは言つても手入れのされていないやや荒らぶれた広い州城の敷地の東にある荒地なのだがそれだけに馬で走り回つても誰にも文句を言われない。

整備されている馬場みたいに人がうじゃうじゃ寄つて来ない。

クロードのお気に入りの場所だった。

白い小さな花が咲き乱れて雑草といえど群生している様はそれなりに美しい。

「きれいね、兄様」

「うん」

そこに中じぐれで馬を乗り回してエスペラントをあやあやあ言わせて。

ゆっくりと並足に歩かせているとクロードの前に乗つてゐるエスペラントが振り向いた。

「兄様、また乗せてね。私が大きくなつてもよ」

「ああ」

エスペラントにさづきつたがクロードはそれが無理なことも解かつていた。

エスペラントは十三歳になる。貴族社会で女の子が十三歳といえば、社交界にデビューする歳だ。

こんな風に城を抜け出して遊びまわるわけにもいかないだらつ。クロードだつてそうなのだ。あともう一、三年の後には現王が死んでクライブが王となり、胸の竜印が完成する。

そうしたら嫌もおうもなく、サイトスに行つてクライブが死ぬ時まで彼に仕えなくてはならない。

そしてその後は……際限の無い月日を魔道師として生きていかなくてはならない。クロードはふつと気持ちが冷めて馬を厩舎に向けた。

「今日はこれで終わり」

「え？ もう、終わりなの兄様」

エスペラントが残念そうな声をあげたが、クロードは早く自分の部屋に帰りたくなつていた。

自分の部屋に帰ると本棚の奥へ隠していた巻物と本を取り出して、机に広げて自分の思いを誰に言つてもなく口にする。

「俺は一歳やそこらで魔道師として生きる運命を『えられた。竜印の完成とともに俺は歳を取ることも無く人としての範疇はんちゆうを超えた生き物になつてしまつ。今までの王の半身たちは自分の決められた将来について葛藤は無かつたのだろうか。俺は……俺は恐ろしい」しかし、もし俺がクライブだつたとしても寿命が尽まるまで歳を取らない王として生きる道があるだけだ。

王といふ名の半身を魔道に人質に差し出す為に双子を世に送り出
す存在……。

暗くなるばかりの考えを振り払つてクロードは本に集中しようと
晩のラヂアスの説明を思い出しながら古代レーン文字を悪戦苦
闘しながら音読していく。

「俺つてクライブに仕えるんだよな。でもさ、そいつが嫌な奴だつ
たら最悪だよな」

印を結ぶ練習をしながらそんな事をぶつぶつ言つてゐる時点で勉
強に身が入つてないのは一目瞭然だ。

「どんな奴か見に行つてやるか」

声に出すと、クロードは立ち上がつた。今ならユリウスの城に
は誰もいない。

今のうちにロープとペンドントを取りに行こう。サイトスなら
竜道も整備されてゐるから俺でも通れるはずだ。

そう算段をつけるとラヂアスやユリウスが竜門を開けるときこ
使つている呪文と印を思い出して、さつきとは雲泥の差の熱心さで
練習してみる。

その一刻の後にユリウスの城の地下からじへ若い魔道師姿の者が
こつそり竜門を開けた。

サイトスの半身

「少し、休もうか、クライブ」

「あ、はい父上」

クライブは手に持っていた羽ペンをインク壺に入れて父親を仰ぎ見た。

最近、少しお疲れのご様子だけれど……。

二十代半ばの赤っぽい茶髪とスカイブルーの瞳の我父親をクライブは心配そうに見やる。

物心ついたときには自分の目に映る父親はいつもこの姿だ。

今年四十一歳になる筈だが王は即位した時から死ぬまで歳を取らない。

つまり、二十七歳で即位した現王コーラルは死ぬまで二十七歳の姿なのだ。

自分が大きくなつてもいつまでも若い父が不思議といえばそのだろうが、王が歳を取らないことを小さい時から教えられているクライブにとってはそれも自然なことだつた。

そのことがより、王を神格化させている大きな要因でもあつた。王は王であるがゆえに歳を取らない。なぜなら王は人ではないのだから。

今では母親とすっかり歳が離れているように見えてそれが少し切ない気がするが……。

前々から政務についての勉強はしてはいたが。

ここ最近、急に王の執務室で王の隣に座らされて。しかも横にはぴったりと宰相のガリオールがついて政務上の書類への裁可を行するようになった。

とは、いつても何が何だかクライブに判断出来る筈も無くて、いちいち横のガリオールに意見を聞いたり父親に説明してもらつたりしているのだが。

ガリオールも午後からは魔道師庁に戻る。

そのため、父親が忙しい時には父親の影であるクロードに見てもらっているのだが、自分がいることで政務が一倍も二倍も時間がかかるつていることは否めない。

急にこんな生活になつて肩に力が入つてゐる所為か少しの時間でもとても疲れていた。

それを父は解かつていてくれる。 その事がクライブは、嬉しかった。

「少し部屋に下がつても宜しいですか」

「ああ」

「では、ライル、ドレーンお付きして……」

「少し、一人になりたいだけだから」

クライブは慌てて供を断つて席を立つた。

「では主城からお出になりますよ」と、殿下

「解かつている」

ガリオールに返事を返すと急いで執務室を出て行く。

息が詰まる……今は一人になりたい。

足早に廊下を歩いて行きながら途中、魔道師庁に続く西側の廊下を何気なく見る。

薄暗いしんと静まり返つた長い廊下が続いている。 大昔、レイモンドー^ル国^の創世期の頃、あの西側でたくさんの血が流される出来事があつたらしい。

その後はどう掃除しようとも血の跡が消える事が無かつたという大広間があつたと聞く。

しかし主城自体はその後建て直されたのでその大広間はすでに無いのだが、その西側一帯が今の魔道師庁として使われている。

サイトスの城の中にはたくさんの魔道師が官吏に混じつて働いているが、魔道師以外の者がこの西側一帯に近づくことは無い。 別段禁止されているわけでも無い。

父はガリオールについてよく行つてゐるようだがクライブは魔道

師庁へ立ち入ったことが無かつた。

今は違う出入口が表側となつてゐる為、この廊下は人通りも無くまるで廃墟のような風情を漂わせている。

その薄暗い廊下の壁に突然闇が口を開けた。

「竜門？」ガリオールや他の魔道師たちも竜門は魔道師庁内で使う為、クライブは名前は知つても竜門が開くのを見たのは今が初めてだつた。

「あー氣分が悪い。魔道師庁内からちょっと外れただけなのにやつぱりだめだ。吐きそう」

目の前の魔道師は今までクライブが見たり、会つたりした魔道師からも聞いた事の無い口調で「えーっと、口だけで吐くまねをして……こちらを見た。

声を聞いたときから既視感を覚えていたクライブは顔を上げた魔道師の顔を見て声を失つた。

「どうやつて捜そつかと思つていたけど俺つて運がいいや」「もう一人の自分が声を上げて笑つた。目をまるくしてゐるクライブの手を取ると内緒話をするように声をひそめた。

「ね、君の部屋に行こう。見つかるとやばい」

何がやばいのか解からないままクライブはその魔道師を自分の部屋に連れ帰つた。

「俺はクロード、君の弟なんだそうだ。よろしく」

差し出された手を握り返して、そうかと納得する。

「私はクライブ・アスター・ヴァン・レイモンドールだ」

手を強く握るこの少年が自分の半身なのか。クライブは父親に付き添うローブ姿の男を思い、クロードを見た。

それでもこの少年も名をクロードと言はずしなかつたか？

きつちりと前髪を揃えて丁寧にブラシをかけたシルバーブロンドを肩上で切り揃えた髪型。

派手な飾りは抑えているが上質で上品な装いのクライブに対して、目の前のクロードときたら寝癖なのかあつちこつちに跳ねているいささか伸びすぎの前髪。

いい加減に後ろで髪をくくっている魔道師姿だ。

鏡を見ているようでもあるが顔立ちや髪の色以外まるで別人だと思つたのも事実だ。

「会いに来てくれてありがとう、クロード」

「俺も会いに来て良かつたよ」

胸を撫で下ろすしぐさをしてクライブに笑いかける。

「おまえ、いい奴そудだから、ほつとしたよ。変な奴に仕えさせられるんじゃあ死んでも死にきれ……じゃなくて死ぬことも出来なくなる身の上なんだから」

クライブは生まれてから初めて聞く汚い言葉づかいに絶句したが、この自分の半身にすでに好意を覚えていたのを感じた。

王になるのは当然だと思つていたし、疑いはない。でも、自分がその重責を果たせるのか……。

この所、王の職務の一端に触れるようになつて心に錘がのつかつていいくような気持ちになつっていた。

しかし、父にクロードがいるように私にも彼がいる。

ほつこりと胸が温かくなつて今までに溜めていた濁^{あい}を吐き出すようにながい息を吐いた。

「また、来るよ、今度は直接ここに竜門を開けるし」

さつさと立ち上がるクロードにまだ挨拶しかしていないと引き止めるがクロードは掴んだ手を空いている手で包むように持つてから外した。

「俺さあ、本当はまだこんな事やつちやあだめなんだよ。見つかつたらゴリウスに向されるか

「ゴリウス？」

「いや、こっちの話。気にしなくていいから」

唖然とするクライブを残し、バタバタとクロードは竜門を廊下に

開けつ放しにしていたのを思い出して走り去っていった。

その直ぐ後に入ってきたガリオールが長椅子にぼんやりと座り込んでいるクライブに声をかける。

「クライブ様、どうかなさいましたか」

「いや、何も」

はつと我に返つて見上げるクライブにガリオールは何を感じたのか辺りを見回した。

「何がございましたか」

やはり一人にするのでは無かつたかとちらりと思いながら目を細めた。

「いや、なにも無い、執務室へ帰る」

クライブの一歩後ろを歩きながらガリオールは魔道師庁へ続く廊下に目を向けた。

クライブの部屋でも感じた魔術の痕跡……やはり魔道師庁の外で術を使つた者がいるのだ。

普通の魔道師なら見すぐすか、初めから解からない程の魔術の痕跡。

光の残像のようなものをガリオールは見ることができる。

規律を作ることもそれにのつとつて行動するのが好きなガリオールは、この魔道師長になつて以来四百年あまり。

数々の規律や規則を作つてきたが、その中にサイトスの王城内の魔術の使用は魔道師庁の中に限つている条項がある。

それは魔道師以外の者に竜門から出て来る魔道師を見られてむやみに怖がらせたり、異質だと思われたりしたくないからだ。

レイモンドールの国教であるからにはあまり変なイメージを持たれるのは困る。 国教に定められている割には在家の魔道師はいない。

魔道師以外が呪文を日常的に唱えるなんてこともない、一般の人々と隔絶されている。

かなりそれだけで異質な集団であることは充分承知しているのだ。

彼としては、なるべく魔術の実態は伏せておきたいのだ。
もし、禁を破った者がいるなら厳しく罰せねばならない。
ガリオールは眉根に皺を寄せて執務室に向かつた。

人外の者

「もう、死にそう」
込み上げる吐き氣と戦いながらクロードは竜門を閉じる。 よろよろとコリウスの小富から自分の部屋まで戻るが。 ハイキングコースなんて言ってた自分を呪いたくなる。 長い道のりを這つように戻つて、やつと自分の部屋の寝台に倒れこんだ。

「俺って天才かも……！」

体はきついが達成感は十二分にあって、青い顔をにまりとせた。この場合、もし呪文を間違えて竜門から出られなくなつた。あるいは、まったく違う場所に出でしまつたらとか、ちらりとも考へない。

クライブ、あいつ、思つたよりいい奴そつだつた。 あいつ

のびつくりした顔ときたら…… とにかく笑つていると。

「楽しそうだな、クロード」

「コリウスの声。

「げっ！」

さつきまでの事がばれたかと冷や汗が流れる。

「べつ、別に楽しくなんてないけど……」

「隠れて何してた？」

「いつ、いや何にも

「だめだと思うが口がうまくまわらない。

「そんな理由無いだろ？、そんな格好でペンドントつけて魔道師っこかい？」

そうだった。 あまりの気分の悪さに着替えるのを忘れてコリウスの小富に置いてきてしまったのだ。 我ながら馬鹿だと思つが今更遅い。

あつといつ間も無くコリウスに胸倉を掴まれてすいつと持ち上げられた。

「魔道師姿を他の者に見られたらどうするつもりだったのか、意見を伺いたいね」

コリウスが冷たく言つが、意見を聞きたいわけじゃないのはクロードにも解かるので無言でコリウスを見上げる。

「今度、勝手なことをすると術の贊にえにしてやる。解かつたか」

小さい声でそれだけ言つと、コリウスは手を離してクロードを寝台に落とす。

「明日、出した宿題をみせてもらつ」

言つだけ言つてコリウスがクロードの忘れていた服を投げつけるように放つ。部屋を出て行った後、クロードは暫く身動きができなかつた。大きく息を吐いて息をするのも忘れていた自分にびっくりした。いつもの軽口こじまかされないと大きく怪我をする。

あいつは五百年以上生きている人外の生き物なのだ。

竜門を使ってすぐまたサイトスへ行つてやろうと思つていた浮き立つた気持ちがペシャンと萎む。つまんねえと声に出したクロードは、そのまま寝台へ潜り込んだ。

コリウスの前にラドビアスがお茶を入れた茶器を置く。

「私達がいない間にクロードが何をしたと思う？」

コリウスの問いにラドビアスは首を傾げる。

「さて？ 何かされたんですか？」

「竜門を勝手に開いてどこかへ行つたらしい」

「え？」と驚いた顔をラドビアスはコリウスに向ける。

「それは、かなり筋がよろしいのでは」

今度は片眉を上げてコリウスがラドビアスを見る。

「それはそうだが気にするのはそこじゃあ無いだろ？ ラドビアス。それに竜印を持っているか、ペンダントをつけているなら竜門を開けるのはそう難度の高い術じゃない」

「どちらへ行かれたか、ですか。調べますか

「おまえねえ！」

コリウスの声に明らかに怒氣が混じっているのにラドビアスはそのらぬ顔をする。

「では、クロード様に廟から誰か呼んで付けさせますか」

「どこへ行つたかなんて、竜門の番人のルーファスかサイロスにでも聞けば解かる。それより勝手をしないようクロードをこの城に連れ込んじゃうか……」

「それはお止めになつたほうがいいですよ」

「あの親父には私から言ひよる

「そうでは無くて」

ラドビアスの手がコリウスの手を押さえる。

「クロード様のお気持ちの事ですよ、問題は

「あれは、私の僕になるべく生まれた子だ。どうしようとも私の勝手だ」

コリウスは乱暴にラドビアスの手を払つていまいましそうに睨んだ。

「でもクロード様にも心の準備がいるでしょ？ 無理やりこちらに連れてこられて反感を買つてもよろしいんですか、嫌われても？」

「つるさいつ、おまえゴートの廟へ帰れ。代わりにルークを寄こしてくれ。あいつはおまえと違つて主に逆らつたり意地悪なことを言つたりしないからな」

指を突きつけられたラドビアスがぴしゃりと言ひ返す。

「半年後の結界の張り直しに向けてサイトスのガリオールと私、王に付いているクロード以外竜印を持つている者はすべて準備にかかりきりです。残念でしうが私の代わりはいませんよ」

十年前に州公の子供になると言つて廟から出てきた主は、前々から子供っぽい所はありはしたが、この所、それが前面に出てきて内心、ラドビアスも驚いていた。

最近のクロードとのやりとりなどは本氣でやつてしているとしか

思えない。

あんな主を見たのは五百年以上も昔、ベオーラの朝陽宮に居た頃のまだ。ほんとにお小さい頃くらいか……。

「じゃあ」

ラドビアスは主の声に物思いから引き戻されて顔を向ける。

「結界を張る時クロードも連れて行く」

「それはどうかと……魔道師の中にも術に巻き込まれて精神を病むものがあります。龍印が成つてからでよろしいのでは。百年後の次回になさっては」

「うるさい、反対ばかりするな。この国の結界がどうやって張られているのか知ることは重要だし、いい勉強になる。あいつは次王の半身なんだ」

話は終わりとヨリ・ウスは茶器を指差す。

「お茶が冷めたから入れ直せ」

「はい」

ラドビアスはそっと息を吐ぐがこれ以上は何も言えないことも承知していた。

「頭が痛い」

ずきずきする頭を押さえながらクロードは目を開けた。ヨリウスが帰つてその後、そのまま寝台で寝てしまったのだ。クロードは西に傾いた太陽の光が斜めに長く差し込んでいたのに気付いて、思つたより自分が長時間眠りこけていたことを知つた。

そうだ、服、着替えなくちやと寝台の中でもじもじとローブを脱いで衣装部屋に行こうと寝台から降りる。大きく開かれたバルコニーに面する掃き出しになつている窓から下を見ると、たくさんの方々が庭に灯され何やら賑やかな音楽まで聞こえてくる。

今日何があつたつけ？ そういえば何か言われていたような

……。

暫くのうちにクロードは思い出してげつと唸つた。エスペラントのお披露日のパーティが近々あるって……今日だつた？

この国では誕生日を特別に祝う習慣が無い。大陸側の国の中にそんな事をする国もあるらしいのだが。

しかし、何も無いわけでもなくて節日、節日にはお祝いもする。しかし、その年の都合の良い時で日にはあまり関係ない。ダリウスは春の生まれだが成人のお祝いは夏ごろやつていた。エスペラントは冬の生まれだが、この国で冬にパーティをやつても招待されたほうが迷惑だろう。

この国の冬は深く厳しいのだ。一番は成人のお祝いで男子は十八歳、女子は十五歳で大人として扱われる。

貧しい者も豊かな者もそれなりにお祝いするが貴族階級の女子のは十三歳がその歳になる。と、いつてもすぐに嫁入りするわけではなく、社交界へのデビューの意味合いが強い。だがもちろん、その歳から結婚話がまいこんでくることもある。

貴族の子女の結婚は政略のためなのだ。多少、歳が離れていうとも、相手が十代を超えたばかりだろうと関係ないといえばそうだ。

とにかく、貴族の女の子にとって十三歳のパーティは特別なのだ。早いところ服を着替えて下に行かないダリウス兄様に大目玉をくらう。

クロードは急いで衣装部屋に駆け込む。豪快に中をあさつて、目についた黒の裾の長い上着と対の細めのズボンを取る。上着の下にはリボンがついたドレスシャツを着込んで。慌てながら同色の靴をひっかけるように履いた。

ついで、鏡を見る間も惜しんで引き出しから黒のリボンを見つけ出すと、髪に何とか結び付けて階下に下りて行つた。

階段の途中で大広間にかなりの人数がすでに集まっているのが見える。しまつたと思いながらクロードは兄、ダリウスを捜す。

パーティの夜

玄関近くで父親とダリウスが、先触れの後に入つて来る近隣の主だつた貴族、豪商ら来賓の挨拶を受けているのをクロードは見つけた。そつと後ろから近づくと足音に気付いて、ダリウスが振り返る。「遅いぞ、クロード。昼に使いをやつた時には部屋に居なかつたらしいし……」

「すみません、兄様。ところでエスペラントは？」

「あそこだ」

兄の指差す方へ眼を向けると白いレースを胸元にこれでもかとあしらつたドレス姿。その上、山のよつに高く髪を結い上げて化粧をがんがんに施された妹、妹だよな？が中央付近で来賓客と挨拶を交わしていた。

「あつちに行つてもいいですか」

ダリウスの背後に小さく声をかけると、大人しくしつくのだぞという兄の声が返ってきた。

クロードは来賓客の途切れたところを見計らつてエスペラントに声をかける。

「十三歳おめでとう、エスペラント」

「クロード兄様」

振り向いたエスペラントがえーっという顔をする。

「何なのその思いつきりいい加減な頭……」

そういうえば起き抜けで櫛もいれてなかつたか。

「どう、今日の私？」

エスペラントが期待しながらクロードを見るのでクロードは戸惑う。

「えつと、そのドレス、すごいレースとフリルだよな」

「それだけ？」

「ええつ？ 今日の顔を、すこい塗つてるよね、びっくりした」

エスペラントの物凄い落胆した表情に間違いを犯したことをクロードは気づいたが、どこら辺がまずかつたかは解からない。

「兄様、だいっ嫌い」

思い切り足を踏まれてクロードは壁際に逃れた。

「これが嫁に行ける歳のお祝いなんて絶対嘘だ」

毒づいて、ついでに溜息もつく。もう少ししたら部屋に戻ろう。ちゃんとパーティに顔を出していると父と兄に見せたからにはもう自分は用済みだ。クロードは早くも帰る算段を始めた。
エスペラントには悪いが主役のエスペラントより目立つているのは長兄のダリウスで、まるで彼の一度目の成人のお祝いのようだ。貴族の若い娘達に囲まれて長身で見栄えの良いダリウスが爽やかに笑っている。と、誰か足りないと思っていたらユリウスがいな。きょろきょろと見回すと丁度クロードの反対側の壁際に置いてある椅子に腰掛けているユリウスを見つけた。

深い紫の服を着て今日は髪をゆるく三つ編みにして後ろに垂らしている。そのまわりに結構女の子たちが集まっている。それなのに彼女らにまるで声をかけるで無く、そ知らぬ顔でひたすら酒を飲んでいるせいで誰も近寄れないようだ。そうでなくともユリウスの風貌は気安く声をかけるには気がひけるほどの美しさなのだ。
そこへ、貴族の子弟らしい流麗な様子の男が近寄って何事かユリウスに話しかけている。あいつに知り合いなんていただと興味がわいたが、変にかかるのはまっぴらと知らんふりを決め込むクロードの前をダリウスが足早に通り過ぎた。

「ユリウス、久しぶりですね」

親しげに呼び捨てされた自分の名前、その声に顔を上げる。

「前に会ったのは君の兄上の成人のお披露目の時でしたよね」
にっこり笑って握手を求めて手を差し出すのを見て、ユリウスは小さく舌打ちをして立ち上がり手を握った。

「ボルチモア州のドミニク候の」子息、トラシユ様ですよね

首を軽く傾げてコリウスが言つ。

「覚えていて下さつて嬉しいです」

「もちろん、忘れるわけありませんよ」

言いながらコリウスは、トラシユが握つたままの手をやんわりはすす。

「今日はエスペラント姫の美しい姿を見られて良かつたですよ」

「では、お気に召しましたか。嫁入りの話なら父上か兄上のほうが話が早いのだけど、まあ私も口添えしますよ」

そう、返して脇のテーブルに置いていた背の高い杯を持って酒を飲もうとしたが背後から手首を掴まれた。

「コリウス、飲みすぎだぞ、もつ止めなさい」

「……兄上」

暫くコリウスを挟んでダリウスとボルチモア州候の子息トラシユが睨み合つ。

「丁度良かった。今エスペラントのいい縁談の話があつて……ねえトラシユ様」

その二人の間の緊張感など知らぬ素振りでコリウスが朗らかに言う。反対側の壁にいるクロードには何の話をしているのか解からないが、あれで相手が女の子なら普通なのにと眺めていた。どう見ても三角関係だけど。あんなところにのこのこ行かなくて俺はえらい。

食べ物もそこそこ食べたし、俺は酒なんて飲まないし。そろそろ引き上げ時だな。クロードは、階段を半分ほど上がりかけて踊り場から上階へ上がつて行く女性が目に入った。

「あの……すみませんけど」

クロードの声にびくっと肩を震わせて女性が振り返った。

「……何かしら」

振り向いたのは自分とあまり歳が違わないと思われる少女だった。そう思うがクロードには女性の歳がよく解からない。化粧をさ

れてしまつともうさつぱりだ。

「お客様の控え室はこっちじゃないんですけど」

「あ、ああそな？ 案内して下さるかしら」

なんか下官に間違われてゐるみたいだが、訂正するのも面倒で庭へ向けて手を向ける。

「こちらです、どうぞ」

少女を先導しながら横目で見る。自分もブロンドだがクロードは銀髪に近いブロンドだ。後ろから付いてくる明るく黄みの強い太陽を思わせる色とは大違いだ。この子が太陽なら俺は月だな…ふと思う。髪に似合つ大きい明るいブルーの瞳の可愛い顔立ちだ。ここいら辺のたぶん貴族の娘だろう。

「あちらですよ」

庭の左手にある一階建ての小宮を手で指し示して立ち去ろうとした、クロードに少女から声がかかる。

「ありがとう、クロード。あなた、ハーネート公の三男のクロードでしょ？」

少女はにっこり笑つて続ける。

「私は隣のボルチモア州の州姫でアリスローザといいます。トランシュ兄様について来たのだけど兄様つたらあなたの一番田のお兄様にご執心で私なんて放つたらかしなの」

ああ、あの三角関係の……とクロードはトランシュの顔を思い浮かべた。

「しかし、なんでコリウス兄様？」

「そうよね、州候の次期当主が男性好きじゃ困つた事だわ。でもあなたのお兄様、凄い美形ですもの。ここいら辺では有名なのよ、『写し絵なんて出回つて』

へえ、あいつの本性知つたら皆手を挙げて逃げ出すだろうに。そうクロードは考えていたが思い切りくだけた口調のアリスローザのことは別に変だとは思わない。

「ねえ、もう少しお話をしない、クロード？」

「いいけど」

アリストローザがクロードの手を取つて庭の奥の方へぐんぐん引っ張つて行く。いくらなんでもこれはおかしいとクロードも思つが。

「私前からクロードの事気になつっていたのよ、知つてゐる？」

いや、名前も顔もさつき知つたばかりなので知らないと答えると、ぱしりと頭を叩かれてクロードは目をまるくした。

「何度も私、ここに来てあなたに挨拶したことがあるのに全然覚えてないの？」

そう、言われても思い出せないが一応、ごめんと謝つておく。

「いいわ、許してあげるから私と一勝負しないこと？」

え？ 一勝負つて……。

アリストローザは辺りを見回して庭の隅にあつた手頃な棒きれを一本拾うとその内の一本をクロードに投げる。

「私、結構鍛えてるのよ」

そう言つて棒を構えるアリストローザにクロードは面食らつた。やはり自分に色氣のある話はまだ早いだろうが、何でパーティに来た隣の州姫と剣術の真似事をするはめになるんだ？

アリストローザからの誘い

「やめよしみ、こんな……」

クロードの声を打ち消す、アリストローザの気合とともに打ち込まれた棒を自分の棒でやつと止める。

「逃げてもむだよ。戦いなさい、クロード」

今度は横から払うように棒を打ち込んだのをクロードは、上から叩いて何とか逃れる。

「俺さあ、剣術あんまり得意じゃないし、止めない?」

どうにか逃げようとするクロードは、背後の下弦かげんからすくへつよう飛んでくる棒を跳んでかわしてわざと棒から手を離した。

「いてつ」

そこへ容赦なく、ばくつと棒が打ち込まれてクロードは声を上げた。

「君つて本当に強いね」

手首をさすりながらクロードが囁く。

「毎日、鍛えてるのよ、『めんなさいね。やりすぎたわ』

アリストローザがクロードの手首を持って、腫れてないか確かめる。

「いっいや、いって、何とも無いから」

ぞきまきしてクロードは手を引いた。

「私、お転婆がすぎるつていつも言われているのよ。でも何が好きって、ダンスより、歌より剣術が好きなんですもの。まあ私もクロードと同じ庶子なのよ。で、あまり厳しく他のお姉さまたちみたいに言われないから。父様も兄様も私を可愛がってくれているから自分が庶子だなんて普通は忘れているんだけど」

そういうえば、ドミニク候は名君と名高いが英雄色を好むの例え通り、たくさんの妾妃がいるらしい。確かに二十人を超える子供がいると聞いたのを思い出した。

その中で庶子といえど父親の田に留まり、可愛がられているのな

ら確かに庶子なんて関係なく任せなのだ。」

「で、私に興味があるのは庶子同士ってことだ？」

「うーん、なんか前に見たときに周りから浮いていてね、ほっとけない気がしたのよ。それにクロードって今の生活に疑問を感じているみたいに見えて……私の仲間にしたいって思ったの」

「仲間……？」

「うん、私ね、この国の現状を憂いでいるの。そういうの思つた事無い？」

急に話が政治色を帯びてまたまたクロードは面食らう。

「この国の……現状？」

「魔道師がこの国を牛耳つ^{ぎゅうじ}っている事がおかしいってことよ」

アリストローザの声がわずかに高くなる。

「王や州候の側に控えている宰相、州宰がなんでも魔道師なわけ？国事、州事すべて王、州候の意見より宰相、州宰の意見が通つて今じゃあ言いなりよ。この国は魔道師庁の意向で動いているのと同じよ。」

鼻息荒く話すアリストローザにクロードは言葉も無い。

アリストローザはこの国の成り立ちといふか根幹を否定している。こんなだいそれた事を初めて口をきく俺なんかに言つていいのかと心配になる。それに俺はどうちらかといふとアリストローザが敵視している側の人間になるべく準備しているのだ。どう、返事をしようかと考えている横から聞き知つた声がした。

「おや、クロード、おまえもなかなか隅におけないな」

声の方へ顔を向けるとコリウスとトラシュが立つていて。

「そんなんじやあ無いよ、兄様こそどこへ？」

「彼が居城へ帰るというので送つて差し上げるところですよ

トライシューが代わりに答える。それを聞いて女の子じゃあるまいし、自分がこの間ラジビアスに送つて貰つた事は当然棚に上げてクロードはへつと小さく声を出した。

「アリストローザ、城へ戻りなさい」

トライシユに不服そうな顔を見せるアリスローザの背中にクロードは手をやる。

「送つていきます。おやすみなさい」

送つて行きながら、アリスローザを盗み見ながらさつきの話を思い出していた。

自分での考えじやあないよな、やつぱり。 そんな考えを持った、アリスローザに影響力を与えられる誰か……。 建国から五百年、魔道に守られたこの国の内側から少しづつ崩れてきているのかもしれない。

長い安定した王朝が滅びる一因はお家騒動だ。 しかし、この国にはその争いが起きる懸念^{けねん}は無い。 なぜなら、王は生まれた双子の内のどちらかに限定され、魔道側が選んだ子の片割れが王になる事に決まっているからだ。 そこへ、他の王子や王女が入り込む余地は無く、王となる子供は魔道によつて王になるまで守られている。

そして、他の一因は……魔道師の持つ利権、権力を取り返そうとしている集団が生まれている。 その集団がどこまで結集しているのか、各州にどれだけ生まれているのかは解からないが、ボルチモア州は州姫が加担しているかもしれないのだ。

その上が知つていると考えたほうが自然だろうし、扇動^{せんどう}している可能性すらある。 何かきな臭い匂いが漂つて来る予感にクロードは溜息をついた。

アリストローザを送つて広間を横切つて階段を上がつているとダリウスに声をかけられた。

「ユリウスを見なかつたか、クロード？」

「私はユリウス兄様の従者じゃないんですよ。 いつも居場所を知つてゐるわけないでしょう」

そう答えながら知つていたりする。

「もう居城へ帰つてしまひたけど」

「そりが、なら良い」

クロードの返事に頷いて下へ降りる兄にふと悪戯心がわく。

「トラシュが送つて行つたけど」

一言言い添える。

顔色を変えたダリウスが外へ出て行くのをクロードは抑えきれず大笑いして見送る。

それにしても一応、兄弟つて事になつてゐるのにこれではトラシュより性質が悪いではないか。ダリウス兄様も女の子にもてもてなのに勿体無いよな。まあこの後、どうなるか知つたことじやないと鼻を鳴らしてクロードは自分の部屋に帰つた。

「今度、私の城にご招待させて欲しいのだけれど」

エスコートするようにトラシュがユリウスの背中に手を回す。

「ダリウス兄上では無く、私ですか」

「ええ、うちの城でサロンを開いているんですが身分に関わらずいろんな方を呼んで語り合つてゐるんですよ。貴方にもぜひ来て頂きたいのです」

「一人であまり城を離れた事が無いので……弟を連れて行つても構いませんか」

「ユリウスは暫く地面に視線を落として心細そつて言つ。

「もちろん、いいに決まっています」

「では、ご招待楽しみしております」

「何か企んでいる」

ユリウスの片側だけ唇を吊り上げたその顔はクロードが側に居たらしそう、言つたはずのかなり性質の悪い笑顔だった。

「ユリウス！」

大きな足音とそれに負けない程の声に一人が揃つて振り返るヒダリウスが険しい顔でやって来ていた。

「兄上、どうかしましたか」

ダリウスはユリウスの問には答えず、ユリウスの隣のトラシュ

をちらと見て視線をユリウスに戻す。

「父上に挨拶も無く居城に戻るなんて」

説教しつつユリウスの手首を掴んで自分側に引き寄せる。

「少し飲みすぎて気分が悪くなってしまったものですから……兄上から言つておいて下さい」

「だからあまり飲むなといったのだ」

「ダリウス殿、本当に気分が悪そうだよ」

トラシユがユリウスとダリウスの間に割つて入る。

「いや、そうだな、トラシユ、ありがとう。後は私が送るよ」

ダリウスが応酬おうしゅうしてしばし、無言で睨み合つ。その沈黙を破つたのは……。

「ユリウス様、お迎えにあがるのが遅れて申しわけありません」

灯を片手にラドビアスが現れた。

「ダリウス様、お客様、ここからは私がお連れいたします。では参りましょうか、ユリウス様」

「おやすみなさい、兄上、トラシユ様」

唖然とする一人を残し、あっさりとユリウスはラドビアスの元に行くと後ろを気にするでなく歩み去つて行つた。

地下室の勉強

次の朝早くにゴリウスの城に来たクロードが、ローブに着替えてラディアスと共に下に降りる。そこには、すでにゴリウスが長椅子に腰掛けで本を広げていた。

「お早うゴリウス」

「今日は吐かなかつたんだろうな」

本から顔を上げずにゴリウスが言つ。

「吐いてないって！」

クロードがむくれる。

「そりや そと、おまえ、ダリウスにトラシュが私を送つて行く事を言つたろう」

「さあ？ 兄様は一人が一緒に出て行くのでも見かけたんじゃないの」

内心どきどきしながら、クロードはしらじらと言つて席につく。

「まあいこよ、近々ボルチモアへ出かけるからね」

「え、ああ行つてらつしゃい」

「じゃなくておまえも行くんだよ」

ゴリウスがくくつと笑つ。

「一人じゃ寂しいから弟を連れて行くつて言つてやつた」

「もう、寂しいとか口からでまかせ言わないでよね。俺を巻き込むのも勘弁して」

クロードの抗議にゴリウスは楽しそうに笑う。

「何？ これからもどんどん、巻き込むつもりだけど」

クロードの更なる抗議に知らん顔をする。

「ところで宿題を見せてもらおうか」

ゴリウスが急に先生モードに切り替わったため、クロードは緊張しつつ座りなおした。その後一刻ばかり。竜巻が部屋の蔵書を飛ばし、火柱がそこら中から立ち上り、鉄砲水が壁を濡らして部屋

中恐ろしいくらい滅茶苦茶になっている。

それは、クロードが結ぶ印が稚拙で力が一定していないこと。

その上、コリウスが寸止めしないで術を繰り出すせいで、

「少しお休みされでは？」

ラドビアスの声にコリウスが答える。

「じゃあ、少し休憩」

肩で息をするクロードはほっとして長椅子に倒れこむ。クロードは自分の足がびんびんに張っているのに気付いた。知らず知らずのうちに体中に力が入っていたからか。

さつき自分の方へ向かってきた火柱に強い風の印を結んで、空間にエイワズというレーン文字を描くと『防御せよ』そう、叫んだ。すると、突風が火を蹴散らしてちよつとクロードはやつた！ といい気分だったのに。コリウスのちつ！ という舌打ちにむかついて範字の『バ』を描いて外獅子印を結んだら今度は、自分のほうへ水が噴出して全身ずぶ濡れになってしまった。

それを見てコリウスが大笑いしているのを見てまた、むかつぐ。

「『バ』を描くところまでは良かつたんだがその後、レーン文字で正しい位置に戻してやらないから自分の所に水が向かう事になつたのさ」

コリウスが嬉しそうに垂れる講釈を大人しく聞きながら、くつそうと思つてゐるクロードにラドビアスが乾いたローブを差し出す。

「お風邪を召しますよ、お着替えください」

「どうせまた濡れるか、燃えるかするのに」

コリウスが冷たく言つ。

「うるせー」

クロードは、またもやむかつとしながらローブを着替える。

「まだお勉強されて日が浅いのに印を組合わせたり、クロード様は飲み込みが早いですね」

濡れた服を片付けながらラドビアスが褒めるが……。

「解かつてやつてるんならしいがこいつは思いつきでやつてるだけ

だからな。始末に負えない」

コリウスにすかさずけなされたが、まさに核心をついていたのでクロードは反論せず、黙つておいた。

昼食を挟んで一刻半ばかりの後……。

「明日からは別の場所に結界を張つてそこで練習して下さー」ラドビアスが手を叩いて厳しく言つたところで、今日の練習は終わりになった。縄で蓑虫のようにぐるぐる巻きになつて天井からぶら下がつてゐるクロード。それを楽しそうに左右へ振り子みたいに手で突き飛ばしながらコリウスが面倒くさそうに叫びつ。

「何で？」

「これ以上この部屋を使われると蔵書が全滅します。何、考えてらっしゃるんですか」

ラドビアスが冷たく言い返す。

「怒られてやんの」

クロードが声をあげる。

「じゃあ、今日は終わりだ。さて、上に上がるつか

つんと顎を上げてコリウスが部屋を出て行こうとするのでクロードは慌てる。

「うわーっ、降ろしてよ、ラドビアス」

「だめだよ。何でラドビアスに言つんだ、クロード。私に降ろして下さい、もう偉そうな口をあきませんと言えよ。だつたら降ろしてやる」

「えーっ、そんな守れないことを言えなによ」

クロードの言葉にふーんとコリウスが歩き出す。

「だつたら明日までそこには居なさい」

「うわーっ、降ろせっ」

「だめだ」

大騒ぎする二人の間に入つたラドビアスがクロードを降ろしてやる。

「何勝手なことをしてゐるんだ、ラドビアス」

「いい加減になさいませ」

またもや自分の主にぴしりと言つてクロードに巻かれている縄に手を置く。

『解!』すばやく印をきると、縄はまらはらと落ちてクロードの足元にたまつた。

「ユリウス様、クロード様上に上がつて下さこ」

「ラドビアスは?」

「これを放つておけるわけないでしきう」

聞いたクロードが後悔するよつた険悪な面持ちでラドビアスが答える。

「あ……そつだよね」

助けを求めるようにユリウスを見たが、ユリウスはさつさと階段を上つていく。慌ててユリウスの後を追つて階段を上がりながらラドビアスとユリウスの関係を考える。ラドビアスはユリウスの僕と言つていたがそのわりには結構あのユリウスに言いたい事言つてる。見かけはラドビアスのほつが年上に見えるが、どっちが年上なのか。魔道師においては見かけの歳などあてにはならない。そんな事を考えながら地下から上がってクロードは自分の体調が悪くないのに気付いてんまりした。

もう、慣れたつてことかなあ、俺つてやつぱり天才? と、へらへらしているクロードの顔に向けて服が投げつけられる。

「上に戻つたらいつまでもその格好でいるな」

ユリウスは、そつけなく言いながらローブを脱ぎ捨ててシャツの袖に手を通している。

「はいはい」

ユリウスを見ないよつにしてクロードも着替え始める。

「あのおさま」

「なに?」

「ユリウスつて女の子が好きなの? それともや……」

クロードは、脱ぎかけて頭の所にある腕を掴まれてぎょつとする。

慌ててもがいてロープを脱ぐと間近にコリウスがいてしまったと思つ。

「何が言いたい？」

「えつと、ほらコリウスって男の人にも結構好かれるからさ……あれはでもコリウスもちょっと悪いよ。なんかにつこつ笑つたりしてさ……ぎやつ！」

言い終わらないうちにコリウスに押し倒されて、馬乗りになつたユリウスが印を結ぶ。『縛せよ』

クロードは金縛りにあつたように目だけしか動かせない。

「おまえに何が解かる？ 私だつてこんな見てくれにしてくれと親に頼んだわけじゃない。こんな女みたいな顔や体つきにしてくれなんて……この見かけのせいでの女を見るように見られたり、扱われたり……おまえ、それを私が楽しんではいるとも思つているのか。どうせそんなら逆手に取つて利用してやると思つても……それもだめなのか」

最後のほうは絞り出すようなコリウスの言葉。何か、軽く言ったクロードの言葉にユリウスの過去を抉る出来事があつたのかと思ひ至り、彼に『ごめん』と言つたかった。コリウスに負けず劣らず思ひ詰めた顔をするクロードに気付いたユリウスが我に返つたように目を見張る。

そして……にやりと笑つた。

「今度、そんな事を言つたら酷いよ、クロード。その手の『冗談』が私は一番嫌いなんだよ、覚えて置けよ」

両肘をクロードの頭の横について耳元で囁くように言つられてクロードは瞬きで解かつたと合図する。

「ふん！ 今日だけは許してやるよ。私はがつしりした男が嫌いだが、おまえは私が劣等感を覚える懸念はこの先まったく無い……からな」

クロードは相等失礼なことを言つていたが『縛』かれているため反論できず、精一杯眼つきを鋭くした。そしてユリウスが印を

組んで術を解せりと上体を起したといひに強い声がかけられた。

「何をやつてゐる。」

ダリウスの声。

その声の方へ田をやつてクロードは これつて見よづによつて
は変ことになつてゐるのではと氣付き慌てる。 シャツ一枚のヨリ
ウスが下着姿の俺に馬乗りになつてゐる状態。 それを見つけたの
がダリウス兄様……つてこれはかなりやばいと青くなつた。

『解』 素早く小さく印を切つて術を解くとヨリウスが立ち上がる。

「ダリウス兄様、これは違いますからね」

そう言つてクロードも急いで立ち上がる。

ボルチモアへの誘い

「兄上、人の家にいきなり入ってこられるなんて困りますよ
結構強気で非難するユリウスにダリウスが声を抑えて言つ。
「何をやっているか聞いたのだが?」

「私が自分の部屋で何をしようと勝手でしょう? 何をつて兄上、
今ご覧になつてらしたじゃないですか」

「ユリウス!」

とうとうダリウスが大声を出してテーブルを叩く。

「あまり大声を出すと外で待つ者がビックリしますよ、兄上」
言つてユリウスが入り口を見るのにつられてダリウスがそちらを
向いた隙に、クロードはその場を離れた。 服を抱えて走るなんて
間抜けだとは思うが仕方ない。 そこへラドビアスが現れた。

「ダリウス様、いらっしゃったとは気付きませんで失礼いたしました。
た。ユリウス様、クロード様、お召し替えの途中では? ダリウス
様、少し失礼します」

ラドビアスはダリウスが口を挟む間も無いくらいとうとうしゃ
べり、あれよあれよと言つ間にダリウスを椅子に座らせる。 おま
けにユリウスとクロードは寝室に押し込まれて扉をぱたりと閉めら
れた。

「お茶でよろしいですか」

「え? ああ」

ダリウスが毒氣を抜かれて大人しくお茶を飲んでいふところにユ
リウスとクロードも着替えを済ませてやつてきた。

「私とクロードにもお茶を」

「畏りました」

「お待たせして申し訳ありませんでしたね、兄上」

さつきのことなど無かつたかのようにユリウスがにっこりと笑つ
てダリウスの正面に座り、自分の横の椅子を引いた。

「クロード、座りなさい」

なるべくダリウスを見ないようにお茶が茶器に注がれるのを見つめるクロードの胃がわずかにちりちります。

「で？ 何の御用ですか、兄上」

沈黙を破つてユリウスがダリウスを見る。

「昨晩、父上にボルチモア州のトラシューからおまえとクロードを招きたいとお話があつて父上はお受けになつた。来月早々行くことになる」

なるだけ事務的に話そつと一本調子に言つてゐるが、内心穏やかでないのが見え見えなのでクロードは俯いて噴出す。 兄様、隣の候子を呼び捨てるよ……。

「承知しました。私はあまり城から出た事が無いので楽しみです」

ユリウスがにっと笑つてお茶を飲む。

「うそつけ、竜門使つてそこら中出かけてるくせに」

クロードのつぶやきは、ユリウスの尖つた靴による左足への攻撃を招く。

「ぐへっ」 痛いのなんのって……。

「お茶飲んでいる時に下品な声を上げるんじゃない、クロード」

「済みません、兄様」

くつそーと思いながらクロードが顔を上げると、ダリウスと目が合つてしまい慌てて目を逸らす。

「……話はそれだけだ、帰る」

ダリウスはそそくさと立ち上がる。 それを止めもせず、ユリウスが片手に茶器を持つたままダリウスに声をかける。

「さよなら兄上、それとクロードも今日はもうお帰り」

えー？ 何でだよと思いながらクロードがユリウスを見るが、ユリウスはにんまり口の端をあげている。 この状況を楽しんでるとしか思えない。 はあと溜息をついて仕方なくダリウスと従者の後を歩いていく。

つと、前を歩いていたダリウスの足が止まる。

「お前は一体何者なんだ？」

体は前を向いたまま放たれた言葉にクロードはびくと詰まるがダリウスは返事を期待していなかつたのか再び歩き始めて。

クロードは気詰まりなままその後に続いた。

「これは?」「えーっとフュイロー」「これは?」「ウルズ」「ふーん、じゃあ意味は?」

「ええと……変化」

開いた本の字を指差して読みと意味を尋ねるゴリウスにクロードが答える。

描くのはなかなか難しくて魔方陣にしても基本形がやつとだが、読む方はかなりすらすらと読むことが出来るようになつてきていた。自分には魔術が合つているのか……それともやる気の問題なのか。印を結ぶのも結構早くなつた 等。

巻物に描いてある範字の下に印がついている印を結ぶ略字を見ても解かるようになつてきて、そうなると練習も楽しくなつた。この所、人目が無いのが解かるとクロードは魔術の練習に余念が無い。しかもゴリウスの教え方は驚くほど早く予習、復習が必須なのだ。

「じゃあ、忘却の印は?」

「わかんない」

クロードのおでこをすかさずゴリウスが中指で弾く。

「いつ、だつてさつき一回きや読んでないじゃないか

クロードの不平もばつさり斬られる

「一回読めば頭に入るだろ?」

一回しか読んでないのに完璧に頭に入る奴いるのかよ。 そういう思いながら絶対部屋に戻つたら今日中に物にすることをクロードは心に誓つ。

「今日はこれで終わりにする」

ぱたんと本を閉じてゴリウスが言った。

「まだ、一刻も経つてないのに……？」

何か気に障る事をしたかなと、考えたが今日はまだ何にもしてない筈……だ。

「明日ボルチモアに行くからね、持つて行く物を用意しとけよ。自分はそんな事ラドビアスに任せきりのくせして……と思つたがクロードには決まつた従者がいないので、女官たちに描図するのも面倒だし自分でやるしかない。

「解かつたよ、じゃあね」

立ち上がるクロードにラドビアスが声をかける。

「ユリウス様の荷はほとんど出来ておりますから後でお手伝い伺いますよ」

「本当？ ありがとう、ラドビアス」

クロードががばりとラドビアスに抱きつくるをユリウスが冷ややかに見る。

「ラドビアス、あんまり甘やかすなよ」

何にもしないあんたがそれを言うのかよ！ そう、思わず口に出しそうになつたがラドビアスを貸してやらないとか言いだしかねないのでぐつと堪えた。

ボルチモア州の州都ケスラーへは片道三日の行程で四頭立ての大型の馬車と荷馬車一台。

随行の従者が、御者、下男を入れて八人という極めて少ない人数だった。当のユリウスには従者がラドビアスしかいないし、クロードにはこれから決まつた従者がいないのでダリウスから三人貸してもらつて、あと一人が御者で残りが下男だ。

「大きさに州公に関わりある者としていくより、こじんまり行く方がよほど危険がありませんよ」

ユリウスはそう言ってダリウスを黙らせ、ハーコート公はそれについて何も言わなかつた為あつさりと決まつてしまつたのだ。だ

けど、今結構国内は物騒になつてゐるみたいなのに……ユリウスは知つてゐる筈だけど……まるで襲つてくれといわんばかりの軽装備にクロードは頭を捻る。

夕暮れ近くなつてクロードの部屋にラドビアスが訪れた。

「遅くなりまして申し訳ありません」

「ううん、ありがとうラドビアス」

ラドビアスは衣裳部屋に入ると脱ぎぱきと服やら下着を手に取つていく。

「ねえ、何でユリウスの従者つてラドビアスだけなの？ ラドビアスだつてたまには休みたいだろ？」

クロードがラドビアスに任せて寝台に寝転がつて尋ねる。

「お休み……ですか？ そうですね。私は立ち働いているのが好きなんですよ。休みをもらつても結局主のお世話をしていると思いますよ。それに私の主のお世話が勤まる者が他にいるとは思えませんし」

ラドビアスの返事にそりやあそだとクロードも思う。何しろユリウスは好き嫌いが食べ物以外においてもべらぼうに多い。

しかも説明がすっぽり抜けていたりするユリウスの意を汲むのは本当に大変だろう。五百年あまりの実績に裏打ちされているラドビアスにはそこらの従者では太刀打ちできないだろ？

「それにユリウス様は魔術以外はほんとに何もお出来になりませんから」

ラドビアスが旅行用の衣装箱に服を入れながらぼそりと言つたのが聞こえてここへ来る前にユリウスが山ほど我慢を言つたらしいと知れた。

いつも一見大人しそうなこの男が実はよくしゃべり、表情も豊かなのがユリウスの小富に行くようになつて解かってきた。何しろ主城にはほとんどユリウスが一人で來ていたのでダリウスはともか

く、クロードはヨリウスに従者がいることも知らなかつたのだ。
背がクロードの知つてゐる中では一番高く、瘦せてはいるがひょ
つとしているのとは違う。動きにも俊敏さが見えて、体を鍛えて
いふらしことクロードは思つてゐるが。

ボルチモアへの旅路

馬車に一日乗つて居るのは結構きついものでその上、ユリウスと差し向かいで一人だ。中で散々、印の組み手を練習させられ呪文の意味と読み方の問答が続く。さしものクロードもユリウスに泣きをいれる。

「ユリウスお願い、もう休ませてよ」

両手を合わせて顔の前に上げる。

「せつかく私が教えてやつてるのに……まあ可愛くお願ひされたら仕方がない。休ませてやる」

ユリウスは持っていた外国の文字が書かれている本を広げて目を通し始めた。気付いてみれば、ユリウスはほとんどの時間を読書の時間にあてている。何を讀んでいるのか外国語の本が多いのでクロードには解からない。まあ、聞いて説明されても困るので黙つておく。クロードは、する事も無く窓から外を眺めていた。

モンゴ州の州都を過ぎて馬車は山道へと入つて行く。緑の濃い山中のトンネルのようになつている縁に田を奪われていると黒っぽい人影を見た……ような気がした。

「さつき黒いものが……あれ？」

「知らぬ顔をしておけよ、クロード」

クロードが声を上げたのにユリウスが本を見たまま鋭く言つた。

「何で？」

ユリウスが本を閉じてクロードを見る。

「我らをつけているのさ、いつ仕掛けてくるか様子を見ている」

やっぱり人だつたんだとクロードが後ろを振り返るが、もう

縁の中に何もかも紛れて何も見えなかつた。

「本当は私とラドビアスそしておまえだけならもつと動けるのだが、そうはいかなかつたな」

ユリウスはクロードに指を突きつける。

「これからちよつと隠れている虫を追い出すつもりだから口出しゃ
邪魔するのじゃないよ」

言つだけ言つとまた本を広げる。やはりコリウスは気がついて
いたのだ。その上で来州の誘いに乗つたのだ。これはアリストロ
ーザに気をつけると言つたほうがいいのだろうか。そこまで考え
て俺はどうちよりなんだとクロードは苦く笑つた。

日が暮れる前の黄昏時。小さな集落について他の従者が宿の手
配をしている中、ラドビアスが馬上から馬車の窓に近づいて低い声
でコリウスに告げる。

「三人確認しましたが、始末しますか

「いや泳がしておけ」

「はい」

手綱を引いてラドビアスが馬車から離れて後方へ下がつたのを見
て、クロードがあわあわとユリウスに尋ねる。

「し、始末つて……まさか？」

「殺すことに決まつているだろ、ラドビアスは腕が立つからな」
前にラドビアスが体を鍛えてるのではないかと思ったことが確か
められたのだが、クロードは嬉しくない。人殺しの話を淡々と話
す、ユリウスとラドビアスに慄然とする。竜印が完成したら俺も
こうやって王の為とかいう理由で人を殺めるようになるのか。

今夜の宿は寂れた場所にあつては唯一宿らしい佇まいがある一階
家で、一階は食堂兼酒屋になつてゐる。森の中の集落にあつては
あまり贅沢は言えないが、州公の子息が一人もいることを考えると
かなり粗末な感は拭えない。

途中大きな轍わだちに荷馬車が車輪をとられて横転して、従者や下男総
動員で馬車を元に戻し、故障箇所を修理している間に時間が思いの
ほか経つてしまった。そのせいで今日予定していた宿場町にたど

り着く前に日が暮れてしまったのだ。

「他に宿がございませんゆえ申し訳ありませんが、ここでお休み下さいますようお願ひいたします」

従者が申し訳なさそうに頭を垂れるのをコリウスはびつでもいと手を振つて降りようとするが、従者に止められる。

「今、宿から人払いしております。少々お待ちを」

金貨を握らされたのだろう、宿の主人が他の泊まり客や食事、酒を楽しんでいた客を追い出している。

「旦那様、これで宿には客は入つこ一人いませんぜ」

宿屋の主人が大意張りで言つてゐるのが聞こえて、クロードは気が塞ぐ。宿が一つしかないのにそこを追い出された者は野宿するしかないではないか。自分が追い出されたような気分でクロードは馬車の座席に沈み込んだ。

「食事の用意と湯を沸かすように

「へへえ」

従者に卑屈な返事を返すと宿屋の主人が中へ引っ込むのを確認してから、従者が馬車に戻つて来て馬車の戸を開ける。

「お疲れになられたでしよう、コリウス様、クロード様」

頷きだけ返してコリウスが馬車を降り、クロードも後に続いた。

「うーん」

クロードは体を伸ばすようにあちこち体を捻つたりしてみて、座つているだけなのにやたらと節々が痛い。明日は馬に乗つて行きたいけど……しかし変な奴につけられているんだと思つて思い直す。

疲れていたがそれに反比例して胃袋は元気そのもの。クロードは、羊肉のローストと黒ずんでいるパンをレンズ豆のスープで流し込みながらコリウスを見る。すると彼は食事にまったく手を付けて血のようなワインを飲んでいる。

いつものようにコリウスのお酒の飲み方は酒を楽しんでいる感じがまったくない。水を飲むようにぐいっと呑るように飲む……こ

れではダリウスではないが誰だつて心配になる。

「あのさあ、酒ばかり飲んでると体壊すよ。食事をしなきやあ」

「口の食事は食べる気がしないんだ。ほつといてくれ」

そう言つて再びワインを飲もうとしたコリウスの目の前に、スープの入つたスプーンが突きつけられる。

「ほら、スープぐらい飲まなきや」

口元に持つてこられたスプーンを暫く見つめていたが口を開けたので、クロードはコリウスの口へスープを流し込んだ。

「じゃあ、はい」

スプーンを手渡そうとして差し出したのをコリウスに払いのけられる。えつ？ とクロードはコリウスを見返す。

「このままクロードが飲ませてくれたら食べてもいいけど」「はあ？」

何言つてんのとコリウスの顔を伺う。

「このまま酒飲んでたら明日、馬車で吐いちゃうかも」
コリウスがなみなみと杯にワインを継ぎ足す。じゃあ、飲むのをやめるよと思つたがここで俺が折れ時なのかと直感する。

「解かつたからワインはもうやめるよ」

ここにこと口を開けるコリウスを見てラジビアスの日々の苦労を思つ。クロードは大きく溜息をついた。

割り当てられた部屋に戻り、お湯を使い体を拭いて寝台に入つてみて。クロードは、いかに自分が恵まれた生活をしているかを感じざるを得ない。薄い板で作られた寝台は少し動いただけできしきし大きな音がするし、中に藁でも詰めているらしい敷布がちくちくして寝るどころじゃない。引き上げた上掛けの上部は真っ黒に汚れていて、気付いてしまつと掛ける気もしない。

しかし、蚤や虱がいないだけでも上等らしい。で、蚤と虱つて何だ？ 放つておかれはいたが決して衣食住に窮きゅうしたことなど無いクロードには、一般の人々の暮らしは今一つ解からない。慣れない寝台のおかげで寝付かれずじゅうじゅうしていると、隣の部

屋に誰かが入つて行く気配がした。

まさか、族か……？ 下の階に従者たちが詰めているからそんな事はないだろうと思いつながらも気になる。クロードは寝台から降りると裸足のまま廊下に出て、そつと隣の部屋の前まで忍んで行く。

「クロードか、入れ」

中から声がしてクロードは大声を上げそうになつて、自分の口を押さえながら入る。すると入り口近くにラドビアスがいた。

「おまえだつたの？ ラドビアス、ノックも無しで入つていくから誰かと思つたよ」

「済みません。一階におられるダリウス様の従者の方をかわして、そつと出できましたので」

「ラドビアス、ダリ・ウスの従者に遠慮しているの？」

クロードの問いにラドビアスが薄く笑う。

「そうではありませんが、私だけユリウス様と一緒にお部屋といふわけにはいきません」

「そうなの？ そりやあこつそり後ろ暗い相談をしようとするのは大変だとクロードは部屋の作り付けの椅子に腰掛けた。

「今までの顔ぶれは五名でした」

ラドビアスにユリウスが頷く。

「放つておけよ、どうせこちちらに不審な動きがないか探つているのだろうが。よもや術を使つたりするなよ」

「はい」

ラドビアスが心得顔で返事をするがクロードは得心がいかない。

「ユリウスとの約束

「どうして？ 間諜かんちょの呪か使い魔でも呼び出して見張らせたほうがいいのじゃないの？」

「ここで我らが魔道師だとバレたら台無しなんだよ。いいかい、おまえも余計な事をするなよ」

ユリウスに厳しい目を向けられてますますクロードはわけが解からなくなる。

クロードの顔を見てユリウスが軽く息を吐く。

「いいかい、トラシュも好意だけで私をボルチモアへ招待したわけじゃない、たぶん。まあトラシュの思惑はともかく。州候のドミニクは息子にどう言ったかはわからないが、奴は私を別の理由からボルチモアに呼んだと思つてる」

「…… そうなの？」

「それもこれも織り込み済みで行くんだ。何を企んでいるのか確かめるために今は奴の手に引っかかったふりをしてやろうじゃないか。解かつたな、クロード」

「解かつた」

すうっとユリウスの口の端が上がった。

「それとおまえはあるのトラシュの妹、なんていつたか…… あの娘がかわわっているレジスタンスどもの動向を娘に近づいて探ってくれ」「そんな事やりたくない」

アリストザをスパイするなんてと断つた途端、がしつとユリウスに肩を掴まれてユリウスの右手がクロードの頬に飛んだ。

「てつ、何だよ！」

頬を押されて椅子から立ち上がりとするが肩を掴まれているのでそれも出来ない。

「おまえ魔道師になるんだろう。好き嫌いに閑わらばそういう運命に足を突つ込んでいくくせに青臭いことを言つのはやめろよ、魔道

師を排そうとしている輩を放つておるのは自分の首を絞める」とと

一緒に

尚も頬を張るとするコリウスの右手をラドビアスが掴んで止め

る。

「おやめ下さい」

掴まれた右手はそのままにクロードの肩から手を離した左手でラドビアスの頬を張る。大きな音がしてクロードは自分が叩かれたように首をひそめた。見るとクロードの時より明らかに手加減しなかつたのだろう、ラドビアスの頬に手形がくつきり残っている。

「お静かに、下の者たちが何事かと思いますよ」

ラドビアスがコリウスの右手を掴んだまま小さく言つて、コリウスがラドビアスの手を振り払つて噛み付くように言つて。

「二人とも出て行け！」

追い出されるように部屋から出てきたラドビアスとクロードが顔を見合す。

「あんな凶悪な奴に仕えんの、止めたら？」

クロードが慄然として言つて。

「そうですね、首になつたらクロード様に拾つていただきます」

ラドビアスが笑いながら言つた。

朝、集落は濃い霧に包まっていたが時が経つにつれて日差しが筋状に射し込むとあつという間にいいお天気になった。馬車の中では、コリウスは黙々と書物に目を通してクロードを無視している。重苦しい沈黙が支配してクロードは息苦しくなる。決死の覚悟でクロードはコリウスに声をかける。

「あの」

「……」

「コリウス？」

「……」

あくまでも知らん振りを決め込むつもりか下に向いているユリウスにむかつ腹が立つ。

「子供みたいに無視すんな！　俺はまだ十四歳なんだよ」

「ユリウスの広げた本の上に手を乱暴に置く。

「まだまだ青臭いことだつて言つし、言える歳だよ、解かつてる？」

「ユリウスがやつと顔を上げる。

「それは、私に反することがあると言つて居るのか」

「……解かんないよ。だけど俺は竜印で縛られているんだから分が悪いよ」

「だったら……私を殺すんだな、クロード」

えつ？

「私を殺せば竜印は消える。但し、前にも言つたが王が契約した『鍵』の剣でなくてはだめだ」

殺すなんてそんなつもりで言つたのではないとユリウスを見たクロードは、ユリウスの目にそれを望むような色が浮かんでいるのを見つけてしまつてぎくりと青ざめる。

「私が死ねば竜印はすべて消えて竜門も開く事はない」

「それじゃあ竜印を受けている魔道師たちは……」

「本来の姿に戻る」

クロードの後をユリウスが続ける。クロードはごくりと唾を飲み込む。王の剣なんておいそれどが持ち出せるわけが無い。もし持ち出せたとして、それを使ってユリウスを殺せば國中にいる二百人あまりの魔道師が一瞬にして全員骨になるのだ。そうだ、ラドビアスだつていなくなるつてことだ。それをユリウスは望んでいるのかと言葉も無く。さつきとは別の沈黙が馬車の中を流れる。そこへ、ユリウスがずいつとクロードの近くに寄る。

「約束してくれクロード、もし私が頼んだら……そんなチャンスがあつたら逃さないでくれ」

「なつ何の事だよ、頼むつて」

後ろに後ずさつて逃れようとするクロードの顔を両手で挟み込むようにしてコリウスが拘束する。

「絶対だ、クロード」

睨むような懇願するようなコリウスの顔。

「……そうして欲しいの？」

クロードがやっとそれだけ口にする。

暫くの沈黙の後、やっとこつもの笑みを浮かべてクロードの頬から手を離す。

「チャンスがあれば、だよ」

窓の外を眺めながらコリウスがつぶやく。

「長いこと待たせているからな……」

「えっ、誰を？」

クロードの問いに答える事もなく外を見ているコリウスはビームを見ているのか。誰のことを考えているのかクロードには見当もつかなかつた。

小高い峠に馬車はさしかかり視界が開けてそこには馬車は停車した。「この峠を越えるとボルチモア州になります」

窓からクロードがラドビアスの指し示す方を見ると、小さな皆のある閑所の建物が見えた。

「あそこで一休みいたしました」

そこでラドビアスがクロードとコリウスの間に流れの壁に気付く。

「どうかなさいましたか」

窓から中をうかがう。

「何も無い」

コリウスはそつなく言つて本を読み続ける。

「クロード様？」

実は竜印のある魔道師皆殺し計画について頼まれて困っちゃったよ、あははは……とか言えるわけも無く。

「何でもないって」

クロードはへへっと間抜けな笑いをラドビアスに返した。

関所に着いた一行はハーロート公爵の書簡のおかげで何事も無く
関所を通り、その関所を統べる官の館で休む。長々と続く官の挨
拶をするりとかわしてクロードは部屋を出て行く。と、他の従者
と別れて一人歩いて行くラドビアスを見つけて後を追つた。名前
を呼ぼうとしてふとクロードは立ち止まる。柱の影になつてよく
見えないが誰かと話をしている。黒っぽい服の男……道中で見か
けた奴、まさかね。

そこへいきなりラドビアスが振り向いて、クロードは顔を背ける
暇もなくまともにラドビアスと向かい合つた。

「見られましたか」「誰と会っていたの？」

「知り合いでですよ、クロード様」

悪びれる様子も無くラドビアスが言つ。

「それをコリウスは知つてているの？」

「さあ、言つてはおりませんが、知つておられるかも知れません」
しつと答えるラドビアスにクロードは唖然とする。

「ラドビアスがコリウスに黙つて行動することがあるなんて……ラ
ドビアスはコリウスの僕なんだよね」

「はい、そうですが」

「じゃあコリウスに不利になるような事はしないよね」

クロードに笑顔を向けただけで歩き出すラドビウスの背中に切迫
した声をかける。

「ラドビアス！」

「私は主を敬愛申し上げております」

背中越しにクロードに返すとすたすたと従者に割り当てられた部
屋に入り、ぴたりと戸を開めてしまつ。 そのラドビアスの不自然
な態度にクロードはわけが解からず、ふらふらと貴賓室へ入るとコ
リウスがじろりとクロードを見た。

「私より先に出てつたくせに今までどこにいたんだ?」「それは……」

思わず絶句して立ち戻るクロードにコリウスが何があると、聞
き出すつもりで口を開いたところにノックの音がした。

「ラドビアスです、失礼してもよろしいですか
ぎょっとしてクロードは戸へ目を向けた。

「良い、入れ」

「コリウスの応えの後に、ラドビアスともう一人の背の低いカルバ

インと言つ従者が盆を手に入つて來た。

「クロード様、甘い物でもお召し上がりになりませんか」

なにも無かつたかのよつた声にさつきの事が夢かと思つてしまつ。勧められるままに盆の上から小さいタルトを取つて齧ると甘い味が口に広がる。何だか今までの体の力みが抜けた気がした。考えすぎか……单なる知り合いだったかもしけないとクロードは思い直すともう一つタルトを齧つた。

「ユリウスは要らないの？ このダークチエリーのタルト貰いやよ」

ユリウスはここでも書物を読んでいたが顔も上げずに答えた。

「私は要らない、お茶だけでいい」

「ユリウス様、先ほどこここの関所の者と話しましたがこの先、物騒な輩が多く出没しているようです。今日はここのまことに泊りになるか、夜にかかるないように早めに出立する方がよろしくいかと」カルバインがユリウスの方へ目を向けるが、ユリウスがそつちへ目をむけると慌てて瞳を伏せた。

「そうだな、じゃあ直ぐ出発だ。たらたら馬車に乗つてゐるのもあきるしこれ以上移動に時間をかけたくない」

ユリウスの答えにカルバインとラビアスは出発の用意に部屋を出て行く。

「それとクロード！ その手に持つてゐるやつで食べるのを止めるよ」

ユリウスがびしつとクロードに指を突きつけた。

「解かったよ」

言いながら手に持つたタルトを口に押し込み、盆の上から両手にタルトを掘んだクロードに露骨に嫌そつた顔をしてユリウスが冷たく言つ。

「一緒の馬車に乗りたいならその甘つたるい匂いのする手を洗つてこい。でないと置いて行くからな」

その声にクロードは急いで下男に水を持ってきてもう。何せユリウスの事だ。本当に置いて行かれる恐れが大いにある。か

くして休憩は瞬く間に終わり関所の建物を後にするとまた、深い森の中に入つて行く。聞こえるのは鳥の鳴き声と馬車のたてる音ぐらいだ。馬車の前後左右を守るよつに馬に騎乗した従者が警戒しながら進んでいく。何事も無くこのまま一日目が終わるのではないかと思われたが……。

ひゅつと風を切る音がしたと同時に右側と前を守つていた従者が落馬した。

「クロード、頭を下げる！」

「コリウスがクロードの頭を押さえて座席にしづくまる。後ろに付いていたラドビアスが早がけで前に出て来た。

「族が現れたようです。馬車をおいてこちらへ」

馬車のドアを開けて身を乗り出したクロードを軽々と抱き上げて自分の馬に乗せる。その間にも射掛けてくる矢を腰から抜いた剣で振り払う。

「コリウスは？」

心配そうな声を上げるクロードに左に付いていた従者が答えた。

「私が

差し伸べる手をぐいっと掴んでコリウスが従者の馬に飛び乗った。

「お前達馬車を捨てて逃げなさい」

ラドビアスの言葉に馬車と荷馬車は急停止し、御者と下男たちが我先にと逃げ出して行く。

「できるだけ急ぎますので後ろに回つていただけますか」

「えーっ！ そんな曲乗りみたいな事できないよ」

言いながらも必死でクロードは後ろにまわつてラドビアスの腰にしがみついた。

「しつかり掴まつていて下さい」

クロードが自分の腰に掴まったのを確認するとラドビアスは、後ろのコリウスに目で合図を送り、体を低くして馬の横腹を蹴つた。

猛然とスピードを上げる馬に乗り慣れているはずのクロードも振り落とされそうになつてしがみ付いた腕に力を込めた。

山道を全力疾走すること、ニザンばかりした後。

「もう大丈夫みたいですね」

ラドビアスの声と共に馬の速度がぐんと落ちた。 やつと身を起こしてクロードが辺りを見ると、森を抜けて煙が散らばる開けた場所にいつの間にか出ていた。

「ユリウスたちは？」

姿が見えないのに心配してクロードが後ろを振り返つて聞く。

「もう少ししたら追いつくでしょう。少し飛ばしそぎましたから」

そう言つてラドビアスは馬の横面を優しく叩いた。

「何もかも無くしちやつたね」

逃げたもの達は大丈夫だつたかと心配になつたが、戻るわけにもいかないのもわかっている。

「金目当てなら馬車と荷馬車を置いてきましたから……まあ大丈夫なのでは？」

「ならないけど」

術を使つていれば誰も死なずに済んだろうに。 ここの騒ぎもどっこで見張られているのだろうか？ だつたらクロード達が術を使わなかつたのは大正解だらうけど。 二人も死んでしまつた。 そのことで自分がすごい悪人になつたような後ろめたい気分に陥つてクロードは気が塞いだ。

規則正しい馬の蹄の音が聞こえて、クロードが目を凝らしているとやがて馬が疾走して来るのが見えた。

「クロード様もご無事で何よりでございました」

一人生き残つたティビットという名の従者がほつとした顔をみせ

た。

「ゴリウスが遅いんで心配したよ」

「その割には後ろも見ずにスタコラ走つて行つたけど?」

「ゴリウスがクロードとラドビアスをじろりと見た。」

「私は主を信じておりましたからクロード様をお守りする事を優先させていただきました」

「ラドビアスはけろりと言つて馬を進ませる。」

「このままプリムスとこつ町に向かいましょう」

プリムスの路地裏

プリムスはボルチモア州の州都ケスラーに近いかなり大きな町だつた。ボルチモア州は良質の石がたくさん採れるが中でも良質の花崗岩を多く産出している。その石を加工して他州に運ぶ要になつてゐるのがここ、プリムスである。その所為でプリムスのありとあらゆるところで花崗岩が使われていて白っぽい建物が多い。道の石畳まで花崗岩で敷かれ統一感のある美しい景観を湛えていた。

「宿の手配をして参ります」

デイビットが馬を降りると町並みに紛れて行く。

「俺も馬降りる、尻が痛くて我慢できないよ」

クロードが言つのも終わらぬうちにから馬から降りて、そのまま自分もプリムスの町を見物しようとした歩き出す。

「どこにも行くなよ、クロード」

そのクロードの背中にコリウスがきつい声を出す。

ちえつ、せつかく城から出られたのに……とクロードはむくれた。待つこと半刻ほどでデイビットが戻つて来る。

「こちらです」

一行が入った宿はこのプリムスでも一番の格式がある宿らしく一見、貴族の館かと思わせる造りになつてている。クロードたちは白い丸い石が敷き詰められた廊下を案内されて他の客室から離れた一角に通された。余ほど金を握らせたのか、何にしても手持ちに金を持つていて良かつたとクロードは思つた。昨日の宿に文句を言つつもりはないがやはり縄張りのクッションの効いた椅子に座るとクロードはほつとした。

コリウスはクロードの疲れただの尻が痛い、腹減った等々まるで構つてくれなかつたが自身も疲れているのか長椅子に足を投げ出して肘掛け頭をもたれたまま眠つてしまつた。

「寝ちゃつたの、コリウス？」

うかがうようにコリウスを見てクロードはにまりと笑つた。

「窓は開いているし、コリウス寝てるしラドビアスはいないし……ぶつぶつ言いながら窓枠にクロードは手をかけた。」には二階だが下には花が植えてある花壇が続いて柔らかそうだ。

窓の横には、装飾的な鳶を模した配管が下まで続いているからこれに掴まれば楽勝だ。クロードは目で降りる算段をつけると後はためらいも無く後ろ向きになつて、窓から跳ぶように離れて配管を両手で掴んで降りていった。

宿の裏手にある外壁をよじ登つて上に立つと今度はそのまま飛び降りる。ずきんとした痛みに顔を顰めたがそんな事よりクロードは早く町を散策したくて駆け出す。

小さい路地から大きい通りに出るとそのまま賑やかな方へと歩いて行く。活気のある物売りの声が聞こえてきてそれを頼りにどんどん足を進めるクロードは大勢の人ごみに紛れていった。市が立つているのか良い匂いがしてクロードを誘うが自分がお金を持つてない事にここで初めて気付いて……がっかりした。まあしかし考えてみれば、クロードは生まれてこのかた、お金を持ったことも使つたことも無かつたのだ。州城の敷地から出たことが無かつたのだから持つていたとしても使い道も無かつたのだが。

「一文無しかよ、俺は」

取りあえず体のあちこち触つて何か金田のものがないか捲して、自分の服についている釦に目が止まった。

「これって金だよな」

釦が付いている服自体、余ほどの上物なのだがクロードにはそんな事は解からない。途端に気分を持ち直してクロードは歩みを進める。その目の先にある店の看板の文字が飛び込んできた。

『換金、宝石、刀剣の鑑定いたします』

「幸先いいや」

クロードはその店のドアを開ける。ドアに付けた金属製の鈴がカラッと鳴つたのに気付いて、愛想良くなげに顔を上げた店主の前にいた

のは金髪の身なりの良い少年だった。

「何の御用で？」

店主の問いに少年はよつと上着を脱いで店主に放り投げるよつによこす。

「これ、鉗が金だと思つんだけど換金してくれない？」

落とさないよう心慌てて受け取つたその上着が事の他上等の物と解かり、店主はそのまま少年を見た。

「盗品じゃないだろうね、それとも家から勝手に持ち出した?」「ないない」

少年は顔の前でひらひらと手を振る。

「で、いくらになるの?」「

興味津々の顔を見せる。

店主は途端に商売人の顔になると金庫から金貨を二枚取り出して少年をうかがうように見た。

「これが精一杯だな」

「ふーん、じゃあ貰つていくよ」

少年はあつけらかんと金貨を受け取ると店を出て行つた。

最近まれに見る上物が手に入った。これが金貨三枚のあらうはずが無い。

店主は笑いながら少年の置いていった上着を撫でた。この手触りは絹、しかも大陸の東、ハオタイという国で採れる天

繭から作られた恐ろしい程、稀少な絹で織られている。艶のあるエメラルド色は繭の色でこの絹は染色を寄せ付けないので。鉗を指差して金と言つていたが確かに鉗も美しい彫金細工を施してある。にんまりともう一度笑うと今度は急いで店じまいの札を表に出そうと店の外に出た店主に男の声がかかる。

「ちょっと見せて貰いたい物があるんだが……もう、店じまいか

「今日は済まないね、明日にしてくれ」

店主の胸倉を掴んだ男はにこりと笑つてそのまま店に店主を引きずつて入つて行つた。

一方、店主の思いなど関係なくクロードは手に入れたばかりの金貨を握り締めて市の中心へと歩いて行く。串に刺した肉をあぶり焼きにしている屋台に行くとたまらず店番の大柄な女に声をかけた。

「おばさん、一本くれないか」

「はいよ」

串と引き換えに渡された手の中の金貨に屋台の女が固まる。早くも串に口をつけている少年に女が大声を出す。

「ちよいど、あんた困るじゃないか」

「えつ、足りなかつた?」

「何言つてゐるんだい、この子は!」

屋台の女の大声に周りにいた何人かが注目する中クロードは困惑して立ち去くる。

「あんたねえ、こんな大金を出されちゃあお釣りをだせないだろうつて言つてんだよ」

女は喚くように言ひ。

「営業妨害だよ、まつたく」

「じゃあ釣りはいいよ」

「へつ?」

女はそのまま口を開けてそのまま暫く突つ立つていたが、思いついたように金貨を齧つてみて手の中の金貨を確認する。それから屋台に来る客を猛然と追つ払い片付けると早足で屋台を押して姿を消した。

クロードはほつとして肉を頬張りながら歩き出す。足りてたらいいのだ。その一部始終を見ていた先程質屋の店からついている男がクロードの歩いていた後をゆっくり追う。が、しかし後をつけているのはその男だけでは無かった。たくさんの人々が行き交う中、人の流れにそつて歩いていたクロードは、いつの間にか風体の悪い屈強そうな男たちが集まって来たことに気付いて反対側に行こ

うと向きを変えたが……。

「おい坊主、金の使いつぶりが良いじゃねえか」

頬に刀傷のある男が臭い息と共に言つてその横の男がクロードの背中に短刀を当てた。

「小父さんたち何の用？」

金持ちの子供だつたらびびつて泣き出すと思ひきや、普通に聞く少年に男はクロードの腕を掴むと路地裏に引っ張り込む。

「すかしてんじゃあねえぞ、坊主！ 今持つている金全部出しな。生きて父ちゃん、母ちゃんと会いたいだらうが」

凄みを利かせて言つた言葉に少年が言い返す。

「そんな事言つてはながら生かして返すつもりなんて無いんじゃないの？」

生意気な言葉に背中に短刀を当てていた男が短刀を振り上げた。

「じゃあ死ねよ、坊主！」

振り下ろされた短刀はしかし、横から飛び出して来た男に蹴り飛ばされて宙に舞つた。

「誰だ？」

男が問う間にその男は体勢を低くして手を付き、足で円を描くように広げて男達を蹴り飛ばす。そして逆立ち状態からひょいと飛び上がるところりと一回転して今度は起き上がつた男達の顎を手つ甲をはめた手で次々と碎いていった。その間いくらの時間も経っていない。口から血を流しながらほつほつの体で逃げていく無頼の男たちを見送り男がクロードに向いた。

「大事ありませんか」

「大丈夫、ありがとう」

仰ぎ見るクロードはその男の姿に目を見張つた。顔つきが違うのだ。どういう風に違うかと言えば、大陸の東に住んでいるというハオ族の顔、もしくはそこら辺りの国人の人か。

ボルチモアの外国人

細い顔だがこちらの人間と比べてのつぱりした印象。 鼻は高いが細く眉も細い。 薄い唇はやや口角が下がっている。

そして一番目を引くのが一重のつり上がった切れ長の目だ。 こんな目を持つ者をクロードは今まで見たことが無い。 その黒曜石の瞳がこちらを見ている。

「珍しいですか？」

クロードの胸の内を読んだように男は笑いながら言ひ。 そうすると頭の上できつく結っている量は少ないが、腰の辺まであるリボンのような真っ直ぐな絹糸じみた黒い髪が揺れた。

「綺麗な目と髪だね」

「ありがとうございます」

男はクロードに近づくとどこから取り出したのかクロードの上着を着せ掛けた。

「あ、これ俺のだ、どうして？」

「こんな高価な物を金貨三枚きりで手放してはダメですよ。 それと屋台で金貨を使うのもダメです。 変な者を呼びますからね」

「そうだな、俺って世間知らずなんだよ。 ところであなたは関所の所でラドビアスと会っていた人じゃない？」

クロードはなぜ大陸の人間とラドビアスが知り合いなのか。 それに俺の名前を知っているのはどうしてなのかと目の前の男をうかがうように見上げた。

「立ち話も何ですからお食事でもしながら話をしませんか」

「いいよ」

男たちにからまれたあたりからクロードは男が見ているのに気付いていた。 それでさつきの余裕発言だったのだが。 男について茶屋に入ると男は主人に金を握らせて一階へクロードを誘うと鍵をかけた。

「「」は密会に使われるといひです。」うして鍵をかけば邪魔が

入りません」

「密会つて……」

その意味に気付いてクロードはぱっと頬を染めた。

「それにしてもレイモンドールに外国人がいるなんて知らなかつたよ

「ああ、そうですね、首都サイトスには少数ながらいるようですよ」「ふうん」

そりやあサイトスにはいるかもしだれないが「」はレイモンドールの北部のボルチモアじゃないか。 結界で隔てられて居るこの国の首都以外にいる外国人とはどんな存在なのかクロードにはわけが解からない。

「あなたはハオタイの人なの？ ……にしては普通にこちらの言葉をしゃべっているよね」

男は薄つすらと笑う。

「私にはこちらの血も混じつておりますので、小さい時から教えられていきました」

それが本当のことかどうか解かりはしない。

「名前は？」

「はい、インダラと申します、クロード様」

男は言いながら水の入った杯を傾けて水を少量木のテーブルに零すと指先でなぞつて何かを書き付けた。

「その文字は範字だよな」

「はい左様ですよ、クロード様」

「おまえは魔道師……？」

思わず席から立ち上がるクロードの手をインダラが掴んで座らせる。

「そうですね、私は魔道師ですがレイモンドール国魔道師じゃありません」

「じゃあ大陸の、ハオタイの魔道師なの？」

クロードの質問にインダラは答えず、自分の着ている立て襟の合わせが肩のほうにある上着とシャツをさりと腰まで脱いで背中を向けた。

「なつ何？」

慌てて何が始まるのかと冷や汗をかくクロードにインダラが言つ。「背中を見てください、クロード様」

言われてクロードがインダラの背中を見ると、その黄みがかった陶磁器のような白い背中の左側上部に黒い龍の彫り物に見える物がある。

「これって……竜印？」

クロードやラディアスにあるものとは似ているが違う。赤紫のクロードのそれに比べて濃い紫とも黒ともつかない色の大きな角のある蛇のような姿に五本爪の足がついている。

「爪が五本あるね」

思わず手で触るとわざかにその部分が隆起している。

「五本爪の龍は一番徳が高いと言われております。サンテラにもある筈ですが見てませんか？」

「サンテラつて？」

「ラディアスのことです」

「ラディアスがサンテラつてどうこう」とだ。きみと同じ黒い竜印を持つていろいろつてどうこう。だってラディアスはコリウスの僕の筈だよね。だって俺はラディアスの左胸にある竜印を見たのに」クロードは筋の通らない話に疎然と椅子にもたれた。

「驚かれたようですね」

インダラは世間話をしているように淡々と言つて脱いだ服を直す。

「インダラ、一体何をしにレイモンドールに来たの？」

「いきなり核心をつきますね」

インダラは少し考えるように窓の外を見た。

「罪人の捕縛と送還……奪取された物の回収ですかね」

「それは俺にも関係あることなの？」

インダラはクロードのまづへ向き直る。

「それは……あるにはありますね、カルラ様の事ですか」
言いながらインダラは立ち上がり戸の鍵をはずすと戸を開けた。
そこにはラドビアスが慄然とした表情で立っていた。

「お迎えが来たようですよ」

「クロード様、勝手をなさつては困ります」

前に立っているインダラを無視してラドビアスは奥のクロードに
声をかける。

「まあまあサンテラ、許してやれよ。ちよつとした冒険か、何も無
かつたんだし」

「その名を呼ぶな、インダラ」

とりなすように言つたインダラに、ラドビアスがきつゝ言い返し
てクロードの方へ歩く。

「宿に戻りましょう。主が……」

ラドビアスはそこでちらりとインダラを見た。

「コリウス様がお待ちです」

「解かつた」

クロードは部屋を出て行きながら頭を下げたインダラを見ながら
カルラって誰だ？ と胸の内でつぶやいた。宿に戻る途中の道す
がら前を歩くラドビアスの背中にクロードが言い放つ。

「知り合いつて外国の魔道師だろ！ おまえは外国の魔道師なのか
クロードの言葉にひたと歩みを止めてラドビアスが振り返つた。

「クロード様？」

「インダラはカルラっていう者を捕らえる為に來たと言つていた。

そしておまえは別の名前を持つているのだろ？」

「そんな事までしゃべったんですか」

ラドビアスが長く息を吐いた。

「インダラの背中には黒い竜印があつたよ。ラドビアスにもあるつ
て言つてたけど」

ラドビアスにクロードが掴みかかる。

「ゴリウスを裏切っているの？ カルラつてゴリウスの事だ？」
ラドビアスは遙か昔、同じ事を同じような髪で同じような瞳の青年に言われた事を思い出して、「二歩後ずさる。

あの時私はヴァイロン様に何と答えたのだったか。

「私は主の僕で」「じやりますよ」

ラドビアスのかすれ気味の声にヴァイロンの面差しを持った少年はかつての青年とは違う言葉を継ぐ。

「じゃあおまえの本当の主って誰なんだ？」

真っ直ぐに向かってくる瞳の力強さにラドビアスは怯んで顔を背けた。そのまま無言で宿まで帰り、クロードはゴリウスの部屋の前に立つ。

「あのクロードだけ……入つていい？」

「入れ」

戸をそっと開けるとゴリウスは酒の入った杯を片手に本を読んでいた。

「楽しかったか？」

ゴリウスが本から目を上げずに言った。

「え……あの……」「めんなさい」

ここで乐しかったですなどと答えるべきでない事はクロードにも解かる。

「じゃあ悪いことだとは思ってるんだ」

ゴリウスが本から顔を上げてじろりと見た。

結界が緩むといふ事

「今は高位の魔道師たちがじつそり出かけていてビームもかしこも結界が緩んで危ない時なのにおまえ、少しは自覚しろよ」

ヨリウスの言葉にあつとクロードは納得する。それは結界に緩みが生じているということ。で、なければ他の国の魔道師が易々とこの国へ入つてはこれないだろう。

もつともレイモンドール側から高位の魔道師の手引きがあれば違うかもしれないが。

「明日には州城から迎えが来てくれるらしい」

ヨリウスは物思いに沈むクロードを不審そうに見る。

「……それにもあいつ、食事でもしながらって言いながら結局何も食べさせてくれなかつた」

クロードのつぶやきにヨリウスが反応する。

「あいつって？」

クロードはつい、ヨリウスに答えてしまう。

「市で知り合つた人、食事でもしながら話しそうつて茶屋の二階に誘われてさ……」

「何だと？」

クロードの話は凄い剣幕のヨリウスに遮られた。

「お前自分がどんな無謀な事をしたか解かっているのか」

勢いよく立ち上がつて膝から本が滑り落ち、酒の入つた杯は音をたてて床に転がつた。

実はその前に上着を質草に入れて族に襲われたが、それは言えるわけがない。

「それで何も危害を受けなかつたんだろうな、クロード。おまえは大事な体なんだ。少しほ自重しないか、まったく」

「ごめんなさい」

はあとわざと大声を出してヨリウスは溜息をついて目の前の少年

を見る。

「本当にどうしようもないがきだ」

現王コーラルがせめてあと五年でも生き永らえたなら少しはましになるのだろうが、それは無理だろう。例の兆候が現れた王はよくて三年、大概は一年ほどで亡くなるのだ。

そして、そのがきに執着しているのは他ならぬユリウスなのが。ヴァイロンが亡くなつてこの数百年、ゴートの廟から必要な時以外、出ることも無かつたはずが何を思つたか童印が完成する前の王の半身にこんなに深くかかるとはユリウスも思つていなかつた。この子を見るまでは……ヴァイロンに瓜二つの子供。だがいつも違うことをしているのが吉と出るか凶と出るか。それは、ユリウスにも解からない。が、クロードに関わることは止められない。今更、すべてをモンド州ゴートの廟にいるルークに今迄の半身のように任すなんてできない。

「どうしたのユリウス？」

黙つてしまつたユリウスの顔を見上げるクロードにユリウスが屈みこむ。

「何すんだよつ」

そのままおでこに口付けられて真つ赤になつてクロードが抗議する。

「久しぶりだと思つてさ。遅くなつたけどお帰りのキスだよ、クロード」

ユリウスが目を細めてにたりと笑つた。

「くそー！ 僕部屋に戻る」

悪かつたとかひつと思つていたのに油断も隙もない。

次の朝、ボルチモア州の州旗を立てた馬車が宿の車寄せに何台もつけられた。そのものしさに宿屋の者たちが右往左往する。そしてその中の一際大きい立派な馬車から美しい身なりの貴人が

降りたつ。

「トラシュ・ゴイル・ヴァン・ドミニク殿下であらせられる」

従者の慇懃いんぎんな声に宿屋の主人が慌てて膝をついた。

「よい、頭をあげてくれ。それより私の客人がお世話になつているらしいな」

「お早いお着きで。しかもトラシュ様が直々にお越しくださるとはうれしいですが政務が滞りますでしょ？」

宿の玄関口まで出てきたユリウスが作り笑顔で言つた。

「このボルチモア州内で族に襲われるなど大変申し訳ありませんでした。族はすぐに捕らえて厳しく処断致します」

トラシュが許しを請うようにユリウスに手を差し伸べる。

「トラシュ様、そのような事。命に別状があるのでなし、どこの州にでも山賊、盗賊の類はありますよ。取り締まるのはもちろんですがどこからでも湧いて出るようなもの。今回の事はお気になさらないで下さい」

ユリウスは営業用の笑顔でにっこりとトラシュに向けて微笑んだ。

「クロード、行くよ」

ユリウスに腕を取られてクロードが不貞腐れる。

「昨日の今日でこんな事言つのはどうかと思つけどここにも行かないからさ。手を離してよ、小さい子みたいじゃないか」

「小さい子だろう、やつてる事は」

冷たくユリウスが言つた。

「まあ暫くは仕方ありませんね」

ラドビアスにも言つてがつくりとクロードは手をひかれたまま馬車に乗り込んだ。

プリムスからケスラーへの道は花崗岩で舗装されていて乗り心地が今までと格段に良い。そのためか、二刻ほどでケスラーに着い

た。大理石が多用された首都サイトスも美しい都として名高いが、ケスラーもなかなかだとクロードは思った。モンド州の州都、エリアルは黒曜石の都として知られているのと対照的に眩しいほどの白い都だった。

「綺麗な所ですね」

クロードが建物に光が反射するのを目を細めながら見ている。

「そう言つてもらえると嬉しいね」

トライシコは朗らかにクロードに笑いかけた。

クロードは首をかしげる。好人物に見えるが。本当に隣の州の公子をボルチモアに悪意を持つて誘い込もうとしているのか。考えすぎなんじゃないとユリウスを見た。

町の様子からこのボルチモア州がかなり豊かなのだろうと解かる。花崗岩を産出し、大きな河が広い平野に何本も流れて北に位置している割に安定した農作物が採れるのだ。そこで桑が栽培され良質の絹が作られている。街の隅々まで舗装された道が続き、上水、下水道も整備されていた。

レイモンドール国三十九ある州の中でも頭一つ抜きん出でている州。それがここボルチモア州であった。そのことは勉強で習つていが、話しに聞くのと実際目で見るのは大いに違う。ボルチモア州候ドミニクはやり手なのだろう。そうだからこそ実力がある上昇志向の強い州候がサイトスの魔道師院の存在など厄介払いしたいと考えることがあつてもおかしくない。

そして今は州宰として詰めていた魔道師たちがこぞつて各州を留守にしているのだ。河に囲まれた大きな中州になつてている土地に盛り土をしてそこにボルチモアの州城は建つていた。その広大な敷地の中に入る為には、東西南北各場所のどれかの跳ね橋を降ろして入らなければならない。クロード達を乗せた馬車は山側を下った西側の跳ね橋から州城へ入つた。馬車は主城を離れて敷地の一角にある小宮の前に止まる。

「今日はお疲れでしょうからこのままこちらでお寛ぎください」

「デリック様にご挨拶をしなくては失礼になります」

ヨリウスが眉をひそめる。

「父上がそのようにと言つたのですよ、ヨリウス、氣を使わないでください。主城には明日私がお迎えに参りますよ」

どうさくさに紛れてヨリウスの手を取つてトラシュがヨリウスを馬車から降ろす。案内された小宮はヨリウスの居城に似た小さな城だが内装はかなり美しく三階建ての中はどれも凝つた造りになつていた。

クロードは一つ一つ戸を開けて見ながら歩いていたがこの小宮にほとんど警備の者が居ない事に気付いた。まあ州城の中で何かあるわけもないか……しかし、他もここまでいかないにしても警備が薄いのなら何か訳があるのであらう。例えば他に兵を集めているような……。昼間プリムスからの道中そんな事を考えていた所為か何を見ても怪しく述べてしまつ。

コリウスの告白

「コリウス、後で話があるんだけど」
トライシユの横に立つてゐるコリウスに後ろからそつと声をかける
と、コリウスは振り返らずに手を動かして合図を送った。指示示
された部屋でクロードが待つているとコリウスがするりと音を立て
ずに部屋に入つて扉を閉めた。

「話とは何だ、クロード」

「うん、俺達ねずみを追つていたと思ったらきつねの穴に入つてい
たかもつて思つてさ」

「きつね……？ どちらかといつと猪に近いご面相だが、そんな事
はながら承知していると言つていただろ。それとも」

コリウスがクロードの胸倉を掴むとぎりりと締め上げて睨む。
「私に話してない事があるのじやないか？ この前出歩いて帰つて
来てからおまえの様子が変だつたものな。無理やり呪をかけてしや
べらせても良いんだよ」

「わ、解かつたよ、話すから……離して」

げほげほと咳こむクロードを離してコリウスが腕を組んだ。

「で、何をかくしていいる？」

「インダラつていう魔道師がボルチモアに來てる」

「インダラ」

明らかにコリウスの顔色が変わる。

「カルラつて奴を捕らえに來たつて言つてたけどカルラつてユリウ
スのことじやないの？」

「どうして……」

「コリウスの口から思わず漏れる声。

「インダラがここに居るということは、このどたばたの絵を描いた
のは奴だな」

「コリウスが溜息と共に言ひ。

「インダラってユリウスの何？」

「あいつは……私の兄の僕だ」

「兄さん？」

「ユリウスに兄弟がいたつていいんだけど、とクロードはつぶやく。
しかし、何かクロードにはしつくりこない。

「私には一応、建前上四人の兄と一人の姉がいる。それに僕が
いるがすぐ上のバサラには一人僕がいた。インダラとサンテラとい
う名の」

「サンテラってラドビアスのことだよね」

「そんな事も知っているのか」

いつの間にとユリウスの顔に書いてある。

「で、ユリウスが犯した罪つて何なの？」

「一番上の兄、ビカラの頭をかち割つて秘宝の経典を盗んで逃げた
事、かな」

えーっとクロードは絶句するがユリウスはそんな凶悪なことをさ
らりと言つて薄く笑つた。

「私は一番下で兄達から逃げ回つていて……ある日一番上の兄、ビ
カラの僕に捕まつて寝所に連れ込まれた時、ビカラが油断した隙に
脳天をかち割つてやつた。そして逃げるときにビカラが隠していた
経典を盗んで逃げたんだ」

「あの……寝所に連れ込まれたつて……？」

「ふん、伽^{とき}の相手に決まつてるだろ」

ユリウスが苦々しく言つ。

「だつてユリウス、男じゃないか。しかも兄さんの寝所つて
たじろいたようにクロードが言つ。

「そうだ、私は男になるんだ」

自分に言い聞かせるようにユリウスがつぶやく。

クロードは目をしばかせてユリウスを見る。着替えの時に何度も
見たがそりやあ綺麗だけど女の子みたいに胸が大きいわけでもな
かつた。

「男になりたいってどういう事?」

クロードの問いにユリウスは不貞腐れたような顔で吐き出すように喋りだした。

「気味の悪い話だぞ」

大陸の東にあるハオタイ皇国という国。他民族国家だが大多数のハオ族という民族が支配している。そのハオタイの北の高地にベオーケ自治国という魔道師だけの国がある。ベオーケ自治国自体は、小さい都くらいの大きさだがその影響力は大陸全土に及んでいる。

「それってどういう……？」

クロードが首を傾げる。

「レイモンドール以外の国にいる魔道師はすべからくベオーケ自治国の支配下にあるということだ」

自ら生産する事のないベオーケ自治国は魔道師たちへの允許や地方からの租税、国王、貴族たちからの献上金、各地にある廟からのお納金などによって恐ろしいほどの財を持つ。

また派遣している魔道師が各国において権力を持つて国に多大な影響を与えていた。

大陸では王の戴冠式にベオーケ自治国の教皇の御璽ぎょじが押印されている書面の無い王は正統とはみなされない。そのベオーケの宮殿、朝陽宮に住んでいた者たちの頂点にいるのが魔道教會で神と呼ばれている一族だ。その一族は恐ろしく長命だ。そして中々子孫を増やせない。なぜなら長い間一族の血統を守るために極端な近親結婚を繰り返した為だ。今では血族以外の者と交配できるか定かではないほどだ。直系の僕たちにしても相手にはなり得ない。彼らには繁殖能力はない、つまり竜印を受けて自分の主と同じ寿命と不老を甘受かんじゅした代償として子孫を残すことを手放すのだ。ユリウスは長い溜息をつく。

「まだ、この気色悪い話を聞くつもりがあるかい、クロード」「もし、聞かせてくれるなら」

クロードの答えにユリウスはもうひとつ溜息をついた。

「私達一族は普通の人とかなり違つていて。まるで違うともいえるが。私達は生まれてから暫くは雌雄同体の体だ。魚や虫の一部にそんな例があるのと同じだ。力の無い者、強く望む者が女になる。姉のハイラは女を望んでそうなった。私は……生まれた時から兄達に女になるよう望まれていたんだ」

「兄達って、そんな」

「兄達と言つても厳密に言えば直ぐ上のバサラ以外は兄弟じゃない。しかし、それがどうだつていうんだ？ 私達は長年に渡つて家族内で婚姻関係を結んでいたんだ。吐き気がするだろ？私の父親は長兄のビカラだし、母親は長姉だ。同腹にバサラという兄がいるがそれ以外は前教皇のアンテラとアンテラの母親との間に生まれた現教皇のビカラ。そしてその後はアンテラと長姉アニラとの間の子供だ。次男クビラ、三男メキラ、次女ハイラ。私を生んだ長姉アニラは、私が十五歳の時にクビラに殺された。その間子供を産む道具のような人生だった。私はそんな人生はまっぴらだったから、兄のバサラから僕を一人奪つて最西の寂れた島に逃げ込んだんだ」

あまりの想像外の話にクロードはコリウスにかける言葉も無い。「うまくいつたと思ったのにビカラは絶対に呪をかけていた。何年もしないうちに護法神が追いかけてきて私は捕らえられてしまつた五百年以上も前のことなのに昨日のことのようにコリウスが唇を噛む。

「だが、護法神が来る前にあらかじめ絶対の中身を私は頭に入れていだからね。護法神をある程度手なづける術を見つけていた。それで護法神と取引をしたのだよ」

「取引つて？」

「詳しくは教えるわけにはいかないがとにかく、私が絶対を害さないかわりに私の縛^{いまし}めを解くことだ。絶対はその日から大事にある所

に仕舞つてある。護法神は今は王を守つてゐるが、今でも私にとつては害悪で触れることもできない。あれで斬りつけるだけでもそこから壊死する。それ以外で私を殺すのは骨が折れるだろうな。私はひつこいから

「しかし」

そう、言つてにまことにヨリウスの唇がつり上がる。

蔵書室の火事

「そう、言つてにまことにユリウスの唇がつり上がる。

「血が濃い為に私以外の兄達にも護法神は効くようでね」
思い出し笑いしているユリウスは酷薄な笑い顔になる。

「ここに結界を張つて五、六十年経つた頃、バサラが取り戻しに来た事があつたが、ヴァイロンが奴の腕を……」

そこまで言つてはつと夢から覚めたように唐突に言葉を切つた。
「とにかく、私はあいつらに經典も私もやるつもりはない。もし、私が捕まつたらクロード、王から奪い取つてでも『鍵』で私を殺してくれよ」

「うん」

クロードの心もとない返事にユリウスは声を落とす。

「私を生き地獄へ落とさないでくれ。頼むから」
いつもの彼らしくない言葉にクロードはユリウスの頼みを退けることができない。

「解かつた」

「ラドビアスはその時からユリウスの味方なんだよね」

「さあな……私が一番とか言いながらインダラと通じていたわけだし」

ユリウスがまた悔しそうに言つた。

「私をお連れください、そう言つたのは、おまえだったのに」

攪乱するため放つた火が瞬く間に燃え広がり、魔道師たちが消火の術をかけようと駆け去つて行く中、カルラは抱えた經典ごときなり背後から男に抱えられた。

男は地下に降りる長い階段を下つていく。

「蔵書室にも火を点けておきましたので皆、そちらに向かっていると思われます。今のうちに地下の抜け道から外く」

そう言つた男の顔をやつと見る余裕がでたカルラは足をばたつかせて男から逃れる。

「おまえ、バサラの僕の一人じゃないか！」

「はい、サンテラと申します」

「どうじつつもりだ、バサラに何を言われた！」

「バサラ様はご存知ありません。カルラ様、私と一緒に連れ下さい」

信じられるかとカルラはサンテラをねめつけた。

「おまえはあるの時、蔵書室の大扉を閉めた奴だ。側に寄るな、殺してやる！」

「地下は迷路ですよ、殺すのは無事ここから出られたらにせねてはどうです」

サンテラが迷わずカルラの血にまみれた手を掴むと、そのまま走るように歩いて行くのでカルラも引きずられるように歩いた。頼る者などいないと気を張つて生きてきた。その自分の腕を力強く引いていくこの者を……信じていのだらつか。ほんの少し頼つてもいいのか。

「それは、おまえの意思なのかサンテラ」

「はい、カルラ様」

やう、言つたくせにとコロウスは思い切り唇を噛んだ。

「コリウス」

過去の思い出に沈み込むコリウスをクロードの声が現在へぐいと引き上げる。

「何でもない」

思つたより話し込んでしまつたとコリウスは戸を少し開けて廊下を盗み見る。

「私はドミニクの血縁の者がどれだけこの企みに加担しているか調べる。おまえは今からこの部屋に結界を張つてやるから竜門を通つてガリオールに連絡を取つてここに城下町」と結界を張る者と、

ゴート山脈一体の結界を張る者をよこすように言つてくれ」

指を噛んで血をクロードの胸に垂らして竜印をなぞりながら呪を唱える。

「これでペンドントとローブの代わりになる」

そう言つと部屋の四隅に範字を書き付けてある札を置いて自分は外に出た。外からレーン文字を扉に指で描きつけて扉に触れると扉は一寸の隙もなくぴたりと閉まつた。

「クロード、始めろ」

「んじゃあ、やりますか」

クロードは再びサイトスへと竜門を開く。

サイトスへの竜道は途中から石畳の道になり一ザンも歩くと田の前に手すりのついた階段が現れる。クロードはその階段を上がり双頭の竜が翼を広げている飾りのついた扉を開けた。そこは魔道師庁にあるガリオールの執務室の一角に繋がっている。それは誰が竜門を使うのかしつかり自分が管理したいガリオールの性格を現しているようだ。

「クロード様、ですか」

書類にサインをしていたガリオールが顔を上げて訝しげに見る。

一人で竜門を使うのは少し早いのではと眉をひそめる。しかし、ガリオールの思惑など関係なくクロードはガリオールの机に手をつく。

「ゴリウスから伝言があるのだけれど」

その言葉にガリオールの面が引き締まり、クロードにうなずくと部屋から仕事中の魔道師を出して自分の前の椅子をクロードに勧めた。

「ボルチモアの城下町とゴートの廟一帯に結界を張る魔道師たちを何人か振り分けて欲しいのだけど」

「それは……主に危険が迫っているのですか。私とルーク、ラドビアスがいれば直ぐにでも結界は張れますか」

「ラドビアスは勘定に入れないので欲しい」

クロードの言葉にガリオールは怪訝な顔をする。

「ラドビアスを外すと?」

「そう」

クロードが声をひそめて身を乗り出す。

「ところで親父さんの容態はどうなの」

「国王陛下のことですか。この所『不調』の事が多『や』しましてお休みになられておりますが……一体何をお聞きになりたいのです?」

ガリオールはへつと笑うクロードをややあきれて見る。 クライブ王子と瓜二つというのに受ける印象がまるで違う。

「『鍵』のことだよ、今は指輪のままなの? 剣になつているの?」

「それを聞いてどうなさいます」

顎を引いてガリオールはクロードを油断無く見つめる。

「ユリウスの使者

「別に、親父が死にそうなのかどうなのか知りたいのは当然じゃないか」

クロードは不敵に笑いながらガリオールを見返す。

「親父などと仰ってはなりませんよ、クロード様。確かに貴方様のお父上であられますからね。国王陛下ですよ」

「ターン！ 机をクロードが叩く。

「じゃあ国王陛下の『鍵』はどうなってるの？ 僕、ユリウスの使者だよ。ユリウスにどう言つたらいいんだ」

クロードの強い態度に僅かにたじろいでガリオールが答える。

「今は存知ませんが今朝ご機嫌を伺いに参りました時には剣になつておりましたが」

ユリウスが知りたいつていうのは嘘だけこの際、僕の知りたい事も駄賃代わりに聞いても罰はあたらないだろう。

「ボルチモアと廟には私とルーク、リチャードが行きます」

リチャード、クロードは初めて聞く名だ。

「初代国王ヴァイロン様のお子でござります。知つておられるかもしれませんが王がお亡くなりになるまでの半身の名はすべてクロードです。王が無くなつた後、王の半身は王の御名を頂いて正式に魔道師庁へ下られますからそれ以降は「様」はつけません」

……なんだ、初耳だった。

「じゃあ俺はクライブになるのか、あいつが死んだら」

「ご逝去されたら、ですね。もちろんそうですよ」

わざわざ言い直されてクロードは慄然とするがまあ、役目は終わつた。

「解かつた。じゃあユリウスに伝えるよ」

竜門の扉を開けて出て行くクロードをガリオールは立ち上がりて見送りながらつぶやく。

「ボルチモアですか、結界が緩んで忙しいときに面倒な事になつた。その最中に主がいるなんて。先に私に調べさせて頂きたかったが。こちからも直ぐに調べなければ」

クロードは竜門から出ると部屋の四隅に置いた呪符に『解』と畠えて印を結ぶ。呪符はもうく粉々になつて消えた。それを確認してから外に出ると丁度そこへラドビアスがこちらにやって来た所だった。

「クロード様、そこにおられましたか、もう直ぐ夕食の時間です。下へおいで下さい」

クロードが出てきた部屋を一瞥だけしてラドビアスは下へ降りて行つた。

気付いた？まあ、いいか。ラドビアスほどの魔道師を出し抜くなんて難しきる。あいつの相手はコリウスに任せとこう。

一階の食堂に行くとコリウスはすでにテーブルについていた。

話は後で聞くと、開口一番コリウスが言つた。コリウスの真横には当然のように座つているトラシュと向かいに座るアリストローザが目に入った。アリストローザが手を高々と上げる。

「クロード、やつと会えたわ、楽しみにしていたのよ」

「アリス、大声を出すものではないよ、はしたない」「妹のその明け透けな行動にトラシュが眉をあげる。

「クロード、小宮を熱心に見て回つていたらしいけどこの城は気に入つて貰えたのかい」

トラシュが笑いながら聞くのをそういう事になつていたらしくと話を合わせることにする。

「とてもすてきなお城ですね、どの部屋の趣向もどれも綺麗で快適そうです」

答えながらトラシュに他意はあるかと顔をうかがう。しかし優しそうな笑みを浮かべた顔は、あくまでも爽やかでクロードには裏があるようには見えない。

「コリウス、君はどうだい、気に入つてもらえましたか」

トラシュがさつ氣なくコリウスの手を握る。

「勿論ですとも。ここはとても落ち着きます。お心遣い有難く思つてあります」

クロードにはうそ臭を全開の笑顔を見せてコリウスは重ねられたトラシュの手をさっさと外す。

「私達は持ち物をすべて失いましたので今日のところは着替えなどもお貸し頂くとして。明日の朝、私の従者に調達させに城下に行かせたいと思つています」

「私ので良かつたら何でも使つてください」

「有難いですが私はトラシュ様に比べて背も低いし体も細くて、トラシュ様の服を着ても可笑しいだけです。ラドビアス、悪いが滞在に入用な物を見繕つて来ておくれ」

「畏まりました」

ただでは起きない奴というか、もしかして襲われる事前提だつたのかとクロードはコリウスを見る。これでラドビアスを半日はこの州城から追い出せるのだ。その間に何をする気なのか。しかし、『悪いが……』なんて普段言わないくせにラドビアスにバレちゃうんじゃないの？

「今晚の夜着なら私のはどうかしら。コリウス様細いし、お兄様のは大きすぎるでしょ？」この前あつらえたのが丈も長いしお揃いのガウンもあるし」

アリストローザの提案にトラシュが厳しく言つ。

「女物など失礼じゃないか」

「では、そうさせて頂きます」

コリウスの返事にえつ？ とトラシュが口を開けたままコリウスを見る。

「今晚寝る時だけですから誰に見せるわけでもありませんでしきう？ お湯を使わせて頂いてから貸してもらえますか、アリストローザ様」

「コリウスの返事に気を良くしたアリストローザがクロードに聞く。

「クロードはどうする？」

「じょ、冗談！俺、じゃなくて私はトラシュ様に貸してもらいます」

自分で言つた。今まで女物を着る羽目になるのを防ぐためクロードは勢い込んで言った。

「私の衣装部屋からこの前作つた、水色の夜着とガウンを持つてきなさい。銀糸で蝶の刺繡がある物よ」

アリストーヴは女官に言いつけると嬉しそうにユリウスを見た。「きっと、お似合いになるわ」

夕食が終わつて先にお湯を使って言つた通り、だぶだぶのトラシユの夜着を大きくウエストで弛ませて着たクロードの横にはユリウスの夜着姿を見てから主城に戻ると言い張るアリストーヴが座つていた。

かちやりと軽い音をさせてユリウスが部屋に入つて来たのを見てクロードは冷や汗をかいだ。水色の薄い生地にレースがついた夜着にガウン姿のユリウスは完全に女の子で長めとはいえ、アリストーヴ用の夜着はユリウスの脛までしかなく白い足がによつきり出ている。それが呆れるほど男の脚ではない。

「……自信が無くなつてしましますわ、ユリウス様……」

アリストーヴが溜息交じりに言つ。

「何をばかなことを、アリストーヴ様は本当にお可愛いですよ。私と比べるなんてとんでもないことです。ラドビアス、アリストーヴ様を主城にお送りして差し上げなさい」

「あら、私従者がいましてよ」

首を傾げるアリストーヴにユリウスが優しく言つ。

「お供させてください。確かにお帰りになつたか心配ですからでは、お送りして参ります」

アリストーヴと女官の後をラドビアスが続いて部屋を出て行つた後、クロードがまったくもうと唸る。

「それ着たのもラドビアス、追っ払う為だろ？アリストーヴが見

たがるのを予想してたんだな」

クロードの言葉を無視してユリウスは長椅子に行儀悪く脚を投げ出して座る。

「で、ガリオールは何と言っていた?」

「ガリオールとルーカ、リチャードが来るって」

「そうか、解かつた。じゃあ私の収穫は」

ユリウスが羊皮紙を広げる。

ボルチモアの企み

「何?」

クロードがのぞくと手で頭を扱われる。

「邪魔だ、クロード。今から読んでやる」

コリウスは、こほんと咳払いを一つして。

「長女、アンはライクフィールド州候夫人、次女ジェーンはミルフォード州候夫人。次男マイクはドートル州のガウス伯爵に婿養子にいき、三男ロイスはサイトスのスノーフォーク伯爵に養子についてる。まあ、他の庶子たちは臣下と婚姻させているようだな」

コリウスが羊皮紙の上を埃を払うように手をすべらせると、書いてあつた字が紙の上をすべつて床に落ちた。その上で改めて羊皮紙を広げて呪を唱える。黒い粒子の細かいもやのような物が紙の上に現れた。それは、レイモンド国の地図になり、それでも暫く蠢いていたがやがて紙に定着していく。コリウスはさっき言った関係のある州に印を書き入れる。

「どう、思う?」

「普通ならサイトスの魔道師庁を押さえようとするだらうけど、インダラがいるということはモンド州のゴートの廟を狙うよね。魔道の本拠地だもの」

「そうだな」

コリウスもうなずく。

「ドミニクの企みのためなら、手つ取り早いのは私を殺すことだが。インダラがそんな事を言つ筈ないし、インダラがどういう餌さをぶら下げてドミニクを釣ったのかまだ解からない。少しライクフィールド、ミルフォード、ドートル各州とサイトスに^{かんざよう}間諜を付けて様子を見るか」

「ゴートの廟はどうするの?」

「あれは放つておく」

クロードの問いかかる顔に黙つて聞けと口にして。

「こことモンドの廟は逆にあいつらを招き寄せてから結界を張つて全滅させてやる」

にやりと笑つてクロードに向く。

「まずは私の城に戻りつ。お前にペンドントを渡しておかなくては面倒でいけない」

手に持つていた羊皮紙にふと息を吹き掛けると、黒いインクはもとの黒い粒子に戻り消えた。お湯を使って落ちてしまつた血の呪印を新たにナイフで指を切りつけてクロードに再度付けるとユリウスは竜門を開けた。

「モンド州ハー・コート公の次男ユリウスと三男クロードを人質に取つて州兵を密かに送り、モンドの廟を落として廟主イーザルアイなる魔道師を押さえてしまえば魔道師どもは身動き出来ない、でしたな」

ボルチモア州州候、ジークフリート・ステファン・ヴァン・ドミニクは暖炉の前に立つ男に向かつて確認するように言った。自身はすでに寝ようとしていたので体は寝台の中だ。

突然、寝酒を楽しんでいたところに暖炉から炎が激しく上がる。彼は驚いて誰か人を呼ぼうとしたが、当の炎の中から男が出てきてドミニクに礼を取つて頭を下した。

思わず落としそうになつた杯をどうにかサイドテーブルに置く。

「インダラ様、でしたな」

この一年程前、このところ州宰と意見が合わなくなり、イライラと過ごしていたドミニクの前に現れたベオーラ自治国から来たという男。大陸ではベオーラ教皇の力が絶大だと言う事は爵位を継ぐ前にサイトスに遊学していたドミニクは知つていたが。ここでベオーラ教皇の後ろ盾を得られ、レイモンドールの上位の魔道師ども

を駆逐したら……。あの死ぬ事の無い人間の皮を被つた化け物ども！

一見すると慈悲深い優しげな顔をしているが、冷酷な内面で何を考えているか解かつたものではない。あいつらを排除した暁には、自分の未来は揚々と開けている。

私はたかが北部の州候に納まっている器ではないのだ。今の魔道教に守られている王はレイモンドールの魔道教が滅びることによつてその正統性を失うのだ。

そして……ドミニクは一人ほくそえむ。モンド州にあるゴート山脈その一帯にある魔道教の廟の中に今も生きていると言われるレイモンドールの魔道教の祖である老魔道師、イーヴァルアイの身柄をこの男に引き渡せば取引は終わる。

百年に一度の結界の張り直しに向けて、上位の魔道師が出払つている今こそ絶好の好機であることは間違いない。縁戚に繋がる州候や息子たちには魔道師序の横暴に対する義憤による反逆を振りかざして地下組織を作らせている。だが、ドミニクの本心はそこには無い。私は新しい国の王になるのだ。

「しかし、そのイーヴァルアイという魔道師を捕らえるより、サイトスの実権を握る宰相のガリオールを捕らえたほうが宜しいのでは」イーヴァルアイという魔道師の名は、ドミニクには初めて聞く名前でレイモンドールの歴史書にも出てこない。初代太陽王と言われたヴァイロンがレイモンドールを強固な結界で守る事を命じた魔道師の名前がそうであったのか。

「ガリオールとてもイーヴァルアイの僕なのですよ、候」

ドミニクに諭すように言つて、インダラが懐から筒にした書面をドミニクの寝台に寄つて手渡す。かさかさと紙を広げると縦書きで見慣れぬ文字が書き連ねてあり、最後に名前らしいものに五本爪の龍を模つた四角い印が押印されている。

「これは？」

「ベオーク教皇の親書です。お読みしましょうか」

「頼む」

ではと、インダラは手渡したばかりの書面を奪つよう手に持つと読み上げ始める。

「我、ベオーケ教皇ビカラはレイモンドールに潜伏せる罪人の引渡しに助力されるボルチモア州、ジークフリート・ステファン・ヴァン・ドミニク侯爵殿に対して事成就の曉には、候にふさわしい地位をベオーケ教皇の名に置いて贈呈差し上げる事を確約するもである。尚、そちらに使わしたインダラを私の名代として候に進言させることを了解するを望む旨記す、とあります」

「うむ、承知した。イーヴァルアイは必ずや捕らえて引き渡します」

「うぞ」

ドミニクの返事に満足そうにインダラははづなずくと書面をドミニクに渡し、部屋の窓を開けた。

「それではおいとまいたします。候」

「どこへ、ここは三階ですぞ」

慌てて言つドミニクにインダラは笑顔を返す。

「お気遣い無く、知り合いが主城に来ておりますので会つて参ります」

インダラはそう言つと窓枠に手をかけると姿を消す。

アリストローザが女官と主城に入るのを見送つてラドビアスは帰ろうとしたが、自分の背中に伸ばされた手に気付いて払い退ける。

「サンテラ、カルラ様から田を離してはダメじゃないか」

「解かつていい」

「ビカラ様をはじめクビラ様、メキラ様、バサラ様、皆カルラ様のご帰郷を心待ちにしていらっしゃるのだ。この数百年、ビカラ様の傷の癒いええるのを待つていて後回しなつていてがそろそろ本腰を入れてお連れすることになつた。お歴々の方々もさすがに御歳を召されてきたからな。バサラ様以外は八百歳を超えていらっしゃる。しかも……」

一旦、口を切つてインダラは薄く笑つた。

「カルラ様がご出奔された後禱こうとうに仕えられたのがハイラ様だからな。他のご兄弟も足が遠のくというものだ。ことに我が主バサラ様は一度もハイラ様を寝所にはお入れになつておられない。他のご兄弟との間にもまだハイラ様は御子を生しておられないのだ」

大抵の男より男らしい容貌のハイラが女性化した後もほとんどの姿が変わつていないことでバサラはもとより、他の兄弟らも彼女を寝所に呼ぶのを躊躇ちうちょしているのだ。

「カルラ様がいらっしゃる所ならどこへでもお供するつもりだ」ラドビアスはつぶやくように言った。

主はベオークに連れて行かれる事になつたらどんな手を使ってでも命を断つてしまうだろう。しかしベオークが本気で連れ戻そうとしているのならこれに勝つことはないだろう。

であるなら、私は主の命に背いても主をカルラ様を死なせはしない。僕としては破錠はじょうしているのは解かつている。主より自分の思いに殉じてしまつてはいるのだから。

「しっかりとカルラ様に張り付いている」

黙りこむラドビアスにインダラは一言言つと闇に消えた。

朝の出来事

「本とか持つてくれれば良かつたかなあ」
部屋に竜門が開いて姿を見せる前にクロードの声がある。

「大声を出すな、クロード」

「いってえ！」

耳を引っ張られながらクロードが竜門から出て、コリウスが竜門を解した途端に扉を叩かれてディエビットの声がする。
「何か」「ございましたか」

ほら、見ろとコリウスがクロードを見る。

「何も無い、ラディアスが戻つたらおまえもお休み。私もクロードも、もう休ませて貰'づ」

「畏りました」

従者の立ち去る足音が消えるのを待つてからコリウスがクロードに話しかける。

「ペンドントはこれからいつも服の下に付けておけ」
髪を搔きあげながら持つてきた香炉や巻物を手早く検分してしまつていいくコリウスを見ながらクロードは、やはりコリウスは十七歳の女の子に見えると思った。しかし体が成熟するまで性別が決まらないなんて、ふしきな種族だ。でもコリウスは本当はどうになりたいんだ。

「やっぱり、女の子になるのは嫌なの？」

つい、言つてしまつて速攻後悔してその場から逃げようとしたクロードの足に『縛!』声がかかる。足をひっかけられたようにクロードは顔から倒れこむが咄嗟にコリウスに向かってレーン文字の『イサ』を描く。その上で宝瓶印を結ぶと左右の手の間から息を吐いた。

息は『イサ』の文字により氷化してつらりとなりコリウスに向かって飛ぶ。コリウスはあっさりそれに範字を描いてつららを溶か

して消す。一人の間に水蒸気が上がる中、抵抗もそれまでだつた。足を縛されているクロードにユリウスが一本だけ溶かさず持つていたつららを顔の真横に突き立てる。

「ひえっ！」

「女になるのは……なんだつて？ よく、聞こえなかつた。もう一度言つてくれ」

「いや、もういいです。好きに生きて下さい。わーお助け！」

「クロード様、ユリウス様、もうお休みの時間でしきう。小さなご兄弟みたいに遊ぶのもいい加減になさつて下さい」

大きくは無いが、よく通る声が一人の騒ぎを止める。

「ラドビアス」

ユリウスの悔しそうな声とクロードの嬉しそうな声が同時に重なる。

「ユリウス様、今晚は特にそのような格好をなさつておられますのに。夜着が破れますよ」

クロードに跨またがっていたユリウスの夜着は太腿のところまで捲くれ上がつていて、確かに破れそうだ。大きく聞こえるように舌打ちして立ち上がったユリウスは、さつさと寝台に入ると一人に背を向けた。

「もう、寝る」

やれやれとクロードは立ち上がりうとして……こけた。

そうだ、足を縛されていたんだ。

クロードは印を組み『解！』と唱えると足が自由になつた。そしてあせらず先に解しておけば良かつたかと頭をかく。

「おやすみ、ラドビアス」

「お休みなさいませ、クロード様」

ラドビアスの声を背中で受けながらクロードは自分の部屋に戻る。部屋に戻るとはあと息をついて、ユリウスが咄嗟に押し付けてきた巻物や香炉やらを弛たるんでぶかぶかの袂から出して寝台の下に隠す。寝台に寝転がつてユリウスの話を思い出していた。

そうだ、自分にとつてもショックな話だつた。どうも俺は子供を作れないらしいのだ。結婚と一緒に今は子供なんて欲しいとも思つていなか。持てないと持たないのとは違う。王の半身として生まれて何か得なことはないのかな……。うーんと唸つてクロードは寝返りをうつた。

次の朝早くトラシュが朝食を一緒にとやつて来ていた。アリスローザに昨晩の様子を聞き及んで、一皿見よつと思つてのことだと見え見えだつたのでクロードは関係ないと掛け布を頭に被つた。が……。

「クロード様もお召し替えは宜しいので、一緒にと言われております」

さう言つ声で渋々起きる。

そりゃあお召し替えはしない方がいいだらつた。特にコリウスは。

クロードが食堂に入るとすかさず、先に來ていたコリウスが冷たく言つ。

「遅いぞクロード」

「すみません兄様」

「本当にこう言つては何ですが、國中の美姫も靈みますよ」

トラシュはコリウスの真正面に陣取つて嬉しそうだ。

「お世辞は嬉しいですが女性の服でトラシュ様にお会いするのは恥ずかしい限りです」

今朝は髪を一まとめにして高じところで結んでいるので、どこから見ても女性にしか見えないコリウスがにっこり笑つてトラシュに返す。

「昨日の夜に俺が女になるつて聞いただけで殺そーとしたくせんぶつぶつ言つクロードの皿に乗つているパンにナイフが刺される。」「行け！」

「ナイフいるだろ、取つてあげたよ」

「あ、ありがとう兄様」

ナイフなら自分のがあると言いたかったがぐつと堪える。

まったく年寄りなくせに凶暴で地獄耳な奴だ。

ラドビアスは既に出かけていていないうだ。

「午後には私の従者も戻りましょう。その後トラシユ様のサロンにお邪魔しても宜しいですか」

「勿論、クロードも来るかい？」

トラシユの誘いにちらつとユリウスをつかがつとユリウスはわずかに眉をひそめた。

「いえ、私は難しい話はちょっと……遠慮します」

「では、お昼に」

上機嫌で帰るトラシユを見送る。すると朝から酒を飲もうとするユリウスに気が付いてクロードはラドビアスがいない今、止められるのは俺しかないとユリウスから杯を取り上げる。

「いいだらう、少しくらい」

「やめろ、この酔っ払い」

「このくらいで酔うものか」

「あのねえ、酔っ払っている人は自分のことを酔っ払いだとは思つてないの」

あーそうとクロードから酒の入った杯を取り戻そうとしたユリウスの目の前で、クロードが杯に口をつけてごくごくと一気に飲み干した。

「これで良し」

クロードが言つた途端に倒れこむ。

「クロード」

ユリウスが抱き起こすがクロードは目を開けない。

「何がこれでよしだ、お前にはいろいろやつてもらう事があるのでに」

「ユリウスが、がくがくとクロードを揺らす。

「起きる、クロード起きろ」

僅かにクロードは薄田を開けた。

「クロード、起きたか」

「気持ち悪い」

「えつ、ちょっとと待てクロード、あーっ」

ゴリウスのガウンはクロードの吐しゃ物をまともにうけてしまつ。

「おー、クロード、これ借り物なのにどうするんだよ。私に一回もこんな事して」

当の本人は吐いてすつきりしたらしく、ガウンを脱いだゴリウスの膝の上ですうすう寝ている。

「デイビット、来てくれ」

ゴリウスがダリウスから借りてただ一人残つた従者の名を呼ぶ。

「いかがされました。あつ」

薄い衣物を着たゴリウスが膝の上にクロードを乗せているのにビットが固まる。

「何ぼさつとしている。」いつを寝台に運んで女官を呼んでガウンをきれいにしてくれ

ゴリウスの声にはつとしてデイビットはときぱきと動きだした。飲んだ量もたいしたことが無かつたせいで半刻もした頃、クロードはぱつちりと田を覚まして顔を横にする。

見ると、寝台の横でゴリウスが巻物にさらさうと書き付けている。

「……ゴリウス、何だつてそんな薄着でいるのぞ」

クロードの問いに柳眉を上げてゴリウスがこちらを見る。

「田を覚ましたのか、そんな薄着でとはよくいつてくれたな。まあいい、こきてやる。昨日の服に着替えてこれを届けてここへくるくると巻物を巻いてクロードに渡す。

「うん、解かった」

何で頭がズキズキするのかと思いながら竜門を開けてサイトスへ向かう。そして思い出した。ゴリウスのいや、もといアリストローザの新調したてのガウンに吐いてしまったのだ。どう言い訳し

よつかと考えながらサイトスの魔道師庁の扉を開けた。

インダラ来襲

クロードを見送つて自分もモンド州の廟に出かけようとした時。扉の開く音がしてそちらへ向いたゴリウスの夜着の左袖のレースを引っ掛けで細い剣が柱に突き刺さる。

レイピア……突き刺さった剣を見てゴリウスが苦い顔をした。顔を戻す間にインダラがゴリウスの右手を掴んでいた。

「お久し振りです、カルラ様。今日は一段と艶やかですが私では相手不足でしよう。私の主が待つておられますよ。経典をお持ちになりバサラ様に御くだりなさい。悪いようにはなりませんよ、カルラ様。お転婆も大概になさいませ」

顔を近づけたインダラに唾をとばして注意を逸らしてゴリウスがレイピアに止められたレースを引きちぎつて片手で印を結ぶ。風と火の範字を宙に書いて叫ぶ。『爆！』

咄嗟に風の盾を出して爆風を防いだインダラは柱からレイピアを引き抜いて壁を蹴つてジャンプする。ゴリウスの背後に飛び降りるとゴリウスの足を払いつ伏せにさせた。その背中に自分の片膝をついて押さえ、レイピアを顔のすぐ横に突き立てる。

「観念なさい、あなたは体術も剣術も私に敵いません

「つ……解かつたから足をどける」

「本当にお解かり頂けましたか、なかなかカルラ様は油断出来ませんからね。経典の在りかをお教え下さい。そうしたら信用いたしましょう」

レイピアを引き抜いてゴリウスの髪を結っているリボンをぷつりと切る。インダラは、それで両手を後ろ手に素早く縛る。

「言つておきますが呪文だけの呪は私には効きませんよ、反呪の札を身につけておりますから」

「の細身の男のどこにそんな力があるのか、立ち上がると片手でゴリウスを立たせる。

「絶対はモンドの廟だ」

ユリウスが答える。

「では取りに参りましょ、竜門を開けて下さー」

「これでは印が結べない」

弱弱しくユリウスが言つた。

「だめですよ、その手にはのりません」

インダラが笑う。

「何を結べばいいのか言つてくだされば私がやります」
ちつと大きく舌打ちしてユリウスが早口で言つた。

「内獅子印、不動根本印、宝瓶印だ」

次々と印を結んでインダラがユリウスを見る。

「アルベルト！ ルーファス！ サイロス！ 解せよー！」

ユリウスの声に暗闇が現れた。

「お先にどうぞ、カルラ様」

促すインダラを一睨みしてユリウスは竜門に飛び込むや否や呪を唱えた。『閉じよ！』ユリウスと共に闇が姿を消す。

驚いているインダラの直ぐ後ろにもう一度竜門が開いてユリウスが飛び出していくと振り返ったインダラに体当たりする。その先に現れるもう一つの穴。

「何？」

インダラが不意をくらつて竜門に落ちたのを確認してユリウスが呪を唱える。

「アルベルト！ ルーファス！ サイロス！ 天地四方を閉じよー！」

レーン文字を宙に描いて床にくたりと座りこんだ。

「捕まえたか、竜道の主の私が腕を封じられたくらいで竜門を一人で使えぬと思つてくれたのが幸いしたな」

ユリウスがにたりと笑顔を浮かべたところに風きり音のような声が聞こえた。

「主よ、残念ですが穴を空けられて逃げました」

「解かつた、アルベルトもう良い。それより解してサイトスから戻

るクロードが通れるようにしてくれ。それと私の手を自由にしてくれ

「御意」

黒い影がコリウスを包むと手首に巻かれたりボンがはらりと落ちた。

「やつと帰れたよ」

大きな声とともにクロードが竜門から顔を出した。

「何か急に竜道が田の前で閉じちゃつてさあ、壁が出来たようになつたからびっくりしちゃつたよ。その壁にレーン文字を描きつけて爆したら光が飛んで壁に穴が空いてやつと出られると思つてたら壁が急に消えてさ。あれって何だつたんだね?……ってどうかした、

コリウス

「おまえか

コリウスが額に手をやつて溜息をついた。

「それに、どうしたの、その格好」

コリウスの夜着の袖口から肘まで美しいレースが無残に引きちぎられて焼け焦げまでそこここに出来ているし、髪は結つてないし。

「……インダラが襲つてきたんだ」

コリウスがぼそりと言つた。

じゃあここに戦いがあつたのか、インダラはかなりの体術の使い手だつたけど。でもここにいなつてことは。

「やつつけたの?」

クロードの言葉にコリウスの田は冷たい。

「捕らえたと思ったがおまえが逃がしてやつたんだよ、おまえのお得意の術でさ」

「と、こいつことは。じゃあ、竜道が閉じてたのつて

「インダラを閉じ込めてた」

あー、そうだったのか。

「あのさ、夜着の事は俺がアリストローザに謝るからね」

「殊勝なことを言つていいけどそんな事ぐらいで割が合つわけがな

いだろう、クロード』

「わー！ 御免なさい』

クロードは言いながらコリウスの攻撃に備えてレーン文字の『Hイワズ（防御）』を宙に描く。

「そんな小細工をするところが頭にくるんだつ」

コリウスが風と力の範字を描いて宝瓶印を結んで押すようにする
と稻妻が床近くを走り、クロードに向かう。稻妻が『エイワズ』
を引き裂いて轟音と共に四方へ飛ぶ。あまりの音に外からデイビ
ツトの声がする。

「コリウス様、何の音です？」

そこで、二人ははっと部屋を見回した。

「クロード、片付けUN」

「俺？」

片付けろつてダマスク織りのカーペットは四方向にひどい焼
け焦げが出来ているし、そこら中めちゃくちゃじゃないか。

「もう、自分の感情にまかせて術だすのやめてよね」

クロードはぶつつき言いながら取りあえずテーブルや椅子を起こ
して元の位置に戻す。暖炉から引き抜いた炭状になつている薪を
使って魔方陣を描いていく。その中にレーン文字で『ダガス』（
打開）を中心とした復活呪文を書き入れる。

「これでどうかな」

クロードは額の汗を拭いながらクロードの後ろで腕を組んでいる
コリウスに声をかけた。クロードは魔法陣があまり得意ではない
ので練習も他に比べて急りがちだったせいで声も小さい。

ふーんと言いながらコリウスは少し眺めて所々描き加える。

「……まあやってみろ」

何か含みのある言い方で言われたがこれ以上考えられないでの、
クロードは魔方陣の真ん中で印を組んで自分の書いたレーン文字を
左から読んでいく。空間がぐにゅりと歪んでゆらゆらと陽炎のよ
うに揺らいだ後。色という色が混ざつていいくような感覚に眩暈を

覚える。

クロードはまきゅうと田を閉じて耐えていた……。

「終わつたぞ」

「コリウスの声がする。」

「成功した?」

クロードの問いにコリウスが答える。

「まあまあだな、自分で見てみろ」

言われて恐る恐る薄目を開けたクロードは、部屋を見てコリウスのまあまあの意味が解かった。

「全部新品にしちゃつたのか」

何だかぴかぴかと安っぽく光る室内に内心焦るがクロードにはどうしようもない。 アンティークの家具は作りたての軽い色合いに変わっている。

「土台の魔方陣 자체がすでに違つていただけどまだ教えてなかつたし、これだけでも上等かな」

コリウスが珍しく褒めてくれたのはいいがこれを直してくれる気もないらしいのに焦りが募る。 そこへラドビアスが入つて來た。

「外でティビットが心配しておりましたが、どうなさいました……あ、これは」

ラドビアスは時と場合によつては使用人としては思えない事をする。 例えば今のように何のおとないも無しに許可なく主人の部屋に入つて來たり。 入つてきてからラドビアスは挨拶をした。

「ただ今もどりました。 で、これはどうなされたのです、コリウス様」

一渡り部屋を見回して最後に自分の主へ目を留める。

「また、何かやらかしたんですか」

「なんで私に聞くんだ。 クロードがやつたんだ」

コリウスがさも心外という顔を見せて言つた。

僕の想い

「クロード様、ですか」「クロードはラドビアスに背を向けていたが背中越しにラドビアスの視線を感じられて何かつまく言わなくちゃと思つが何も浮かんでこない。」

「部屋を綺麗にしようと思つてさ」

自分でもこりや嘘だと思つよつた事しか口に出来なこじの正直さを呪つた。

「綺麗は綺麗ですが後で問題になりますよ、私が手直しして宜しいですか」

クロードの嘘っぱちに何の突つ込みを入れるで無くラドビアスがクロードに問う。

「お願いするよ、助かった」

クロードはほっと胸を撫で下ろす。

「それより服をお持ちしましたよ、早速お着替え下さい。ゴリウス様もその小汚い夜着をお脱ぎ下さい」

話が他へずれてやれやれとクロードは服を着替え始め、その横でラドビアスはゴリウスの着替えを手伝つていたがゴリウスの手首に皿を止めた。

「それはどうされたなんです」

うつすらと残る手首の赤い紐の跡。

これは……と、ゴリウスがうつと言葉につまる。

「これは、何ですか」

ラドビアスが畳み掛けるよつて聞く。

「これは クロードがしたんだ」

苦し紛れにクロードの名前を出してゴリウスがそっぽを向く。

「クロード様ですか」

片眉を上げてラドビアスがクロードを見る。

「何で俺なんだよ……くそつ。

「『ごめん、俺です。俺がやりました』

クロードはやけくそ氣味に大声を出すと、何でとか、どうやってとかといつラドビアスの追求が始まる前に部屋を飛び出して行く。ラドビアスは脱ぎ散らかつた一人分の服を片付けながらクロードが出て行つた方を見やつた後、つと屈んでユリウスの方へ顔を向けてた。

「インダラが来たのですね」

ユリウスの目の前に一本の長い綿糸のような黒髪を突きつける。

「髪を結ってくれ、ラドビアス」

片手でラドビアスの手を払いのけてユリウスが今着替えたばかりの深紫の服と同色のリボンを突き出す。

「こ」の後、ドミニクに挨拶に行つてトランシュのサロンに顔を出す

「はい」

ユリウスの髪にブラシをかけて片側に寄せたリボンで結び、髪を前に垂らす様にまとめながらラドビアスは頷く。

「それと、クロードを呼んでくれ」

クロードは部屋に戻るとガリオールから渡された呪符の分厚い束を懐から取り出して、ユリウスから預かっている品々と一緒に寝台の下に隠した。それにしても今日は朝から左胸の辺りがじくじく傷んで仕方がない。

「竜印が完成するときはもつと痛いのかなあ」

そして竜印が完成したらクライブに仕えて何十年かの後。魔道師庁に組み込まれてクライブと名を変え、ユリウスともラドビアスとも別れているのだろう。

その考えはとても寂しくて自分で考えておきながら急いで頭を振つた。俺らしくもない。

その時はその時だ。

「クロード様、主が呼んでおります」

外からラドビアスの声が聞こえた。クロードが部屋に入るとコ

リウスが手招きする。

「私が主城に行っている間にこの州城の城壁に沿つてガリオールから受け取った呪符を貼つて来い。場所はこの地図を見な」

「解かつた」

返事をして踵を返して部屋を出ようとするクロードの腕をゴリウスがやや乱暴に掴んで引き止めた。

「何?」

「クロード、おまえを信用しているからな」

「どうこうこと?」

「もう、いい、行け」

怒ったように言つゴリウスにわけも解からず部屋を出ると、ラドビアスが入れ違いに入つていく。

「主城においてになりますか」

「……」

無言のまま先を行くゴリウスにラドビアスが声をかける。

「何かお気に障ることがありましたか」

「……」

「カルラ様」

わざと主の嫌う昔の名前を出すが振り向きもせず、答えないゴリウスにラドビアスが溜息をついてゴリウスの右手を掴んで振り向かせた。

「何をするんだ、手を離せ」

「……主が私を避けていらっしゃるからです」

ラドビアスがひたとゴリウスを見る。

「そう思つのは自分に後ろ暗いところがあるからじゃないのか」

ゴリウスはラドビアスをじろりと見ながら自分を掴まえている彼の手をゆっくり剥がす。

「私は、主を、あなたを失いたくないだけです」

ラドビアスが再度離された手を掴んで強く引いて自分の方へ倒れこむゴリウスを抱き抱える。

「あなたを失いたくない」

絞りだすように言いながら背中に回る手。

「やめろ！ ラドビアス、離せ！」

もがくゴリウスをさらにきつく抱きしめて田はゴリウスの薄い唇へと移るが……。ラドビアスは、ゴリウスの顔に怯えの色を見つけてはつと腕を緩めた。

「お許しを」

言葉が終わる前に拳が頬に飛ぶ。

「許せるわけないだろう、大ばか野郎！」

ゴリウスがもう一度拳を握る。

「私に一度とこんな事をしてみろ、殺すぞ！」

「それは……確約出来かねます。ベオーネにいらした頃からお慕い申し上げていたのですから」

「ベオーネのことなど言つな！ 思い出したくも無い！」

ゴリウスが目を閉じて嫌な物を吐き出すように言った。

忘れぬ苦い記憶

幼い頃、母親が顔と言わず体と言わず痣だらけになつている」と
があり、カルラは子供心に犯人を見つけてやるとある夜半過ぎ寝室
を抜け出すと主殿の廊下をあても無く歩いていたが、細い母親の叫
び声を耳にした。

「あれは母様」

声のした部屋に飛び込もうとしたカルラは十歳違いの兄バサラに
軽々と抱きとめられた。

「止める、カルラ」

「兄様、誰か、母様に酷いことをしているに違いないよ、助けなき
や！ 母様を殴る奴をぶっ殺してやる！」

おのれの腕の中で暴れる弟を落ち着かせようと意識してバサラは
声を落とす。

「静かに、おまえに敵う相手じゃない」

「兄様、この中に居るのが誰か知っているの？」

バサラがカルラの頭を優しく撫でながら静かに言つ。

「クビラ兄様だよ」

「は……？」

力が抜けた床に座り込んだカルラの背中をバサラが優しくさする。
「アニラ、いや母様を助けたいなら強くなるしかない。このベオー
クでは強い者が弱い者を支配できる習いだ」

バサラが淡々と諭すように言つのにカルラが素直に頷く。 カル
ラにとつてバサラは特別なのだ。

「強くなつて母様を泣かす奴を皆ぶっ殺してやる。クビラもだつ！」
そう言つて拳を握り締めるカルラをバサラは抱きかかえたまま立
ち上がつた。

「手伝つてやるよ、そしておまえは私が守つてやるよ。部屋まで送
つて行つてやるつ、もう、寝る時間だよカルラ」

「うん」「

カルラは急に眠気を覚えてバサラにしがみついた。兄とは言つても他の兄弟たちは実際は兄では無い。皆、カルラより一百歳以上歳が上でとても兄弟の情などを持てる対象では無かつた。日常的にもまだ幼いカルラは兄たちのいる主殿から離れた宮に住んで居る為、兄たちとめったに会うことも無い。それに比べてバサラは十歳位しか離れておらず、ついこの間まで一緒に同宮に部屋をおいていたため、カルラにとつて頼りがいのある大好きな兄だ。そのため、暇さえあれば後ろについて歩いていたし、バサラも何くれと自分の修業の合間に弟の面倒をみていた。

カルラが十一歳のある日、カルラは夜遅くまで術の練習をしていた。昼食時一緒に食事をしたバサラに出されていた課題に取り組んでいたのだ。

「おまえには少し難しいかな」

バサラの笑い顔にムキになつて夜更かしをしてしまつたがやつと成功したのだ。

「出来た、兄さま起きていらっしゃるかなあ。すぐ見てもういたいのだけど」

こんな遅くに主殿まで行くのはどうかと迷つたが勉強熱心な兄はまだ起きているだろう。

前にも雷が怖くて兄の寝所へ潜り込んだ時も寝台の中で分厚い本を読んでいたつけ。

「仕方ないなカルラ、今日はここで寝なさい」

あのときも、そう優しく言つてくれた。その時のことと思い出し足早に辺りを気にしながらバサラの寝所に向かう。

「兄様、今日出された忘却術の魔方陣を見て下さい」

闇の中を走つて来たため、言つが早いか扉を開けて兄の顔を見ようとしたバサラの寝所に入つて来たカルラの足が止まる。バサラの寝

台にいたのはバサラだけでは無かつた。

「カルラか、ああ忘却術が出来たのかい、見てあげたいけど今、ちよつと取り込み中なんだ。明日見てあげるよ、もう遅いからお休み」固まっているカルラに寝台の中からバサラがいつものように話しかける。が、しかし何事もないようすに平然としているバサラの下には女がいたのだ。良く見知っている、カルラが母と呼ぶ女。そして勿論バサラの母もある。

がくがくと震える足を叱咤しながらカルラは部屋を出る。その後は自分の部屋にどうやって帰ったのか覚えていない。

ただ一つはつきりしたのは自分には母も兄も要らないということだ。自分は一人きりで生きていくのだ。頼るものなど無くていい。その日以来、母親や兄達を避け独学を続けた。

十五歳の時に母アーラが死んだことがカルラは葬儀にも出なかつた。しかし、アーラが死んだことがカルラにとって大きく関わつてることがこのときはまだ解かつていなかつた。

それから一年後、気が遠くなるほど膨大な量の書架の林の中。巻物を捜していたカルラが伸ばした手の先の巻物をすらりとした手が背後から先に取り上げた。

「そら、これだろう欲しいのは？」

少しハスキーな聞き覚えのある声に振り返ると、自分より頭一つ大きい自分によく似た男が巻物を手に立つていた。

「バサラ」

「兄様とはもう言つてはくれないのか、残念だな」

バサラは薄く笑つて唇を片側吊り上げた。

「私には兄などいない。ここで兄弟などというのは言葉遊びだ。何の意味も無い。おまえが教えてくれたんだぞ」

憎しみを込めて睨むと、奪うように巻物を取りうとしたが反対に腕を取られる。

「久しぶりの対面にそれはないだろ、カルラ。まあそうだな、我々にとつて親兄弟なんて形だけの呼び名だ。アーラが死んでビカラ

兄様は次をおまえに正式に決めたようだけど、先に渡しちゃうのは惜しくなつたな」

バサラが言いながらカルラを書棚に押し付ける。

「何を言つているのか解からぬ、どけバサラ
バサラがカルラの腕を掴んでいないほうの手をカルラの顔の横に突く。

「私が守つてやるつて言つたのを覚えているか、カルラ

「覚えてなんかいるものか、離せ」

「守つてやるから私のものになれ、カルラ。他の奴なんかに渡さな

い」
囁くように言つてからバサラが大声で扉の方へ命を出す。

「インダラ、サンテラ、蔵書室を閉めろ！ 外を見張つて誰も入れるなよ」

「畏まりました」

二人の男が異口同音に答える。

「サンテラ、早く扉を閉めろ」

黒髪の男が室から出ようとしない同僚にきつて言つ。
「解かつていい」

もう一人の男が振り切るように蔵書室の大扉を閉めた。

「私のものにするよ、カルラ」

酷薄な笑みをバサラは浮かべた。

三日後、長兄ビカラの寝所に召しだされたカルラは、ベオークを出奔した。

アリストローザの裏の顔

遠い過去を思い出し、コリウスは歯噛みする。

「許さないぞ、ラドビアス。ベオークのことも私を女扱いするのも絶対に。私の僕でいたいのならさつきみたいに触れるな。いいな、次は殺すぞ」

コリウスの平手が飛んでラドビアスの口が切れて血が流れた。何も言わず頭を下げるラドビアスに怒りが募るがどうしようも無く、コリウスは、ただ苛々と急ぎ足で主城に向かつ。そこに主城の入り口でこちらに向かつて歩いて来る魔道師を見て、コリウスが立ち止まつた。

「お、お迎えにあがひと思つておりましたのに申し訳ありません。トラシュ様も」自分がお迎えにうかがうと言つておられたのですが、急なご用事ができまして」

しじろもじろの魔道師にコリウスはにこりと笑つて手を横に振る。「いえいえ、お迎えが来る前に来てしまつた私が悪いのですよ。気にしないで下さい。あなたが誰か聞いてよろしいですか」

「最初に名乗ることさえ忘れていたとは、申し訳ありません」

四十台前半に見える少し薄くなつた頭を撫でながら魔道師がしきりに恐縮する。

「あ、あたしは州宰のラジムの留守を預かるダニアンと申します」「では、ダニアン。デミニク様のところへ案内を頼みます」

通された貴賓室は美しい大理石で床を敷き詰め、上の階をぶち抜いた高い天井のせいで益々広く感じられる。壁には一面、長大なタペストリーがいくつも掛けられている。高い位置にある窓にはステンドグラスがはめ込められていて、午後のきつい陽の光がステンドグラスを通して床に複雑な模様を投げていた。

「た、ただいまデミニク様は執務中でございまして、少しお待ちをお願いします」

ダニアンと名乗る魔道師はどもりながら、やつとわづとあたふたと頭を垂れて下がつていった。

馬鹿だなドミニク。大人しくしていればこのまま裕福な州候として安穩と暮らしていられたのに。インダラにいように操られていることも解からぬとは。しかし私を裏切るからにはその罪はその血で購つてもらうぞ。

コリウスは唇の端をついつと上げる。

それからいくらも経たない間に、何人かの足音が部屋の前で止まる。

「ドミニク様がお見えです」

さきほど魔道師の声の後に恰幅のよい男が満面の笑みを浮かべて入つて来た。

「ボルチモア州候のジークフリート・ステファン・ヴァン・ドミニクです。コリウス殿、途中暴徒に襲われたとか。我が州内で大変な目にあわせてしまいお詫びの言葉もない」

この男が腹の中にどんな暗い企みをいだいているのか知らなかつたらうつかりと信用しそうな穏やかな善人に見えるが。

「コリウス・ヴァン・ハーロートです。今回のお招き大変有難うございます。ご挨拶が遅れて申し訳ありません」

ドミニクに負けないくらいの笑顔でコリウスが応じる。

「弟君はどうだらに」

「申し訳ありません、何せ城を離れたことが無かつたのですから、はしゃぎすぎて少し体調を崩しております。それで今日は部屋で休ませております」

「そうですか、何がご不自由なことがあれば遠慮なく言つて下さい。自分の家のように思つて欲しいのですよ」

「有難うござります」

コリウスはにこりと応じた。

一方寝ているはずのクロードは城壁に沿つて結界術のアンカーに

なる呪符を貼つていた。

くつそーつ、まだこんなにあるよ、『貼つて来い』で済むやつはいいよな。愚痴りながらもユリウスから渡された地図を見ながら指定の場所に札を貼つていく。

ばれないように隠蔽魔法を使って周囲に紛れ込ませる。一枚一枚そんな事をしていたので全部貼り終わる頃にはすっかり陽が西に傾きはじめていた。

正門に続く跳ね橋が下ろされて、四頭立ての馬車が何台も入つていくのが見えた。馬を四頭もつけて走らせる馬車を持てるとはかなりの豪商か貴族だけだろ？ トランシューはサロンと称してどんな秘密の会合をしているのか。

「クロード、あなたそこで何をしているの？」

女の声にぎょっとして見ると、何人かの騎乗した州城へ戻ろうとしている者たちの中に男物を身につけたアリストローザを見つける。

「アリストローザ、君こそ何でその格好？」

反対に尋ね返されてアリストローザは言葉に詰まる。

「あ、ちょっと散歩に」

「へえ、君つて散歩に出る時、男装して帯刀するのか」

田ざとく腰の剣を見つけられてうるうると田を彷徨わanderingわせる。

「それは……物騒だから」

「だろうね、ブーツに血がついている。何かあったのかい？」

小さく飛び散った血痕を指摘されてアリストローザは言葉に詰まる。

「こいつ、始末しましょう」

男の一人が背負った蛮刀をすらりと抜いて馬の腹を蹴つて走りこんでくる。クロードは小さく後ろ手に印を組んで馬の脚に呪を飛ばした。『縛!』クロードは言つてから大急ぎで逃げるまねをする。

「わー助けてアリストローザ、何とか言つてよ」

「止めて、トーマス」

アリストローザが叫ぶと同時に脚を縛られた馬が、体勢を崩してト

トーマスがどうつと宙に体を投げ出された。その拍子に手から離された蛮刀がクロードに向かってくる。

クロードは、大げさにわあわあ言いながら頭を大きく傾げて刀を避けて馬の脚にかけた呪を解く。

『解!』

「大丈夫、トーマス?」

駆け寄るアリストローザに男は何でもないと手を振った。

「ああ、肩から落ちたが骨は大丈夫そうだ。変だな、俺の馬が急におかしくなるなんて」

肩を押さえるトーマスに剣を逆手に持つてクロードが近づく。

「はいこれ

睨むトーマスに慌ててアリストローザがとりなす。

「トーマス、この人私が言つていたモンド州の第三公子よ。クロードって言うの、今お兄様が第二公子と会つてゐるわ

「そうかよ、おまえ命拾いしたな」

トーマスは言いながら刀を鞘に収めた。

「まったく、馬が体勢を崩さなかつたらあなた殺されていたわよ」アリストローザがため息交じりに言つ。

「あなたとあなたのお兄様には武術方面はまったく頼れないわね」

「あはは、」めん

「これから州城内に帰るけどクロードはどうするの。来るなら馬に乗せてあげるけど

ひらりとアリストローザが馬に跨る。またが

「じゃあお願ひ、手を貸してもらえるかな」

「こにはへたれてみせる方が得策かとクロードは手を差し出した。

「手が掛かるわね」

アリストローザは呆れた顔を見せたが、実はクロードの世話を焼くのは嫌ではない。手を引いて引っ張り上げると彼は、以外にしないとアリストローザの後ろに跨つた。

クロードは馬に揺られながらアリストローザに話しかける。

「ねえ、彼らは何者で君たちは何をしているんだ?」「知りたい?」

そりやあ洗いやうこそつくり聞きたいけど。

「少し、怖いけどさ」「

「後でクロードの部屋に行つて教えてあげるわ」

アリストローザと分かれて部屋に帰ったクロードの部屋に、半刻も
しないうちにアリストローザがドレスに着替えて一人でやって来た。

「デイビット、女官にお茶の用意をさせて」

クロードが従者を部屋から出して自分の前の椅子をアリストローザ
に勧めて自分も座つた。

「それで何を話してくれるの、アリストローザ」

「前にモンドのお城に行つた時に言つた事覚えてるかしら」

アリストローザの言葉にクロードは少し考えるふりをする。

「ああ、魔道師の横暴うんぬんの話かな」

アリストローザが思い切り真剣な顔でクロードを見つめるのでクロ
ードの心臓が早鐘のようにびくびく速さを増す。その音がアリスト
ローザに聞こえるのではないかとそればかりに気をとられる。

トライシックのサロン

「魔道師の勢いを削ぐ戦いを私達はしているの」

「そんな危険なことして……大丈夫なのか」

クロードの言葉にふつとアリストローザの口元が緩む。

「危険が無いとはいえないけど。今の所各地の廟を襲つたりしてい
るだけだけど。今年の夏至の日は今までに無い好機らしいのよ」

「どうか……結界を張りなおす日だ。

「何で」

取りあえず聞く。

「あのね、詳しくは知らないけどそこら中の大きな廟の廟長や州宰、
魔道師庁の上位の魔道師がそつくりどこかへ行くのよ。おまけに夏
至の日の夜は國外出禁止になるらしいわ。夜陰に乘じてモンドの
廟や国府にも入り込んで、悪辣な魔道師どもを成敗できるってわけ
なのよ」

「勇ましいね、はは……」

「絵空事だと思っているんでしょ?」

反応の薄いクロードにアリストローザが憮然として大声を出す。

「ええつ、いや、そんなこと」

まあ落ち着いてと手を上げたクロードの手をアリストローザが掴ん
で降ろす。

「このレジスタンス活動にはお父様をはじめ各州候の後ろ盾がある
のよ」

アリストローザは鼻息荒く、どうだと腰に手をやつた。

こんなに簡単に活動のことまで喋つていいいのか。 クロ

ードは人の事ながら心配になる。

「そ、それは頼もしいよね、各州候つてうちの父様もはいつてるの
?」

重大な秘密を打ち明けたにしてはまたしても軽く返事を返すアリ

スローザは眉根を寄せた。

まだ、事の重要性も解からない子供のかしら、確か私よりもほど下だつたはずなんだけど。

「あなたのお父上は現王コーラルの兄ですもの、サイトスに近すぎるわ」

「どううね」

俺とコリウスはその子供って事だけど、それはいいのか。

心の内でクロードは突っ込む。

「ライクフィールド候、ケースワース候、ミルフォード候、ガウス伯爵等々たくさんのお味方がいるわ。あなたはどう?」ここまで聞いてやめるなんて言わないでしよう

ここに至つて初めてクロードの意志を確認しようとするアリストローザに、笑い出しそうになるのを堪えてクロードは深刻そうな顔してみせる。

「こんな私に出来る事があるかな」

「そんな事、お父様や兄様が考えてくださるわ、クロード大丈夫私がついているし」

すっかり保護者気分のアリストローザに両手を握られる。

「うん、がんばるよ」

調子よく答える自分にあきれる。

しかし、アリストローザの自分の意に誰もがたやすく応じると思つてゐることの危うさに内心心配になる。今まで自分の意に背かれたことが無かつたのか。彼女は人の外側だけを見て信じてはいけないという事がわかつていない。簡単に仲間に引き入れたと思っているクロードさえ、実はアリストローザの敵側の人間なのだから。ああ、そんな事を訳知り顔で思つてゐる俺は十四歳にしてどんどん腹黒くなつていいくのだとクロードはため息をついた。

きく窓になつてゐるが今日は厚めのカーテンが天井近くから下げられた。

真夏にでもならないとこの海に近い水で周りを囲まれた城は肌寒いのだ。その為、午後とはいえたま日は暮れていないので灯の灯されたこの部屋は薄暗い。それが返つて親しみがわく空間になつてゐるかも知れない。毛足の長い絨毯にそのまま腰を降ろしてゐる者、長椅子に足を投げ出している者様々に覗いでいる。

「眞様に今日、ご紹介するのは私の友人、隣州のモンド州第一公子のコリウス殿です」

トラシュの言葉にコリウスがにっこりと微笑む。

「ゴリウス・ヴァン・ハーモートです、よろしく」

集まつていた者たちが様々に囁きあつてゐるが、コリウスは構わず奥の長椅子に陣取つて早速酒を飲み始めた。ざわざわと他愛もない話が続く中、トラシュがすくと立ち上がり話をする。すると眞、話を止めてその姿を仰ぎ見た。

「眞さん、夏至の日まであといくらもありません。眞様のお力を借りる日がやつてまいります」「

トラシュは余韻を計るようにたっぷりと間を取りながら話を続ける。

「モンド州との州境近くへ密かに集結させております、うちの州兵が途中こちらにおられるモーギヤン卿率いるライクフィールドの州兵と合流してゴート山脈側からモンドの廟に入ります。廟を制圧して後、イーヴァルアイなる老魔道師を捕縛。それにより、このレイモンドールに巢食つてゐる魔道師どもの首根っこを押さえる手筈になつております」

「我らが州境を侵犯しようとしている州の公子など呼んで大丈夫なのか、トラシュ」

モーギヤン卿がトラシュに厳しい目を向ける。

「だからこそ第一公子ですよ、モーギヤン卿。彼には将来モンド州を担つてもうつお手伝いをさせて貰う代わりにこちら側について

もりいます

「そうなのか」

モーギヤン卿がコリウスの方へ顔を向けたため、皆の視線がコリウスに集まる。

「そのように承知しておりますが」

酒を飲むのを一旦やめてそれだけ言つとまた杯に口を付けてぐいと呷つてコリウスは、立つているトラシユを見上げた。

「先程の話ですが、大事なところで穴が空いておりますよ」

「どういう意味だ！」

モーギヤン卿が馬鹿にされたのかと大声を出す。

「我がモンド州のゴートの廟ですが、皆様行けば何とかなると思われているのなら大変だと思いましてね」

コリウスが笑いながら言つのを、トラシユが皆に目配せしてまあと宥める。

「理由を聞かせてくれますか」

「モンドの廟と皆様は一言で言つてらつしゃいますがモンドの廟は昔ならいざ知らず、今ではゴート山脈一帯に広がっているのですよ。山脈のあちこちに大小の廟が建つていてそれを一つ、一つ捜してゆかれるのかと思いまして。そんな事をしている間に私がイーヴァルアイなら竜道使つてスタコラ逃げているかなと思いますが」

コリウスの話に皆ぐうっと黙り込む。

「だからこそ、モンドの廟に詳しいあなたをお呼びしたんですよコリウス。あくまでも廟へは奇襲でなくては意味がありませんからね。そして、お酒はもうダメですよ」

トラシユがコリウスの手から杯を取り上げてテーブルに置く。

「このくらい大丈夫ですよ、トラシユ様」

憮然とした顔を隠そうともせずにコリウスは立ち上がった。

「私の知っていることはお教えします。それでは皆様、お先に失礼します」

言つだけ言つてさつさとサロンを出て行くコリウスをトラシユが

慌てて追いかける。

「皆様すぐに戻りますので」

「コリウス、待って」

「あのモンド州の公子、女のような顔であれであてに出来るのか
自慢の顎鬚を撫でつけながらモーギヤン卿が苦々しく言った。
「でも美しい方ですね、噂以上でしたわ」
横に座つた豊満な体の女が嫣然えんぜんと笑つた。

「コリウス、気分を害したのかい」

先を行くコリウスに走り寄るトラシユにコリウスは立ち止まって振り返る。

「あんな六だらけの計画に私を引っ張り込むつもりだったのですか、トラシユ」

「それは」

コリウスにじっと見つめられてトラシユは僅かに目を背けた。

「父上や兄上を裏切つて、成功するわけのない反乱ごうらんこに加わるほど私は世間知らずではありませんよ。いくら上位の魔道師がいくつても州境に兵が集められている事くらい廟は把握している筈です。それとも廟に対して、または、父上に対して何か他に有効な策があると言うのですか」

「……それは……」

「私には話せない事がまだあるようですね、トラシユ様。廟の様子については思いつく限り詳しく描いたものをお届けします。それで失礼します」

素早く踵を返して立ち去りとするコリウスにトラシユが追いかがるように言つ。

「コリウス、どうかわたしの話を」

「ラドビアス、いるか」

トラシユの言葉を断ち切つてコリウスが自分の従者の名を呼ぶ。

「はい」「元」

柱の影から姿を現したラドビアスがトラシュに頭を下げた。

「では明日またお目にかかります」

トラシュが差し出した手を仕方無く握ると、その手にトラシュが唇を寄せた。コリウスはすうっと手を引いた。

身を翻して帰るコリウスの後姿をトラシュは見送つて、出したままの自分の手を見ながら呟く。

「つれないな」

そして、にやりと笑つた。彼らしくない笑み。しかしそれは

直ぐに消えていつもの好青年の顔に戻つた。

レジスタンスのアジト

クロードは隣のコリウスの部屋の扉が音を立てたのを聞いてコリウスが返ってきたのを知った。

「アリストローザ、兄様が帰つて来たみたいなんだけど仲間を紹介してもらつの、兄様も一緒にいいでしょ」

「そうね」

立ち上がりかけたアリストローザを制してクロードが席を立つ。
「呼んで来るよ、待つてて」

「コリウス、帰つて来たんでしょう、入つていいかな」

「どうぞ、クロード様」

ラドビアスが応じて扉を開けた。部屋に入るとコリウスは羊皮紙に向かつて何やら描きこんでいる。

「それは何？」

「モンドの廟の大まかな地図だ」

「何で？」

「トラシユに渡す」

顔を上げずに羽ペンを動かすコリウスの右手を、クロードは思わず押さえて止める。

「そんな事したらこっちが不利になるじゃないか」

ペン先からインクが漏れて黒いシミが広がるのを側にあつた布に急いで吸い取らせて、コリウスが顔を上げた。

「何も詳細なものを渡すつもりは無い」

「……え」

「それ、らしいものだよ。邪魔するなクロード」

そういうことが。

「ねえ、アリストローザがレジスタンスの連中に引き合わせるって言つてるんだけど。コリウスも来てよ」

クロードの言葉にユリウスは、面倒臭そうにペンをインク壺に突

つ込んで羊皮紙をラドビアスにぽんと渡す。

「仕舞つておいてくれ」

そう言つと、渋い顔のままクロードの部屋の扉を開ける。

「アリストローザ様、先程クロードからあなたもトランシュー様と同じくレジスタンス活動を主導しておられると伺いました。さすがトランシュー様の妹君、凛々しくていらつしやる」

直前までの渋面はどこやら、アリストローザにお世辞を言いながらにこにこしているゴリウスの背中にクロードは小さく舌を出した。「主導しているなんて大げさだわ。でもトランシュー兄様のお手伝いをしてているのは本当なの。お一人が力を貸して下さるなら嬉しいんだけど。アジトへ案内しますわ」

先に立つて出て行くアリストローザの後ろからクロードとゴリウスも続く。ゴリウスが付いて行こうとする、デイビットとラドビアスに冷たく言つ。

「ついてこなくていい」

「ですが」

デイビットが食い下がるが。

「聞こえなかつたか」

ゴリウスの有無を言わせぬきつい調子にデイビットも黙つた。

小富を出ると、主城に行くのとは反対方向へ向かう。そのうち前方に古い教会の尖塔のような物が見えてきた。

「あれよ」

アリストローザが指差すそれは、近づくにつれ無残な姿をさらしていく。崩れかかった建物の中はそれこそ瓦礫の山。ここに人がいるなどとはとても思えない。その瓦礫の山を半分以上迂回した先の床に金属で出来た四角い蓋があつた。アリストローザは慣れた手付きで取つ手を引き起こすとそれを掴んで立ち上がるよう持ち上げた。

そこに地下に続く階段が現れ、暗く斜度のきつい階段をやつと下りて行く。すると降りきつた所に分厚いドアが立ちはだかってい

た。

「どん、どん、……どん。

「一回続けて少し間をあけてもつ一回叩くの」

アリスローザがドアを叩くとすぐに低い男の声が聞こえた。

「モンドの蝶は」

「蜘蛛に捕らわる」

アリスローザの答えの後に内側から門をはずす音がして、軋む音を立てながらドアが開いて男が顔を出した。

「私よ、モンド州の公子を一人連れてきたの」

アリスローザに入れと、それだけ言つて男は姿を引つめた。階段と同じくらい薄暗い足場の悪い通路を抜けると急に開けた部屋に出る。そこには大きな机とベンチ式の椅子が置かれていて、その椅子に五、六人の男たちが座つて談笑していた。だが、アリスローザの連れてきた新顔の一人に気づくと注目して黙り込んだ。「紹介するわ、モンド州の公子のユリウス様とクロード。クロードにはさつき皆会つてていると思うけど」

なんで俺は呼び捨てなんだよ、アリスローザ。 クロードはこつそりつぶやく。

「そして右からヘンリー、クリストファー、ステファン、マーク、ウイリアム、そしてトーマスよ」

アリスローザの紹介の後に男達から不満の声が上がる。

「おいおい、モンド州つていえば今の国王の兄が州公をやつているところだろう。大丈夫なのか」

ヘンリーと呼ばれた男が胡乱そうに言つと他の男たちも大きく頷く。

「そんなんペラペラした服を着たお姫様みたいなのと可愛い坊ちゃん一人に何が出来るというんだ」

クリストファーがおどけたように言つ。

「剣をふるのは確かに出来ないし、するつもりも無いが。わたしの立場と資金はこの活動に有益だと思うが」

「ユリウスが一同を見回して囁く。

「ちえつ」

トーマスは面白くなさそうに椅子から立ち上ると壁にもたれて腕を組んだ。

「まあこここの場所も武器も何もかもあんたらが提供してくれているんだから好きにすりやあいい」

「次の襲撃の場所だが……」

机に地図を広げてヘンリーがペンで何箇所か印を付ける。そこにいる人数分印があるということはここにいるのは各グループのリーダー格の者らしい。そう、クロードは見当を付ける。ヘンリーが話出すが、遮るよつに地図の上にトーマスの大きな手がどかと置かれる。

「今日はその話は無しだ」

そう言つてユリウスの方へ顎をしゃくつてみせると、他の男たちもはたと黙り込んだ。じろりと見るトーマスにユリウスも負けず見返して、暫くの間二人の睨みあいが続いたが先に視線をはずしたのはトーマスだった。気まずい空気が流れる。

「その刀、変わってるよね、大陸で使われている物みたいだけど」張り詰めた空気を破つてクロードがトーマスの背負っている刀を指差して尋ねた。

「シャムシール」

ユリウスの声。

「違うな」

と、トーマスが応じる。

「よく似ているがタルワールだ」

ぼそりと言つて背中から抜いた剣をクロードの鼻先に突きつけた。

「この剣は片刃だよね、突くのには向いていない」

抜き身の刀の背をついと撫でて、クロードはトーマスに笑いかけた。

「それに良く似た剣を使う奴を私は知っているがおまえ、どこでそ

の剣を手に入れたのだ

ユリウスが探るように目を細めてトーマスを見たが、当の本人は知らん振りを決め込んで壁にもたれている。

「シャムシール使いがレイモンドールにいるとはね。シャムシールは大陸の南でつかわれている湾曲した柄と刀が特徴だ。そいつのは柄が長い。振り下ろした時にてこの力が加わってより強力な力で切ることが出来るようになつてているのだろうぞ」

ユリウスの解説にウイリアムがへえーと感嘆の声をあげた。

「俺も剣術習いたいんだよね」

クロードが呟く。

一応モンドの城でも基礎は習つていて結構好きでもあつたが今までう少ししつこんで極めたいとは思つていなかつた。ところが最近身の危険を感じることが多くなり、自分の命を他人に託すばかりなのが厭わしい。つまりは強くなりたいのだ。魔術においてはユリウスでいいが事、体術、剣術においてはからつきし頼りにならないことは解かつている。だからラディアスに頼むつもりでいたのだ。

「トーマス、私に剣を教えてくれませんか。ここにいる間の、空いている時でいいのだけど」

「俺はいつもここにいるわけじゃないぜ」

「それはいいわ、トーマスは剣術の達人だもの。一日はいるでしょう、トーマス」

やつと場が和んだとほつとしたアリストローザが口を出した。

「はっ、面倒なこつた！」

トーマスが地面に向かつて言つ。

「嫌だつて言わないつことはイエスよね」

アリストローザがクロードに笑いかけてきてクロードもつられて笑うが心からは笑えない。それは、さつきクロードに近づいたユリウスが耳元に短く言葉を残し離れたからだ。

「トーマスを探れクロード」

え？ と思つたときにはコリウスはクロードの側から離れて
いてどういう理由かも解からなかつた。

「クロードがやる気になつてくれて私も嬉しいわ。早く私の相手が
できるくらいになつてね

「あ、そうだね」

アリストローザに曖昧に返しながらクロードはトーマスを見やつた
が、トーマスはこちらを見ようともしなかつた。

「では今日のところは私達はお邪魔のようすで失礼します
ゴリウスがすたすたと帰る後姿にクロードも追いつこうと走る。
「ユリウス、俺剣うまくなるからね」

「何だ、急に

「だからさ、おれの事頼りにしてつて事だよ
ゴリウスの背中が震えている。

経典の在り処

「笑つてんの？」

「いや、頼りにしているよクロード、勿論」

ユリウスを追い越して顔を確かめるとユリウスは笑っていたが、それはいつもの人をばかにしたような笑みではない。もつと暖かなものでクロードはびっくりしてその顔に見入ってしまった。

「私は独学で苦労したからな。このごたごたが終わったらちゃんとした剣術の先生をつけてやるよ。期待しているからな、クロード」

そう言つてまたほっこりと笑つた。

ユリウスが、こんな優しい笑い顔をする事があるなんて今まで気付かなかつた。

「魔術は誰かに習つっていたんでしょう？」

「その後は？」

「経典を自分で探して勉強した。だから私はラドビアスやインダラ達とは術が違うのだ。いろんな術を混じつて覚えたからな」

それでラドビアスと違うのか。今迄ラドビアスの方が異端だと思つてきたが、レイモンドールの魔術の祖はユリウスなのだからガリオールやルークが同じなのは当たり前なのだ。正当な魔術といつていいいのか、それはラドビアスの術の方だったのか。

「私の術は禁術を用いることが多い。結界術もその一つだ。普通は結界を張る場所に何箇所か呪符を置いたり貼つたりして術をかけるが、私のははるかに呪力が強い」

「あー今日の呪符の事？」

尋ねるクロードにユリウスが頷く。

「そうだ、あれだけでも一応結界の呪文を唱えれば術は発動するが

……」

言ひつか言つまいが、少し迷つていたが言葉を繋げる。

「血を使う。それも大量の」

「血」

おうむ返しに聞くクロードにコリウスはうなずく。

「私はビカラから秘伝の経典を盗んだからな」

「コリウスの口が半円を描くようにまことに上上がる。いつもの笑顔。

「禁術には大量の血が必要だ。だからわたしの結界術もまたしかり。大勢の贊^{にえ}が必要になる。おまえも連れて行くつもりだからそのうち解かる」

酷薄な顔で笑うコリウスを見て禁術について解かりたいんだか解かりたくないんだか自分でも判然としなかつた。ただ、その時に使われる贊つてどういう経緯で得られたものなのかが酷く気になるのだが。

「クロード、トーマスとか言つ男、どうも引っかかる」

「うん、探つてみるよ」

話しながら歩いていたのでもう小富の前に来ていたのだ。ラドビアスが城の前で立っている。

「お帰りなさいませ」

「ただいまラドビアス」

挨拶を返すクロードの横をコリウスが知らん顔で通り過ぎて行く。

「どうしたのラドビアス、コリウスと何かあつた？」

「いえ、何も、といういつもの返事を期待していたクロードは、はいといふラドビアスの返事にびっくりして聞き返す。

「どうこうこと？」

「先程私の気持ちを口走りまして、主の怒りを買いました」

「早く來い、クロード。やることが山のようにあるー」

何を言つたのか大いに気になつたが、前を行くコリウスの冷たい声に断念する。一体どこで何を怒り出すやらクロードには今一解からない。いい加減結構な歳なんだからまるくなることを覚えて欲しいと心の中で呟く。

しかしこれを口に出しては、ばかを見ることがらしさは経験値を上げたクロードだった。帰ると早速書きかけの先程の羊皮紙に廟の名前と場所を書き込んでいたコリウスに長椅子に足を投げ出しているクロードが話しかける。

「きっとインダラは経典を廟に隠してると思つてゐよね」

はつと顔を上げたコリウスに、クロードが得意げに続ける。

「でも良く考えれば経典のありかなんて簡単に解かるよね」

「クロード！」

いきなり大声で怒鳴られてその後の言葉をじくじくとクロードは飲み込んだ。コリウスの形相かたちにやつちやつたかと悟る。あつという間に口を塞がれ、床に転がされてクロードは絶対体術も習つてやると決意する。

「それ以上一言でも言ひと忘却術をかけておまえの頭の中を真っ白にしてやる」

ぐいっと掴まれた喉が苦しくヒューヒュー言つてゐるのに容赦なく力を入れられて気が遠くなる。

「お止めください、クロード様が死んでおしまいになりますよ」

ラドビアスがコリウスの体ごと抱えてクロードから離す。

「クロード様、しつかりして下さー」

頬を軽く叩かれてクロードはつづらと目を開けた。

「気がつきましたか、起きられますか」

ラドビアスがクロードの背中に手をまわして抱き起します。

「死ぬかと思つた」

「おまえが聰いのは解かつたが、なんでもかんでも口に出す癖を止めないと早死にするぞ」

殺そうとした本人が言つのだから間違いないか。

「喉に跡が残りますね」

クロードの首に心配そうに触れながらラドビアスが言つ。

「それを見て自分のおしゃべり癖を反省する縁にすればいいんだ」

書き上げた羊皮紙をくるくると巻き上げて、コリウスがラドビア

スに巻物を突き出す。

「これをトライシユに渡して」

「は」

ラドビアスが出て行つた方をなんとなく一人は同じ田線で追つた。
「口に出すなよ」

顔を見合わせた途端にコリウスがけん制するよつていつぱい。

「どこに耳があるのか解からない」

「うん」

「」のままインダラを廟に向かわせて始末しようと思つてこるので
から

「そんな事できるの？」

「やるんだよ」

いつものように唇の端を上げて笑い顔を作つたコリウスをちらりと
クロードが見る。

「自信満々の顔だと思つてたよ」

「何が」

「その、顔の事」

クロードが前を向いたまま膝を抱える。

「」の顔つて

首を傾げて問うコリウスを無視して前を見ているクロードにじれ
てコリウスがあつく言つ。

「クロード、気に障るまねをやめろよ。最後まで言え」

「んじゃあ、言つけど余裕のあるときにする顔だと思つていたけど
わつきのは違うんじゃないかなと思つてさ」

クロードはぐるりとコリウスに顔を向ける。

「すごく切羽詰った時もそうやって笑うんだと思ったのさ」

酷薄な笑顔の皮一枚下はどんな顔をしているのか。ベーオ
ークから逃げて来た時、コリウスは自分とそつ歳の変わらない十七
歳だった筈だ。追つ手がいつ来るかと思いながらいかに自分を守
ろうかと経典を自分の頭に叩き込んでいる彼は。その頃から一ヤ

りと笑っていたのだろうか。余裕があるよつに見せていた顔の正体をちらりと見た気がした。

「おまえは可愛いが可愛いくない」

ゴリウスは謎賭けのよつた事を言いながらクロードの頭をぺしりと叩いた。

「言つている事解かんないよ」

「解からなくていい」

クロードの言い分もにべも無く切り捨てられた。

そこへ何の前触れも無く龍門が開く。

ガリオールの訪問

「大変です」

ガリオールが自ら竜門を使ってサイトスから離れるのは、クロードに竜印を刻みに来た時以来かもしれない。と、するならば。

「王に異変が？」

ユリウスの問いにガリオールは頷いて一旦竜門を閉じた。

「しかしあまりにも早いな、普通は二、三年は持つものだが……」
言いながらユリウスは、ヴァイロンの死期も慌ただしかったのを思い出していた。

「朝、剣が鍵のすがたに一刻ほど戻つておりました」

「それで王の容態は？」

「それは今までとお変わりありませんが」

「夏至の日まで持つかな」

ガリオールにユリウスが声を低くして言う。

「なんとも、どちらとも言いかねます。初代の王、ヴァイロン陛下の時とよく似ておられますか」

ガリオールも思い出していたらしくヴァイロンの名を出して目を細める。暫くの間の沈黙をユリウスが破る。

「ここは私の結界は私とルークとクロードに任せたおまえはリチャードとサイトスに残れ」

「クロード様ですか」

「王の崩御が近いのだ、おまえはサイトスから離れるべきではない」「主がそう仰せならば従います」

ガリオールは深く頭を垂れる。ガリオールにとつての主イーヴアルアイは絶対神である。自分がレイモンドールの魔道教の魔道師を養成する廟の学生だった頃から尊敬し、崇拜していた。

その主に認められて竜印を頂いたときの誇らしい気持ちは忘れる事が無い。

その為に、時に主に意見し、軽んずることを口にするラドビアスに我慢が出来ない。それを態度や顔に出すガリオールではないが、主の一番の僕は自分であると自負している。

主によつて不死の力を与えられているのだから。 ラドビアスとは違う。

ガリオールにとつてレイモンドール国魔道教による支配、今の状況の他を考えることなどあり得ないことだった。 そこがイーヴアルアイ自身のことしかみていないラドビアスとの違いなのだけことは、ガリオールにはわからない。

ラドビアスにとつてイーヴアルアイ、いやカルラの身が無事ならば、いる場所はどこでもいいのだ。 いわんや生きていたならその場所がベオーク自治国のバサラの寝所であつてさえも。

「変わつた事があればすぐに知らせてくれ」

「畏りました」

ガリオールが竜門に消えてクロードがすかさず声を上げる。

「ガリオールの抜けたあとに俺つて」

「ふん、結界を張るくらい本当は私一人で出来る。 寝小便を見つかつたときみたいな顔をするなクロード」

「寝小便なんかするかつ」

「ついこの間までしてたくせに、覚えているだ」

怒るクロードにユリウスがからかい口で言つ。

「それよりこれからモンドの城に帰つてこの書状を父上に」

そう言ってからふつと吹き出す。

「おまえと私の間で父上はないよな、ハーモートに渡してくれ」
「解かった」

「モンドの城内の人間から私達の記憶を消すことにしてから。 クロード、しつかりやれよ。 術式はおまえがかけるのだ」

まるめられた書状とユリウスを交互に問うように見る。 クロードはこの十四年間の生活と唐突に別れることになるのを悟る。 この騒ぎが収まつても俺はモンドの城の三男坊じゃなくなつてているの

だ。こんなことならもう少しダリウス兄様の言うことを聞いて、エスペラントを馬に乗せてやれば良かつた。無為に過ごしてきた

と思っていた日々がただ懐かしく感じられた。

「ゴリウスはどうだつた？」

「何が？」

「十七年間モンドにいたんだろう？」

「ああそのことか、私が居たのは十年間だけど」

「十年間つて……あ、それに美人のお母様つていうのは？」

「あれは術で過去を捏造したのさ、あの絵は勿論私だ」

やっぱり……そりゃあゴリウスが本当の公子で無いのだから母親も違うだらうけど。今迄お母様似なら良かつたのにと言わ続けていたエスペラントに、クロードは哀切の情を禁じ得なかつた。が、それも今日で終わる。

「ハーモートの正妃は州城から離れた所にいるが、そのことでハーモートはずいぶん私を嫌つっていたようだな」

そうか、ゴリウスとハーモートとの確執はここから来ているのか。州宰として来るはずの魔道師が自分の子供として入り込んで、妻を城から出すことになつてさぞかし腹の煮える思いだつたう。

「その書状を開いて見てござらん、クロード」

ゴリウスに言われるまことにクロードが書状を開く。かなり複雑な魔方陣が描いてあるがクロードが読みやすいように中にかながふつてある。その上、印を組む順番と何を組むかが範字の上に書いてあつた。

「レーン文字はこの印から左回りに読むんだ。いいな」

ゴリウスが書状をもう一度くるくると巻いて封印をかけてクロードに渡した。

「もう、モンドの城に帰ることはないんだね」

クロードはしんみりと言つ。

「お家に帰りたくなったのか、クロード。がきだな」

小ばかりしたよつにココウスが鼻をならした。

「つるせー、行って来るー」

竜門に飛び込むよつに出て行くクロードを見ながらココウスが呟
やぐ。

「私はこの十年、とても楽しかった」

クロードはユリウスの小宮の地下室に龍門を開けて嗅ぎなれた香の匂いにほつとする。そして、思いだした。

俺の部屋に置きっぱなしにしている魔術関係の本や巻物を、ここに戻しておかなければ。

クロードは主城の正面ではなく裏手の使用人が使う裏口を目指す。そこで何人もの使用者とすれ違つたが、誰も自分の雇い主の息子に気が付かない。そのまま一階の自分の部屋に飛び込む。すばやく隠し場所から本と巻物を取り出して、同じように下へ降りようと部屋を出たところで霸氣とした声がかかる。

「クロード、何だつてお前がここに居るのだ」

今一番会いたくない人間に会ってしまった。もつと注意深くしていれば……と井戸の底まで後悔しきりだつたがもう遅い。

「えつと……それはその事情が……」「

「何の事情だ」

語尾を上げてダリウスが返す。

「えつ……とあつたりなかつたり……」「

「どつちなんだ！」

ダリウスの声が廊下に響く。

「あの、これについては父上の部屋でお話しします。あと一ザンの後に父上のお部屋で会いましょう、兄様」

驚いた表情のダリウスを残したまま、大荷物を抱えてクロードはユリウスの城に向けて走り去つた。

一ザンの後、クロードはハーコート公の部屋に父親と長兄と共にテーブルについていた。

「で、話してくれるんだろうな」

ダリウスが横に座るクロードに視線を外すことなく言つ。「えつと

クロードはダリウスに気を取られないように向かいに座るハーコートに顔を向けてユリウスから託された書状を手渡す。

「ユリウス、いやモンド州付き魔道師イーザルアイからモンド州州公バルザクト・ロイス・ハーコート様への書状です」「イーザルアイ？」

眉根を寄せながらハーコートは書状の封印を切つて広げる。

その他人行儀な弟の口上にダリウスが驚く。

「クロード、どうした」

しかしクロードはダリウスに顔を向けることも無くハーコートを見ている。

「これは、本当に私宛なのか、意味が解からん」

書状を広げたままハーコートがクロードに尋ねる。広げられた羊皮紙に書かれているのは現世の文字ではない。あるのは複雑な形の魔方陣。そして細かく書き込まれた古代の文字。テーブルに置かれた書状を見ながらクロードが立ち上がり、おもむろに左回りに文字を読んでいく。

そして次々と組んでいく印。

「一体何をやっているのだクロード。それじゃあまるで魔道師のようじゃないか」

顔色を変えて言つダリウスの声を聞きながらもクロードの呪文は止む事が無い。

どうしたんだ。

ダリウスはふっと空気が震えた氣がして辺りを見回す。空気の乱れは書状のなかの魔方陣が紙の上から浮き上がった所為だった。

それはそのまま大きく広がり、部屋を抜け尙も広がりながら高く上つて行く。やがて州城の敷地を見下ろすほどになるとびたりと止まつた。書状が忘却術の術式だつた。封印を取つたことによりすでに術式は始まつていたのだ。

延々と続いたクロードの呪文を唱える声が止み、最後の印を組む。

『我の命により忘却すべし』クロードが言い終わつた途端、空一杯

広がっていた魔方陣は霧散し、テーブル上の無地の羊皮紙も跡形なく消えた。その間にクロードは竜門に消える。

暫く茫然としていたハーコートとダリウスはふと我に返つてお互いの顔を見あわせた。

「父上、私は何の用でここに？」

引かれたままになつている自分の横の椅子をダリウスは不審そうに見る。

誰か來ていたのか。

「さて何だつたか」

ハーコートは何も無いテーブルをしばし見つめたが何も思い出さない。

二人は途方にくれたように今一度お互いの顔を見た。

「行つてきたよ」

「ああ、少し休めクロード」

うんと言つてクロードはユリウスを見ると指に綿布をまいていた。では、あれはユリウスの血で書かれたものだったのか。クロードは重い気持ちを引きずりながら部屋に戻る。何でこんなに気分が沈むのか。

いろいろユリウスがお膳立てしてくれたとはいえ、間違えずに一人であんな大きな術式を行つたのに少しも嬉しくない。モンドの城の自分の部屋から何か記念に持つてくればよかつたのかな。しかし、考えてみても取り立て思いいれのある品などクロードには無かつた。借り物の生活に見合つようにも何もかも自分の物では初めから無かつたように。

それでも俺にはモンドの城の思い出がある。俺の事をある人達が忘れてしまつても俺は覚えている。もし、俺が不死となつたら忘却術なんてかけなくともあつという間に人は寿命を迎えて、

俺のことを知つてゐる者などいなくなるのだ。思わずモンドに居た頃の思い出に浸つてしまいそうになつてクロードは両頬をべしつと手ではたいて氣合をいれた。

俺は今迄の十四年間よりこれからの方がずっと、いつもと長い人生なのだ。いくらでも思い出は作れる、しかし。

「取りあえず飯、飯。放つておくと一日中飯抜きでこき使われてしまう。あつちは五百年以上生きている年寄りだからあんまり食えないだらうけど俺はまだまだ育ち盛りなんだから」

さつきから鳴りっぱなしの腹を押さえてユリウスの部屋の扉を叩いた。

コリウスの弱み

さつきから鳴りっぱなしの腹を押されてコリウスの部屋の扉を叩いた。

「ラドビアス居る?」

扉が開いて、ラドビアスがクロードを中に入れる。

「俺、腹へつて死にそうだよ」

クロードは大げさに声をあげてみせる。

「一食抜いたくらいで死ぬもんか」

「コリウスがすかさず冷たく言う。

「年寄りと俺を一緒にしないでよ、俺は一食抜いただけで死んじゃうんだよ」

クロードは、よたりと部屋の床にわざと倒れ込んだ。おや、また

あとラドビアスが笑い顔になる。

「まだ、お夕食の時間じゃありませんが、何か持つて来ますね」

そう言って部屋を出て行く。

「喚けばだれも彼も言ひ事を聞くと思つているんだろう。この万年餓鬼小僧! そんなに腹へつっているのなら柱でも食べとけ」

「コリウスが片眉を上げて床に伏せているクロードを見下ろした。

前半のセリフはそのまま自分のことだろうが、文句を言いそうになつたがそこへ、かちやりと軽い音がしてラドビアスが温かい湯気をたててているシチューとパンを盆に載せて入つて来たことで霧散する。

「うわ美味しい、頂きます」

「ゆっくり食べて下さい」

テーブルについた途端に、がつがつ食べているクロードにラドビ

アスが声をかけた。

「あの人残つた従者、この騒ぎが収まつたら始末しろ」

長椅子に足を投げ出して書物に目を通しながら、コリウスがラド

ビアスに告げる。

「記憶を無くすだけではいけませんか？」

「記憶を無くしてモンド州に帰しても話がややこしくなるだけだ」

「ゴリウスがぱしりとラドビアスに言い返す。

「話がややこしく」 ではモンドの方々の記憶を消されたのです

か

ラドビアスが驚いた顔をした。

「あつそれ俺がやりました」

クロードがパンを持った手を挙げる。

「左様でございましたか、それなら承知しました」

「ちょっと待てよ。承知したってことはティビットを殺す事を承知したって事？ それどうにかならないの」

「どうにもならないな」

あつさつと了承するラドビアスに慌ててクロードはゴリウスを見るが、ゴリウスは本のページをめくる手を休めずにスペッと言い切る。

それを聞いてさつきまでの空腹感がどこかへ消えたようにパンが喉につかえる。

「そろそろドミニクも動き出す

「ドミニクが何？」

「ドミニクは私達を人質に取つたつもひなのさ。その価値があると思つてゐる。私達を盾にとつてモンド州に越境して廟を家捲ししようと思つてゐるんだらう」

「だから忘却術を」

お宅の次男と三男を預かっているので廟を荒らすのを大目に見てね、と言つたところでハーコート公はせせら笑うだらう。うちには次男も三男もはなから居ませんと。ドミニクは知らずに一番欲しいものをすでに手の内に入れているといつた。

「既にガリオールがライクフィールド侯からドミニク候へ送つた密約書を押さえて国軍を向かわせているだらうよ」

「ゴリウスが本をぱたんと閉じてにやつと笑った。

「密約書?」

「ああケースワース候、ミルフォード候以下有力なドミニクに加担している貴族、將軍らの名前がばっちり入っている」

「そんな都合のいい」

「偽造したのだから、そりやあぱちり全部ある事無い事書いてある」

「ゴリウスがしゃあしゃあと言つ葉にクロードが絶句する。

「国軍動かす根拠が偽造文書つて……」

「ふん、形さえ整つてさえいればいい」

「ゴリウスが事も無げに言つた。

「じゃあその三州とボルチモア州を国軍が囲むわけだ」

「国軍に囲ませてここに集結したレジスタンスのリーダーたちも結界を張つて閉じ込める。と、同時に州兵を動かしてモンドの廟にいつている奴らにも結界を張つて二つともなかに居る奴ら全員殲滅する」

「こり笑つてゴリウスが続ける。

「それとも生かしとして結界を張りなおす贊の一部にあてるか」「すでに結界の張り直しには充分の贊の用意はできておりましょ。」

「こから海岸線へ運ぶ手間がかかります」

「ラドビアスの事務的な言い方にぞつとする。話だけでお腹一杯に成るほどの血なまぐさに話に、クロードは顔色を失くしついでに食欲も失くした。

「「ううそうさま」

「もうよろしいのですか、お口に合いませんでしたか」

皿を脇に押しやるクロードにラドビアスが心配そうに聞く。

「せつきあれ程騒いでいたくせに。全部食べてしまえ、クロード」

「つるわこつ」

「ゴリウスがまたも冷たく言つのにクロードがいい返す。

「ドミニクだらうがミルフォードだらうが。レジスタンスだ

つたとしても、ただの人間どもなどいぐら集つてこようがどうにでもなると思う。だが問題はインダラの出方だ。ふとコリウスは自分の口元に手をやる。自分が引きつった笑みを浮かべているのを確認して苦笑いする。私はそんなに切羽詰まつてゐるのだろうか。問題はインダラだけでもてこずりそなに、そりでない気がするのだ。

他にももつと悪いものが入つて来ている気がする。

「酒を、酒を持って来てくれ」

「ここのところ連日お酒が過ぎますよ。今日はお止めになつては心配げに言つたラドビアスに向けてコリウスが持つていた本を投げ付けた。

「うるさい！ 酒を持ってここと言つてるんだ！」

だんだん大声になる。

「僕のくせにいちいち説教めいたことを言つのは止め。一回も二度も言わすな。酒を持って来い、ラドビアス」

「解かりました」

ラドビアスは大きく息を吐いて、片手で受け取つた本をテーブルに置く。

「果実酒を水で割つたものでは」

「なんでもいい」

コリウスはラドビアスが部屋を出て行くと、テーブルに置かれた本をもう一度扉に叩きつけるように投げる。コリウスの剣幕に驚いてあっけにとられて見ていたクロードはふと思つ。

今のはハつ当たりだよな。でも何で？

「インダラのことを気にしてるの？ コリウス」

「おまえはどう思つ」

問い合わせいで返されてクロードは答えに窮する インダラは経典を捜しにモンドの廟に行くだろさあくわが闇雲に捜すわけはない。

「コリウスの身柄を確保してから口を割らせる方をとるよね」

だがどうやって口を割らせる？ ベオーク自治国に連れて行

かれるくらいなら死んだ方がましだと言つてゐるユリウス。 その
彼から経典のありかを吐かせることが出来るのか。 弱みなんてど
こにも無いし、と考え込むクロード眺めていたユリウスは、はつ
と目を見開く。

「おまえか」

「俺が何？」

意味が解からず眉を寄せるクロードにユリウスは答へず、椅子か
ら立ち上がりつてそわそわと部屋中を歩き回つて……つと止まつた。

「サイトスへ行け、クロード」

「サイトス？」

「そうだ、私の側にいるな。 おまえも私の枷になりたくないだろ？
今直ぐだ」

ええつ、どうこういふ」と。

「早く行け！」

質問する間も「えられず、ユリウスの大声に仕方なくクロードは
竜門を開けた。 クロードが消えてユリウスはほつと椅子に座り込
んだ。

「危ないところだった」

クロードを盾に取られたら私は経典の場所を言わないわけに
はいかない。

そこへ酒の用意をしてラドビアスが部屋に戻ってきた。

「お酒をお持ちしました。……クロード様は？」

「さあ部屋に戻つたのだろう」「

ラドビアスは部屋に残る竜門の揺らぎの跡を認めて目を細めたが
なにも言わず、果実酒を背の高い細い杯に半分注いで半分を冷水で
満たして主に渡す。

「カシス酒です」

奪い取るようにユリウスが杯を取つてぐいと呷る。

「ゆっくりお飲みください」

ラドビアスの言葉が終わらぬうちにユリウスはお代わり、と杯を

ラドビアスへ突き出した。はあーと盛大に溜息をついて二杯目を作る。さつきより水を多く入れたが。

「ラドビアス」

呼ばれて振り向くとユリウスの手には先程ラドビアスが果実酒の栓を切るために使ったナイフが握られている。そのままラドビアスの首元にナイフを突きつけて壁際まで追い込む。素直に壁に背中をついているラドビアスの首にあてたナイフに少し力を加えるとついっと一筋血が流れた。

「何ですか、お知りになりたいことがあるなら普通に聞いてください」

「おまえは信用できない」

ユリウスがナイフを握った手に力を込めて新たに血が滴る。

弱気な一人

「はあー」

今日何度もため息をついて。ラドビアスは何といふこともないようだに、コリウスがナイフを持つ手をあつさり掘む。そして一瞬のうちに体を反転させると、コリウスを壁際へ押し付ける。「私にナイフを向けるなんてお酒に酔つてらつしゃるんじゃないでしょうね？　ふいをついて術をかける方が、何倍もあなたに勝つ日がありますのに」

「悪かつたな、剣が使えなくて」

するすると壁に背中を預けて座り込もうとするコリウスをラドビアスが抱きとめて聞く。

「何をお知りになりたいのです」

横を向くコリウスの顔を強引にこちらに向かせる。

「カルラ様」

「その名を呼ぶな、おまえは本当に嫌な奴だ。おまえしか使える僕がいないというのに信用できない事がどんなに腹立たしい事か、おまえにはわからないのか」

「どこでどうなつても私はあなたの僕ですよ、コリウス様」

コリウスが腕を突つ張つて、ラドビアスの腕から距離を取つて見上げる。

「じゃあ聞くが、インダラは誰と一緒に国境を越えた？」

「どうしてインダラだけだと思われないのでですか？」

答えるラドビアスにためらい無く平手が飛ぶ。

「答えるー！　ラドビアス」

その声にあきらめたようにラドビアスは小さく息を吐いた。

「……バサラ様とクビラ様です」

コリウスがぐくりと唾を飲み込む。顔色も変わる。
「とクビラだと……。

バサ

「一人にしてくれ」

ゴリウスの言葉にラドビアスが首を振る。

「今の主を一人にしてはおけません。離しませんが……殺しますか」

「ばか！ だからおまえは嫌いだ！」

ゴリウスはきりりと唇を噛む。 ラドビアスの腕の中でゴリウスは負けそうな気持ちと戦つていた。 くそつ、どうにかしてあいつらの裏をかいてやる。 こんな弱気になつている自分は本来の自分ではない。 絶対になんとか……してやる。

「クロード様、今日は何の用で？」

竜門から現れたクロードにガリオールが立ち上がり迎える。

「用つていうか、ゴリウスにサイトスに行けつて言われて。 僕が居ない方がいいってさ」

自分で言葉に出してみて、いかに自分が傷ついたかを認識させられ、クロードは泣きそうになる。

「そうですか、主には何かお考えがあるのでしきう。 では直ぐ部屋をご用意いたしましょう」

別にしようとしているクロードを慰めるわけでもなく、ガリオールは側の魔道師を呼ぶ。 用意された部屋の寝台の上でクロードは転がりながら喚く。

「くそーっ。 信用してるとか言つてたくせにもう、用済みかよっ」

ゴリウスがまた自分の気持ちと戦つていることなど解かるはずも無く、クロードはただユリウスに打ち捨てられたように感じていた。

「ショックだ。 ちくしょう、落ち込んでしまった」

産まれてこのかた、誰かに期待されたり、誰かのためにがんばつたことなど経験が無い。 今まで自分のためだけに生きてきたクロードにとって、初めて感じる類の感情にどうやってやり過ごせばいいのかわけが解からない。 他者にあてにされてないことが、こん

なに苦しいなんて思いもしなかった。

「あー立ち直れないかも」

「ひるいじの寝台を転がりながら眠れない夜が更けていく。もう少しで朝日が顔を見せる一歩手前。薄紫に変わった空を窓から眺めてクロードは思う 必要だと思わせてやる。くそつ、コリウスが窮地きゆうぢに陥つたところを颶爽せつそうと助けてやる。

「やっぱりおまえがいないと私はだめだな。ラドビアスなんて屁の突つ張りにもならないよ」

とか言わせてやる！ ぐつとクロードは両の拳を握り締めたが、果たしてコリウスがそんな言葉を使つかは考えの外だ。

「いい事を思いついた」

そのいいことは誰にも話さないで実行するつもりだった。

「待つてろよ、コリウス」

急に眠気が襲ってきてクロードは目を閉じた。

その時に備えて休養は必要だ。

擬態する者

深夜トラシユのサロンを冷たい空気が満ちている、暗い室内。「剣に気付かれてしまった」

そう言つた割には悪びれない様子の男。

「あなたはもう少し考えて動かないとダメですよ」

低いハスキーな声が咎めるように言つ。

「いつまで待つんだ、もういいだろ。さっさと攫つて帰ろ!」^{さあ}「攫うつて、私達は誘拐犯じゃないんですよ、まったく」

月明かりに照らされて顔半分が闇に浮かぶ。

「カルラだけが目的ではないでしょ、兄上」

呆れたようになつた顔は、確かにトラシユの顔だったが……。

「そりやあそудがカルラを見たか。ベオークに居た時のままだつた。男に変わつてたらと思つて心配していたが。俺は早く連れ帰りたいな」

唇をべろりと自分の舌で舐めながら男は笑う。トラシユの反対側の男は、がつしりとした体つきに背負つている剣のシルエットが壁に大きな影を作つている。柄の長い湾曲した剣を背負つている黒い影。

「まったく、全部三つづつあるメキラ兄上は擬態^{ぎたい}がへだから田立つし、ハイラは動きが鈍いしで兄上を選んだけど。私とインダラだけの方が良かつたかもせんね」

長い息を吐くと、あつという間にトーマスとの間合いを詰める。それから、自分よりはるかに大きい男の胸倉を掴んで引き寄せてトラシユが低く囁く。

「勝手な事をするなよ。カルラに正体を簡単にばらしてみろ、私がおまえをばらばらにしてやる。意味が解かるかい、鳥頭^{わねや}」「わ、解かった」

トーマスがぐくりと喉を鳴らす。トーマスの返事ににっこりと

人好きする顔に戻ったトラシュが男の服を離す。

「じゃあまた明日、トーマス」

その声は先程の低いハスキーな声ではなく、いつものトラシュのものだ。

「そうだな」

トーマスが顔の汗を拭きながら部屋を出て行つた。

「レジスタンスの中に気になる奴がいる」

「気になる、ですか」

自分の腕の中に入る主を見下ろして、ラドビアスが聞く。

「シャムシールに似ている長刀を持っている。私が今迄見たことがあるシャムシール使いは一人だけだ。大陸の南ではどうか知らないが、他の地での刀を使う者は少ないだろ?」

「クビラ様の事を言つておられるのですか」

「本人はシャムシールではないとぬかしていたがな。擬態しているくせに得物を変えていないなんて考えなしの馬鹿はクビラしかいないうだろ?」

「ユリウス様」

「何だ」

「仮にもあなたのお兄様ですよ、そのクビラ様は」

ユリウスは、はっと大きく息を吐いた。

「私があいつと血が繋がっているなんて虫唾が走る。ついでに言えば他の奴らも大嫌いだ。湿つた所にいる虫並みだ」

そう言つてラドビアスをじろりと見上げる。

「おまえもその手を早く離せ」

ユリウスは緩められたラドビアスの腕から逃れて、指に巻いてある綿布をするすると外す。

もう一匹はどこに隠れている? 見つけて潰してやる。取

りあえず解かつているクビラの方をこちらから急襲してやる。

「ラドビアス、明日クロードの名を使ってあいつをここへ連れてこい」

床にしゃがみこんで綿布を外した指を噛んで新たに血を滴りせると、せつせと何かを書きつけるが。

「足りないな、ラドビアス、血が足りない……デイビットを殺れ、死体がいる」

「ユリウス様」

「少し早まつたが丁度いい。最後の従者までつまく使ってやればダリウスも喜ぶだろう」

自分がどれだけ非道な事を言つているのか、すでにユリウスの頭にはない。部屋に仕掛ける術の事で頭が一杯の主にラドビアスは軽く息を吐くと、頭を下げて部屋を出て行く。

……死体を作るために。

ゴリウスは淡々と作業を進める 魔方陣は血が確保されてからでないとダメだな。

モンドの廟から持つてきた呪符に自分の血を垂らして文字を書き入れると息を吹きかけ、頭から抜いた髪をその呪符に包んでその呪符を五角形に折つて自分の懷に入れた。

次の朝、レジスタンスのアジトの戸が叩かれる。

『コン、コン……コン』その音に中から声がかかる。

「モンドの蝶は」

符丁を尋ねる声に訪ねてきた男が落ち着いて答えた。

「蜘蛛に捕らわる」

重たげな戸が少し開き、その隙間から男がうかがうよつて顔を出す。

「誰だ、おまえ」

田の前に立つ長身の頬のこけた顔色の悪い男。 にこりと笑いながら相手の男が閉めようとする戸を引き止めるように押された。

「私はモンド州の公子の従者ですが、そちらのトーマス殿に小宮のほうへおいで願えますように仰せつかつて参りました」

「ラドビアス、ああ、この人は大丈夫よ。何なのクロードったら先生を呼びつけるつもり？ トーマス悪いけど少しクロードの相手をしてやつてくれるかしら」

入り口でもめているのかと後ろから早々とアジトに入っていた、アリストローザがやつて来る。腰に手をやつて後ろを振り返ると、奥のトーマスに声をかける。湾曲した大刀を背負つた男は素直に戸口に向かう。クロードの従者の後に続いて小宮に向かう男の後ろ姿を見送りながらアリストローザは悪戯っぽく笑つた。

今日のトーマスはやけに素直だわ。後でクロードがみつちじじいかれているのを見に行くのもいいわね。

「解かつているんだろう？」

前を行くラドビアスの背中にかかる声。

「何が、でござりますか？」

へつへつへつ……下卑た笑い声。

「おい、サンテラ！」

それでも知らぬ顔をしているラドビアスにじれて肩に手をやる男。

「俺だ、俺。上手く化けただろう？」

前を行くラドビアスがため息をついて振り返つた。

「来られるのですか、来られぬのですか？」

「ああ、行くわ、あのガキ刀で二つにしてくれる」

にやにや笑つて言つ声は既にトーマスの声ではない。

「へりらく

手の平を上に向けて指し示された部屋を、男はおとないも無く開けると足音も荒く中に入る。部屋は陽が登ったというのに厚い力

一テングが閉められ、薄暗い上に何やら香が焚いてある。

「坊主、来てやつたぞ」

しかし部屋の中、丁度真ん中の椅子に座っているのはクロードでは無い。

「カルラじやないか」

トーマスの姿を纏まといつたクビラはずかずかと大股で歩いて、椅子に座るコリウスの元へ行く。

「何だ、俺に会いたかったのはおまえか」

いきなり屈んでコリウスを抱くと、それに応えるようにきつくコリウスも抱きつく。それを見て、ラドビアスがぱたりと小さい音をたてて外から扉を閉じた。

擬態する者（後書き）

だんだん、話が血生臭くなつてまゝりますが皆様ついて来てください。

仕掛けられた罠

「えらく積極的大だが……おまえ見た目よりじつい体だな……」
しかも腕がどんどん締め付けてくる。力自慢の俺が抵抗できないほどなんて……いくら何でもおかしい。息が苦しくなり力を振り絞って、コリウスの体を撥ね退けよう頸に手をかける。渾身の力で後ろへ押すと、ぼきりと骨の折れる音がした。驚いたクビラにあらぬ方から声が聞こえた。

「何びっくりしているんですか、だからあなたは何百年経つても鳥頭なんだよ」

元の姿に戻ったクビラが声のした方へ顔を向けると、部屋の北東の隅に見知った姿を認め、びくりとおのれを抱く物……を見る。術を施そうにも両の手を拘束されて締め付けてくる腕の中で、クビラは自分が捕まっている物の仰け反つて開いた口の中に折られた紙片を見つける。

口を使って食いつくように取り出すとそれを床に吐き捨てた。途端にコリウスの姿は消えうせ、若い男の姿に変わる。その男はすっかり血を抜かれたのか体が蟻のようになり。

「昔も趣味が悪かったけどあなたは今でもばかで変態なんだな、死体に口付けしたりしてさ」

コリウスが印を組みながら言つ。

「くそつ

クビラはぎりぎりと体を締め付ける死体と格闘しながらそれでもだんだんとその関節を一つ一つ外していく。

それを見てコリウスは印を結ぶスピードを上げて、呪文を唱える口調も早口になる。大きくレーン文字の開始を表す『カノ』の文字を宙に描く。

『包藏せよ!』コリウスの声の後に……。床に昨晩、血で描いて隠蔽魔法で隠していた魔方陣が浮き上ると柵状になりクビラを取

り囲む。鳥かごのようなそれの柵の太さがどんどん太くなり隙間を埋めていく。

「くそうつ、やめろ！」

片手が自由になったクビラがシャムシールを抜いて投げつける。後僅かで閉じようとしていた隙間にそれは突き刺さり、動きが止まる。大きく舌打ちしたユリウスが隙間に打ち込まれたシャムシールを抜こうと手を差し入れるが、その手はがしりと太い腕に掴まつた。

「捕らえたぜ、カルラ」

思ったより早く死体から自由になったクビラにユリウスが目を見開く。

「捕らえたと言つても腕だけじゃありませんか。欲しいのならその刀を抜いて切つて持つて帰ればいい」

「何だと！」

クビラに力一杯引つ張られて肩口まで隙間に引きずり込まれてなお、ユリウスの憎まれ口は止まらない。

「この隙間から無理やり引っ張り込んで体中ちぎれてもいいっていうのか、その時になつて泣いて謝つても遅いんだぜ」

脅しながら、本気なのか殆ど笑い声でクビラが掴んだユリウスの手をぺろりと舐めた。

「気持ち悪いことは止めてください、そんな事をしなくともあなたは充分気持ち悪いんだから」

尚も逆なでする言葉にクビラがユリウスの腕に噛み付いて、流石のユリウスも悲鳴を上げた。

「痛い、やめろ」

その声にクビラはにやりと笑つ。もう一方の手を隙間に差し入れてぎりぎりと音を立てながら広げようとするとユリウスは声も無く見つめる。血の魔方陣で作った檻を力技で壊そうとするなんて……なんてばか力なんだ。

ぐにやりと頭一つ出るくらいに広げた隙間からクビラが頭を出す。

「誰が気持ち悪いって？ 良く聞こえなかつたな。今近くへ寄るからもう一回言つてくれ」

クビラのばか力を見くびつていたかとユリウスは唇を噛んだ。

「……しかし何だ、さつきから匂つているこの匂いは……嫌な匂いだ」

クビラが顔をしかめる。

「そうですか？ 私は全然気になりませんけど」

クビラの様子にユリウスの目が細くなる。

「それ、このレイモンドール固有の香木が主成分なんですけどね。体の動きを阻害する毒性が強いんですよ。それに何種類かの呪草を混ぜて作つてあるんですが。面白いことにレイモンドール生まれの者や、長年居る者は耐性が出来てゐるようでこの毒は効かないようですね」

ぜえぜえと息をするクビラを見ながら、ユリウスはゆっくり話しを続ける。

「だから呪法を行う時の基本の香にしてゐるんです。だけど大陸の出のあなたにはやはり毒性が強いでしょうね」

脂汗を流してクビラは、ユリウスの手をついに離すと床に倒れ込んだ。 それと同時にユリウスが隙間に刺さつた剣を抜く。 直後、檻は間髪入れずぴつたりと閉じた。 腕を擦りながらゆるりと笑うユリウスの前に巨大な球体が出来ていた。

「焼尽呪文で骨まで灰にしてやる。アニアを……母を殺したつけを払つてもらうぞ」

そう言つてユリウスは剣を放り投げた。

「兄様、トラシュ兄様」

サロンから中座したトラシュに妹が声をかける。

「どうした？ アリス」

「小宮に面白いものを見に行かないこと？」

手を後ろ手に組んでにこにこに見上げるアリストローザに、トライシ

ュが足を止めて聞く。

「面白いもの？」

「クロードがトーマスに小宮で剣術を習っているの。今朝、従者がトーマスを呼びに来たのよ」

くすくす笑いながら話すアリストローザにトライシが確認するように聞く。

「トーマスは行つたのか！」

「え？ ええ……」

兄の険しい顔にアリストローザはびっくりする。いつも穏やかな兄がついぞ見せた事の無い表情。

「いけなかつた……かしら？」

「いや、いい。行つてみる」

言つてトライシがアリストローザをおいたまま走り出す。アリストローザは後を追つて走るがあつという間にトライシの後姿は見えなくなつた。

「一体どうしたの？ あんな兄様初めて見たわ……でもこのとこう少しおかしい感じはしていたのだ。いつもとは違う……どうがどうとは言えないのだが。ただ一番変なのは私の事をアリストローザは後を追つて走るがあつという間にトライシの後姿は見えなくなつた。

印を組んで距離をショートカットしながらトライシは唇を噛んだ。

クビラ、カルラに落ちたか！

「お呼びですか」

指を鳴らすと後ろに黒い人影が現れてついて走る。小宮の入り口で一人は急停止した。目の前には一人の男が長刀を下方に構えて立つっていた。

「サンテラか、持ち慣れぬ刀を持っているな。おまえは短刀の方が

好みだと思っていたけど」
ふつと笑ってトラシユが言つと、横の黒髪の男がすらりと自分の
得物を抜いた。

トラシュを纏うバサラ

「ここは私が」

「じゃあ頼むよ、インダラ」

そう言って先を急ぐとするトラシュに、ラドビアスが打ちかかろうとするのをインダラが割って入る。

「おいおい、おまえの相手は私だ」

言いながら素早く間合いを詰めると、インダラは空いている手でラドビアスを殴りつけて離れる。ラドビアスはトラシュに気を取られていたため、顎にインダラの拳をまともに受けて、体勢をくずされたが懐からダガーをインダラに立て続けに三本投げつけた。その間に充分な間合いを取る。

太いラドビアスのバスター・ソードに対し、インダラの持つレイピアは細長く不利に見えるが……インダラは楽しそうに笑った。

「久しぶりに打ち合える機会は嬉しい限りだが、時間稼ぎのつもりか？　あきらめるんだな。この五百年カルラ様を独り占めにしていたのだからな。もうそろそろ主にお返しするのが筋というものだ」「カルラ様と私はおまえのような下種が考えるような関係ではない。変な勘ぐりはやめる！」

ラドビアスがバスター・ソードをインダラに振り降ろす。インダラはそのバスター・ソードをレイピアの柄のところで受ける。その剣にひらりと足をかけて弾みをつけて宙返り、ラドビアスの後頭部を狙つてレイピアを付き込む。それを間一髪、ラドビアスはバスター・ソードで頭上で跳ね返しざま、着地しようとするインダラの背中を蹴りつけた。

また一たび二人は睨みあう。

「おまえも存外甲斐性が無いな。まあそれなら我が主だけが、カルラ様と結ばれたお一人だと考えてよいのか？　それは我が主は喜ばれるだろ？」

「「つるさい！」

ラドビアスの頬をレイピアが風を切る面とともに掠り血が滲む。

「動搖しているみたいだな、相棒？」

楽しそうにインダラは円を描くように足を運ぶ。

「おまえの話は昔から自分が思っているほど面白くない」

ラドビアスが頬の血を手で拭つた。

階段を登りながら香の匂いがするのにトラシユが気付いて顔をしかめる。

嫌な……匂いだ。

ある部屋の前で特にその匂いがきつい。

この中か。扉を開けると同時に印を組んで呪を唱える。

『風勢我に寄りて力を成し外法を除外せしめよ、廢呪、解毒、封緘せよ』

呪文が終わるやいなや突風が吹いて窓が大きく開く。するとその風はうずを巻き、部屋中に満ちていた香を香炉」と吹き飛ばすと部屋を覆つていた結界まで消した。

「カルラ久しふりだな、元氣そうでなにより

久しぶりに会ったふつうの兄弟のような挨拶をして、部屋に入ってきたトラシユにコリウスの印を組む手が止まる。

「トラシユ……いつからだ、バサラ」

「うーん、ほんの十日前くらい……かな」

ではこちらに来た時にはすでに成り変っていたということ。
驚愕するコリウスにおかまいなくバサラは田の前の球体に田をやる。

「さて、その檻を解して中の獣を返してもらおうか。一応私達の兄と呼ばれているばかが入っているのだろう? 禁術で作った檻はどうも私の呪法では解けないようだ」

畠にふいつと浮かぶと、足を組んでトランショの姿でバサラがにやりと笑う。

「それに入っているばかを返すから、それ持つて家に帰るっていう

のは無理だろううな

「そりやあ、無理だな。何年好き勝手させていたと思つていいんだ、

家出少女君

「少女じゃない！」

バカラは声を荒げる。ツカスの前にすとりと降りると、ぬりぐつ顔をめぐらす。

「そうかな？ 少女に見

「んて考えられないけどね」
ユリウスの顎を掴んで引き寄せるのをぱしつとココウスが払う。
「幼体……だと？」

「おまえの体の事だよ。今でも前のままであるな！」

「普通は遅くとも四、五十年も経てばどちらかの性に決まるというのに、おまえときたら今だにどちらでもない。……いやどちらでも変わる可能性のある体のまま。なぜかな?」

自分が気にしていぬ」とをすげすけと言ひバカラにこういふと云
リウスは返す。

「私が思うに……おまえは自分が女性になる」とを拒否しているくせに、男性化に背く想いを抱いているから……じゃないか？」
たゆたむ

「リーウスの背後にまわりこんで楽しそうに囁く。
ささや

「おまえもつぐづくひにいよね、ヴァイロンにいだわっていの

「ばかばかしい!」

ヨリウスが思わず大声を出す。

「クビラがばかだと思っていたがおまえも底なしのばかだ。ヴァイロンは私がレイモンドールに逃げ込むために利用しただけの男だ。

実際一緒にいたのだつて命わせても一年に満たない。それを、何だつて……」

「その通り、ヴァイロンはそれだけの男だ。しかもあいつが死んだのはもう何百年も昔だ。いくら私達が長生きだからって一途にも程があるというものだ。おまえ、女性としてヴァイロンに思いを告げたかったのじやないか？ それが原因だと思つけど」

バサラは最後に少しばかにした口調になり、ふんと鼻をならした。

「吟遊詩人があまえは。話を作るな！」

ユリウスが毒づいてもバサラは氣に^{いは}も留めない。

「いろんな女で試したがどの女も孕むことは出来なかつた。やっぱりおまえしかだめなようだよ」

言いながら、バサラがユリウスの背中に手を回す。

「何言つてる！ ハイラがいるだろう、この嘘つきめ！」

「あ、ああ……」

ユリウスの言に眉をひそめて、バサラはハイラの姿を思い出すと苦い顔をする。

「あれは……女どころか人の姿とも思えないじやないか。カルラ、おまえと私は特別だ。いいかい、よく聞いて、カルラ。他の奴らには触れさせない、私と共にベオークへ帰ろう。私が守つてやると言つただろう？」

甘い言葉を紡ぐバサラの腹にがしつと肘を打ちつけて、ユリウスがバサラから逃れる。

「ばかが！ 寝言は寝てから言え！ 自分の母親と寝てたくせに！ 何が特別だ！ 他の奴に触らせないだと？ 自分の血しか残したくないだけだろうが！」

ユリウスはが次々と術をとばすが、バサラは易々と防いでユリウスを追い詰めて行く。

「正直、兄上たちは鬱陶^{うつとう}しくて仕方がない。おまえがビカラの息の根を止めてくれたら良かつたのに。中途半端にしておくから後が大変だったんだよ」

ひょいとコリウスが飛ばした炎で出来た剣を頭を傾けて避ける。そして腰の剣を抜いてあつという間も与えず、コリウスの左腕ごと壁に突き刺す。

「ぐはっ！」

痛みに顔を歪めるコリウスに長い口付けをして、バサラはにやりと唇を上げる。

「痛いだろう？ 四百五十年前くらい前だつたか……確かに私も左腕を傷つけられて痛かつたな。あれはザーリア州城の地下だつたよね、カルラ！」

懐かしい昔話でもしているようにバサラが穏やかに言う。

囚われの君

「これで少しは解かつたんじゃないかい、人の痛みがわ」
「おまえは人なんかじゃないだろ。それよりあの時左腕を無くした
はずだ」

突き立てられた剣の場所から血が流れ、コリウスの顔から血の
気が失せていく。

「そうそう、両手が揃ってないと印も組めないし困ったよ。ベオー
クに帰つてどうしようかと思ってたんだが……丁度寝込んでいる奴
がいてさ」

くつくつと笑う酷薄な笑顔を見て。コリウスは、トラシュの姿
を纏ついても自分との相似を認めざるを得ない。

「ビカラの腕を……奪つたのか……」

バサラはコリウスに立てた人差し指を横に振つて否定の仕草をす
るが。

「奪つたんじやない。ちょっと借りただけさ。ビカラにはもう要ら
ないだろう。寝台から動けないんだし……ね」

言つている言葉は肯定している。

「あれどうした？ 気分でも悪いのかい？ 顔色が悪いが……」

壁に突き刺された左手を残し、崩れるコリウスを抱きとめてバサ
ラは剣を抜いた。そこへぱたぱたと軽い足音が近づく。

「兄様、クロードいました？」

アリストローザが部屋に走り込んで来て……止まる。

「兄様……？」

「おや、下で止められなかつたのかい？ 一人ともお楽しみに夢中
なのはいいが、鼠が入つて来たのに気付かないとは……やれやれ」
穏やかな声で話すのはいつもの兄だが。トラシュに抱かれてい
るコリウスの左腕からは血が流れ、トラシュ本人の持つている剣に
は、コリウスのものと思しき血がべつとり付いている。

「……兄様、ユリウス様はどうされたの……？」

「Jの光景を見てさえ、アリストローザはトラシュがユリウスを刺したとは思えない。おろおろと目の前の兄に尋ねる。

「ああ、ユリウスがいう事を聞かないものでね、つい口をにんまりとさせて笑うトラシュに、よつやくアリストローザも疑つような目を向けた。

これは兄の形をとつているが兄ではない。急に恐ろしくなつてアリストローザが後ろへ後ずさるのを追うようにトラシュが一步前に出る。

「あなたは誰なの？」

「何を言つてる、私はトラシュだよ、アリスト。父上に予定が変わつて私は、ユリウスとモンド州の廟に行くと伝えておいてくれ」

トラシュはアリストローザにそつ言い置いて、ユリウスを荷物のように肩に担ぐ。そして剣に付いた血を自分の上着で拭いて鞄に戻し、素早く印を組む。中央にある檻のことなどもはや眼中にない。トラシュの周りにぐるぐると風が巻き起こり、その渦の中に入つたままトラシュは大きく開いた窓から出て行った。

何なの？ 後にはぺたりと座り込んだアリストローザが取り残された。

「お前達、久しぶりで仲良く遊んでいるのもいいがそろそろ終わりにしなさい。モンドの廟に行く」

対峙している二人の間にユリウスを担いだバサラがふわりと降りて、振り下ろされた互いの剣を呪で弾いた。

「カルラ様、血が！」

ラドビアスが担がれているユリウスの垂らされた左腕の傷に気が付いて、手をだそうとするのをバサラが払い退けてユリウスをインダラに渡す。

「おまえにはやつてもらひつ事がある。竜門を開けて案内しろ、モンドの廟だ」

「……バサラ様」

躊躇するようにバサラから目を背けるが……がくりと首をうな垂れて観念したようにラドビアスは印を組んだ。

「アルベルト！ ルーファス！ サイロス！ 解せよ」

暗闇がぱっくりと口を開けた。

「じゃ行こうか、久しぶりだな……サンテラもいてカルラもいる」バサラが楽しそうに言うのをラドビアスは背中で聞いて、悔しそうに唇を噛んだ。

レイモンドール国^{（ナントラ）}の首都サイトスの主城。 その王の寝所にガリオールが佇む。

現王コーザルが二十七歳で即位してわずか十四年。 なんと短い在位か。 即位して直ぐに双子を授かった時点でこの王の治世は短いものになるとガリオールは思ったものだが。

普通は双子の成人を待つてからの崩御となる例が多いのだ。

まれに王があまりにも高齢で双子を儲けたときなど成人前に崩御する事があるが。 それでも魔道の加護に護られているのか、王は人間の寿命に逆らうように永らえる。 大抵は、双子が十七歳までになるまでこの世に留まるものなのに……わずか十四歳とは……。

今迄ここまで年少で『鍵』と契約を交わした王はない。 果たしてクライブ様は子を成すことができるのだろうか？ 今回は何もかも今までと違うようだ。

今朝から剣は幾度も姿を変えて『鍵』に戻り、陽炎のような空気の歪みが今も剣を取り巻いている。 ガリオールにとって要は王自身のことより『鍵』を何事もなく次の王へ引き継ぐことが大事なのだ。

このレイモンドールを今ある形で恙無く動かしていくことこそが彼の使命である。 王はそのための駒……重要な駒の一つでしかない。 王という器が大事なのであってその中身については王の血を

継いだ双子の一人なら顔ぶれが変わろうとあまり関係ない。何十年かでどうせ変わつていくのだ。

まあ、御し易い人物にこしたことはないのは勿論だが……。

「父上……」

クライブが心配そうに父親の手を取る。それを見て、自分の思いに埋没しかかっていたガリオールははつと意識を戻して先程の考えなど気取られぬように顔を取り繕つた。

新王の契約

「ガリオール、父上のお姿が……」

田の前で苦しそうな息をしている父親の顔から青年期の若さが消えていることに気付き、クライブがガリオールに助けを求めるようすがに縋る。

この人は……父上なのか……？ 赤味の強い茶色の髪に僅かに白髪が混ざり、田じりには昨日までは無かった皺がある……中年の男。

「クライブ殿、御氣を確かに聞いて下さいませ。陛下のお最後が近いのですよ」

ガリオールの言葉に、クライブは田を見開いて父親を見つめた。

「葬儀の前に祭祀を執り行います。殿下、御氣を強くお持ちになつて急ぎ魔道師庁の方へおいで下さい。祭祀のお召し物をご用意します」

茫然とするクライブを気遣いながらてきぱきと指示をとばし、クライブに魔道師を一人つけて支度のために部屋から出す。

「誰か、クロード様を魔道師庁の私の執務室にお呼びしなさい」

何度も繰り返してきた行事。しかし今回は上位の魔道師は呼び戻してあるルークとリチャードしかいない。魔道師たちに命じて意識を失った王を寝台から細長い輿に乗せ変えて魔道師庁へ運ばせる。自分は剣を箱」と捧げ持つて王の輿の後に続いた。その列にクロードが走り寄る。

「ガリオール、何？ 僕は何をすれば……」

ガリオールは小さい溜息をついて輿を行かせるとクロードに向き直った。

「陛下の崩御がお近いのです。祭祀を執り行いますのでクロード様も魔道師の方へお越し下さい。衣装は直ぐに用意させますからね」

言つて踵きびすを返すと剣を捧げ直し魔道師庁へ歩き、その後をクロードも追う。魔道師庁の最奥の双頭の龍の彫刻のある高い扉を開ける。輿より先に入ると、高い位置にある祭壇に剣を置いて出て来る。

「ルーク、リチャード手伝ってくれ」

「はいはい」

緊張感のないルークの返事に憮然とする。この自分と同期の魔道師は自分と同等の能力を持つているにも係わらず浮ついていて、一緒にいるところちらまで調子が狂う。が、主はルークを高くかつているようだ。ガリオールも腹蔵なく話せるのは王の半身出身の上位魔道師では無い、同期のルークだけなのだが……。

王を乗せた輿をルークとリチャードの二人で運び入れて、祭壇の前に設えた寝台に横たえる。この中には王と王の半身、祭祀をしきる上位の魔道師。そして新しく王となる者とその半身以外は入れない決まりだ。

現王の家族である王妃、長女であるマーガレット姫も入る事は出来ない。つまり王の死に日に立ち会えない。勿論これもガリオールが作った決まりなのだが。王の崩御に伴う『鍵』との契約を一部のもの以外に見せるつもりはガリオールには毛頭無かつた。王とその半身がその生涯で一度訪れる場所、始まりと終わりの場所。ガリオールは石畳の床に膝をついて王の寝台に付き添つている男を考え深気に見た。

同じ竜印を持つ魔道師だが、半身の事は長く生きてきた自分にもよく解からない。自分は元を正せば子沢山の農夫の子供だった。おそらくこの国の黎明期に魔道師庁に入ったもの達は自分と似たりよつたりだろう。

貧乏人の子が口減らしのために廟に連れて行かれたのだ……。

そこへ白い正装を纏つたクライブが緊張のためか青い顔をして入室し、その直ぐ後、うつむきかげんで王の半身と同じロープを纏つたクロードが入った。一人は、ガリオールが示した場所に膝をつ

いた。

「揃いましたか？ 閉めちゃいますよ」

相変わらず気の抜けるようなルークの声の後、ルークとリチャードがきつちりと内側から扉を閉める。と、同時に一瞬目を開けていられない程の光が、祭壇の上の剣から四方に飛びライブは手で顔を覆う。

「ご逝去されました」

ガリオールが静かに言つてルークを見た。それに気付いてルーグが弔慰を表すレーン文字の呪文を唱え、リチャードが印を切る。剣は『鍵』に戻り、ガリオールが押し頂いてライブの前に立つ。「これからライブ殿下におかれましては王となる為、『鍵』と契約を交わして頂きます。

『鍵』を膝まづいでいるライブに手渡す。

「『鍵』を顔の前に掲げてお持ち下さいまし」

大人しく『鍵』を掲げるライブにうなずいてガリオールは続ける。

「わたしのあとにつづいて同じ言葉を仰つて下さい
「我、汝と契約する者なり。血の契約をする者なり」

ガリオールが目で促す。

「我……汝と契約する……うつ……」

ライブが胸を押さえてうずくまる。驚いてガリオールが駆け寄る。

「どうしました？ お加減が宜しくないのでですか？」

「い、いや……大丈夫……だ」

苦しそうな声。

さつき、お会いした時は何とも無かつたが……。ガリオールも気にはなるが『鍵』との契約は後回しには出来ない。再度クラップに声をかける。

「もう一度お願ひできますか、殿下？」

「わ、解かった。……我汝と契約する……者なり……血の契約をす

る者なり

「変じよ、と」

「……変じ……よ」

最後は消えそうな声になつて『鍵』は掲げられるどころか右手に握りこまれて胸に押さえ付けられていたが『鍵』に変化がおこる。

「熱つ！」

火傷するかと思つほど熱さにクライブは『鍵』を取り落とした。『鍵』は形が曖昧になり……獸のような咆哮^{ほうこう}が辺りの空氣を震わす。世に新しい王が即位したことを知らせる龍の声と言われている。その後に『鍵』は龍が巻きついている美しい細工を施してある長剣に姿を変えた。剣の刀身には古い呪文が彫りこまれている。そして……竜を象つた美しい彫金の指輪になつて床に転がつた。蒼白で細かく震えているクライブの手に床から拾い上げた指輪をガリオールがクライブの右手にはめる。

「クライブ国王陛下、ご即位おめでとうござります」

クライブの体調が悪いため仰々しい言葉も無い。儀式もそこそこに王となつたクライブを祭祀所から退室させてガリオールは残された前王の半身に目を向けた。

「今からそなたはコーラルの名を与えられた。今日より上位の魔道師として魔道師庁のために力を尽くしてもらつ

ガリオールの言葉にコーラルは深く頭を垂れた。

「コーラルの名を頂き魔道師庁の末席に加えて頂き真に有難うござります。魔道師庁のために生々世世力を尽くします」

ガリオールはコーラルの言葉に満足してうなずくとクロードに視線を向けた。物事を肅々^{しそくしそく}と済ませたい性格のガリオールにとつて、仕方の無い事とはいえるいろいろ省略した今回の祭祀は不満が残る。だが、一応すべてやるべきものの核は恙無く終わり、ガリオールはほつと胸を撫で下ろした。

「クロード様、今から国王クライブ陛下付きの魔道師としてサイトスの魔道師庁に属して頂きます。この度は準備期間が無くて魔道師

としてのお勉強も中途で『ございましょうから続いてサイトスで学んで頂きます。……クロード様？』

あまりの反応の無さに言葉を止めてガリオールがクロードに近づく。

「クロード様？」

いつもならいちいちガリオールのいう事に反発したり、質問したり姦しいほどなのに大人しいというよりはまるで……。うつむくクロードの顔を両手で自分のほうへ向けてじっくりと見る。表情の無い顔、目の瞳孔が開いている、綺麗に切り揃えられた前髪が揺れた。

術にかかっている？

『解！』印を組んで大声を出すと、がくりと仰け反ってクロードが倒れるのをガリオールが支え起こす。ガリオールの腕の中でクロードは二、三度頭を振つて目を見開いた。

「ガリオール、祭祀は？ 父上はどうなつた？」

ごくりと喉を鳴らしてガリオールが呻いた。

「ライブ様でござりますか？」

「何を言つているのだ、ガリオール？」

言つてから自分の着衣に気付く。

「何で私がローブを着ているのだ？」

「申し訳ございません、失礼いたします」

王の遺体も畠然としているライブもその場に残したままガリオールが急いで魔道師庁から出て行つた。

「やられたな、何か企んでいると思ってたが……ルーク、ガリオールの顔見たか？」

いつものように軽口を叩くチャールズは深刻そうなルークの表情に驚く。

「クロード様は『鍵』をどう使つおつもりなのか、どう使ってしまうのかが問題だ」

灰色の瞳が心配そうにガリオールの走り去つた方を見据えた。

謀る者と人外の道

「クロード様！」

王の寝所に走り込んで来たガリオールの声に、今までに竜門を潜ろうとしていた少年が振り向く。

「謀りましたね」

ガリオールが苦虫を噛んだように言う。

「ばれた？ ごめんガリオール。でも、俺剣が要るんだ。ユリウスが待ってるから行くね」

クロードは言うだけ言うと竜門に消えた。今、クロードを追つてサイトスを離れるわけにも行かず。ガリオールは考えた末、ルークを呼ぶ。

「クロード様をお守りしてくれ、『鍵』と契約なされたのはクライブ様では無くクロード様だ。後から私もここをリチャードに任せて行く」

「じゃあ、お先に」

ルークがクロードの後を追いボルチモアへ向かつた後、ガリオールは脱力して長いため息をついた。長いレイモンドールの歴史の中でさえ、胸に竜印のある者が『鍵』と契约を交わした事など無かつた。そんな事を考える者が出て来る事さえ、今まで頭に無かつた。先程の体の不調は、竜印が成つた為だったのか……ちらりとも考えなかつた自分に腹が立つ。

しかし、竜印を持つということは主と繋がるということだ。

ガリオールをはじめ上位の魔道師たちでさえ、長時間『鍵』に触れていると体調が悪くなるというのに。あの少年がこの先どのくらい經典を身の内に置いておけるのか、誰にも解からない。さて……これをどうするか、問題は山積している。

ボルチモアの州城敷地内の小宮の中、へたり込んでいたアリストーザの目の前にぽつかりと開く穴。

何？ 魔道師が使うと言わわれている人外の道。 何でここに？ 穴の縁に手がかかり現れた人物を見てアリストーザが声をあげる。

「クロード、どうして？」

少年の後に灰青色のローブを来た男が続いて出て来る。

「ごめん、アリストーザ、どうもこうも、俺ははなつから魔道側の人間だつたんだ」

「私を騙していたのね」

アリストーザが噛み付くように言うのをやるせなくクロードは聞く。

「うなることは……解かっていたのに。」

「騙すつもりは」

言いかけてクロードは後の言葉を飲み込む。
無かつた……と言つつもりか、それは違う。 初めから騙すつもりだったのだ。

「ごめん」

それしか言える言葉が見つけられなかつた。 そして目の前に圧倒的な存在感で部屋にある球体に目をやる。

「あれは何だ？」

「何かは解かりませんが主の為さつた事であるのは確かでしうね」
首を傾げてルークがクロードに言う。 灰色の長い前髪が顔半分を隠して表情はよく見えないが自分の主を心配して眉根を寄せている。

「一体、ここでヨリウスに何があこつたのか？」

クロードの視線が床に投げられている剣を捉える。 これは、

トーマスの。 この中にトーマスがいる？ ではなくてトーマスに擬態した何者か。

クロードは急にアリストーザに腕を引かれてはつと後ろを見た。

「兄様が……いえ、あれは兄様じゃないかも。 とにかく兄様に化け

てた者がユリウス様を連れてモンドの廟に行くつて……窓から出て

「いたわ」

青い顔でアリストローザが言いにくそうに小さく言った。さつきの出来事は本当の事なのにこうして口に出してみるとなんとも嘘臭い作り話のようだ。

それとも今迄私、夢でも見ていたの？ それも性質の悪い夢だ。魔道師を排斥しようとしている兄が魔道師のように印を組んで、ユリウス様を攫つて窓から出て行くなんて。しかも、竜門からクロードが魔道師を従えて出て来るなんて。

「トラシユ様に擬態した誰か、ですね」

ルークが考えるように呟く。

「主が気付かない程、巧みに擬態できるとは？」

ルークの呟く声にクロードはインダラの姿を思い描くが。いや、インダラとトラシユは同じ時間別の場所に居た、となると別の誰かがこの国に入つて来ているのだ。だとしたらユリウスの兄弟の内の誰かかその直系の僕だろう。

トーマスとトラシユ、一人なのか、他にもいるのか。

「新しい血痕があります」

ルークの指差す方を見ると、柱にべつとりと血がついていた。

「アリストローザ、ユリウスは怪我をしていた？」

「……していたわ」

他でもない、自分の兄がそれをやつた事を、アリストローザは兄を別人と疑っていたにも関わらずクロードに言つことが出来ない。

「ルーク、廟へ行こう」

「はい」

竜門を開けるとクロードの後ろにアリストローザが走り寄る。

「私も連れて行つて！ 兄様を追いかけなくては」

「それは出来ない」

強く肩を押してクロードがアリストローザを押しとどめて顔を見る。きつぱりと言わされてアリストローザが大声を出す。

「私が足手まといになるつて言つの？ そんな事には絶対ならないわよ、クロード」

「そりじゃ、無くて……」

クロードがため息をついてアリストローザの両肩を持つて自分に向かせる。殆ど同じ背の高さの為、顔が真正面に来てアリストローザはどきりとした。

「竜道は人外の道だ。知ってるだろう？ 人は通れないんだ。俺は……俺は既に人ではないよ、その意味では。だから君には通ることが出来ないんだ」

「人で無いってどういう？」

アリストローザの頬に手を滑らせてクロードは再度、ごめんと言つた。

ルークが印を組んでルーファスを呼ぶ。

「ルーファス、ここからイーヴァルアイ様が何処の廟に行つたの？」

「ご案内します」

ルークの問いに聞き取りにくい風音のような声が答える。

「クロード様」

「うん、行こう。待つてアリストローザ」

二人が暗闇に吸い込まれるように消えてその闇も現れた時のようにふいと消えた。

残されたアリストローザはクロードの触れた感触を確かめるように自分のほおに触れる。

夢じゃないのね。兄だと思っていた者は誰か確かめるべくも無く姿を消す。また、好ましく思っていた年下の元気印の隣州の公子が、魔道師だと言い魔道師を従えて闇に消えた。私は今迄何を見ていたの？ この目に映っていたのはすべてまやかしだった

のか？では今迄私がやつてきた事は……？ そうだ。

「お父様、お父様にお会いしなくては」

今のアリストローザの困惑の淵から救い出してくれるのは父親しかいない。悪夢の中から現実の自分の見知っている世界へ帰る。その一心でアリストローザは主城へ急ぐ。父親が見せていたものも、己の見栄えのいい一面であることにアリストローザは気付いていなかった。

尋問（前書き）

この回はやや残酷な描写が入ります。ご了承してお読みください。

モンド州、ゴート山脈の廟。

ヴァイロンが命からがら山脈にあるハンゲル山にイーヴァルアイと会った五百年前は、長大な岩肌を掘り込んで造られた廟が一つきりあるだけだった。その後、長年に渡り次々と大小の廟がゴート山脈に建てられて、今ではモンドの廟と言えばゴート山脈一帯を指している。

「起きろ、カルラ。着いたよ、起きて」
昼夜をしている子を起こすよつに揺さぶるとコリウスが薄田を開ける。

「うるさい、寝かせる」

「ふーん、寝起きが悪い子はお仕置きだな」

優しく言う言葉とは裏腹に、田を開じるコリウスの左腕の傷口にバサラが指を突っ込んだ。

「ぐはっ、や、やめ……」

上がるコリウスの悲鳴。

「ほら、目が覚めたろ？ 起こすの得意なんだ」

笑いながらバサラが血の付いた指をぺろりと舐めた。

「この……変態野郎！」

痛みに引きつりながらコリウスが悪態をつく。

この二人は本当に何から今までよく似ている。ワドビアス

は密かにため息をつく。

顔形は勿論の事、しゃべり方、思考傾向まで双子のよさに似ている。しかし、バサラがカルラのことを交配相手と見なしている以上、決して相容れる事はこの先無いのだろう。

「何を深刻な顔をしているんだ、サンテラ。晩飯の心配なら鹿肉の煮込みがいいな」

物思いに沈んでいたラドビアスにバサラが言つ。

「今晚はそんな手の込んだ料理は無理です」

ラドビアスの律儀な応えに、からからと楽しそうにバサラは笑う。
「カルラのことが心配か？ ほら見てみる。傷口がもう塞がりかけ
ている。私達の体がそんなに柔な体じやないのを知つていてるだろ？
？」

バサラがコリウスの左腕を持ち上げてラドビアスに見せる。

「まあだけど痛みはそこら辺の人間と同じだ。いやどうなのかな？
そう思つてているけど……血も流れるし……だからこそこうする事
に意味がある」

言つと同時にコリウスを押し倒すと、今度は右腕に剣を突きたて
る。

「うぐっ！」

「お止めください！ バサラ様」

とび出したラドビアスを、インダラが後ろから羽交い絞めにして
止める。

「手をだすな、サンテラ」

「くっ！」

何をされても生きてさえいればと思っていたが、思いの外自分は
耐えられそうに無い。

「カルラ、もう右手も封じたよ。今度はどこがいい？ 要望は喜ん
で挙聴するが」

我が弟、いや妹か……カルラは剣術、体術が出来ない。それは
意図して自分がその機会を奪つたからだが。自分の影響下から抜
け出した後も習得しなかつた事はこの際、福音だらう。それでや
つかいな禁術を繰り出す両手を止めてしまえば簡単に攻略できる。
「じゃあ、おまえの首を」

コリウスの返事に生徒を叱る先生のように言つ。

「今のはダメだな。面白くない、減点一だ」

後ろに顔を向けて叫ぶ。

「インダラ、おまえの剣を貸せつ」

バサラの声に後方でラドビアスを押さえ込んでいるインダラが腰からレイピアを抜いて放つてよこす。

「無精者が！ 主人に投げてよこす奴があるか。カルラも私もろくな僕を持つていねいな」

ひょいと受け取ったレイピアでユリウスの左太腿をついと突き刺す。

「ああつ」

「経典はどこにある、カルラ」

「……鼻嘔んで捨てた」

「うつ」

バサラが右の太腿にレイピアを刺し替えた。

「おまえ言つてることがどんどん面白くなくなつているぞ。残念だな。また減点だ」

言いながら一度、三度と頬を張る。

「経典の場所はどこだ？」

「……バサラ、おまえさつきから同じ事ばかり言つて……呆けたんじやないのか、くそじじい」

バサラがユリウスの顎を掴んで目を細める。

「カルラ……もしかしておまえ楽しんでる？ 実を言つと私もちょっと楽しんじゃつてるけどそろそろ遊びは終わりにしないか？ 母様に遊びは一刻だけといつも言われていただろ？」

太腿から抜いたレイピアをゆっくり右の胸に刺していく。「ぼ

」ほど空気の漏れる音がしてユリウスの口から血が流れ落ちる。

「……おまえは……母様と一刻以上……遊んでいただろ……ぼけ」

ふん、鼻を鳴らしてバサラが無造作にレイピアを抜く。

「次は左だけ言わないんじゃ仕方ないな」

芝居^{ためらい}がかつた仕草でレイピアを上段に構えると躊躇い無く振り下ろした。 が、そのレイピアはインダラを振り切ったラドビアスの剣が弾いた。

「お止めください、バサラ様。カルラ様を殺すおつもりですか！」

「……サンテラ」

ラドビアスの剣幕にバサラが踏みするように見つめる。

「おまえはカルラにとって虜囚の価値があるのか？」

「ありません」

ラドビアスが短く応えた。

「ふーん、これでは埒^{らち}が明かない。カルラも私も自分以外心を寄せる者がないとは泣けるな」

バサラはレイピアをからんと放り投げるとコリウスの右腕に刺していた剣を抜いて腰に戻し、ざつと廟の中をざつと見回して白墨を見つけて掴むとその場にしゃがみ込む。

「仕方ないな……それとも初めからこうすれば良かった？」

ぶつぶつ言いながら魔方陣を描いているバサラに、やれやれとインドラが呆れたような顔を見せる。

「だつて、楽しんでらしたじゃないですか」

「まあね」

さらさらと描きあげると立ち上がりつてラドビアスに声をかける。

「真ん中に寝かせる。線を消すなよ」

ラドビアスが魔方陣の真ん中にコリウスを降ろして下がつたのを、バサラがばかにしたように見る。

「おまえ、最低の僕だな」

呴いてバサラは印を組んで呪を唱える。

『我に寄りて力を貸さんとせよ、捕縛、落手、剥縛、おまえの口蓋の主は私だ』

血の氣無く仰向けに横たわるコリウスの胸倉を掴んで上体を起こす。

「経典の在り処を言え！」

コリウスが口に溜めていた血を吐いてバサラの顔にかかる。

「経典の在り処だ、カルラ」

苦しそうに口を閉じようとするがコリウスの口が勝手に動く。

「……王に……王の体に封じてある……」

「バサラ様」

バサラとインダラが顔を見合す。 大きく舌打ちしてコリウスの体を突き放すように床に落とすとラドビアスに命ずる。

「竜門を開ける、サンテラ！ サイトスだ。インダラ、カルラを頼む」

「はい」

ラドビアスとバサラが竜門に消えて、インダラが思いついたようにコリウスに屈み込む。

「そうでした」

コリウスの口に手のひらを置いて術を解く。

『解!』

「寝台にお連れしますよ」

インダラが抱き上げるが、コリウスの反応は鈍い。

本当にバサラ様も遊びが過ぎる。 カルラ様が死んでしまつていたらどうするつもりだったのか。 軽くため息をついて部屋を出るが……。

「はて、寝室は一体どこでしょ?。 聞こいにもここに居た魔道師は全員殺してしまったし。 私も主と同じですね。 考えが足りない」
くすりとインダラは笑みを浮かべた。

インダラの首

「ルーク、ユリウスが今命の危険にさらされているんじゃないかな
「お解かりですか、クロード様」

モンドの廟の一つに姿を現した一人は沸きあがつてくる不安を共有していた。それはユリウスと竜印で繋がっている所為だつた。
『変じよ』クロードの言葉に指輪は姿を変え、長剣となりクロードの右手に収まる。そして目の前に広がる廟の中の有様に気付いてうつと呻いた。廊下には何人もの魔道師が血を流して絶命している。生臭い匂いの中死体を踏まないよう歩いて行くと、部屋の大扉が開いている場所にたどり着く。そこには大量の血痕と魔方陣が残されていた。

「この魔方陣は收奪(しゅうだつ)の形ですが」

ルークの言葉にクロードは頭を巡らす 収奪？ 何を……あ、そうか、ユリウスから経典の場所を術で聞き出したのだ。サイトスに向かつたのか。クラ입의身に危険が降りかかる。助けなきや、でもその前にユリウスは何処だ、サイトスか、いや違う。

クロードが『鍵』に命ずる。

「おまえの宿敵はどこだ」

クロードは剣に導かれるまま廊下に出でてある部屋の前で止まる。

「誰です、まだ生きている者がいたのですか？」

中から聞き覚えのある声がして、クロードはルークと左右に分かれて部屋に飛び込んだ。戸を開け放ったクロードの目に飛び込んできたのは寝台に寝かされている白い陶磁器のようなユリウス。そして、その横に座っているインダラの姿。

「何してる」

「クロード様、今カルラ様の傷の手当てをしておりました」

クロードが寝台に近づくと、ユリウスは服を脱がされて両腕と両足に綿布を巻かれている。それ以外一糸を纏わぬ血の気が無い体

の胸元に空いた刀傷にクロードは驚く。

「誰がこんな酷い事を」

「申し訳ありません、主が少々やりすぎたみたいで」
言ひながらインダラは、傷口を手で触れながら呪を唱えて綿布で巻いていく。

その綿布を奪つよう取り上げると、ルークはきつぱりとインダラに宣言する。

「あの処置は私が致します。その手をどけて下さい。主の体に触れた感触も見た記憶も返して欲しいくらいです」

「インダラ、おまえは俺と片をつけるんだ。外に出る」
クロードがインダラに言つて部屋を出る。

「ふふ……片をつける、ですか。いいんですかそれで」

寝台の傍らに立てかけてあつたレイピアを取り上げて、インダラは立ち上がって薄く笑つた。

「死んじゃいますよ、クロード様」

「うるさい、来い！」

廊下に出たインダラにクロードが打ちかかる。レイピアの根元でクロードの刀を受けてインダラの顔色が変わる。

「これは、護法神の」

へへっクロードが笑う。

「そういう事！ 契約したのは俺で」

再度、上段から切りかかる。

「経典があるのも俺の中だ」

インダラは思いの他鋭い太刀筋に間一髪避ける。
真横から振り出された剣にレイピアを飛ばされた。
早く飛びのいて壁に刺さったレイピアを引き抜く。

成るほど、護法神に護られているということか。以前と同じと見てびつているところちらが死ぬな。インダラが印を組んで呪を唱える。

『夜陰、下弦、闇路を通り彼の者を行く手を阻め』

間を空けずに
インダラは素

「インダラ、覚悟！」

剣を構えて走り込もうとしたクロードの体に黒い糸のような物が巻きつぶ。 後から後から絡み付いてたちまち身動きが出来なくなつた。

「うわあ、気持ち悪い」

「失礼ですね、それ私の髪ですが」

余裕の表情を見せてインダラが近づいて行く。 クロードが魔術においてまだ未熟で助かつた。 にまりと笑いながらレイピアをクロードの胸に狙いをつけて構える。 そこへ古いレーン文字が流れる。

『解！ 焼尽せよ！』 大きく呼ばわる声にインダラは身を伏せた。 その上を火炎のかえんがえんの竜が口を大きくあけて飛び、クロードの体を包みこんで燃え上がつたあと一瞬で消えた。 クロードに巻きついていた髪だけが焼け落ちてクロードの足元に灰になつて溜まる。

「ルーク、助けてくれて嬉しいけど俺まで焼けるかと思つたよ」

「クロード様は『鍵』に護られておいでなので、まあ大丈夫かと思いましてね」

思つたつて……大丈夫だと知つてたわけじゃないんだ。 あきれてクロードはルークを見た。 ともかく。

「足りない魔術は助つ人が来たよ、インダラ」

上唇を舌を出して舐めてクロードはびりつとした痛みにうへつと声をあげた。 まったく無傷とはいかないか。

「そちらが火ならこちらは水でいきますか」

インダラが早口で呪を唱える。

『龍神降臨し我に力を与えよ、濁！ 爆！ 撃！』 押し出すように組まれた手から龍の形を取つた水流がクロードに向け噴射される。 宙にレーン文字が手早く描かれる。 盾と風、勢い。

『冷滅すべし！』

ルークの呪文が風の盾となり、それに当たる側から水流が凍つていぐ。

「クロード様！」

ルークの声を合図に氷の間を潜つて、クロードはインダラの懷にとび込む。クロードの剣は、インダラの印を組む手」と腹まで刺し貫いた。

「ぐはっ！」

どうつと腹に剣を刺したままインダラが倒れる。

「返してもらひよ、インダラ」

足で支えてクロードは両手で剣を引き抜く。そこへルークの声がかかる。

「ちやつちやつと首を刎ねて下さい」

クロードはきくりとルークを見返す。

「竜印のある者はめつたな事では死にません。その者にもあるのでしょうか？」

この一見優しそうな笑みを浮かべている男も間違いなく、ユリウスの僕なのであった。

「私は剣が使えませんので」

「こうじうところもヨリウス似なのか。汚い力仕事はお願ひねど、後ろへ下がるルークにくそつと思いながらクロードは剣を頭上に構える。そして剣は過たずインダラの首を刎ねた。ヨリウスより長生きしていたバサラの従者の首が転がるのをクロードは目で追つた。

「ルーク、ヨリウスについていて。俺はサイトスに行く」

「お一人ではあまりに危険です」

「ヨリウスを一人にしとけないだろ、クライブが心配だ」

「それはそうですが」

ルークをヨリウスの所に行かせて、クロードが竜門を開けようと印を組んだところに声が……低いハスキーナ声がした。

「もうおまえがサイトスへ行く必要はないよ、クロード」
田の前に開いたばかりの竜門からトラシュの姿がゆっくりと現れた。

「ずるいな、おまえが王になつたんだって？ 行つたり、来たり手間をかけさせるなよ、クロード」

「おまえ誰だ、クライブとガリオールをどうした？」

「ああ、不意をついて術をかけて口を割らせたんで、何も手荒なことはしてないけど。あ、術を解すのを忘れた、かな」

男はにやりと笑つて印を結んだ。

「私も術を解いておこう。この男の体は動きにくい」

背中がぱっくり割れて蝉が脱皮するように中から男が姿を現わす。古い衣服を脱ぎ捨てるように男の体を横に払つた。

「この体では初めまして……かな、クロード。カルラのいや、ユリウスつて名乗つてたんだつたな。兄のバサラだ」

クロードはぐくりと唾を飲み込む。亜麻色の軽くウェーブした髪を緩く結んで背中に垂らし、インダラと同じようなハオタイ風の片側に合わせのある服を着ている。そのバサラはあまりにユリウスに似ていた。細いがユリウスより幾分しつかりした卵形の顔に細い弧を描く眉、美しい水色の瞳の一つ一つが似ているが少しづつ違う。彼はバサラは大人の男の顔形なのだ。体つきもすらりとしているが華奢では無い。程よく筋肉のついた剣術も体術も得意な男の体だ。口の端を吊り上げて笑うその様はユリウスそのものだが。

「あれ？ 私の僕はどこですか、クロード？」

クロードが無言で指差す方をバサラが田で追う。

「あらら繫げるの大変なんですよ。まあいいでしょ、あと一仕事終えたらベオークに帰れますから許してあげましょう。この件は」

につこうと笑つて自分の腰から剣を抜く。

「だからさつさと経典を寄せ、くそがき！」

バサラの声が合図になつてクロードも剣を構えて走り出す。上からクロードが振り下ろした剣をバサラが剣で打ち返しそま左手に持つていたダガーでクロードの肩を刺す。

「痛つてえ！」

クロードが肩を庇つて後ろへよろける。

「そりやあ痛いだろうよ、私は一刀流なんだよ、クロード」
バサラは流れるような動きで瞬時にクロードとの間合いを詰める。右手の長刀で胸を狙つて切りつけながら、クロードが長刀に気を取られている隙に左手のダガーで下弦から切りつけてくる。対峙してまだ間がないのにクロードはもう息があがつている。

「何、はあはあ言つてる？　おまえの師はカルラだからなあ、運動不足なんぢやないか？」

対するバサラは笑う余裕をみせて呪を唱えると、すいつと田舎を駆け上がるようにして体を浮かべて立つ。

「今はダガーしか体に当ててないけど次はこつちでいくよ、クロード」

見せびらかすようにバサラが斜めに構えてみせた。

「刀身が波打つているだろ？　フランベルジュというのだよ、これで斬ると傷口が塞がりにくく、殺傷能力に優れていると言われている。解かつたかい？」

バサラは言い終わると同時にクロードの頭上からフランベルジュを振り下ろした。クロードはその剣を受けずに転がつて避けた。床に剣を打ち付ける大きな衝撃音がしてバサラは床に着地をすると、今度は低い姿勢から足を踏み出しながら横様にフランベルジュを振り抜く。

その横からの斬撃にクロードはようやく剣を合わす。そして左手から繰り出されたダガーは後ろから来たラドビアスのダガーによつて止められ弾かれた。

「おい、今度はそちら側につくのかサンテラ、せわしない奴だな」
まつたく、バサラは呴いて剣を腰に収めると印を組んだ。

『我 召喚する者成り招魂！ 招請！ 招来！ 雷公羅漢！』

唱えられた呪文を聞いて、ラドビアスがクロードの服を掴んで目の前の部屋に飛び込む。

「何、何だよ」

クロードの問いが終わらぬ間に、もの凄い音と振動が廊下を伝わつてクロードがいる部屋まで振るえさせた。

「バサラ様が雷公羅漢しゃくかんを召喚したようです」

ラドビアスがクロードに言つ。

つて、説明になつてない。

「雷公羅漢らいこうらいかんつて何？」

クロードは戸を少し開けて外をつかがつ。そこにいたのは異国風の黒い甲冑を着た大男。男が大太刀を振るい、その度に稻妻が走り雷がそこら中に落ちている。クロードは閉まらない口をあわあわとさせながらそつと戸を閉めてラドビアスをみた。

「あれは反則だろ……何、あれ」

「あともう一体別の羅漢をバサラ様は召喚できますが」

「こっちも何か無いの？ ラドビアス、なんか持つてない？」

「持つてるわけないでしょ」

だよね。がっくりするクロードが壁に背中を預けて座つた

目の前に、竜門が開きコリウスを抱いたルークが出てきた。

「おい、何で今ここにコリウスを連れてくるんだ」

「うるさい、私の言つとおりにしろつ」

相変わらず苦しそうなコリウスにクロードは気が気でない。

「何するつもりだよ、勝てるの？」

「勝つんだよ、ぼけつ」

コリウスが唇を吊り上げるのを見てクロードはあと天を仰いだ。

「おまえが『鍵』を継いだと聞いたが、そなうこちからこも勝算は充分ある。降ろしてくれ、ルーク」

気遣いながらそろりとゴリウスをルークが立たせると、ゴリウスが覚束ない足取りでクロードのところにやって来て、思わずクロードは立ち上がってゴリウスを抱きとめる。

「少しこのまま、じつとしていろ」

ゴリウスはクロードの胸元に手をやつてレーン文字の呪文を唱えた。

『魔王の書、閲覧、開示せよ』言ひてクロードを見る。

「魔經典、第五十章、第三節だ、クロード」

俺？ コリウスの声に驚く間も無く頭の中でぱらぱらと勝手にページが捲られるイメージにクロードは飲み込まれる。そしてクロードの口について古の言葉が流れて最後にある名前を叫んだ。

『アウントウエン！』

大きな声で言つておきながら何の意味か解からない。 とまどいつクロードの足元近くの床がぼこぼこ泡だつて解けた溶岩のように変わる。 むつとするほど周りの空気が暑くなり、クロードはその場所から飛び退いた。 そこから赤い塊かたまりがざりざりと姿を現すと、ぶるぶると体を震わせたため、そこらじゅうに溶けた石が飛び散る。慌ててクロードは出来うる限り距離を取つた。 姿を現したのは、大型の狼のよだんな姿。 背には大きな翼を持ち、床を打ち付ける尾は鞭むちのようだ。

「おまえが…… アウントウエン？」

クロードの呼びかけに小さく炎を吹いてアウントウエンが応えた。

「行け！ おまえの主に仇名す者を始末しろ！」

クロードの開けたドアを一回り大きく破りアウントウエンが走り出て行く。 大きな衝突音がしてその後獸の吼ほええ声が反響する。

「あいつらは放つておいてクロード、私達はバサラを捜すぞ」

「うん、だけどコリウス、經典の中身全部覚えてるのか」

「まさか、どこに何が書いてあるかぐらいしか覚えてない」

ぐらりってそれつて凄い事じゃないか。 クロードはコリウスの頭の良さに改めて舌を捲く。

「とにかくクロードの体に經典が封じられているのは好都合だ。 今まで私の自由に中をのぞく」ともままならなかつたからな

「コリウスはにやつと笑う。

と、いう事は結界術も何も護法神が追いかけてくる前に納めた以降、コリウスは何百年というものの経典を開いていないのだ。

そんな奴に凡人の俺の勉強の悩みはこの先解かることはないだろつ。

クロードの緊張感の無い思いなどコリウスは氣にもかけず、次の呪文を唱える。

『閻王の書、閱覽、開示せよ』

「クロード、魔經典第三十八章、第十五節！」

またもやクロードの頭の中でページが捲られる。 続いてクロードの口から発される古い言葉、そして頭のなかに現れる名前。

『サウンティトウーダ！』

クロードの声に応えて敷かれた石板を突き破つて勢い良く姿を見せたのは、先程と違つて黒い塊。 大きく伸びをして体を伸ばすとその大きさに驚くが、その姿もクロードには珍しいものに映る。大陸の南に棲むと言われているワニのような顔。 その頭には立派な角が一本あり、体は硬そうな鱗うきのいがびっしりと生えている。 その四肢には蹄ひづめでは無く鋭い爪が石板にくいこんでいる。 鱗に覆われている尾の先には鋭い棘があり、なんとも恐ろしい外見だが前足を二、三回かいて大人しくサウンティトウーダは伏せの姿勢を取つた。「クロード、乗れ、ルーク、私をクロードの後ろに乗せろ」もつとつるつる、ぬるぬるしているのかと思ったがサウンティトウーダの背中は以外にすべらかで安定していた。

「クロード、首にしつかりつかまれ」

コリウスはそう言つてクロードの腰にしがみ付くが、痛むのかうつと小さく呻いた。

「大丈夫、コリウス？」

「うるさい、それよりサウンティトウーダの体のどこかに逆鱗げきりんがあるらしいから気をつける」

え？

「それって具体的にどこら辺？」

「……知らない

ええつ？

「私はアウントウエンもサウンティトウーダも今迄召喚した事など無い」

きつぱりとココウスが言ひ。

「行くぞ」

コリウスが懐から一本の髪の毛を取り出す。

「サウンティトウーダ、この髪の持ち主を探せ」

長い首を回してまえに突き出された亞麻色の髪をぱくりとサウンティトウーダは飲み込むと立ち上がった。

「ラドビアス、ルーク後から来い」

クロードは自分の腰に回されたコリウスの腕に巻かれている綿布に血が新たに滲んでいるのに気付く。　まつたく、元気そうに装っている割にはあまり時間はかけられない。

しかしクロードの気がかりも何も、サウンティトウーダが走り出したことでクロードの頭から消え去る。　今も戦っている雷公羅漢とアウントウエンを避ける為に、廊下の壁を激走している所為だ。廟の1階の大きい吹き抜けになつてているホールにサウンティトウーダが降りたときには天地がどうなつているのか暫く定かではなかつた。

そこへかけられる、低いハスキーナ声。

「凄い物を出してくれるじゃないか、カルラ」

ホールの最奥で印を組みながらバサラが立つてゐる。

『我召喚する者成り招魂、招請！　招来！　風公羅漢！』

あつという間もなく竜巻がホール中央に出現し、あまりの暴風にクロードが目を閉じた後、がちゃりと金属が床に当たる音がしてクロードは目を開けた。　髪を逆立てたこれまた雷公羅漢と同じよう

な甲冑を身に着けた大男が鎖鎌を携えてまさに仁王立ちしていた。

そこへ、バサラの声がホールに響く。

「そこのトカゲを排斥せよ！」

思いの外、素早い動きで鎖鎌が飛び、サウンティトウーダの首に巻きついた。 対するサウンティトウーダが唸りをあげながら風公羅漢につっこんで行く。

クロードはユリウスに腰を掴まれたままサウンティトウーダから転がるように落ちた。

「あ痛つ」

落ちた衝撃に顔を歪めるユリウスに手をかけて大丈夫かと言おうとしたクロードは、床の石に描かれている模様に気付く。 僕達は大きな魔方陣の中にいる。

『変化！ 変質！ 変転せよ！ 石岩、遡及し水をたたえよ！』

バサラの声とともにクロードとユリウスがいる敷石の床が、ぐずぐずと崩れて水が溢れたと思う間にユリウスを飲み込む。

「コリウス！」

クロードが腰まで水に浸かったところにバサラが水から少し上あたりを歩いて、クロードの前で止まるといぐいとクロードの手を掴んだ。

「羅漢出した後、お前達が隠れている間に何も仕掛けてないとでも思っていたか」

バサラが楽しそうにクロードに笑いかける。

「助けてやるからカルラに降伏するようにおまえから言ってくれないかな」

「誰が！」

「そんな事言つていいの？ 手を離しちゃうよ。それにカルラもう引き上げないと、いくら私達がしぶとくても術を使わずに水の中に長時間いたら死んじゃうよ。傷も開くしね」

言いながらバサラは満面の笑みを浮かべる こいつ、楽しんでいやがる。しかしこんな時の顔もこいつはユリウスに本当に似て

二〇一九年九月三十日付のクローリーの手紙

クロードの返事に満足そううなずいてバサラは、そのまま片手でクロードの全身を引き上げると腕を掴んだまま魔方陣の外へ連れ出すとすとんと降ろす。

「じゃあ大人しくね」

バサラはクロードの口に手を触ると印を組む。

『閉塞せよ』縫いとめられたように口が動かなくなり、クロードは念じて『鍵』を剣に変えようとするが『縛せよ!』バサラの声に体が硬直する。

「大人しくしろって言わなかつたか、がき!」

クロードはバサラに腹を蹴られて転がる。

「おまえに説得させるのは止めた、面白くないからな」

バサラは踵きびすを返すとすたすたと魔方陣のほうへ歩いて行く。膝をついて水の中に深く手を差し入れると、水音を立てて白い手首を掴んで一気にユリウスの体を引き上げて抱き上げた。

「起きろよ、カルラ。おまえがこんなに昼寝好きだとは知らなかつたよ」

ぐつたりしているユリウスに大きく一回、二回と平手を打つ。

「ぐはっ」

水を吐いてユリウスがげほげほとむせたように息を吹き返す。

「やつと起きたか、おまえには聞くことがある」

そのままずぶ濡れのユリウスを横抱きに抱えて立ち上がると、バサラはクロードを降ろしたほうへすたすたと歩く。

「昔からおまえは甘えん坊だが抱っこばかりしていたら抱き癖がつくというからな、これで止めだ」

バサラはどさりと放るようにユリウスを降ろした。そして横のクロードに人指し指を立てる。

「そこで大人しく待つてろよ、クロード。すぐに相手をしてやる。

順番は守らなくっちゃな、おまえはカルラの次だ「

バサラの目がユリウスへと向く。

「おまえが強情なのは解かつたからもう遊びは無しだ」

ユリウスのローブの胸倉を掴んで引き寄せると呪を唱える。

『我に寄りて力を貸せ、捕縛！ 落手！ 剥縛！ おまえの口蓋の主は私だ』

「カルラ、クロードの体に封じている経典を解す方法を言え」

「……」

「カルラ、答える」

「……外縛印、外獅子印……被申護身印」

「呪文は？」

『フェフュー ウルズ スリサズ アンスル ラドワイン ハガルニイド イス』

ユリウスの言葉にバサラの眉間に皺が寄る。

「それは爆する事に関係している呪文だろ？ カルラ、おまえって奴は」

吐き捨てるようにバサラが言つと、ユリウスが閉じていた目を開けてにやりと笑つた。

「ばれたか、やれば良かつたのに。今のは自爆の呪文だ、私だつて同じ手を何度もくらうものか。反呪の印をさつき体に焼き付けたらバサラ、おまえの呪は私に効かないよ」

「くそつ！」

ユリウスの胸倉を掴んだまま体を床に打ち付けるようにして離すとバサラは立ち上がつた。

「取り出せないならクロードじと消してやる」

「そんな事、護法神がクロードを守るぞ」

ユリウスに右から拳をくらわせて黙らせるとバサラは顎に手をしてクロードを見る。護法神はクロードを守っている、ではなく護法神は経典を守っている。

「もし、クロードが自ら死のうとしたらどうなる？ 体が残つてい

るなら次の体へ封じられるのをまたばいいが、自爆しようとしたら。護法神は止めるかな、試してみるか。カルラ、おまえはどう思う?」

バサラがクロードに近づく。

「大人しくしていたかい、クロード。順番が回ってきたよ『解!』解したその手で新たに印を組んでクロードの口に触れ、腕を取る。

『我に寄りて力を貸せ、捕縛! 落手! 剥縛! おまえの口蓋と両手の主は私だ』

クロードが必死で抵抗しようとするが両手も口も自分のいう事を聞かない。

「外縛印、外獅子印、神申護身印」

バサラの言葉どおりにクロード手が印を組む。

「クロード、私の後に続いて唱える」

『フュイフュー ウルズ スリサズ……』バサラの後にクロードの声が続く。

「止める、バサラ!」

ユリウスが耐え切れず声を上げて呪文が途切れる。

「何だ、今大事なところなんだけど」

バサラが軽い調子で返す。

「クロードから経典を取り出すから……もう止める」

苦しそうに吐き出された言葉、それは体が不調な為ではない。諦めたような声。

「そうか、へえ、そうなのか」

バサラがゆっくりとユリウスとクロードを交互に見る。

「クロードが大事なんだ。妬けるな、まあヴァイロンに瓜二つだものな、この子供は」

バサラが笑みを浮かべてユリウスの手を取る。

「じゃあクロードもベオークに連れて行こう。おまえが望むなら愛人として一緒に暮らしてもいいさ。私は寛大だからな、ヴァイロンはいくつの時おまえと会ったんだつけ。確か二十歳をいくらも超え

てないくらいだったよな。竜印を解してヴァイロンと回じへりこの歳になつたらまた竜印を施せばいい

楽しい計画を披露するように喋るバサラにコリウスは眉根を寄せ

ながらもようよう立ち上がつた。両足から新たに出血してローブの下から落ちて床に広がる。

「バサラ、私を支える」

「了解」

楽しそうに両腕をユリウスの脇の下から差し入れて後ろから支えるように立つ。

「クロードにかけた術を解せ、経典の中身が要る」

支えられても辛いのかコリウスの声は細い。それに対してもバサラは上機嫌で頷くと印を結んでクロードを自由にした。

『解!』

「バサラ、三ばつ耶印、不動根本印、外獅子印」

「クロード、闇王の書閲覧、開示せよ、魔經典第九十一章、第一節だ」

バサラが素早く印を組んでクロードを見る。

「……」

黙つたままのクロードを訝しげに見てバサラが怒鳴る。

「呪文を言え、クロード」

バサラは前にいるユリウスが小さく呪文を唱えているのに気付いてはつと離れようとするが印を組んだ手はそのまま一つになつたようには離れない。

「この後に及んでまた、謀つたな、カルラ!」

悔しそうなバサラにユリウスは薄く笑う。

「経典は九十章で終わりなんだ、その手は離れないよ、バサラ」
言いながらユリウスは床を指差す。自分の血で描いた魔方陣が二人の足元に広がっている。

「いつの間に」

「さつきの呪文ですよ、さつき倒れていた時に呪をかけていたのを

さつきの印で完成させたんだ」

ゴリウスはバサラの組んだ手に自分の手を重ねる。

「バサラ、あなたの弟としてなら一緒にいて差し上げますよ。だから一緒に逝つて下さい」

ゴリウスがかすれ気味の大声を出す。

「クロード、約束を覚えているか」

クロードがぐくりと頭を下げる。

「今が、その時だ、やれ、クロード！」

クロードは『鍵』に命じる。『変じよー』『鍵』は剣に姿を変えてクロードの手に収まる。

「俺は、ゴリウスを助けようと思つて……こんな事するためじゃない」

「私を助けたいのなら殺れ、クロード、私を助けてくれ」

「クロード！」

ゴリウスの懇願する声にクロードは右手の剣を両手でしつかり握りこむとそのまま一人に剣の切つ先を向けて走り込む。自分の体重をかけてぶつかるように剣を突き刺す。ずぶずぶと肉を貫く音と感触が剣を通してクロードの手に伝わる。

「ぐはっ、このがき」

バサラが呻いて血を吐いた。

結界消滅

ホールの入り口で先程まで羅漢らと戦っていた魔獣に加勢していたルークとラドビアスが走り込んで来て目の前の光景に悲痛な声を上げる。

「カルラ様」

「イーヴァルアイ様」

深々と剣の根元まで差し込んでいる為に向かい合つような位置にいるクロードはそのまま体が固まつたように動けない。

「ユリウス、嫌だ、こんなの」

自分が刺しているのにまるで自分も一緒に貫かれているような痛みをクロードは感じて手を離そうとするがその手はユリウスが伸ばした手が掴む。

「ユリウス、離してよ、俺、ユリウスが死んじゃうなんてやつぱり嫌だ」

嫌々をするように首を振るクロードの口にもう一方の手を当てるユリウスが苦しそうに息を継ぐ。

「悪かつたな、おまえに嫌な役を頼んで……でもおまえしか頼めなかつたんだ。約束を守ってくれて私は嬉しいんだ……おまえはやっぱり頼りになる奴だ……クロード」

クロードの目から流れる涙をユリウスが優しく手で拭つてやる。やがてがっくりと手を降ろすユリウスに大声でこちらに引き留めようとするようにクロードが叫ぶ。

「ユリウス！」

「ユリウスはここつと唇をあげる。

「愛しているよ……クロード」

「俺だって、ユリウスのことクライブより、ダリウスより誰より」

「そうだ、俺だって愛していたのだ。失いたくない、家族とし

て。

「コリウス、愛してる」

クロードの言葉にコリウスの目からも涙が零れる。

ああ、

私が本当に欲していた愛情をかけてくれる者と出会つことが最後に出来たんだな。私は何て幸せな気持ちで死にいくことができるのだろう。

「クロード、ありがとう……もう、随分と待たせている……人がいるんだ……だから……」

ヴァイロン、もういいだろう？ おまえの言った通りこの国の結界を守つていたが、私にだつて五百年は長かつたよ。もうおまえを追つても怒らないでくれ。

『おまえの為すべきことをしろ』

死に際の老いた指が私の顔に触れて、私は何度も連れて行けど。私を殺してくれと頼んだのにおまえはそう言つて一人逝つてしまつた。だけでもう、いいだろう？ ヴァイロン。

コリウスがぐくりと上体を倒し、バサラはコリウスを支えている手をはずそとやつきになる。

「サンテラ、剣を、このがきをどけろ！」

ラドビアスがクロードの背後から手を回して、ゆっくりとクロードの硬く握つた指を一つ一つ外していく。全部の指が離れたところでラドビアスが剣を一気に引き抜く。

「サンテラ、カルラを離せ」

ラドビアスはバサラの組んだ手を潜らせるよりコリウスを動かしてバサラから離して抱きとめる。

「サンテラ、体の半分はここに置いていつてやる。早くしぃ！」
バサラが大声を出す。

「もう、観念なさいませ、バサラ様」

ラドビアスはバサラに顔も向げずに言つとコリウスを抱いたままその場にしゃがんだ。
「カルラ様、私もお供させてください」
「くそつ、やられてたまるか」

バサラがよろよろと歩きながらホール中央の割れた床のなかに倒れながらも呪を飛ばす。そのまま水音を立てて落ちていくと水は瞬時に鏡のように凍つっていく。

「バサラ様……」

ラドビアスが目を硬く閉じて諦めたように呟いた。

「ラドビアス、バサラが」

クロードがラドビアスの方へ向かおうとする目の前でルークの姿が一瞬に消えて砂の山が出来る。そしてラドビアスの腕の中のユリウスが砂で作った人形のように崩れてラドビアスの手から零れていった。

クロードははつとして自分の胸元を引き下げるがそこには何の印もなかつた。

竜印が消えた。コリウスが、イーヴァルアイが死んだからこの国にかけられていた術が解けたのだ。結界が完全に解けて二百人あまりの魔道師も今消えて逝つた。

それではついにヴァイロンから続いた魔道の国としてのレイモンドールはここに終わりを迎えたのか。皮肉にもボルチモア州のドミニクが口先で言つっていた、魔道師の支配しない国が今、誕生したのだ。

「何とか馬を調達してサイトスに戻りましょ、クロード様」

思いを断つように立ち上がったラドビアスをクロードは複雑な思いで見つめた。

「おまえは何で消えてないんだ？ バサラもコリウスもいないのに」
それともバサラは生きているのか。クロードの問いに答える、ラドビアスは歩き出す。

「サイトスは大混乱でしょうね」

「……そうだな」

首都サイトスの中核は魔道師庁だ。

主だった官や大臣の職まで

魔道師が兼任していたのだ。王の首がどんどん変わつても変わらない政策を続けていたのは魔道師庁が国事を動かしていた事に他ならない。ドミニクの言つていた事は嘘では無い、国はガリオールら上位の魔道師の意向で動いていた。国が魔道師に牛耳られているのは本当だつた。サイトスの国府は今壊滅状態にあるといつていい。

「でも途中、ボルチモアに行かなきゃあ。ベオークから来た奴がまだ一人いる」

「左様でしたね」

ラドビアスが相槌をうつ。クロードはその顔を伺うがラドビアスの胸のうちにはクロードには解からない。

「立てますか？」

手を貸そうとするラドビアスを振り払つて、クロードは何とかふらふらと立ち上がる。

「俺を……殴つてもいいぞ、お前にはその権利がある」

「いいえ、カルラ様がそう望んでおられるのは解かつておりましたから。私も一緒に避けなかつたのは残念ですが」

「ばか野郎、俺の気持ちが治まらないんだよつ」

落ち着いたラドビアスの声になぜか頭に血が上つて大声を出します。ラドビアスに背中を向けたクロードは彼の顔を見たくなかつた。いや、見れなかつた。どうか、俺を罵倒するなり、殴るなりしてくれよ、どうにかなりそつだ。

クロードの決心

「これじゃ、目立つて仕方ないな」

「でも、馬より速いですよ」

クロードの後ろにいるラドビアスの言葉にそれはそうだけど……とクロードは自分が跨またかつっている獣を見る。

「まあ、戻す呪文が解からないんじゃ仕様がないか」

サウンティトウーダの背中の前後にクロードとラドビアスが乗つて低空で森林地帯を飛行している。わずか後方にはアウントウエンが付かず離れず近くを飛んでいた。竜印が消えてクロードに封印されている経典を読むことも出来なくなり、魔獸たちを放っていくわけにもいかない。しかし、ボルチモア州の州都ケスラーに入るには街の中を通らなくては入れない。

「夜を待ちますか？」

「そうだな」

ケスラーに入る手前の小さな森の中、大きく枝葉を茂らせた大木の根元で休みを取る。

アウントウエンとサウンティトウーダも近くに伏せをして寛いでいる。クロードは視線を一頭の獣から暮れ行こうとしている西の空へ向けた。まるで太陽が別れを惜しんでいるようにオレンジの色でその場を染めていく。

俺、これからどうしたらいい？　ベオークから来た奴を始末してサイトスに戻つて、それから？　自分に用意されていた居場所を己おのが壊してしまった……急にコリウスを刺した時の感触が甦ってきて。ショックを受けてクロードは息も出来ずオレンジ色に染まつた自分の両手をただ、見つめた。

殺したくなんて無かつた……我儂われらで気まぐれな兄……サイトスにいる血の繋がつた者たちなんかよりずっと好きだったのに。延々と繰り返される自責の呪縛にまたも囚われる。

「クロード様」

両肩をラドビアスに掴まれてやつと我に帰つてクロードは大きく息をした。

「……ラドビアス、おまえはこれからどうする？」「クロード様に付き従わせて頂きたいと存じますがお許し願えますか」

頷くクロードにラドビアスが続けて言つ。

「クロード様は王の位をクライブ様に^{いじょう}譲られるおつもりですか」「察しがいいな」

クロードがふつと笑う。

「俺が王になつたのは『鍵』を使いたかつたからだ。ユリウスを助けたかつたんだ。あの契約はクライブの名を騙つて交わしたものだし、俺は魔道師だ。ユリウスが死んでこの国は生まれ変わる。これから政治に魔道を介入させたくないと思っているのに俺が王様じやまざいだろ？ クライブが王になつて国を治めてくれたらいいと思つんだけど」

「では、クロード様はどうなさります？」

「本当なら国が混乱している今、ガリオールの代わりにおまえが사이트スでクライブを助けて欲しいところだけれど……ラドビアスには俺と行つてもらいたい所がある」

クロードはラドビアスから夕暮れの山々へ目を移す。

「ベオーク自治国へ行こうと思っている」

そう言って砂埃を掃つて立ち上がる。

「遠いですよ、ベオークは」

「……そうだな」

地理的にもベオーク自治国はこのレイモンドールからは遙かに遠い。大陸の東、ハオタイー皇国の北に位置する。それ以上に自分は魔道師としては下の下だらう。ベオークに行つて何ができるのか。そんな事は解からないが、自分に封じられた経典をどうするかを含めてベオークに行かなくては自分は先に進めない、そんな気

がする。 経典の始末はヨリウスからクロードに託されたのだと思うのだ。

第一、このまま『鍵』を持つていたらまたベオーグから魔道師が取り返しに来て一騒動だ。 やはりクライブではなくて俺が『鍵』と契約して正解だろ？。 もし、取り出すとして命の保障などできないのだから…… 国王であるクライブじゃだめだ。

「陽が落ちましたね」

ラドビアスの声に顔を上げると、さっきまで赤味の強い光に包まれていた景色は変わり、オレンジ色の光は山々の稜線だけを残して薄青色の空にとつて変わる。

やがてこちらに頭を向けている一頭の魔獣たちの目が赤く光始め、すっかり闇が濃くなつた頃。 ケスラーの町並みの上空を飛んでいく大きな黒い影が闇にわずかにもう一つの闇を落としていく。

「一体、これは何だ？」

額を擦りながらボルチモア州候ドミニークが州城敷地内にある小宮の一室で突然に現れた球体を見上げる。 隣の州宰代理のダニーアンに尋ねるがダニーアンにも解かるわけもなく、さあと首をひねる官吏たちと同じようにぽかんと見ている。

「これの事をトランシュは何か言つておつたか」

ドミニークの問いに後ろにいるアリストローザが無言で首を左右に振る。

誰も声をあげる者が無く、ドミニークが苛立ちを抑えきれず、大声を出す。

「誰か、これが何か解かるものは？」

「知つていると思うんだけど、たぶん」

ドミニークに応えるように放たれた声が壊れた窓の外から聞こえて、いつせいにそちらを見る。

「それは呪で形成した檻だ、そして中には……」

クロードの言葉を引き継いでラドビアスが続ける。

「ベオーク自治国から来たクビラ様です」

「あんたが裏で密約を交わしたビカラの弟だよ」

「無礼なつ」

州候である自分にこのよくな無礼な口を利く少年はモンド州の公子であつた筈。ところがモンド州に送つた使者は、そんな名前の公子はいないと追い返されてきたのだ。

「無礼者め、捕らえよっ」

その声にドミニークの後方に控えていた兵士たちが剣を構えるが、その間に大きな魔獣が割つて入つて威嚇いかくの唸りをあげる。驚く兵士たちの背後にもう一頭の朱色の大きな狼のような獣が飛び込んで来て挟みこむような布陣となる。

「俺に手を出すのは止めたほうがいい、もう直ぐ国軍がここに着くからな」

「国軍だと? 誰の命で……」

僅かにたじろいでドミニークがクロードを見つめる。

「王への反逆罪は斬首かサイトスの地下宮への終身幽閉だからね」言いながらクロードは自分の手にはめている指輪をドミニークに見せる。

「先の王、コーラルが亡くなり、新しく『鍵』と契約したのは俺だ」「まつ、まさか……」

「クロード?」

ドミニークとアリストローザが同時に叫ぶ。

『変じよー』クロードの言葉に指輪はその姿を長剣へとえてクロードの手に收まる。その剣をクロードはピシリとドミニークの喉元に突きつける。王の証を突きつけられてドミニークは驚愕きよくがくに目を見開いた。

「た、確かに……あなた様は国王陛下……」

「ラドビアス」

クロードに呼ばれてラドビアスが前に出る。

「デニク候と領む事無く話がしたい」

「畏まりました」

ラドビアスが喉元に剣を突きつけられて固まつて、デニクの

前に立つて印を組む。

『我に寄りて力を貸せ、捕縛、落手、剥縛、おまえの口蓋の主は私だ』

「ベオーク自治国と繋がつてゐる証拠となる物を持つてゐるか聞いてくれ」

クロードに頷いてラドビアスがデニクに向く。

「ベオークからの書簡か何かもつてゐるのか、答へよ」
デニクは助けを求めるように手をうねうねと彷徨さまよわせて抗う素振りを見せるが、口は勝手に動いてしまう。

「教皇ビカラからの親書は……私の寝所の絵画の裏に……隠してい
る……」

デニクは自分の口を慌てて押さえられるがもつ遅い。それを軽く笑つてクロードがラドビウスに言ひへ。

「正直に言つてくれてありがと、デニク。ラドビアス、取つて
きてくれ」

「畏まりました」

クロードに短く応えてデニクにかけた術を解くとラドビアスは部屋を出て行つた。

「お父様が反逆罪つてどうこう」と?」

ショックから立ち直つてアリストローザがクロードに詰め寄る。

「お父様は王には忠誠を誓つてゐるわ、クロード、違うのよ私の話を聞いて」

剣を指輪に戻して右手にはめながらクロードは静かにアリストローザを見る。

クロードの決心（後書き）

このお話も後半に入ります。引き続きよろしくお願いします。

「アリスローザ、だいたい魔道を奉じる事は王の命だらう。その國の廟を襲つたりしている時点すでに反逆罪は成立している。この國において魔道と王は別々のものじゃないだらう?」

「そ、それは……」

それでも私達は國のために……王のために戦っていたのに……もどかしく思いながらどう、言つたらいいのかとアリスローザが頭を巡らす。その横を一枚の書簡を持ってラドビアスが通り過ぎる。

「それか」

「そのようです」

ラドビアスが書簡を巻いて留めてある紐を解いて、クロードに手渡す。それはハオタイで使われている文字で描かれているが、範字と互換性ひかんせいがあるらしくクロードにも意味が解かる。

「ふさわしい地位と読めるが……ラドビアス、俺は間違っているか横からのぞき込んだラドビアスがクロードが指差す文字を追つて顔を上げる。

「それでよろしいかと」

「ドミニク候、ふさわしい地位とは何だ?」

ぎょっとしてドミニクはクロードを見て慌てて下を向く。

こんな子供が王だと言つのか……そしてこんな子供なのになんとう落ち着き方だ。その上、ハオタイの文字にまで通じている……。「私はこの國の未来を陛下のお立場を憂いていたのでござります」ドミニクはがばりとその場にひれ伏して声を上げる。

「魔道師に操られている者どもを排し、正しいご政道が行われんと切なる願い故ゆえのことでござります。陛下に『』を引く事など考えも及びません」

「よくもそんなに口がまわるな、ドミニク」

クロードがため息まじりに言つ。

「俺はサイトスに居たんじゃない、ここに居たんだ。何も知らないわけないだろ？」「…」

クロードは面を厳しくして、後ろで魔獸たちに睨まれて固まっている兵士たちに声をかける。

「抗弁、弁解の類はサイトスへ行つてから正式な裁判の場でいくらでも聞いてやる。ドミニク侯爵の州管轄の任を今この時をもつて解く。身柄を拘束して幽閉し、国軍到着後、速やかに引き渡すようにな。クロードの言葉に兵士たちの先頭にいた州軍の將軍の肩章を付けている大柄な男の双眸そきぼうが戸惑つようにクロードとドミニクの間を彷徨う。

「トレンス、私を裏切る気かつ」

ドミニクが迷つている將軍を自分側に引き戻そうと大声を出す。「將軍、気持ちは解かるが今は自分の職務に忠実でいて欲しい。君たちが今迄職務のためにドミニクの命に従つて動いていた事は仕方の無いことで不問にする。が今、この先からの俺の命に従わないことは後々君のみならず、州軍全部に関わつてくる事になる」

落ち着いた少年の声が將軍のうるさく泳ぐ口を止めさせた。

「お前達、早急に王陛下のご指示に従え！」

「無礼者、私に触れるなつ、離せ、この下郎ども！」

両側から腕を屈強な兵士たちに取られてドミニクは手足をばたつかせて暴れるが、そのまま引きずられるように連行されて部屋を出て行つた。

「クロード、私の話を聞いて。これは誤解なのよ」

アリストローザが駆け寄ろうとするのを兵士らが取り押さえる。

「アリストローザ、君はそんなつもりはなかつたにせよ、きみの父親はこの国の王座を狙つていたんだ。きみは聞きたく無いかも知れないかも知れないが……。そして君も知らないこととはいえ、その企みに加担していた」

「嘘よ、そんな、お父様が」

「さつきのジカラからの書簡はそれを確約すると書かれていたんだ」「嘘よ、信じないわ」

アリストローザの目から流れる涙にクロードはふいと顔を背けたくなる。泣かないでと慰めたくなるのを歯を食いしばって耐える。「信じようと信じまいと真実はそういうことだ。自分が信じたく無いことから目を背けることは出来ない」

「クロード」

クロードの言葉にきつと睨むようにアリストローザが鋭い視線を向ける。クロードは、一瞬酷く傷ついた顔を浮かべたが、直ぐにその表情を消して将軍に命を下す。

「レジスタンス活動に加担していた嫌疑により元ボルチモア州州姫、アリストローザをドミニクと別に幽閉し、同じく国軍に引き渡すよう」

挑戦的な目を向けながら連行されていくを、クロードは追いかけて自分を弁解したくてたまらなかつた。違う、俺の本心は……こんな事を望んじやいない……。

しかし、現実にはクロードは無表情でアリストローザが連れて行かれるのを見送り、次の指示を出す。

「州城敷地内にある、古い教会の地下にあるアジトにレジスタンスの各グループのリーダーがいるはずだ。捕らえて他のアジトやメンバーの捕縛に係ってくれ」

「承知しました」

将軍が副官を残して手勢を引き連れて部屋を出て行く。

「後の者も俺とラドビアスを残して小宮から退城してくれ」

クロードの命に残された官吏と魔道師のダニアンが驚いて口を出す。
「…………と言われますと？」
「言葉の通りだ、出て行ってくれ。用があれば呼ぶ」
ぱじりと言わればもうなすすべも無く。少年の霸氣に圧されて階しあしあと部屋を出て行った。

ふーっとクロードが大きくため息をついた。

「疲れた、やっぱり俺には王は務まりそうにないや」

「そうですか?」

ラドビアスがにっこりと笑顔を見せる。

「王様になりたてにしては、立派でしたよ」

いつか、魔術のときにもそんな風に言われたのを思い出しクロードは吹き出す。

「俺が何やつてもラドビアスはそう言つんじゃないの?」

急に十四歳の少年に戻ったように悪戯っぽくクロードは片手をつむつた。

そつきのクロードは確かに王としての貴祿を見せて、大人たちにちらとも遅れをとるものでは無かった。帝王学を幼い頃からまなんでいたクラブならいざ知らず。この前までモンド州の公子として、箱の中に入れられたような生活を送っていたはずのクロード。彼があれ程やれるとはラドビアスは思っていなかつた。魔術にしても何をやらしてもこの少年は自分でも解からないような才能を隠し持つてゐる。

「いいえ、本当にこじ立派でしたよ」

ラドビアスに言われて照れたようにクロードは赤くなつた。

「やめてくれよ、それよりこの大きな檻? を開けなきゃ」

クロードが見上げる球体の檻をラドビアスが確かめるように触れる。

「その中にいるのが……」

「クビラ様です、ビカラ様の弟君の」

クロードはコリウスに聞いた話を思い出す。

「一番田……だよな」

「カルラ様がお亡くなになつて、この術にも綻びひびが出来てあります
しょつ」「ひつ」

ラドビアスの言葉にクロードはうつと呻いて胸を押せめた。「
くなつた　その一言で体の内側の柔らかい所を針でつつかれたよ
うに痛む。

「クロード様？」

ラドビアスの声にクロードはあわてて心に蓋ふたをする。

「……何でもない。それよりコリウスがかけた術はすべて消えるの
？」

「消えるものと消えないものがありますが禁術は消えると思います
が……」

じゃあ、俺がモンドの城でおこなつた忘却術はどうなのだろう?
もしかしてこのことを予感してコリウスは俺に術をかけさせ
たのだろうか。

「クロード様?」

度々自分の中に閉じこもつてしまつクロードにラドビアスが気遣
わしげに名を呼ぶ。

「何でもないよ、それにしてもクビラつて檻から出して俺たちで何
とかなりそうなの?」

ラドビアスは顎に手をやつて考へるようへ歩く。

「そうですね、術はたいしたことはないと想いますが

「他にたいしたことがありそつだけど?」

クロードにラドビアスが苦笑にする。

「それをあげ足取りと言つのですよ、クロード様」「後でいう事があるなら、今言つといて欲しいつてだけだよ」

クロードが釘を刺す。

「それで言えば……」ラドビアスが言つ。

「体術というか、力が尋常ではありません」

そういうことを黙つてちゃだめだろ！ クロードはもう、と

膨れつ面をした。

「で、それじゃあどうする？ 作戦」

「作戦……ですか」

そうですねとラドビアスは生真面目に顔を向ける。

「では、私と魔獣の総力戦にクロード様による奇襲、でござります？」「それって別に作戦でも何でも無いじゃないか、そのまんまだろ」「呆れた顔でクロードがラドビアスを見る。

「まあ、そうですね」

あつさりラドビアスも言つてお互に顔を見合させて笑つた。

「込み入った作戦など要らないと思いますがね、の方には……」

そう言ってあれを、と指をさした。檻のいたるところにひびが

入つて中から何かを叩きつける音が響いてくる。

「中でだいぶ暴れているようですね」

ラドビアスが洩らした言葉にクロードの表情が曇る。

「中に入っているの、本当に人なの？」

その間にも一つのひびが大きい亀裂になり、一旦そうなるとそこから四方へ亀裂が走つて物凄い音と舞い上がる粉塵や瓦礫を宙に飛ばしながら檻は崩壊していった。

「サウンティトウーダ！ アウントウエン！」

クロードの呼ぶ声に一頭の魔獣がクロードの傍らに走り寄つた。砂塵の中、ラドビアスが投げたダガーを掴む手が見えた。が、

クロードが思つていてるよりずっと上からクビラの頭が見えて、その全身が現われる。思わず、後ずさりしてしまつほどの大躯だ。

これがユリウスとバサラの兄のクビラ……？ そう聞いても

半分は血が繋がっているとは思えないほどかの一人とは似ていない。

コリウスはともかくバサラは細身ながらも背が高かつたが、クビラの体躯の大きさは人の範疇はんとうの限界だつ。体の筋肉量が半端ではないのだ。古代の剣闘士のような猪首から背中、胸まわりその全てが筋肉の鎧でまもられている。バサラやインダラと同じ服を着ているのにも係わらず、まったく違う印象を受ける。

そのクビラにアウントウエンが火を吹いて攻撃する。あつと言う間に黒焦げになるかと思われたが水の盾を使ってアウントウエンを逆に追い立てている。

出来が良くないと言つてもそのレベルは高い基準においてのことでは、決して低いわけでは無いのだ。

横からサウンティトウーダが長い棘のある尻尾を振つてクビラのシャムシールと渡り合つている。硬い鱗に守られたサウンティトウーダと剣を合わしながらアウントウエンの炎を避けているため印が組めない。

「くそっ！ 厄介な！」

クビラがその体にまるで合わない素早い動きで、サウンティトウーダの頭を抱きこむように押さえながらアウントウエンに向かつてダガーを投げた。ダガーは過たず、アウントウエンの右目に刺さり、アウントウエンが痛みのために大きく吠えて転がつた。

「ざまあみろ！ おまえは首をこのまま捻つて殺してやるつ」

もの凄い力でサウンティトウーダの首をぎりぎりと締め上げるのをサウンティトウーダも体をくるくる回して逃れようとする。しかしクビラの両腕はさらに力を入れて血管が浮き上がる。ぱりぱりとクビラの腕が当たつているところの鱗が音を立ててサウンティトウーダの首が折れるかと思つた時……。瓦礫の影からクロードが走り込んで来てクビラの背中に深々と剣を突き刺した。

「この、卑怯者のくそがきめ！」

クビラがサウンティトウーダを離して片手だけでクロードを剣ごと跳ね飛ばした。壁まで飛ばされて背中を盛大に壁に打ちつけて

クロードはげふつと血を吐いて意識を飛ばした。

「痛いじゃないか」

体を中心まで剣で刺されたというのにクビラの歩みに少しの揺らぎも無い。投げられていた自分の得物を拾い上げて、確かめるように大きく一、二回振つてみる。上段にシャムシールを構えて大股でクロードの元へ歩くのを見てラドビアスが呪を飛ばす。

『辺幅、変調、変転、王の前に防壁を築け！』

その声が終わる間も無く床の石板が激しい音と共に形を変え、倒れ込んでいるクロードの前に分厚い壁が出来た。

「ちつ、サンテラ、よくもやりやがったな」

踵^{きびす}を返してクビラがラドビアスに向かつてシャムシールを振り下ろす。金属を打ち付ける音がしてラドビアスが何とかダガーでシャムシールを受け止める。だがクビラが力を込めて振り下ろした大型の剣を短剣で受けている為長いことは持ちそうに無い。

「苦しそうだな、サンテラ……諦めろ」

不敵にクビラが笑う。

ラドビアスが自分の頭上で何とかクビラの剣を受けながらクビラに言つ。

「気付いていらっしゃらないのでお教えしますけど……」「自分の腹に大穴が空いてますよ」

「腹？」

ラドビアスの声に自分の腹を見ようと氣を逸らせた刹那、ラドビアスがクビラの剣を右に流して後ろに飛び退いた。

「なんだ、これは？ 僕の腹が」

自分の腹を触ろうとしてぽこりと音を立てて自分の手が腹に出来た穴に収まるのを見てクビラが驚きの声を上げる。

「さつきのがきの剣は護法神だったのか」

言われるまで気付かないとは……やつぱりばかだ、といつ言葉をラドビアスは口にしないが。

「死ぬのか、おれは……」

充血した田を虚ろに開けて口から涎を垂らしながらクビラが縋る
ようにラドビアスに近づく。

「早晚そななりましようね」

ラドビアスは素つ氣無く言つてクロードの方へ足を向ける。それを追いかけようとしたクビラが足を縛もつれさせて倒れた。どうつという音と共に倒れたクビラが立ち上がるうとして手を付く。ところが倒れた衝撃でクビラの体は腹から上下に分かれて間が砕け散つて起き上ることは不可能な体になっていた。

「どうにかしる、サンテラ！　どこだ、サンテラ！」

田が震んできたのかラドビアスの名を呼びながら手を使って、上半身だけがうるつると床を這いずつっていく。

その田の前に黒い鱗あわ覆われた脚がたんつと止まる。

「何だ？」

顔を上げるクビラにサウンティトウーダが顔を下げて前脚でひよいとクビラをひっくり返した。

「止める、この蜥蜴とがめつ」

クビラの大聲など気にする様子も無くサウンティトウーダがその大きな口を開けてバクリ……とクビラを飲み込んだ。

混乱の都サイトス

ラドビアスに助け起されたクロードが目を丸くして呟く。
「飲んじやつたよ……」

「大丈夫ですかね」

ラドビアスが心配そうにサウンティトウーダを見る。

「お腹こわさなきやいんですけど。サイトスにはあれに乗つてい
かないと時間がかかり過ぎますからね」

クロードとラドビアスの心配をよそに、サウンティトウーダが満
足そうに喉を鳴らした。

「クロード様」

床に落ちていた剣をラドビアスに渡されて指輪に戻すと右手にほ
めて、クロードは目を痛めたアウントウーンの所へ急ぐ。

「目を潰されたな、かわいそうに」

傷の具合を確かめようと顔をのぞくと血まみれの眼窩がんかの中に黒い
物がのぞいている。

「これは、なに?」

「ラドビアス、これを見て」

ラドビアスがクロードの指示す所をのぞく。

「あ、目が生えてきたのでは?」

「目が……生えるの? まるで、歯が生えてきましたね、と

いう調子のラドビアスは驚く素振りを見せない。

「よく解かりませんが、この獣は魔物ですからね、そんな事もある
かもしだせん」

そういうものなのか? かなりいい加減なラドビアスの説明
にクロードはラドビアスを見返す。結構ラドビアスは物事にこだ
わらない性格なんだ。まあ、でなけりやあ、破天荒なユリウスの
僕を何百年も務めることは無理だったか。やう言えども、モンドの
廟長のルークもユリウス付きだったことがあると言つていたが。

あいつも良く似た性格だった。

クロードは火傷をした自分の唇にそっと触れる。 ガリオールなら三日あたりで氣鬱の胃炎になつてゐることは請け合いだ。 そう思つたところで一人ともこの世にはもういないのだと氣づく。 膜の痛みなのか、身のうちの痛みなのか、ぴりりとした痛みにクロードは胸が詰まつた。

クロードがそんな事を考へてゐるなどお構いなく、ラドビアスがクロードに声をかける。

「お疲れでしょうがこのままサイトスへ参りましょ」

「解かつた」

「サウンティトウーダ、済まないがまた乗せてもらひよ。しかしアウントウエンがもう少し熱くないなら乗せてもらうんけど」 クロードの言葉にアウントウエンが小さく炎を吐いて、こくこくと返事をするように頭を上下に振つた。 朱赤の体が徐々に暗い赤色に変わる。

と、いう事は。

「もしかして体温下げたの？」

そつと恐々アウントウエンに触れる。

「あ、これなら大丈夫だ」

かえつて気持ちいいくらいだとクロードはにまつと笑つた。

「ラドビアス、俺アウントウエンに乗るね」

「クロード様、お待ちを」

ラドビアスの声より早くアウントウエンに飛び乗ると首を軽く叩いて命ずる。

「行け！ サイトスへ」

ぶるぶると体を震わせてクロードを乗せたまま大きく伸びをしたアウントウエンが窓から飛び出す。 それを負けじとラドビアスを乗せたサウンティトウーダもその後を追つた。

サイトスの王宮はクロードが予想した通り大混乱に陥つていた。

下位の魔道師たちが王の執務室で転がっていたクライブ国王を（本当に文字通り床に転がっていたのだ）見つけたが一緒にいたはずの宰相のガリオールの姿はどこを捜しても見つからなかつた。

大臣職を兼任していた上位の魔道師もサイトスの王城に居たはずの全ての上位の魔道師たちの姿も消えた。それどころか竜門が閉じて竜道が使えない。そのため、モンド州のゴート山脈にある魔道教の本山にも連絡をつけることが出来なくなつていて。結界を張りに出かけている他の上位の魔道師の所在すら今は解からないだ。

混乱は國中にも広がっていた。州宰など、やはりサイトスほどでは無いにしても州の重要な役職についていたのが上位の魔道師だつたからだ。

それだけでは無い。大陸とレイモンドールを隔てていた海峡は、一寸前も見えなかつた霧が晴れ渡つていて。海は、凪いでまるで内海のような穏やかさだ。その先には遠くにうつすらと大陸の陸地が見えてすらりいる。この國の人間で今までこんな光景を見た者はいない。

何て不吉な……。海岸を見つめながら人々は囁きあう。

その混乱の中、サイトスの王宮、王の寝室に続くバルコニーに大型の獸が一体、音も無く舞い降りた。

「クロード様、ラドビアス様」

王に側づいていた魔道師が喜びの声を上げた。

今、この時点で生存が確認されている上位の魔道師は三人だけだ。クロード、ラドビアス、コーラルである。そのうちのクロードはついこの間上位の魔道師になつたばかりで皆の本心を言えばあってはしていない。そこに現れたラドビアスは魔道師庁に残された

下位の魔道師たちにとつて縋る唯一の大木だった。

「ラドビアス様、国王陛下のご様子が……」

「解かっている」

『縛』されているのを解することも出来ない者たちばかり残つたのか。『一ラルは何をしている?

ラドビアスはため息をつくと、王の寝台の天蓋てんがいから垂らされる布をかきわけた。素早く印を組んでライブにかけられていた術を解く。途端にライブがラドビアスに縛りつく。

「ガリオールが大変なことに……砂のようになつて……」

ラドビアスの後ろから手を出したクロードがライブの肩を掴む。「落ち着け、ライブ。魔道師のイーヴァルアイが死んでこの国にかけられていた術が解けたんだ。竜印を持っていた魔道師は呪が解けて、本来の寿命が尽きていた者はすべて消えた。勿論、ガリオールもだ」

「それは……」

驚きのために声も続かないライブは自分の肩に置かれたクロードの右手の中指にはめられた指輪に気付いて、びくりと肩を震わせてクロードを見た。

「君が『鍵』と契約したのか、クロード」

ライブの視線が問いかけるようにクロードに突きつけられて思わず、目を逸らしそうになるがぐつと堪えてうなづく。

「ライブ様、クロード様、こちらへおいで下さい」

その重苦しい空気を掃つようにいつの間に行つたのか、ラドビアスが円テーブルの所の椅子を引いて手招きしている。

「早速ですがモンド州のハーコート公様にサイトスへ登都されるよう書簡を送りたいのですが」

「ハーコート公?」

椅子に座つた二人を見ながらラドビアスが説明する。

「モンド州は」存知のように魔道師の州宰をはじめ、州府に魔道師を置いておりません。今、この国で一番落ち着いている州です。その上、クライブ様の叔父君であられ、身分的にも申し分ありません。数年の暫定措置としてモンド州の州公の職を嫡子のダリウス様に任じられてハーロート様を宰相としてサイトスへお招きになることをお勧め致します」

それはいい。元から魔道師に頼つて施政を行っていないので今の混乱とは無縁だし、ダリウスへの権の委譲も行われている。しつかりした官吏もいる。ハーロートなら手腕に関しても人物的にも確かに最適な人選だろう。この不安定な時に謀反を心配する事もなくクライブを助けてこの国を立て直してくれるはずだ。

感心しながらクロードはさらさらと仰々しい言葉とか、堅苦しい文面を羊皮紙に書き付けていたラドビアスを見ていると彼がペンを置いて顔をこちらに向けた。

「で、どちらがサインなさいます?」

「そりゃあ、クライブだろ?」

弾かれたように顔を背けるクライブをよそにクロードが言ひ。

「どうして『鍵』と契約したのは君じゃないか?」

喰つてかかるクライブにクロードが淡々と言ひ。

「契約する時、俺はクライブとして契約したし、イーゲアルアイが死んでこの契約も意味が無くなつたと思わないか?」

「意味が無いってどうい?」

「んーとそれは……とクロードは、じつはおつかと頭をくしゃくしやとかきむしる。

「つまり、もう龍道も無く国境を守る結界も消えた。この国は魔道から離れる時期が来た。この国の王も魔道に関わりのない者がなるべきだと思うんだ。俺は不老だ、これは普通じゃない!」

「王が不老なのは普通じゃない、のか?」

クライブが腑ふに落ちないようになつた。クライブにとって王が死を迎えるまで歳を取らないのは不思議でもなんでもない。常識死を迎えるまで歳を取らないのは不思議でもなんでもない。常識だつたのだ。

「普通じゃ無いんだよ、クライブ。魔術の介在しない国の王にクライブがなつてよ」

「周りの者は、祭祀中にクロード様が入れ替わつたことなど知りませんしね」

混ぜ返すよつてラジニアスがしつつと言つてペンをクライブに渡す。

「……解かつた」

クライブは少しの間考え込んでいたが小さくつなずくと丁寧にサインをした。

「クロード様、指輪をお借りできますか?」

ラジニアスに指輪を手渡すと、ラジニアスが龍の飾りの部分に爪

をひつかけて上に跳ね上げるとそれは印章になつていた。朱肉につけると慎重に羊皮紙に押す。

「そんなふうになつているなんて知らなかつた」

クロードは布で拭いて渡された指輪をへえーと眺めた。

「でもいちいち裁可する書類にこれを押すのは大変そうだな」

ラドビアスが笑いながら答える。

「一般的の書類は違う印があります。国治の大事、今の場合は宰相の任命要請です。まあ、そんな場合だけです。押しやすいほかの御璽があるのでしようが、どこにあるか私が知らないので今はこれを使わせて頂いたので」「心配無用ですよ」

いちいちクライブに貸さなきゃいけなかつたら出かけられないところだつた。クロードはほつと息をついた。

「次にボルチモア州のことですが」

「ボルチモア州がどうかしたのか」

クライブが首を傾げる。

「ええっ、知らないの？ 謀反騒ぎがあつて……ガリオールに国軍

出してもらつたんだけど」

「謀反……」

この顔は本当に何も知らないって顔だ。ガリオールの奴、

本当に好き勝手にやつてたんだな。クロードははーとため息をついた。

「とにかく、謀反を企てた州候を捕らえてサイトスに移送させてくる。國軍の責任者、左軍將軍が帰つてきたら詳細を聞いてよ」

「左軍……レミントン將軍が動いていたなんて、知らなかつた」

ショックを受けるクライブに構わず、ラドビアスは話を進める。

「スノーフォーク伯爵にボルチモアをお任せになつてはと思ひますが」

「スノーフォーク？」

サイトスに城を持つ貴族の名前にクライブが反応する。

「ボルチモア元州候ドミニークの子供の一人で、スノーフォーク伯爵

にご養子にいかれた方がいらしたはずです。確かルイス……」

「ルイス・カーランドのことを言つているのか」

「知つておられますか、クライブ様？」

「私の剣術の練習相手になつてくれている……友人だ」

「左様でしたか。それに伴いスノーフォーク伯爵の位を格上げして頂くよう、お願ひします。ドミニクの血筋に縁がある方で、今回の策謀に加担されなかつたのは、スノーフォーク伯だけでしたから」ラドビアスの話に納得がいかない風にクライブは眉根を寄せる。「何で今更謀反を企てたドミニクの血筋を次の州候に任するのだ。あなた王が侮られるとは思わないのか」

「今はそんな事言つてる場合ぢやないからさ、クライブ」横で大人しく聞いていたクロードが口を出す。

「ボルチモア州は州候が居なくなつた今でもドミニクの係累けいるいは山ほど残つてゐるんだ。それを一掃してゐる余裕は今この国はないよ。と、するならスノーフォーク伯を州候に任することで、ボルチモアの者たちには王の温情を見せる。一方、スノーフォーク伯にとつては爵位が上がり、無冠の立場から州候として対面を保つたままサイトスを出る事ができる。なんといつても身内に謀反人を出したのだからこのままサイトスにいるのは肩身が狭いだろうし、ね。養子に入つたルイスにしてもスノーフォーク家から廢嫡はいてきされる心配がなくなる。そして、自分の生まれ育つた場所の跡取りになることができるので、王に感謝するつてもんぢやあない？」

「そう、言われればそうだ」

「だろ？ ラドビアス、考えたな」

クロードがラドビアスに笑いかけた。

相手の思つてゐる事をこんなに的確に瞬時に解かつてしまふクロードに、ラドビアスはユリウスがクロードのことを聴いのは解かっていると言つていたのを思い出す。

それにしてもカルラ様の人の資質を見極める日はいつも正しかつた。

まだ、個性のかけらも見せないような幼子を一瞥して選んでいたが。 そのどれもが後になつてみれば正しかつたのだと解かる。

王になる者は素直でまわりの意見をよく聞き、穏やかな性格の者が多い。 対して王の半身として魔道師になる者は、自主独立の傾向が強く扱いにくいが頭がきれる者が多い。 と、いうことは今まで魔道師庁の言つとおりに国政を行つている分にはクライブが王で良かったのだ。 だが、王が自分で切り開いて行かなければならぬ局面に立たされていけるこの国の王にふさわしいのは…… クライブ様ではない。

ラドビアスはそつと額に手を当てた。

「この件にはあと、三州の州候が係わっている。その後も決めないと」

クロードがため息混じりに言つ。

「彼らの嫡子に継がせることにして、暫く国軍を駐留させましょう。州宰としてサイトスから官吏を送る事にして、何年かはサイトスの事実状直轄地扱いにすることはどうでしよう？」

ラドビアスがさらりと応える。

「その案で話を進めてくれ」

ラドビアスに返事を返すクライブにクロードもうなずく。 しかし、こいつなつてみるとハーコートが一刻も早くサイトスへ来ないと、ラドビアスはサイトスを離れることは出来そうに無い。

ラドビアスの辣腕ぶりにクロードはラドビアスがこのままサイトスへ留まることを選んだら…… と心配になつた。 ガリオール以前の宰相がラドビアスだつたことなどクロードは知る由も無い。しかし、それを心配するほどレイモンドールの政庁内はすかすかと脆もろくなつてている。

そんな時にラドビアスを連れて国を出ようとしている自分はやはり王の器ではない。

しかし、直ぐに出発出来るかと思つていたのに竜門が使えないのと上位の魔道師が消えたことが、国の機能をこんなに滅茶苦茶にするとは思わなかつた。クロードはあーあと声を出す。

今までの王がユリウスとの契約を反故にするのを渋つていたわけだ。考えなしの俺が現れるまでは……。

「この混乱を一応立て直すにはどの位かかるかな？」

「どの程度かによりますが」

「最小限でお願い」

ふーんとラドビアスは考え込む。

「大枠を作るのに一年ほどでしょ、それを軌道にのせるまでと仰るなら十年はかかるかと……」

「そんなに待てないよ！」

クロードが慌てて椅子から立ち上がる。

それを見てラドビアスがくすりと笑つた。

「クライブ様、各州に早馬を飛ばして各州州候かその代理の者の登都をお命じ下さい。年を越しまして、後春の月に全州候の前でクライブ様の即位式と初心勅語ちよくごを賜る式を取り行います。そこで今回のあらましとこれから國事、州事についてお言葉をかけられるのが宜しいかと思います」

「解かつた。しかし、さつきから出発とか待てないとか。まさかどこかへ行くつもりなのか

心配そうにクライブがクロードを見つめる。

「今すぐとはいかないみたいだけ……俺の中に封印された物を突っ返しに行つてきたいんだ」

「突っ返すってどこへ、何を……？」

クライブは解かつた様な解からない様なはぐらかされたクロードの言葉に頭を捻る。

「それはそうと」

ラドビアスがクロードの右手を指差す。

「対外的には王の詫が無くなつてしまつのはやはりまずいでしょうね」

「そう……だな」

クロードがラドビアスにいやつと笑いかける。

「じゃ、作つちやう？」

クロードの言葉にそうですね、とあつんの呼吸でラドビアスが返す。

「そ、それは偽物を造るといつことか！」

クライブが悲鳴のような声をあげる横で。

「国最高の技師を集めて作らせてから忘却術で記憶を消しましょ
う」「
「術でぱっと出せないの？　ぱっとせ……」
クロードとラドビアスは頭をつき合わせて、後ろ暗い相談を始める。

「そのような事、許されるとは思えない

クライブの言葉は一人にあつたりと黙殺される。

「あ、指輪だけじゃあだめだよな。鍵と剣も要る」

「ではついでにそれを王位継承の時の三種の神器とか言つことにては」

「それ、いい！　それでいいよね、クライブ」

「そ、そのような……」

生真面目なクライブは絶句して、田の前で不埒な相談を続ける二人を睡然と見た。

さて……と、ラドビアスは立ち上がる。

「明日からは忙しくなりますよ。国境の結界が消えた今、我が国へ大陸の国の大型船が大挙して押し寄せてきます。大陸側の沿岸に兵

を大量に割くことと、サイトス以外の州の港の整備を急がせません
と。それに係る役人の増強も急務です」

そこまで言つてはん、と手を打つ。

「いいですか、今日はもうはしゃいでいるで早くお休み下せ」「
いきなりの子供扱いにクロードはむくれる。

「ラドビアスは？」

すでに歩き出していたラドビアスが振り向く。

「魔道師庁へ行つてまいります。」「一ラルがありますから彼を祭祀
長に命じて、これから仕事を話し合つてきます」

てきぱきと言つとラドビアスは部屋を出て行った。

「クロード、頼みがある

クライブが頼みの内容を言つ前にクロードが応える。

「だめ」

「まだ、何も言つてないじゃないか」

クライブが拗ねたように言つ。

「だつてラドビアスを欲しつて話だろ、どいつせ」
ぱしりとクロードが言つ。

「正式に宰相として迎えたい」

「だめ……さてお子様は寝るか。前に居た部屋を借りるよ、お休み
クライブ」

んーと大きく伸びをしてクロードは話を一方的に打ち切つて席を立
つ。そして部屋の隅に目をやる。

「サウンティトウーダ、アウントウーン行くよ」

クロードが声をかけると、今迄置物のように微動だにしなかつた
異形のものが伸びをして立ち上がった。

「……これは」

顔を引きつらせて目だけで姿を追いながら、クライブは椅子から
立ち上がり後ろへ下がる。

「ああ、クライブには紹介するの忘れてたっけ？ こっちの赤っぽ
い狼みたいなのがアウントウーン、黒っぽいワニみたいなのがサウ

ンティトウーダ、可愛いだろ」

自慢の愛玩物紹介のような説明にええつ？と苦笑いしているクライブの前を横切って、クロードは部屋の隅にいる一頭の魔獣の頭をがしがしこいてやりながら魔獣を引き連れ部屋を出て行つた。

「リウスにとつてのクロード

「クロード様、起きて下さい」

ラドビアスに肩を揺すられ、うーんと寝返りを打つて再び寝入ろうとする。が、それを見逃してもらえるわけも無い。がしりと両腕を取られて無理やり体を起こされたクロードは、やっと目を擦ります。りながらラドビアスに声をかける。

「んー、お早うラドビアス」

「お早うございます、クロード様。明日からはお一人で起きてくださいね」

「えーっ冷たいなあ」

クロードが甘え半分に抗議の声をあげる。

「私は忙しいのですよ。今も仕事を中断して来ているのです」

ラドビアスが扉の所で洗面の器や水、替えの衣服を持つて立つている女官のところへ歩いて行つて、次々に受け取つては寝台際のテーブルに置いていく。

「何しろ皆怖がつてこの部屋には誰も入つてこれないのでから」

「……怖い？」

「そうです」

ラドビアスが顎をしゃくつてみせる方をクロードが見ると、自分の寝台の足元側の部屋の一隅が大きな固まり一つに占領されている。「怖い……ってこの事？」

首を自分の体に突つ込むようにして丸まっている一頭の魔獣を微笑ましく見て、返す瞳で入り口で固まっている女官たちを見る。

結構可愛いと思うんだけど。サウンティトウーダの大きな口（何しろ大男の上半身を一口なのだ）の横にある長い髭が寝息の度にゆらゆらと揺れている。アウントウエンなんか赤毛の犬みたいだし。（しかしつかさは尋常じゃないのだが）薄く開いた口からぞく大人の指ほどもある牙の間からべろりと舌を垂らして寝て

いるのも……可愛いと思つただけだな……。

「部屋にこれらを入れるのを止めもらわないと私以外誰もここへは入れないのでからクロード様お一人で起きてください。とりあえず、顔を洗つて下さい」

事務的に言つたラドビアスにクロードが甘えた声を出す。

「ラドビアスお願い、毎日起こしに来てよ」

という事は魔獣を部屋から出す気は無いのだと苦笑しながら、顔をあげたクロードをすかさずラドビアスは用意していた布で「しごしと拭いた。

「仕方ありませんね。何でお仕えする方は、監禁がかかる方ばかりなんでしょうかね」

呆れたようにいいながらも手は着替える服を取る。

「さあ、着替えて下さい」

「はいはい」

クロードは生返事を返して夜着を豪快に投げ飛ばす。すかさず、首を伸ばしたサウンティトウーダが口で咥えて受け止めた。

「うまい」

クロードが走りよつて頭を撫でてやると、隣のアウントウエンがぐわっと喉を鳴らして自分にもやつてくれと催促する。

「クロード様着替えて下さい、私は忙しいんです」

ラドビアスが、サウンティトウーダの口に手を突っ込んで夜着を

回収してぴしりと言つた。

「はいはい」

「クロード様」

「解かつてゐて」

アウントウエンの構つてくれ光線を背中に受けながら、着替えているクロードの髪にラドビアスがブラシを入れる。

「うわつ、そんなのいいよ」

「駄目です、じつとしてて下さい」

一人で仕度しろとか口では言つものの何やかやと世話を焼くラド

ビアスに以前、コリウスが「つるさい」とか言いながら世話を焼かれていた事を思い出す。途端にクロードはしんみりしてしまった。

「どうか……しましたか」

ラドビアスの気遣う声にクロードは、はっと我に返る。

「いや、今日の服は紫だから……思い出して」

それを聞いてラドビアスのブラシをかける手が止まる。

「紫の服、コリウスが好きだったよね。よく……着ていた」

紫の服にゆるく髪を後ろに編み込んで酒を飲んでいたエスペラントの成人のお披露目のお宴。その時の姿が思い出されてクロードの胸が詰まる。あれはほんの数ヶ月前のことなのに。

「紫はヴァイロン様がお好きな色でしたから」

「ヴァイロン？ 初代の王だよね」

「はい、そうです」

「ヴァイロンってさあ、コリウスにとつて何だつたの？」

ラドビアスは目を見開いてクロードを見る……暫くの沈黙。

「さあ、本当の所は私にも解かりません」

「待つて、ヴァイロンの事だよな」

びっくりとラドビアスの瞼まぶたが痙攣するが口調は変わらない。

「私はその場におりませんでしたから……たぶん、そうでしょうね」
クロードは自分の生まれる遙か昔の男に嫉妬している、と思った仕方ないのに。自分のような王の半身は数え切れないくらい彼の前にいたのだ。クロードはその何番目なのか、いずれにせよ大勢の中の一人であることは間違いない。

「俺なんてコリウスからしたら只の僕候補だったのかな」

ラドビアスに否定してもらいたくてわざと口に出す。それを知つていいのかラドビアスが目を細めた。

「クロード様は特別で」「やりますよ」

「本当？」

「ええ、もう、終わりますからじつとしていて下さー」

服と同じ紫の幅広のリボンで、クロードのシルバーブロンドの髪

をきゅっと結ぶ。

「思つたより話し込んでしまつて時間がありません、食堂へお急ぎ下さい。外にいる女官がご案内します。陛下がお待ちになつていますよ」

はい、終わないと背中を叩かれてクロードは外に追い出される。

「サウンティトウーダ、アウントウエン!」

行きかけて一頭の魔獣に声をかけると一頭の魔獣が揃つて付いて行こうとする。それをラドビアスが手のひらを立てて止める。

「駄目です、あとで牛の頭でもやっておきます。まさか食堂へ連れて行こうなどと考えてないでしょうね、クロード様」

「まさか」

まさにそう考えていたが小さく舌打ちして一頭を見ると、魔獣たちも不服そうに鼻を鳴らしてその場に伏せた。

「さ、急いで下さい」

クロードは渋々食堂へ向かう。歩きながらヴァイロンとユリウスの事をはぐらかされたのに気付いた。

「いらっしゃるです、クロード様」

女官に案内された朝食用の小さな（と、いつても充分広い）食堂に入ると、クライブがすでに上座に座っていた。クロードは済まなそうな顔を急いで作つて座る。

「お早う、クロード」

「お早づござります、遅くなりました。……だいぶ待つた?」

「少しね」

クライブは笑いながら横に座る一人の女性を見やつた。

気付いていた。部屋に入った時から当然見えていたのだから。じゃあ……この人が。

「クロード、私達の母上と姉上だ」

地下宮の少女

そう言つてクライブはその女性たちと優しく見詰め合つ。

「えつと、お早うございまーす」

何と挨拶していかわからず、やはりお早つかなとクロードは朝の挨拶をした。目の前の女性はクライブとクロードとは色目の違うブロンドの髪。サファイア色の瞳の美しい三十台後半の女性だった。その横にいる十代後半の母親似の女性は、ダリウスと婚約するところマーガレットらしい。

「お早う、クロード、会うのは十四年ぶりなんかしら」

「姉のマーガレットよ、本当にクライブとそつくりなのね。祭祀長になつたクロードはお父様より随分と年寄りになつてしまつたけど……あなたは歳を取るの？」

えんりょの無い物言いにクロードは言葉に詰まる。

「姉上、もういいでしょ？ 食事にしましょ？」

クライブが助け船を出してクロードはいつそりため息を付く。

特段、感極まつたとか懐かしくてどうとか、そんな事を期待していたわけでは無かつたがクロードは内心落胆してもそもそも食事を続けた。

「慣れない執務に陛下はとても疲れているの。あなたも陛下の側つきとなるのなら少しは執務室に顔を出しなさい」

「え……？」

母親の言葉に、そつかこの人たちにとって自分は家族というより臣下なのだと、クロードは愕然とする。前王の半身ゴーラルと同じ、そういうこと。

「母上、姉上、今までとは違つのですよ、クロードは私の影にはなりません」

クライブが慌てて言つたが、クロードは我慢できずにかたんと席を立つ。

「申し訳ありませんが気分が良くないので失礼します」

何とかそう言つて足早に食堂を出て行くと、自分の部屋に駆け込んだ。

やつぱり俺は血の繋がりだけで、長い空白を瞬時に埋めることができるとは思えない。そんなことを期待していると返つて白々とぽつかり空いた穴に落ちてしまう。俺もユリウスも血縁とのかかわりに問題がある。まあ考えてみればそれもユリウスのせいなのだが。

一旦、クライブが王位につくと決めてから、クロードは意識して王の執務室には近づく事を避けていた。日中は手の空いている兵士相手に剣や体術を学ぶ。間に、執務の手が空いたラドビアスに魔術を習う。それ以外はモンド州に居たときのように、一人で王宮内をうろついていた。そのことについて王もラドビアスも黙認している以上、他の官が止め立てできるわけも無く、いつの間にかそれが普通になっていた。

勿論それについて表立つて意見される事は無かつたが、影ではいろいろ言われていることもクロードは知っていた。だけど、特に爵位をもらつたり、官職についたりするわけにはいかなかつた。

俺はここから居なくなるのだから。あてにされてクライブの対抗馬に祭り上げられて騒動になる懸念など小指の先程望んでいないのだ。国王の食客扱いで丁度いい。

サイトスの王城の地下には主に政治犯の貴族、それもかなり上流の者だけが幽閉、投獄される為の裏宮が造られている。断首されず、終身幽閉の刑を受けた者は一般の牢獄とは比較にならない程の恵まれた部屋で、飢えることも無く世話をする者もいる……。だがそこを出る事は死ぬまでない。

地下宮の入り口の前、警備の兵士たちが、がたりと崩れるように倒れた。その倒れた兵士の間をクロードが縫つて歩く。大きな

錠前の穴に手を触れてから印を結ぶ。びしりと言う音と僅かに閃光が走り、錠が外される。ゆっくり分厚い戸を開くときいきいと耳障りな音が地下にひびくが誰も起き上がる様子もない。入り口近くには審判が下される前に留め置かれる牢がある。その牢の戸の錠もさつきと同じように外して戸を開ける。部屋には薄茶のドレスを着た明るいブロンドの少女が座っていた。

天井近くにある明り取りの為の窓が横長に大きく取つてあり、地下にしては明るい。だからといってここが獄であることには代わりがなかつた。戸の開く音に少女が振り向く。

「クロード！ いえ、国王陛下だつたわね。何のご用かしら、王自ら罪人に会いに来るなんて」

その強い口調にクロードが思わず笑う。

「俺は、国王じやないから不敬罪が加算されないけど君つて相変わらずだな」

「国王じや……ない？」

アリスローラはクロードの右手に指輪があるのを認めて眉根を寄せた。

「その指輪は何？ 偽物なの？」

怒りを含んだ顔でクロードを見る。

「ああ……これ？」

クロードがよいしょとアリスローラの向かいの椅子に腰掛ける。

「君には朗報かもね、レイモンドールの表舞台から魔道師は退場することになり、魔道師で『鍵』と契約した俺は王では無くなつた。兄のクライブが王だよ。戴冠、即位式はまだ先なんだけど」

「どういう事？」

「この国の魔道師の祖、イーヴアルアイが死んで術が解けて魔道も結界も消えた」

言つたクロードは自分の胸をそつとなぞる。そこには竜印があつた場所だった。

「魔道師が政治から手を引くの？」

興奮氣味にアリストローザの声が大きくなる。

「ああ」

反対に幾分落ちしたようにクロードうなずく。　「そうだ、俺がこの手でイーヴァルアイを殺したんだ。　何度もその話題に触れても慣れることが出来ない。　思うだけで胸が苦しい。

「そう、良かったわ、これからレイモンドールはいい方向へ変わっていくわ。ありがとうクロード。」このことを知らせに来てくれて。裁判でお父様のように斬首となつてもここで一生幽閉となつても悔いはないわ」

アリストローザがクロードの手を握り決然と言つた。

「あのさ、君は裁判にかけられない」

クロードの言葉にアリストローザが握っていた手を離す。

「え？」

「ボルチモアへ返そうと思つていてるんだ。この国が……ボルチモアがどう変わるか見てみたいだろ？」

「それはそうだけど」

□□もるアリストローザにクロードはにやりと笑う。

「俺がモンド州の三男だったことを覚えてるのは君だけなんだ。ユリウスっていう兄貴がいたことも。俺にとって大事な思い出なんだ。一人ぐらい思い出話を出来る相手が欲しいと思つてさ」

「クロード、それ本当の理由じゃないわよね」

「それだけじゃダメ？　じゃ君を地下宮に置いていたくない……つていうのも理由として脆弱かな」

クロードの言葉にアリストローザの顔が赤く染まつたが、それに気付く様子も無いのがクロードなのだつた。

「また来るよ。スノーフォーク家に預けられる事になると想つけど、暫くはここでがまんしてね。裏工作しなきゃあ」

すぐつと立ち上がるとアリストローザの返事を待たずにクロードは牢の戸を閉めた。

毎過ぎサウンティトウーダとアウントウーンを連れて、クロードは王都のはずれにある森にやつて来ていた。

「退屈だつたろう? 少し遊んでおいで。ただし人間は狩るなよ。あと、アウントウーンは火を吹くの禁止だからな」

クロードの言つけに一頭の魔獸はこくんと頭を下げる相次いで消えていった。一頭を見送つてクロードは草地に寝転がつて空を眺めていた。

「お一人で動くのは構いませんが、城内からお出になるなら一言お知らせ願います」

聞きなれた声に目を向けるとラドビアスが立っていた。

「でも俺がここに居るつて解かってたんでしょう?」

「それはこの辺りで恐ろしい獸の叫び声が聞こえると面たちが騒いでいたからです」

「へへっ……」

悪戯っぽく笑うクロードの横にラドビアスが膝をつく。

「……で、地下宮には何の用で行つたのですか」

せりりと尋ねる。

「アリストローザに会いに行つてたんだ。彼女、ボルチモアへ返そう

と思っているんだけど。できるでしょ?」

「それは……何とでもいたしますが、理由をお聞きしても?」

うーんとクロードは唸る。

「アリストローザには生きてボルチモアでこの国行く末を見て欲しいと思っているんだ。俺がベオークから帰つて来たときに待つている人がいてほしいと思つたら駄目かな。いつになるか解からない。

若いうちに帰れるのか、何十年かかるかもしれない。でも結婚して子供ができる……時が過ぎたあと俺が帰つて来たときに笑つて話ができる人が欲しいんだ。それは……クライブじゃない」

「そうですか」

ラドビアスは思わず口元を緩めてクロードの頭に触れる。

「本当はだめですけど彼女の罪を直接知っているのは数少ない者だけですし、何とかしましょ」

「ありがとう、ラドビアス。しかし、おまえこの時間ここに居ていません？」

クロードが身をおこしてラドビアスを見る。朝早くから晩遅くまで仕事にかかりきりでその合間、合間にクロードの修業や勉強に付き合つて。いつ寝てるのか不思議になる。見上げた顔は前から顔色が悪いので、今の体調がどうだかは窺えない。クロードに対する態度も何も変わらない。

「それを心配して頂けるのなら大人しく城内にいらして下さい。今、クロード様より大事に思うことなど私には無いのですからね」

ラドビアスの言葉にじいんと嬉しくなつたクロードは、その余韻に浸りたかった。だが何か重い物を引きする音と荒々しい鼻息。生臭い血の匂いに邪魔されて立ち上がると、楽しそうな二頭の魔獣が揃つて帰つてきたところだった。しかもお土産つきで……。

「これ、獲つてきたのか」

サウンティトウーダがその大きな口に咥えているのは白馬で……たぶん王の騎乗する馬だ。その後ろからアウントウエンが咥えているのは茶色い大型の馬で馬車を引く馬だらつ。

「あちやー、今さら返しにもいけないよな」

「死んでますしね」

二人が顔を見合わせる横で二頭の魔獣が満足そうに尻尾を振る。

「こうなつたら……骨まで残さずに食べてしまえ」

あとは知らぬ存ぜぬで通そうとクロードは腹を決めた……が。

「そんな事通るわけないでしょ」馬丁たちが今頃大騒ぎですよ。

二頭を野放しなさつてはいけません、何事も躰が大事です」

ラドビアスにきつちり怒られて、クロードは大きな馬の腹から臓物を引きずり出して夢中で食べている二頭の前に立つて腰に手をや

る。

「おまえたち、勝手に食べ物を獲るの、サイトスでは禁止だからなー！」

出来る限り低い声を出す。「えーっと言ひやうな顔で口の周りを馬の鮮血でべたべたにした二頭がクロードを見る。

「解かった？」

クロードの声に頭を上下して二匹を注視する魔獣にクロードはニコリと笑う。 やつぱり可愛い。

「まあやつちやたもんは仕方無いからそれはゆつくりお食べ」

クロードの声を合図に一頭は先を争って馬の腹に頭を突っ込んだ。

朝、ラジビアスに例によつて荒っぽく起しられてクロードは頭を搔きながら仕度を始める。

「あのさ、前に早馬を飛ばしたけど最北のダートベージ州までのくらこかかるの？」

今日もクロードを捕まえて丁寧に髪を梳りながらラジビアスが答える。

「馬を替えながら一日中駆け通しで片道一十日はかかるかと。直ぐに返事を持つて帰つて四十日と少しあかまじょうね」

「そんなに……」

「なぜ州宰の魔道師が多かつたと思われますか」

「魔道師庁の意向を州政にいき渡らせるため？」

「それもありますが……。サイトスからの政令の速やかな周知と州候への親書等の送付などを、竜道を用いたことによって安全に地域の距離に係わらず、半日ほどで出来ていたのですよ」

「んーっ、それって俺を暗に責めてる？」

クロードが頭をかきむしる。

「止めてください。せっかく髪を梳いていますのに……どうされた

んです？ 何か気に病まれる事があるのですか

ラドビアスの問いにこつくりとクロードが頭を下げる。

「それは皇太后様に関係あります？」

ラドビアスが濃紺のリボンできちり髪を結びながら聞く。

「では、こちらに朝食を運ばせますか」

「えつ、いいの？」

クロードが勢い良く言つので、ラドビアスは当たりかと薄く笑う。
「私も一緒にご相伴させていただきますよ。そのほうが私もクロード様と話をさせて頂く時間が増えますし」

はい、出来ましたとぽんと背中を叩いてクロードを開放すると、
ラドビアスは、クロードが脱いで飛ばした夜着を魔獸の口から抜き取つて畳み小脇に抱えて戸に手をかけた。

「三種の神器が出来たと報告がありましたから、見に行きましょう」「出来たの？」

「はい、良い出来栄えだと報告がありました。今日はがんばって皆様とお食事なさつてください。終わったら祭祀庁へお連れしますよ」
クロードが大人しくうなづくのを見てラドビアスは部屋を出て行つた。

三種の神器

祭祀庁か……。クロードは西側へ目を向けて権を手放し名前を祭祀庁と変えた場所を思い、またこれから向かう苦行を思い出し息を吐いた。砂を噛むような食事を終えてクロードが部屋に戻るとラドビアスが待っていた。

「参りましようか」

二人が西側の長い廊下を通り、大きな扉を開けるとその中はがらんとしている。

「何か働いている魔道師の数が少ないよね」

クロードが寂しそうに言う。

「はい、還俗して官吏になつた者が大勢いますから」

ラドビアスは何の感傷もないよう自分で次々と扉を開けていく。
そうか……魔道師はもう国政に携わらない為、今迄国政に携わっていた者は官吏になつたのだ。

やけに風通しの良くなつた庁内を見回して、クロードはガリオールがてきぱきと指図をしていた頃との差に物悲しくなつた。いつも俺は口先だけで後になつて自分のしたことを思い知るのだ。

ラドビアスが大きな箱から細長い箱と小さい箱をそつと取り出して机に置くと、括つてある紐を解いて箱を持ち上げる。

「クロード様、こちらへおいで下さい」

クロードが机を見ると、そこには美しい彫金が施されて宝石がそこにここに散りばめられた剣と鍵、指輪があつた。

「うわーきれいだね」

クロードがラドビアスの横で感心しながら眺める。レイモンドールは三十日ほどを一の月として十一か月で一年としている。その四ヶ月ほどが厚い雪に完全に閉ざされる。その間、農作業などはまったくできない。そのことが長い事、この島国が貧しい要因であった。

しかし、この国は山中から稀少な宝石、鉱物が豊富に産出される。屋内作業としてそれを加工する技術がこの数百年のうちに発達し、他に並ぶ国はないと言われるようになつていて。他にも細かい細工を施した木工細工など、細工物全般においてレイモンドール産物は他国の二倍以上はする高級品として出回っている。唯一、開かれているサイトスの港からはこういった品々が海を渡つていくのだ。

「でもこれ、本物と大分違うよね。本物より豪華で……」

本物よりかなりけばけばしい。クロードは自分の指にある本物を目の前に上げる。

「そうですね、クロード様がお持ちの物は実用を兼ねてありますからね」

「そうか、これらは見栄えがして豪華で神々しい感じがすればいいのだ。指輪以外は身につけることも使うこともないのだから。「本物を知っているのはローラルだけですから見栄えが良ければいいんですよ」

ラドビアスがあつさり言いながら、丁寧に包みなおして箱に収めていく。

「では、消しますか？ 職工たち」

ラドビアスの言葉にぎょっとしてクロードは唾を飲み込んだ。

「もしかして今、物騒なことを考えてましたか？ 消すのは記憶ですよ、クロード様。そういうお話だつたでしょ？」

くつくつと手を口元に当ててラドビアスが笑つた。

「解かつてゐよ」

クロードはやられたと思いながら手にかいた汗を上着で拭つた。穏やかな笑顔のこの男が何人も手にかけているのを知つてゐるから、この手の冗談は笑えないのだ。

「一足先にハーロート公が近々サイトスにお着きになられます。ご長子のダリウス様も」一緒に、ダリウス様は直ぐお帰りになられるようですが

「ダリウス兄様が来るの？」

久しぶりに会えると心が浮き立つたが、直ぐにダリウスは自分のことなど覚えていないのを思い出し一気に気が塞いだ。結局、二日後に到着したダリウスにも会いたくなくて、クロードは王城の城壁に上つて海を眺めていた。結界が消えてここから大陸側の陸地が良く見えるのだ。

「王陛下……まさか？」

あまりにも聞き覚えのある声にクロードは思わず振り返る。

「ダリウス兄……」

兄様と続けそうになつて慌てて言葉を飲み込む。不思議そうに見上げるダリウスはまた少し背が伸びて大人っぽくなつていた。長い黒髪も腰まで伸びている。

「あ、クライブ王の弟のクロードです。あなたは今度宰相を拝命されたモンド州公、ハー・コート公爵のご子息でしたよね」
クロードの言葉にはつどダリウスが片膝を付いた。

「失礼いたしました。陛下の弟君とは知らず……しかしそのようない方がこんな所で供もつけずにいらつしやるとは」

「ここから一番大陸が良く見えるんだ」

「実は私もそう聞いて参つたのですが」

そう言つて後ろに控えている従者を一瞥して、何かを思い出したようにクロードを見つめた。

「何？」

「いえ、以前にもどこかで同じようなことがあつたような気がして……思い違いでしょう。お気になさらないで下さい」

「別に気になど」

クロードは嬉しくて笑い出しそうになる。モンド州にガリオールが来た時もクロードは城壁に立つてダリウスが呼びに来たのだった。

記憶はなくなつているのでは無く。どこかへ仕舞い込まれているのだとクロードはダリウスを見ながら、やはり会えて良かつた。

たと思つた。

バルザクト・ロイス・ヴァン・ハーロート公爵がサイトスに到着して宰相の任に就いてから、急速に国政は形を取り戻していく。年が明けると、続々と各州から州候、または州候代理がサイトスに到着して王宮も賑やかになつていく。それからは、あつという間に時が流れしていく。

怠情なときも忙しくしているときも一刻は一刻のはずなのに通り過ぎていく時の流れは確かに違うのだとクロードは思つ。

戴冠、即位式を迎えたその日、祭祀庁の大扉が左右に大きく開かれた。中ほどにある階を大きくぶち抜いた広い空間に、モンド州のゴート山脈にある廟の内部に似せた教会が造られている。今そこはぎつしりと貴族や軍の將軍らが両膝を床につけている。高い壇上には祭祀長のコーラルが厳かにレーン文字を宙に描いて、祝福の言葉を古代の言葉を紡いで大きく印を切る。最後にコーラルが美しい冠をクライブの頭に載せて戴冠式は終わつた。人々が続々と祭祀庁から出て行き玉座のある大広間に場所を移す。

今度は新王の初心勅語が始まる。初めてクライブ国王を見る貴族達がひそひそと言葉を交わす。

「クライブ陛下はおいくつであられるのだ？ 隨分とお若いようだが」

「十五になられるのではないか……」

新王となつたクライブのあまりの若さに戸惑いが広がる。今だからつてこのように若いまだ少年といえる歳で王位についた王はいかつた。魔道側が要求する王の血を受け継いだ双子の一人を差し出すには体が成熟している必要があつたのだ。

王は『鍵』と契約すると不老になる為だからか、魔道に守られている間、幼い子供が王になることは皆無だつた。が、今は魔道の加護は無い。理由が解からず、不安ばかりが小波のように広がつていいくばかりだった。

「国王陛下の御前であることをお忘れか、控えなさい
大きい声では無い。しかし宰相ハーコートの声はぞわついた広間の端から端へ一陣の風のように通つていく。

「陛下、お言葉を」

宰相のハーコートに軽くうなずいて、クライブが玉座から立ち上がる。

「皆も懸念してこの國を覆つていた結界はもはや存在しない。各州から出たままになつてゐる州宰や上位の魔道師も戻ることは無い」

小さくセコでじよめきがおこる。それほど州候たちにとって州宰の存在は大きかつたのだ。

「この国の結界術の要だつた魔道師のイーヴァルアイが亡くなつたことが原因で龍道は消え、龍印を受けた者もまた然りだ。これからこのレイモンドールは魔道に頼る事無く新しい国としてあらねばならない」

そこでクライブは一旦言葉を切つて周囲をゆっくり見渡した。

「見ての通り私は若輩だ。政策、案件があれば遠慮なく奏上して欲しい。私からもこれからこの国の有り様を勅書として記したので後で目を通すように。官の不足を補つために魔道師の還俗と各州に官吏を養成する大学の設立など早急に進めてもらいたい。これからは政治から魔道を排し人を以つて司ることとする」

頬を赤くしてクラライブが玉座に座り各州候、主だった貴族から拍手を送られてふーっと長い息をついた。

「ご立派でございましたよ」

「こりとハーネートに笑いかけられてクラライブはもう一つ安堵のため息をついた。

それを一段下がった所に設けてある椅子に腰を降ろしていたクロードとラディアスも、ほつと息をついてお互い顔を見合わせた。それから長い州候のお祝いの挨拶が続き、終わつたのはとつぱりと日も暮れた夜半の頃だった。

「疲れたーっ」

大声とともに部屋に駆け戻るとクロードは寝台に飛び込む。

「寝台に上がられるなら履物を脱いでください。明日からは祝賀の宴が始まりますよ」

「ええーっ、もう勘弁して」

「いくらなんでも王弟が全く顔を出さないわけにはいきませんが、午前中我慢なさつたらうまいこと出して差し上げます」

ラディアスの言葉にクロードはがばりと起き上がる。

「本当?」

「本当です」

「じゃあ我慢してやるかと靴を脱ぎ捨てるが、それにしても俺が王でなくて本当に良かつたとクロードは思つた。

「めん、クラライブ。王の居室のある方へ手を合わせてクロードは正装のまま寝入るつとしたが、ぐいと腕を掴まれる。

「お疲れでしょうがお湯を使って下さー」

「もういいよ、寝たい」

「じゅりと寝返りを打とうとしたクロードを軽々とラドビアスが抱え上げる。

「さやあー何するんだっ」

「言ひ事をきかないからですよ、クロード様」

わざと横抱きにしてすたすたとラドビアスが浴室へ連れて行く。「わーっ降ろしてよ、恥ずかしいよ」

「だつたら初めから言ひ事をおきになればよひしこのです」

ぴしゃりと言つて、それでも降ろすことなく歩くラドビアスの胸にクロードは顔を埋める。顔を上げたままだと廊下ですれ違う官の驚く顔を見てしまうからだ。浴室に入るとラドビアスがやつとクロードを降ろした。

「お一人で大丈夫ですか、お世話をする女官を呼びます?」

「ラドビアス!」

「こいつ! いつだつて俺は一人で入つてるだろつ。」

真つ赤になつたクロードにラドビアスがにこりと笑んでみせた。

「これからにお着替えがござります、体を拭く布はこちり。では見計らつてお迎えにまいります」

ぱたんと閉まる音にクロードはやれやれと服を脱いで裸になつた。「絶対日頃の憂さを俺をからかつて晴らしているよ、ラドビアスの奴」

しかし、湯に体を浸すと体中の疲れがお湯に溶けていくのが解かる。

そして……一つ、名案も思いついた。ラドビアスと一緒にお風呂に入ればいいじゃないか。上手い事やつて服を脱がせて……と、中年の色ボケ親父のようなことを思いながらぶつぶつクロードが一人つぶやく。上半身だけでも脱げばその体に誰の竜印があるのか、無いのか確かめられる。口元までお湯に漫かりながらぶくぶくと泡を立ててクロードはそんな事を考えていた。そして……自分が靴を履いて来ていないことを思い出す。

俺、帰りも抱っこなのか。

浴室を出たラドビアスは、その足で祭祀庁へ向かう。大扉の前にいる警備の兵士も一人きりになつていて中に入ると「コーラルが直々に迎えた。

「ラドビアス様、何のご用です?」

「今日の祭祀の事と言えば解かると思つが
「こちらに」

ガリオールが使っていた執務室に入ると上座の椅子をラドビアスに勧めて、反対側に「コーラルが座つた。

「やはり、ラドビアス様には解かると思つておりましたが」

「古代レーン文字で呼ばわった名はクロード様だつたな」

ラドビアスがきつく言つて「コーラルの返事を待つ。

「はい、『鍵』と契約を交わした御方はクロード様でござりますから」

「コーラルは当然の事をした迄、と言つと後ろに控えていた魔道師に茶を入れるよう命じた。

矜持の行方

「この者、マルトはガリオール様に長く……といつてもあなた様の尺度で言えばたったの十年ですがお仕えしておりました」

「だから、何だと？」

ラドビアスが突き放すように言つた。

「それで、何ゆえ、クライブ陛下の術を解かなかつたのか。何を考えているのだコーラル」

「私はコーラル前国王に十四年間、お仕えし……やつと魔道師庁でお役に立てるどガリオール様にお誓い申しあげておりましたのに。今の状況は納得しかねます」

コーラルは挑むようにラドビアスに言つた。王の子として同じ日に生まれたのに、王の影として生きなければならぬ身の不運。それを我慢できたのは、自分が王の死後、永遠の時を国の施政者の一人として生きる。そのために自分こそが選ばれたのだ、とう誇りがあつたからなのだ。それが……あつさりと奪い取られた。イーヴァルアイ様が亡くなつたから童道が無くなつたという事も、結界がなくなつたという事も仕方ない。だからといつてこの国を今迄支えてきた魔道を政治の表から排除するなどという事は我慢がならない。神聖な『鍵』を受け取つたのがクロード様であるなら、王はクロード様なのだ。

「おまえたちがどう思うと勝手だが、クロード様は王位につぐ」意志は無い。無駄なことは止めなさい」

ラドビアスは立ち上がるとさつさと歩きだす。

「魔道師庁がこんなになつてしまつてお寂しくはないのですか？ ラドビアス様！」

マルトがラドビアスの上着のすそを思わず握つて追いすがる。

「別に。おまえたちには気の毒に思うが、そんなに政治に係わりたいのであれば還俗して官吏になればいいではないか」

ラドビアスは冷たく言ってマルトの手を払う。

「クロード様を浴室にお迎えに行くので失礼する。それと、もう、ここは魔道師院ではないよ、マルト」

ラドビアスが出て行つたあとに何とも言えない暗い空気になって二人の魔道師は無言で立つていた。

「ラドビアス様には解かつて頂けなかつたが……そうだな、その手がある」

「コーラルがぼそりとつぶやく。

「マルトおまえ、気持ちを同じくする者を連れて官吏になれ」

「コーラル様、何を」

「形だけの還俗を……サイトスをこの国を魔道師の元に取り戻すのだ、マルト」

「……解かりました」

そしてこの国は魔道師の王を迎える。それはクロード様でもない、この私だ。晴れやかにコーラルは久しぶりに笑つた。

三日程、祝賀の宴が続き各州候らが各所領に帰つて行く頃、地下宮のアリストローザの獄の戸が開けられる。

「アリストローザ様、お迎えに参りました、これからスノーフォーク候様についてボルチモア州にお帰り頂きます」

「ラドビアス、クロードは？」

アリストローザがきょろきょろと辺りを見回しながら問うのにラドビアスは幾分素つ氣無く応える。

「クロード様は上でお待ちです」

ユリウスに仕えていたこの男がクロードと一緒にいるのがアリストローザには気に食わない。国がどんどん魔道と距離を置いていくのに、ラドビアスといふとクロードのほうはどんどん魔道側へ引き込まれていつか自分の前から消えていきそうだ。

この従者は表面上は礼儀正しく無礼な事をするでもないし、人当たりも大変いい。しかし、本当の所はどうなのだろう。優しそうな聲音のわりに先程見せた顔は……かなり冷たかった。

ラドビアスに続き階段を上がり、迷路のよつた廊下を歩いていくと大きく曲がった所で突き当たった。そこは梯子が上まで続いていて上を仰ぐと四角に切られた、跳ね上げ式の扉があるようだ。ラドビアスが先に立つて梯子を上り、パズルのように板が組んである戸板を動かすと、歯車がかみ合つたような音がした。それを押し上げて開けると下から続くアリストローザの片手を掴んで引っ張りあげる。

「この地下宮の中を良く知つているみたいね」

こんな誰もこないような場所の……自分が仕えていたモンド州州城内ならともかく、首都サイトスの地下宮の隠し通路の事まで何でこの男が知つているのか。

「サイトスの主城を建て直す時に私もこちらにおりましたもので」アリストローザの胸の内を読んだようにラドビアスが口にした内容に、アリストローザが目を見開いて掴まれた手首を振りほどいた。

それって四百年以上前の話じゃ……。

ラドビアスが軋む音を立てて次の戸を押し上げると固まつた埃が落ちて来て、その先に一人がやつと立てるほどの足場があった。そこから最後の梯子が伸びている。

「足元にお気をつけください」

こちらに顔を向けたラドビアスが一人事のように言つ。

「足を滑らせて頭をうつ……というのも……やはり止めときますか」しかしその後にはいつもの笑顔を見せせる。

「先にお上がり下さい、アリストローザ様。戸は引き戸になつております」

生きた心地もせず、追われるよう急いで梯子を上り、戸を開いて上に体を出す。急に昏くろ闇の力強い光がアリストローザの目を一瞬眩くらませて、今出てきたばかりの穴に足を取られそうになる。

「あつ」

バランスを崩したところをがつしりと肩を掴まれてひき戻された。

「大丈夫？ アリストローザ」

「クロード！」

アリストローザに抱きつかれてクロードは田を白黒させた。

置いていかれる者

「一体どうしたの?」

「わ、私、あのね、クロード……」

「足がもつれたのでしよう。長い事、狭い所においでだったのですから」

アリストローザの話は、ラドビアスが姿を見せて断ち切られた。
「これからスノーフォーク候の馬車の所まで案内させるよ。長い間、不自由な所に閉じ込めていたけど、許してくれよ」

州候の子供同士という立場から大きく身分が変わったというのに、クロードは少しも変わらない。

「クロード、ありがとう」

抱きつかれて距離が近い上に、にっこりと可愛い笑顔で言われてクロードは赤くなつて、しまったといつ顔をする。

「んーもう、いつも俺はアリストローザにいいよしされているみたいだ。あのせ、元気で。俺またボルチモアに行くから。いつになるか解からないけど覚えていて、俺のこと」

「クロード?」

ここを出て行くのは自分の方なのに、遠くに今にも行ってしまいそうなクロードの言葉にアリストローザは切羽詰った気持ちになつてそのままクロードに口付る。

「アリストローザ様お急ぎください、案内の者が来ております」

ラドビアスの声にぱつと離れたアリストローザの手をクロードが掴んで引き寄せるともう一方の手に丸くて平たい物をのせる。

「これを預かっていてよ、俺の大切な物なんだ。また、会つときまで君に持つていてもらいたいんだ」

「クロード?」

アリストローザは自分の手にのせられた竜を型どったペンダントを見つめる。

「俺つていつも君にはせりげっぽなしだつたけど、別れる時へりこ
俺にいい所を作らせてよ」「
言つて素早くクロードは、さつきのお返しとアリストローザに口付
けた。

「クロード様」

ラドビアスが案内の従者からその様子を隠すように立ち塞がつて、
僅かに咎めるように名前を呼ぶ。

「じゃあ、またねクロード。すぐ会いに来てね」

顔を赤くして名残を惜しむように後ろを振り返りながら、アリスト
ローザは去つて行った。

俺が選べなかつた人生……。州候の子供としての人生をア
リストローザの中に見ているのかもしれない。だから強く頑張つて
生きて欲しいと思う。魔道師としての俺の人生も頑張るから。
そして別の感情もあると……。アリストローザのことを思つとき、
会つているとき、苦しくて嬉しい。この感じはユリウスに感じて
いた愛とはまた違うものだということは、クロードにも解かつてい
た。だけど今は無理やりにでも心の隅に追いやつておかなくては。
クロードはアリストローザの立ち去つた方を長い事見ていた。

そして、むつりと黙つて歩くラドビアスに気付く。

「何か、怒つてるのか、ラドビアス？」

「いいえ……ですが、あれはカルラ様から頂かれた物です」

「やつぱり怒つてゐるんじやないか」

憮然とした顔のラドビアスにクロードは困つたように見上げる。

「俺にとつて大事な物つてあれくらいしか思い付かなかつたんだよ、
許せラドビアス」

「別に私は怒つておりますん」

そういう割にはラドビアスはクロードに歩調を合わせず背中を向
けた。

「だからクロード様が私に謝る必要などありません」

即位式の後は少しずつラドビアスは政務から離れるようになり、午後は毎日つきっきりで剣術、体術、魔術をクロードに教えるようになつた。

嬉しいんだけど一日くらい休みたいかも……。

しかし勉強をラドビアスに教えてもらうよになつて、ぐんと自分で術が上手くなつたと思う。ラドビアスの教え方は論理的かつ解かり易く、以前の師であるヨリウスがいかに先生として、はちやめぢやだつたかという事も、良く解かつた。

ヨリウスはほとんど独学であれ程の魔術を收め、あらゆる国の言語に通じていたのには今さらながら尊敬するが、天才は優秀な教師にはなり得ない。なぜなら自分が一読して解かつてしまつしが、どうして解からないかが解からなかつたから……だ。

取つ組み合つて喧嘩して楽しかつた。そう、楽しかつたんだ。もつと一緒にいたかつたんだ、ヨリウス。しばらくクロードは思い出に足を取られて動けなかつた。

ある毎過ぎ、クロードは前方から宰相のハーコート公と話ながら歩いて来るクライブが田に入る。この所、朝食も血塗に運ばせてラドビアスと食べているクロードは忙しいクライブと顔を合わせることも無い。

「クロード、久し振りだな」

「あ、陛下、お久し振りです」

そのクロードらしくない挨拶にクライブは、ほこりばせていた顔を曇らせる。

「悪いが先に執務室へ戻つていてくれ、すぐ行くから」

ハーコート公と従者まで追い払つと、クライブは廊下に突き出たバルコニーにクロードを誘う。

「最近私を避けているのか、クロード？」

「いや別に」

向かい合つた体勢になつた途端、クロードがあーっと大声を上げた。その声にクライブが驚いて後ずさる。はあーと今度は大きなため息。

「どうした？」

クライブが今度はクローデーに挑み寄る。クローデーは田の前に立つて、このクライブと田線を合わせたいかねど、やや上を向かなくてはならなかつたのだ

育力……何で力がな

「ううう、声は思ね、自分の頭はタリイへは手をやる

セの書のカーファイブは前は競の本のこ以て、一たん

肩から腕にかけての線が細い少年の体からの脱却を始めていた。男の子が一番変わっていく時期に差し掛かっているのだ。男の子から子と言う文字が取れていく過程の時期。たつたの一年ですっかり変わってしまう。俺はこの先どんどん置いていかれる。

自分を見て黙り込むクロードに居心地の悪さを覚えてクライブが呼びかける。

「ごめん、クライブ。またね」

うな垂れてクロードは部屋に帰つた。
たクロードをラディアスが迎える。

「何かございましたか？」

「あのさ、俺つて絶対を取り出さない限り死ぬまでこのままの姿だ

「そうですが？」

ラドビアスはクロードが何を言いたいのか計りかねて首を傾げた。

「もし俺が五十歳で絶筆を出したら俺は、十四歳からいきなり五十歳だよね」

「そうなりますね」

ラドビアスの淡々とした物言いにクロードが大声を出す。

「うわーっ、嫌だ！ 俺は今すぐ出発したい」

「クロード様？」

寝台に飛び込んでじたばた暴れるクロードの両肩を掴んでラドビアスが寝台に腰掛ける。

「一体、どうなされたのです？ 私に解かるよひて説明してください

い」

その言葉にクロードの動きが止まる。

「解からないの？」

「はい、解かりません」

不信といづ病

「なんで？」と思つたがはたと氣付く。ラドビアスは不老のまま何百年も年月を重ねてきているのだ。歳を取らないことへの恐れや急に年老いてしまう不安を解かれというのも無理な話か……。

「とにかく、クラブと外見が変わつていくのが。俺だけ子供のままつていうのが堪らないんだよ」

そう、訴えるクロードの顔を見ながらラドビアスは、そりですかと短く応えた。

「クロード様」

両肩に置いた手を滑らせて手首を掴むと、クロードをひょいと上体を起き上がらせる。そして壁にかけてある剣を取つてクロードに差し出す。

「体を動かしたらさつきりしますよ」

ラドビアスの言葉に、やる氣が出ないクロードはそれでも渋々剣を受け取る。

「体を動かしたら背、伸びるかな」

「それは無理ですね」

「すつきりするだけ？」

「腕も上がります」

ラドビアスの返事にクロードは大きいため息をついて剣を支えに立ち上がった。中庭で半刻ほど打ち合つてクロードはへろへろになつて座り込んで水を飲んでいた。

「すつきりしましたか」

顔にかかる髪をかきあげながらラドビアスが聞いてきた。

「……そういうえば、背のこと忘れていたかも」

「近く、出発しますか」

さつきと同じ調子で軽く聞かれてうつかり聞き逃すところだった。

「このの？」

「いいですよ、お伴します」

クロードは晴れ晴れとした顔をラビアスに向けて水をじっくり飲んだ。

数日後、朝食のテーブルにすでにいたクロードを見てクライブは驚く。前に話をしたのはこの間廊下で話しかけたきりだ。

「お早う、クロード」

「お早うございます。クライブ陛下、母上、姉上」

マーガレットの挑発するような言葉にも、母親の小言にも愛想良く答えるクロードにクライブは不信がる。だが最後まで以前のように勝手に食堂から退出するでなく、クロードは大人しく座つている。

「今日はやけに大人しいな、クロード？」

「ああ、今日は特別だから……」

「何が……？」

「それは内緒ですよ陛下、じあそう様でした」
席を立つクロードに少し不安になつて、クライブが手を伸ばしたのをクロードががしりと握つて笑いかけた。

「じゃあね、クライブ」

久しぶりに名前を呼び捨てにされて、クライブはクロードとまた距離が近くなつたような気がして嬉しくなつた。やはりクロードはクロードだ。魔道師庁へ続く廊下で初めて会つたときのようだ。あのときもあつたりとそう言つて……。クロードは手を離すとくるりと身を翻して食堂を後にする。それを見送つてクライブはすとんと椅子に座り直した。

また、来るよ、そう言つて私の前からいなくなつたんだった。

「クライブ陛下、少しクロードに気を許し過ぎですよ」

母親の言葉にクライブはびっくりして母親を見た。

「確かにあなたの弟でしょうが悪い噂もあるのですよ、私はあの者

が「コーラル陛下に仕えていたようにあなたに仕えるなら黙つていようと思つていましたが」

「母上？」

私の弟といつ事はあなたの子供ですよ。

クライブは今までクロードに会つと冷たく小言を言ひ母を心苦しく見ていたのだが、それはサイトスに外れた振る舞いをするクロードのためを思んばかりのことだと思つていたのに……。昨日のことが甦つてクライブはこめかみを押さえた。

昨日、久しぶりにほつかりと半日の休みをもらつて、新しく従者にした顔なじみの者と剣の手合させした。その後、しばらくは和やかに談笑していた。新しく側付きになつたのは、昔からクライブの遊び相手に選ばれたサイトスに居を構える伯爵以上の貴族の子弟らでクライブとは小さい頃から気心が知れている。

その中の左軍將軍のレミントンの息子のライアンが声をひそめる。「陛下、ここだけのお話という事でお許しを願いたい話があります」「ここでは陛下もつける必要はないよライアン。君と私の仲だ。遠慮なくなんでも言つてくれ」

クライブは皇太子の時より全ての者が遠くに行つてしまつたように感じて寂しくなる。消えていくのではなく、いるのだが自分のまわりに今は無き結界が張つてあるように皆、一定の距離を置くだ。王とはなんて孤独なんだ。

「では、言いますが……クロード様のことです

クロードの事?

ライアンが咳払いを繰り返して、自分を鼓舞しているのを見て、クライブは嫌な予感がする。

「早く言つてくれ、ライアン」

なかなか言い出さないライアンに焦れて強く言つと、ライアンの横にいた内務大臣の息子、ゴーデンが口を切つた。

「申し訳ありません、クライブ様。本当にいい話ではないので……
私から申し上げます」

今年十八歳になり成人式を迎える、ゴードンがこの中で一番の年長者らしく決意したように声を上げ、まわりの二人が目に見えてほつとした顔をした。

「今、この国が大変な状況になつている原因がクロード様にあると
いう話があります」

「まさか！ 誰だそんな事を触れ回つているのは！」

クライブの剣幕にライアンは目を伏せる。

「氣をお静め下さい。この後をお聞きにならないのですか」

「ゴードンのいう事にクライブは、ぐつと拳を握り締める。

「解かつたから……それで？」

「大陸の東にベオーラ自治国という魔道師の国があるのをご存知ですか」

「話だけは、それが？」

「クロード様がベオーラ自治国と通じておられると……。」この度の混乱はベオーラ自治国が結界を消して、このレイモンドール国をベオーラ自治国の支配下に置く為に起こしたことではないかと」

確かにボルチモア州の事はベオーラが裏で糸を引いていたと報告があつたが、クロードはそれを阻止したのだ。 それがなぜ反対に伝わっているのか。

「このレイモンドールの結界を張つていた要の魔道師の祖、イーヴアルアイを弑逆じぎやくしたのはクロード様であるとも」

「ゴードン！」

叫ぶよつに言うクライブにゴードンも顔色を無くし黙りこむ。

「もう、聞きたくない、帰る」

足音荒く歩み去るよつとするクライブにライアンが背中に向かって言ひ。

「クロード様は国の宝を持つてベオーラに行かれるおつもりだと言うではありませんか、クライブ様、それは本當ですか」

宝……？　こんなでたらめを吹聴しているのは一体誰なのか。
「今聞いたことは根も葉も無い嘘だ。私とクロードの仲を割こうと
している者がいるようだ。とにかくこれ以上そんなばかな話を広め
ないでくれ」

クライブはそう言いながらクロードがどこかへ行くことを言つて
いたのを思い出す。暗くなつて久しぶりの剣術も打ち切つて自室
に戻つた。体調が悪いと寝台にもぐり込むと従者が天医を呼びに
出て行くのに乗つかつてほかの従者たち、女官たちも追い出した。
いつもとあまりに違うクライブの様子に周りは戸惑うばかりだ。

嫌だ……私はあんな話を信じない。そう思うのにこの圧し
掛かる嫌な感じは何なのだ？　クロードは王位を欲していなかつた。
それなのに『鍵』と契約した……なぜだ？

「この国の宝は何だと思われます？」

誰もいないと思ったのにいきなり自分の頭の中を見透かすように
放たれた言葉に、口を開けたまま声の主を捜す……。その者は気
付いた時にはクライブの目の前に立つていた。父親の面影を映す、
中年の魔道師姿の男。

「クロード……いや、『コーラルになつたのだよな』

「はい、陛下。クロードは言わば仮の名、王の半身の幼名みたいな
ものです」

「コーラルは王の、と書つところを強く言つて口の端をにいつと上げ
た。

「何の用だ、コーラル。私は氣分が良くないのだ。大した用が無い
のなら下がつてくれないか」

クライブはそのままコーラルに背を向ける。その様子に憮然と
した顔を浮かべたコーラルがやや乱暴に寝台に手を付く。

「クライブ様の氣鬱の原因の真相を知つていると私が言つても……
ですか？」

「コーラル？」

「クロード様は『鍵』をお持ちになつてベオーク自治国へ行かれる

おつむりです。この国の王の誕、五百年も大切に守られてきた宝です
よ、陛下」

それは！

尚も口を開いたとしたコーラルは、急に口を閉じて印を組んで姿を消した。

「隠形いたします。この続きはまた後ほど、国王陛下」

天医を始め、宰相のハーコートや母親まで入ってきてクライブはコーラルを呼び止めることが出来なかつた。このとき、医者になれど治せない不信という病にクライブは罹患したのだった。

クロードがそんなことをする筈が無い。話をするば何もかも笑い話にできる。

「母上、お先に失礼する」

クライブは乱暴に席を立つとクロードを追いかけて走り出す。慌てて食堂の外に控えていた従者がそれを追いかけた。

「お戻りになりましたか、クロード様」

荷物を二つにまとめて、サウンティトウーダとアウントウエンにつけた鞍に括りつけながらラドビアスが顔だけ口に向けた。

「もう宜しいのですか」

「うん、クライブに会つて來たし、何やかや考えていると出発なんて出来ないよ」

「そうですね」

クロードは用意されていた服に着替える。ラドビアスがクロードにマントを着せ掛けて前に回つて留め金を止めるとい頭の魔獣をバルニーに連れて行こうと彼の側を離れた。その時、大きな音と共にクライブが飛び込んで来た。

「クロード、何をしている！」

あまりの切羽詰った表情にクロードは眉根を寄せた。

「何つて……前に言つてたる。俺ここから出るから」

「どこへ行く気だ、クロード」

クライブがクロードの手首を掴んで詰問するような強い口調で聞く。

「どうして……ベオーク自治圏に行く

「え？」

あまりに何のてらいも無く聞きたく無かつた言葉を聞いて、クラ

イブは一瞬何の反応も出来ない。

今何て？

「な、何をしに行くつもりなんだ……まさか『鍵』をベオークに渡

すつもりでは無いよな

恐る恐る言ひ「クライブの心情など解からないクロードは、頓着なく応える。

「何でクライブ、知っているの？ そうだけど、クロードの返事に雷に打たれたような衝撃を受けながら、クライブは小さく呻くように聞く。

「クロード……君が……イーヴァルアイを殺したといつのは……本当なのか？」

自分で聞いておきながらクライブは返事を聞きたくないと耳を塞ぎたくなつた。しかし、口にはつせりつけせなくてはならないのは解かつてゐる。

「言ひ必要はありませんよ、クロード様」

剣呑なふいん気を察してラドビアスがバルコニーからクロードの元に戻るゝとするのをクライブが制する。

「止まれ！ 話を聞くだけだ！」

「一体どうした、クライブ？」

敬称をつける事無く反対にクロードがクライブの肩を掴んで揺する。

何を動搖しているんだ？ しかしそオークの事といい、『鍵』のことなど誰に聞いたのか……そしてコリウスのことまで。さつきまでのお氣楽な氣分が吹き飛んでクロードは無言でクライブを見て、その後ろに控えている年若い従者たちに視線を移す。

何で陛下に似ていらっしゃるのか……。

祝賀の宴の一日前から顔を出したライアンら貴族の子弟たちにとって、表だって顔を出していなかつたクロードを見るのは今日が初めてだったのだ。王弟にしてはあつさりしたシャツ。肩や肘に皮が縫い付けられた上着に、皮で補強してあるズボンにブーツを履きマントを羽織つているその姿は騎乗しての長旅の装いに違いない。えてして悪い噂は本当のことが多いものだ。『ゴードンはライア

ンに田配せをする。直ぐに陛下の安全を図りクロードを捕りえる
ことができるよう」。

「答えてくれないか、君がイーヴァルアイを殺したのか」

「だつたとしたら、どうする気なんだ？」

必死で聞いた事にクロードがはつきり答えないことにクライブは
苛立つ。

「君はベオーク自治国と通じていてイーヴァルアイを殺して結界を
解き、この国の宝である『鍵』を渡そうとしている、のか？」

「…………？」

今度はクロードが唖然とクライブを僅かに見上げる。

誰がそんな事を……しかし事実にうまく嘘を少し練り込むこ
とでこんなにも事を見る田は違つてしまつ。だが、コリウスを殺
したのは確かに俺で、その為に騙して『鍵』と契約したのも本当で
……。ベオーク自治国に行こうとしているのも本当のことだ。その
せいで国が混乱の最中であることも俺のした事だ。しかし、経典の
ことやコリウスに関していることをここで言つつもりも無い。

「ベオークにそそのかされたわけじゃ無いにし、『鍵』の最初の所有
者はベオークにいる。この混乱を引き起こしたのは俺かもしれない
が、今は何も言えない」

「では君を行かせるわけには行かない。君を……一旦、地下宮へ幽
閉する」

クライブが傷ついた顔で言つのをクロードは痛ましい思いで見る
が、自分の意思を曲げる氣も無い。

「話が終わりなら俺はもう行く、わよつならクライブ

「させるか！」

「ゴードンが剣を抜き放ち、他のものもそれに翻つ。それを見て
クロードが冷たく笑う。

「何をするつもりか知らないけど君たちの主は俺の手の中だよ」

クライブの背後から首に手を回してクロードが『変じよ』と言つ
のに応えて、指輪は長い剣に変わりクライブの咽元につきつけられ

る。

その先へ

「陛下！」

丸腰だと油断していた従者たちが悲鳴のよすに叫ぶ。見田目、
クライブより細く樂に拘束できると踏んでいた彼らは上位の魔道師
と対峙したことが無かつた。

『縛！』ラドビアスが次々と印を組んで呪を飛ばしてその場にいた
者は床に貼りついたように動けなくなる。そこへ一頭の魔獸も加
勢しようとするが。

「サウンティトウーダ、アウントウエンおまえたちは手出しをする
な！」

クロードの一言でぴたりと動きをとめた。

「いい子だ。おまえたちはそこにいろ」

「クロード様、急ぎましょ。新手が来ますよ」

ラドビアスが縛されて突つ立つている者の間を縫つて扉に行くと、
レーン文字を描きつけて印を切る。

「簡単な結界を張りましたから一ザンほどは大丈夫ですが」「
うん、解かつた」

クロードはクライブに剣をあてたままバルコニーに出る。
「このまま出て行くと言うのなら君はこのレイモンドール国を貶め
た重罪人の烙印を押されて生涯追われる事になるぞ、クロード」
クライブの目から涙が一筋流れれる。

「行くな、クロード。嘘だと……冗談だと黙ってくれ。わたしを一
人にしないでくれ、君が必要なんだ」

「悪い、行くよ、クライブ。レイモンドールをよろしく頼む」

クロードは懇願するような目を向けるクライブを離して剣を指輪
に戻すと、アウントウエンに跨る。

「ラドビアス、行くぞ！」

「はい」

サウンティートウーダに跨つたラドビウスが呪を解くと同時に先に飛び出したクロードを追つてバルコニーから飛び立つ。

「矢を！ 早く矢を用意して撃ち落せ！」

やつと扉を開けた警備の兵士たちに命じるハーデンにクライブがため息まじりに言つ。

「よせ、もう間に合はない。クロードは行ってしまった」

「クロード様は行かれたのですか」

「コーラル」

クライブは扉近くに立つている魔道師に気付いてすぐるような目を向ける。

「おまえの言つ通りだつた。私は……どうしたらしい？」

「そうですね……影ながらご助力致しますよ、陛下」

にっこりとコーラルが安心させるように笑いかけてくる。 クライブは亡き父親の面影をその魔道師に見て胸が詰まった。 そうだ、この者は父上の弟なのだ。 私を心配して……導いてくれる。

しかし、自分の肩に手を置いたコーラルの瞳が氷のように冷たいことにクライブは気付かなかつた。

クロードの目の前に広大な陸地が広がる。 サイトスと海峡を隔てた位置にある、リスペイン王国だ。 五百年前、そこはルクサン皇国という大きな国で戦闘好きな国王、ドリゲルトが支配していた。 そのルクサン皇国が大量の軍隊をこの島国に送りこみ、一時は支配下に置いたがレイモンドール王ヴァイロンがこれを破り、ドリゲルトは憤死し、あれ程勢いのあつたルクサン皇国も王のいない間に他国の侵入を許すことになる。 今は三分割されてリスペイン王国、ポーチニア王国、イストニア連邦國の一部になつていた。

帰つてくる頃……この国はどうなつてゐるのだらう。他國に蹂躪じゅうりんされているか。

そして俺が帰る場所があるのか……？ 俺は重罪人だつたつけ。それでも自分は行くと決めて出てきたのだ。俺は俺の道を突き進む。引っかきまわして出て行く俺は卑怯者だが、すべてを終わらしたら絶対帰つてくるから……。クロードはつぶやいて自分が置いていくものを一度だけ振り返つた。

サイトスの王宮の一角から異形の物が一つ空へと飛び立つていく。それはこの国が魔術の国から脱しようとして吐き出したものかもしれない。魔道の加護を失つたレイモンドールはこれからどうなつていくのか。

クロードの目の前にはただ遙かな大陸の大地が広がつていた。

了

その先へ（後書き）

長い話に今まで付きましたがどうぞよろしく。一応、クロード編は終わりです。混乱のレイモンドール編をアップしてあります。（転成の章）

また、外伝としてこの話をのせる時に切った黎明期の話をのせますのでよろしかったらお読み下さい。

似たような題名で混乱させてしまつて申し訳ありません。

- 1・レイモンドール綺譚
- 2・レイモンドール綺譚（転成の章）・・・本編の続きです。
- 3・外伝・・・レイモンドール綺譚（創成の章）・・・レイモンドール国の出来た頃の話です。

- 4・外伝・・・クロード冒険譚>1話、1話独立した話です。<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5941c/>

レイモンドール綺譚

2010年10月8日10時16分発行